西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書1

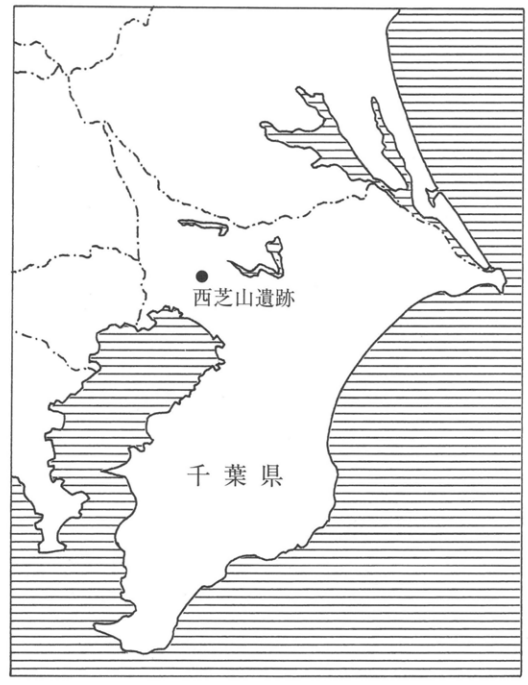
―八千代市西芝山遺跡―

平成19年3月

独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団

西八千代北部地区
埋蔵文化財調査報告書1

―八千代市西芝山遺跡―



序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第564集として，独立行政法人都市再生機構の西八千代北部地区土地区画整理事業に伴って実施した八千代市西芝山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，旧石器時代の石器をはじめ，縄文時代の土器・石器や平安時代の住居跡が検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年３月

財団法人　千葉県教育振興財団

理事長　岡　野　　孝　之

凡　例

1　本書は，独立行政法人都市再生機構による西八千代北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第１集である。

2　本書に収録した遺跡は，以下のものである。

　西芝山遺跡　千葉県八千代市吉橋2307－3ほか（遺跡コード221－030）

3　発掘調査から報告書に至る業務は，独立行政法人都市再生機構の委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の経緯及び担当者は，第１章に記した。

5　本書の執筆，編集は研究員大内千年がおこなった。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，独立行政法人都市再生機構，八千代市教育委員会の御指導，御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は，以下のとおりである。

　第２図　八千代市発行　　1/2,500　八千代市都市計画基本図№14

　第５図　国土地理院発行　1/25,000地形図「白井」（NI－54－19－14－3）

　　1/25,000地形図「習志野」（NI－54－19－14－4）

8　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による平成16年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標値は，日本測地系に基づく平面直角座標で，図面の方位はすべて座標北である。

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要…… 1
　第２節　遺跡の位置と環境…… 3
第２章　旧石器時代……13
　第１節　概要と方針……13
　第２節　AT下位石器群 ……17
　第３節　AT上位石器群 ……71
　第４節　単独出土石器……91
第３章　縄文時代……99
　第１節　陥穴……99
　第２節　グリッド出土遺物……99
第４章　平安時代…… 105
　第１節　住居跡…… 105
　第２節　土坑…… 106
第５章　中・近世…… 109
　第１節　土坑…… 109
　第２節　溝状遺構…… 110
　第３節　柵列…… 115
　第４節　グリッド出土遺物…… 116
第６章　まとめ…… 117
　第１節　旧石器時代…… 117
　第２節　縄文時代以降…… 119
報告書抄録……巻末

挿図目次

第１図　グリッドシステム…… 2
第２図　西芝山遺跡周辺地形図…… 4
第３図　確認状況図…… 5
第４図　上層遺構配置図…… 6
第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）
　…… 9
第６図　下層本調査区及び石器集中地点位置図
　……14
第７図　基本層序……15
第８図　石器集中１・分布状況……18
第９図　石器集中１……19
第10図　石器集中２・分布状況……20
第11図　石器集中２・分布域ａ・ｃ・分布状況
　……22

第12図　石器集中２・分布域ａ（１）……23
第13図　石器集中２・分布域ａ（２）……24
第14図　石器集中２・分布域ａ（３）……25
第15図　石器集中２・分布域ｂ・分布状況……26
第16図　石器集中２・分布域ｂ（１）……27
第17図　石器集中２・分布域ｂ（２）……28
第18図　石器集中２・分布域ｂ（３）……29
第19図　石器集中２・分布域ｂ（４）……30
第20図　石器集中２・分布域ｂ（５）……31
第21図　石器集中２・分布域ｃ……32
第22図　石器集中３・分布状況……34
第23図　石器集中３……35
第24図　石器集中４・器種別分布状況……37
第25図　石器集中４・母岩別分布状況……39
第26図　石器集中４（１）……41
第27図　石器集中４（２）……42
第28図　石器集中４（３）……43
第29図　石器集中５・分布状況……45
第30図　石器集中５・分布域ａ・分布状況……46
第31図　石器集中５・分布域ａ（１）……47
第32図　石器集中５・分布域ａ（２）……48
第33図　石器集中５・分布域ａ（３）……49
第34図　石器集中５・分布域ａ（４）……51
第35図　石器集中５・分布域ｂ・分布状況……52
第36図　石器集中５・分布域ｂ（１）……53
第37図　石器集中５・分布域ｂ（２）……54
第38図　石器集中５・分布域ｂ（３）……55
第39図　石器集中５・分布域ｂ（４）……56
第40図　石器集中５・分布域ｂ（５）……57
第41図　石器集中５・分布域ｃ・分布状況……58
第42図　石器集中５・分布域ｃ（１）……59
第43図　石器集中５・分布域ｃ（２）……60
第44図　石器集中５・分布域ｃ（３）……62
第45図　石器集中５・分布域ｃ（４）……63
第46図　石器集中６・器種別分布状況……66
第47図　石器集中６・母岩別分布状況……67
第48図　石器集中６（１）……68
第49図　石器集中６（２）……69
第50図　石器集中６（３）……70
第51図　石器集中７・分布状況……72
第52図　石器集中７……73
第53図　石器集中８・分布状況……75
第54図　石器集中８（１）……76
第55図　石器集中８（２）……77
第56図　石器集中８（３）……78
第57図　石器集中９・分布状況……80
第58図　石器集中９……81
第59図　石器集中10・器種別分布状況……83
第60図　石器集中10・母岩別分布状況……85
第61図　石器集中10（１）……87
第62図　石器集中10（２）……88
第63図　単独出土石器……91
第64図　陥穴……99
第65図　縄文土器（１）…… 101
第66図　縄文土器（２）・土製品 …… 102
第67図　縄文時代石器…… 103
第68図　SI001 …… 105
第69図　平安時代の土坑…… 107
第70図　中・近世土坑…… 109
第71図　SD001 …… 110
第72図　SD002・SD003 …… 111
第73図　SD004・SD005・SD006 …… 114
第74図　SX001 …… 115
第75図　銭貨…… 116

表 目 次

第１表　旧石器時代石器集中地点一覧表…… 7
第２表　上層遺構一覧表…… 7
第３表　石器集中１　組成表……17
第４表　石器集中２　組成表……33
第５表　石器集中３　組成表……34
第６表　石器集中４　組成表……36
第７表　石器集中５　組成表……64
第８表　石器集中６　組成表……65
第９表　石器集中７　組成表……71
第10表　石器集中８　組成表……79
第11表　石器集中９　組成表……81
第12表　石器集中10　組成表……90
第13表　旧石器時代石器属性表……92
第14表　縄文時代石器属性表…… 103
第15表　縄文土器観察表…… 104
第16表　平安時代土器観察表…… 108

図 版 目 次

図版１　遺跡周辺航空写真（S=約1/10,000）
図版２　調査前状況（平成９年度)・調査前状況（平成10年度）・C2区遺物出土状況（石器集中１・８）
図版３　C3区遺物出土状況（石器集中７）・D1区遺物出土状況（石器集中10）・D2区遺物出土状況（石器集中２・９）
図版４　D2区遺物出土状況（石器集中２・９）・D3区遺物出土状況（石器集中３）・D4区遺物出土状況（石器集中４）
図版５　E1区遺物出土状況（石器集中５）・E1区土層断面・E2区遺物出土状況（石器集中６）
図版６　SK005・12AAグリッド・SI001・SK001・SK002・SK003・SK004・SD001
図版７　SD002・SD004・SD005・SD006・SX001・石器集中１
図版８　石器集中２（１）
図版９　石器集中２（２）
図版10　石器集中３・石器集中４
図版11　石器集中５（１）
図版12　石器集中５（２）
図版13　石器集中５（３）
図版14　石器集中５（４）・石器集中６
図版15　石器集中７・石器集中８
図版16　石器集中９・石器集中10・単独出土石器
図版17　縄文土器・土製品
図版18　縄文時代石器・SI001出土土器・遺構出土土器・SI001出土石器・銭貨

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

西八千代北部地区は，八千代市の北西部地域における大規模な土地区画整理事業で，現在，都市再生機構により整備が進められつつある。当地域は，かつては鉄道の駅からやや離れていたため，近郊農村的な様相を色濃く留めた地域であった。近年の東葉高速鉄道の開通後は，大規模な商業施設などが進出し，発展著しい地域である。西八千代北部地区の土地区画整理事業は，この地域における住宅供給需要などに対応するため，整備が進められている。

土地区画整理の事業者である独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団）は，開発に先立って千葉県教育委員会に，埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し千葉県教育委員会は，事業地区内には周知の埋蔵文化財包蔵地が存在し，東向遺跡・西芝山遺跡・西芝山南遺跡・八王子台遺跡・坪井向遺跡などの遺跡が所在するとの回答をおこなった。これを受けて，千葉県教育委員会と独立行政法人都市再生機構との間で協議がおこなわれ，その結果，事業地区内に存在する埋蔵文化財で保存が不可能な部分については，やむを得ず記録保存の処置をとることとなった。

本書に所載した西芝山遺跡については，事業範囲にかかる遺跡範囲ほぼ全域が記録保存の対象となり，発掘調査が実施されることとなった。発掘調査及び整理作業は，財団法人千葉県教育振興財団（旧財団法人千葉県文化財センター）が受託して実施した。発掘調査は，平成９年度・平成10年度・平成16年度の３か年にわたって実施した。整理作業は平成17年度から平成18年度の２か年にわたって実施した。発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員・内容は下記のとおりである。

（発掘調査）

（１）平成９年度

期　間　平成９年12月１日から平成10年２月26日

組　織　調査部長　西山太郎　　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　猪股昭喜

内　容　上層確認調査　1,154㎡／11,539㎡，下層確認調査　447㎡／11,176㎡

（２）平成10年度

期　間　平成10年12月１日から12月25日

組　織　調査部長　沼澤　豊　　北部調査事務所長　折原　繁

担当者　研究員　花島理典

内　容　上層確認調査　990㎡／9,900㎡，下層確認調査　336㎡／8,400㎡

（３）平成16年度

期　間　平成16年７月２日から12月27日

組　織　調査部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　雨宮龍太郎，上席研究員　岸本弘三・竹内久美子・渡邊高弘

内容　上層確認調査　430㎡／2,870㎡・上層本調査　1,863㎡，下層確認調査　242㎡／4,733㎡・下層本調査　3,342㎡

（整理作業）

（４）平成17年度

期　間　平成17年６月１日から11月15日

組　織　調査部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　上席研究員　榊原弘二，研究員　大内千年

内　容　水洗・注記から原稿執筆の一部まで

（５）平成18年度

期　間　平成18年４月１日から８月31日

組　織　調査部長　矢戸三男　　北部調査事務所長　古内　茂

担当者　主席研究員　土屋治雄，研究員　大内千年

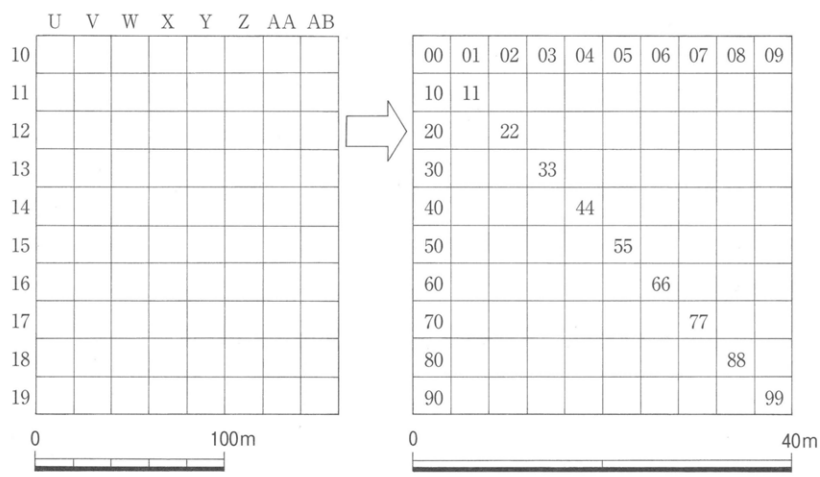
内　容　原稿執筆の一部から刊行まで

２　調査と整理の方法

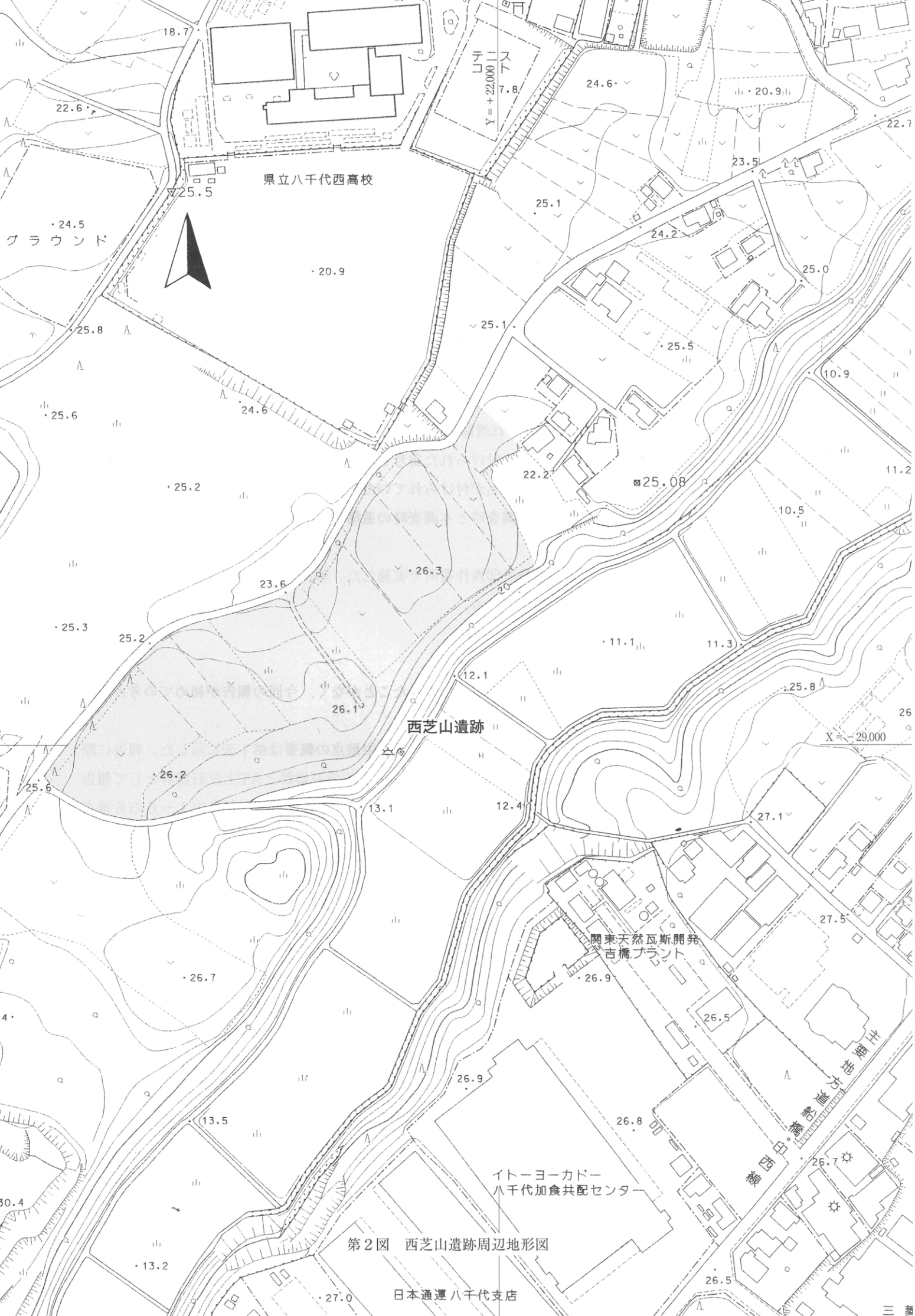
（１）発掘調査

西八千代北部地区に所在する遺跡群は，広範な面積にわたり，多年度に及ぶ調査が予定されていたことから，遺跡群全体を対象として旧公共座標である日本測地系（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく40ｍ×40ｍの方眼網を設定し，大グリッドとした。大グリッドは，北西を基点として西から東へ向かってＡ・Ｂ・Ｃ…とし，Ｚ以降はAA・AB…とした。北から南へ向かっては１，２，３…とした。大グリッドはさらに４ｍ×４ｍ方眼の小グリッドに100分割し，西から東へ00，01，02…，北から南へ10，20，30…とした。よって，各小グリッドは23S15，24T36のように呼称する（第１図）。

遺構番号については，遺構種別を示す記号（SI・SKなど）と001～の３桁の番号を組み合わせて表記する方針をとった。



第１図　グリッドシステム



第２図　西芝山遺跡周辺地形図

発掘調査は，まず上層（縄文時代以降）の遺構確認のために，調査対象面積の10％を基本としてトレンチを設定した（第３図上）。遺構や遺物の検出を目安として，本調査を要する範囲を確定した。下層（旧石器時代）の確認調査は，調査対象範囲に２ｍ×２ｍの確認グリッドを，調査対象面積の４％を基本として設定した（第３図下）。石器が出土した地点について周囲を拡張し，遺物集中の在否と広がりを確認した上で，本調査を要する範囲を確定した。

平成９・10年度はこの確認調査のみを実施した。平成９年度は南端部を除いた遺跡西半部分を対象とし，平成10年度は遺跡の北東半部分を対象範囲とした。平成16年度は，この確認結果を受け，上層本調査・下層本調査を実施した。また，確認調査が未了であった遺跡南端部分について，上層確認調査・下層確認調査を実施し，遺物の出土した地点を中心に下層本調査を実施した。

（２）整理作業

遺物の注記に当たっては，平成９年度調査で出土した遺物には（A），平成10年度調査の遺物には（B），平成16年度調査の遺物には（C）を，それぞれ遺跡コードの後ろに付けて注記をおこなった。

遺構番号については，基本的には調査時に付けられた番号をそのまま踏襲し，遺構番号の変更はおこなわなかた。ただし，確認調査の際に仮の遺構名が付けられていた場合があり，それらのものについては注記を含めて正規の遺構名に変更した。確認調査時と本調査時の遺構名の対象については，第２表を参照していただきたい。

水洗・注記以降の作業は，北部調査事務所印西作業所で実施した。整理作業終了後の遺物と記録類は，平成18年度現在，同作業所において保管している。

３　調査成果の概要

西芝山遺跡については，これまで発掘調査がおこなわれたことがなく，今回の報告が初めての考古学的な調査成果の報告となる。

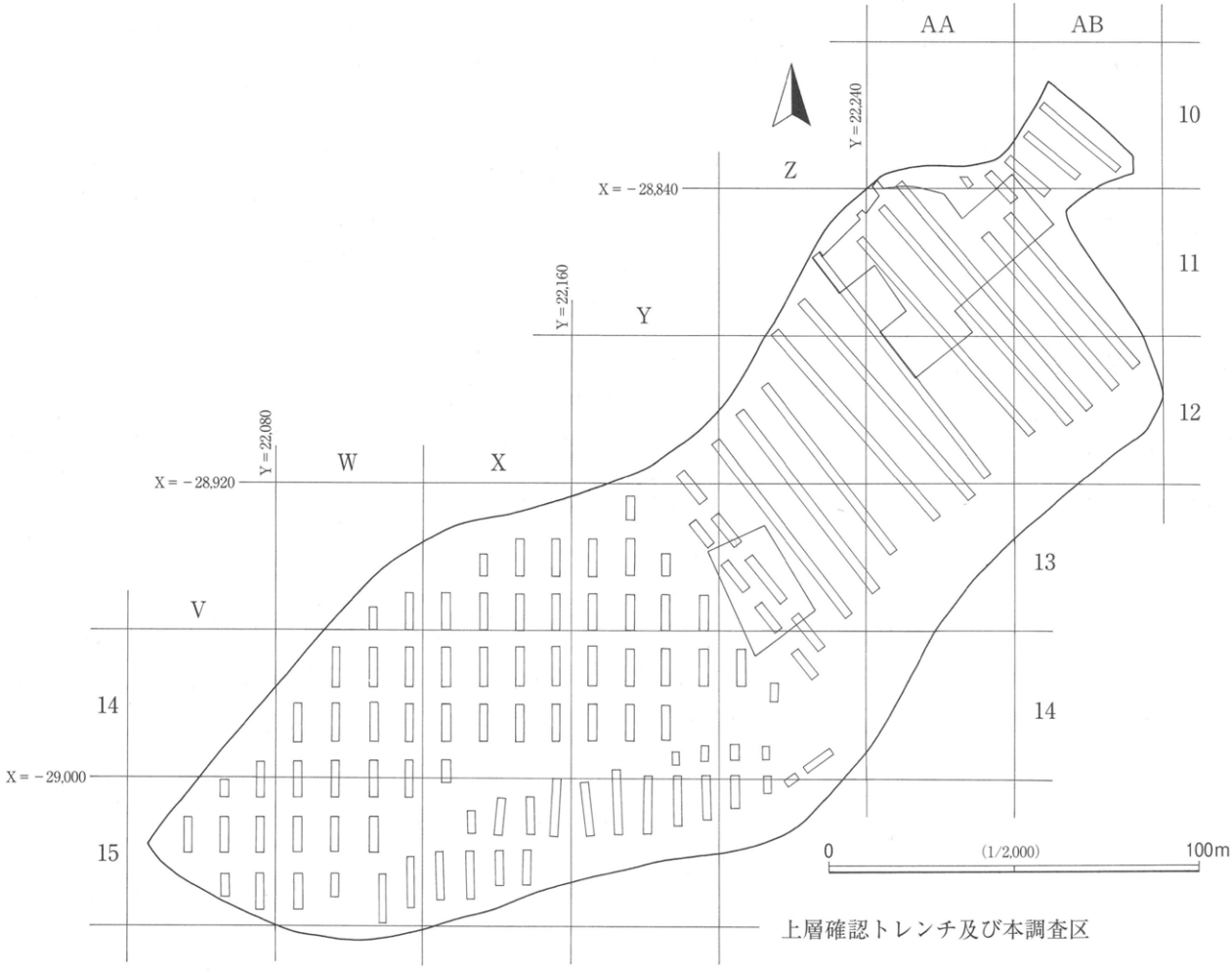
旧石器時代では，10か所の石器集中地点を検出した。石器集中地点の概要は第１表に示した。報告に際しては，基本層序のⅥ層（AT包含層）を境に大きく二分し，AT下位石器群とAT上位石器群として報告した。AT下位石器群は，主にⅨ層～Ⅶ層から遺物を出土した石器集中地点で，石器集中１～６の６地点が相当する。AT上位石器群は，Ⅵ層～Ⅲ層を中心に遺物を出土した石器集中地点で，石器集中７～10の４地点が相当する。

上層遺構としては，縄文時代，平安時代，中・近世の遺構が検出された。検出された遺構については，第４図に遺構の配置を示し，第２表に一覧を示した。縄文時代は，遺構としては陥穴が１基検出され，早期から後期にかけての縄文土器と石器が出土した。平安時代では，痕跡的ではあるが住居跡が１基，土坑が３基検出された。中・近世の遺構としては，火葬施設１基，シシ穴１基，野馬堀１条，溝５条，柵列１基である。

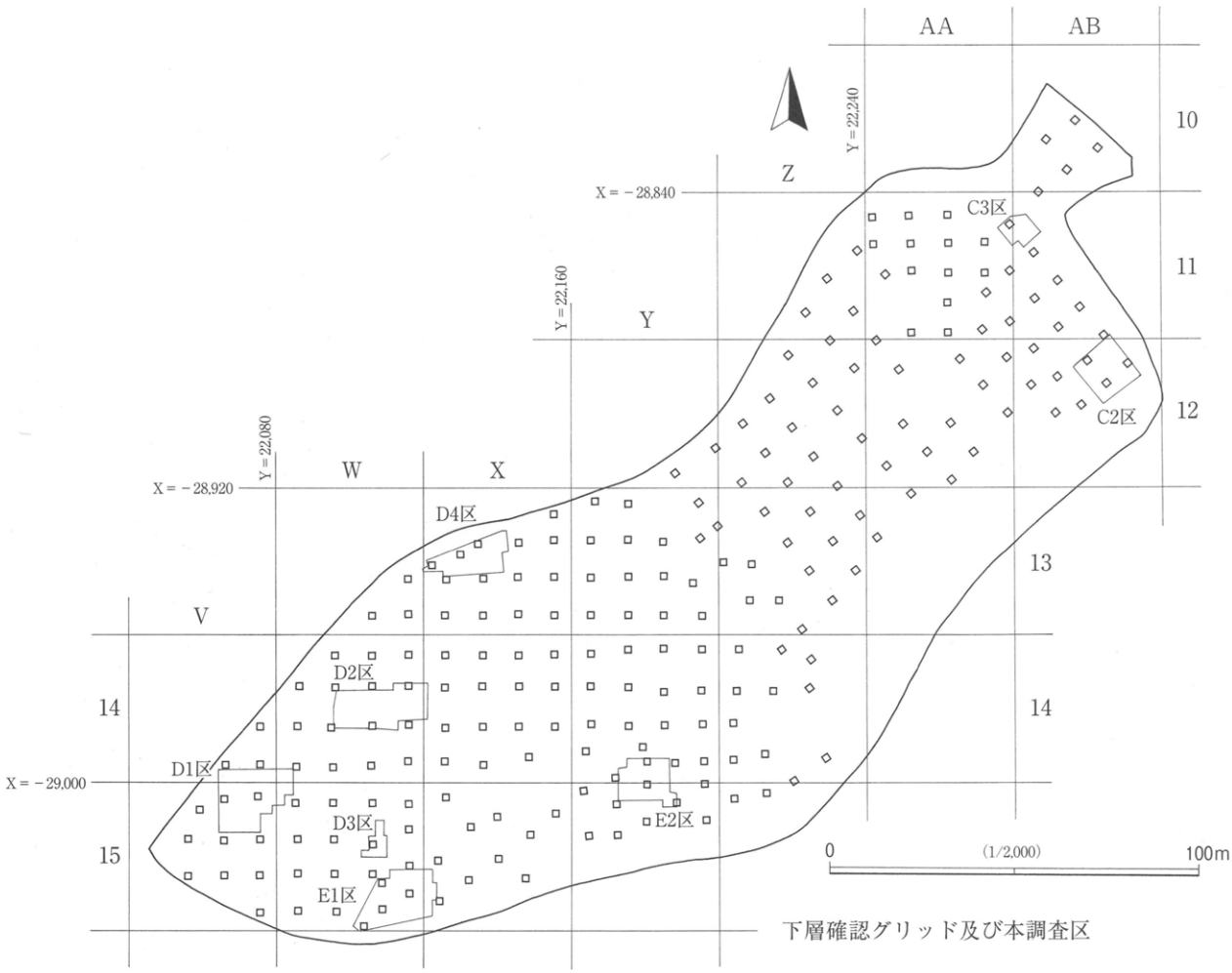
第２節　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

西芝山遺跡の所在する八千代市は，千葉県の北西部に位置する。近世には成田街道の宿場町として栄え，現代では鉄道の便の良さと，幹線道路の存在から，早くから首都圏のベッドタウンとしての開発がなされ，

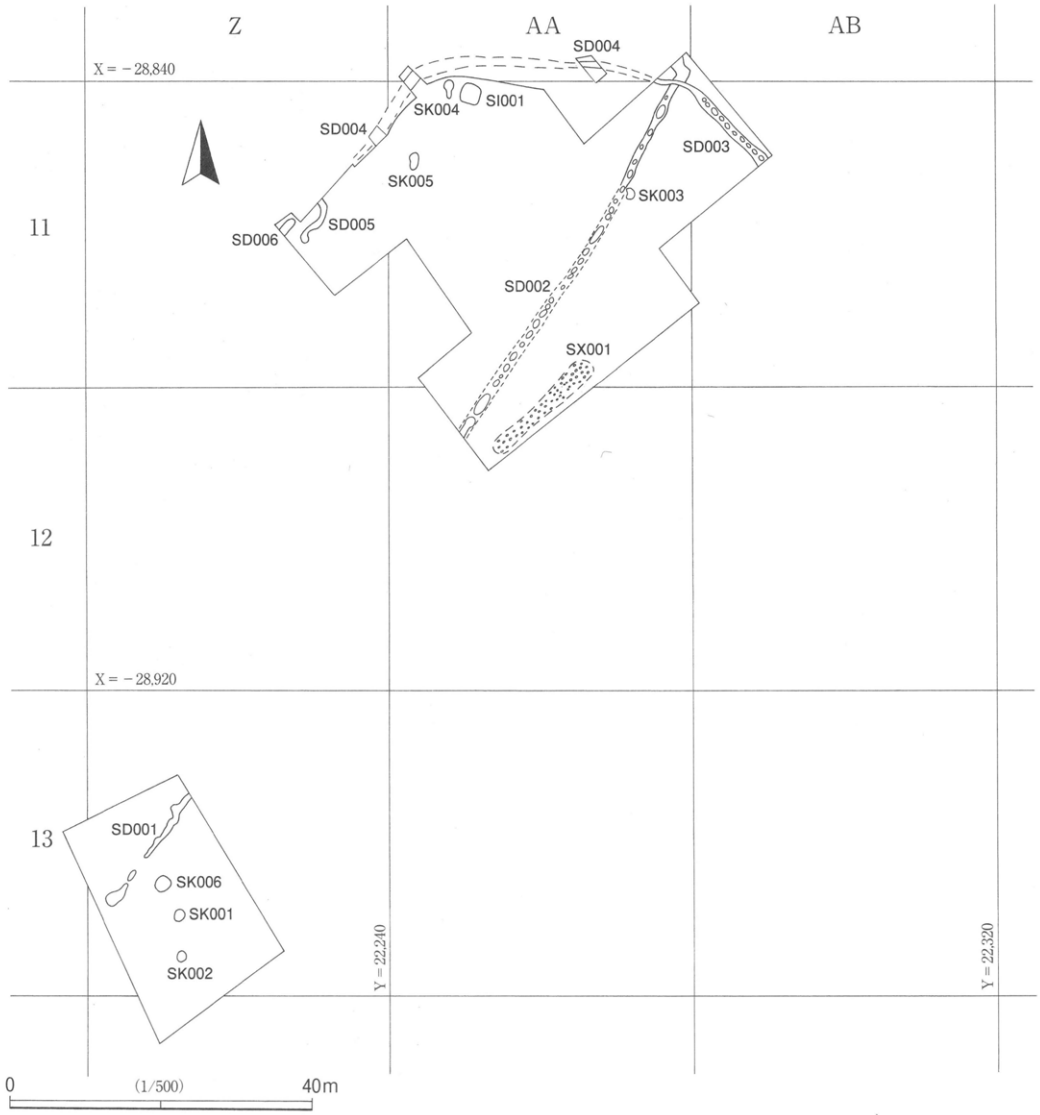


上層確認トレンチ及び本調査区



下層確認グリッド及び本調査区

第３図　確認状況図



第４図　上層遺構配置図

工業団地等の造成も活発におこなわれてきた。

市域南西部には京成電鉄が走り，市域中央部を国道16号線が縦断，市域の南部を国道296号線が横断し，国道16号線と交差する。近年，東葉高速鉄道が新たに開通し，都心へのアクセスがさらに便利になったことから，この沿線を中心に，バブル崩壊後の今日も開発の手が休まることのない地域と言えよう。

遺跡の所在するのは，八千代市の北西部で船橋市との市境付近である（第５図１）。遺跡周辺の地域は，東葉高速鉄道の開通以前は交通の便も悪く，市域の中では開発の遅れた地域であったと言る。しかし，同鉄道の開通や，住宅・都市整備公団（当時）による萱田地区の整備などによって，近年発展が著しい地域である。西芝山遺跡を含む，西八千代北部地区土地区画整理事業は，こうした情勢を受け，これまで整備の遅れていた八千代市北西部地域の開発を企図したものであろう。

遺跡の所在する台地は，千葉県北部を中心に広がる下総台地で，西芝山遺跡付近の標高は約26mである。印旛沼水系最奥部の河川のひとつである桑納川の支谷により，遺跡周囲の台地は樹枝状に刻まれる。遺跡

の存在する台地は，桑納川本流方向から入り込む谷により東西を画され，大きく見れば細長い舌状台地の形状をとる。遺跡はこの舌状台地の東側で，台地先端部からは若干奥まった位置に存在する。遺跡の南東側に桑納川水系の支谷を望み，谷への斜面部は急崖となっている。遺跡の北東と南側には小規模な谷が貫入する。台地と谷の水田面との比高差は約14mである（第２図）。

遺跡の調査前の状況は，畑及び荒蕪地等であった。建造物などは存在せず，遺跡の遺存状況は良好と思われたが，耕作に関連した地形改変や，西八千代北部地区の事業地内一帯で共通した産業廃棄物等の不法投棄などにより，遺存状況は必ずしも良好とは言えなかった。

第１表　旧石器時代石器集中地点一覧表

報　告	地点名	地区	主なグリッド	主な出土層位	備　　考
AT下位石器群	石器集中１	C2区	12AB05・06・17・26	Ⅸ層下部	
	石器集中２	D2区	14W45・48・49・57	Ⅸ層上部からⅦ層	集中域３か所
	石器集中３	D3区	15W46・47	Ⅸa層	
	石器集中４	D4区	13X33・34・41・44・45・52	Ⅸ層中	集中域２か所か
	石器集中５	E1区	15W68・78・79・87	Ⅸ層上部	集中域３か所
	石器集中６	E2区	14Y95・15Y05	Ⅶ層	
AT上位石器群	石器集中７	C3区	11AB20	Ⅵ層	
	石器集中８	C2区	12AB25	Ⅵ層	
	石器集中９	D2区	14W54・55	Ⅳ・Ⅴ層	
	石器集中10	D1区	15V17	Ⅲ層	

第２表　上層遺構一覧表

遺構名	グリッド	種　類	時　期	調査年度	章	備　　考
SI001	11AA02・03	住居跡	平安	H10	第４章	床面のみ
SK001	13Z73	土坑	平安	H16	第４章	「T1仮2」と同じ
SK002	13Z02・03	土坑	平安	H16	第４章	「T1仮1」と同じ
SK003	11AA37・38	シシ穴	中・近世	H16	第５章	
SK004	11AA01・02	火葬施設	中・近世	H16	第５章	
SK005	11AA20	陥穴状遺構	縄文	H16	第３章	
SK006	13Z62	土坑	平安	H９	第４章	旧「T1仮3」
SD001	13Z	溝	中・近世	H16	第５章	「T1仮4～5」含む
SD002	11AA・12AA	野馬堀	中・近世	H16	第５章	
SD003	11AA・11AB	溝	近世	H16	第５章	２条切り合い
SD004	11Z・11AA	溝	近世	H16	第５章	SD003に繋がる?
SD005	11Z47・57	溝	中・近世	H16	第５章	
SD006	11Z46	溝	中・近世	H16	第５章	

2　歴史的環境

西芝山遺跡周辺の遺跡を，千葉県埋蔵文化財地図[1]に基づき，これに一部補足して示した（第５図）。１が西芝山遺跡であり，２～６は同じ西八千代北部地区事業地内に存在する遺跡である。それぞれ平成８年度以降，断続的に調査がおこなわれており，徐々に遺跡の内容が明らかとなってきている。東向遺跡（２）では，旧石器時代の石器集中地点が複数検出された。八王子台遺跡（３）では，旧石器時代の石器集中地点や縄文時代中期の竪穴住居跡，奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出された。西芝山南遺跡（４）では，Ⅸ層主体の旧石器時代石器集中地点が多数検出された。坪井向遺跡（５）では，旧石器時代の石器集中地点や奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出された。庚申山塚群（６）・吉橋宮ノ前塚群（７）は，当財団による調査以前に，残念ながら消滅した。川向遺跡（８）では，事業地外の北側の部分で八千代市教育委員会による調査が実施されており，縄文時代早期～中期の土器片などが検出された[2]。

西八千代北部地区内の遺跡では，現在までのところ，旧石器時代の石器集中地点を中心として，若干の縄文時代，奈良・平安時代の遺構が検出されている，という遺跡が多いと言えよう。

西八千代北部地区周辺の遺跡は，東側の八千代市域と西側の船橋市域で遺跡の粗密が若干認められるものの，八千代市域側で多数の遺跡が確認されている。ただし，周辺で発掘調査がおこなわれ，遺跡の詳細が明らかとなった事例はそれほど多くない。ここでは発掘調査の成果が公表されている遺跡を中心に，西芝山遺跡周辺の遺跡を概観してみたい。

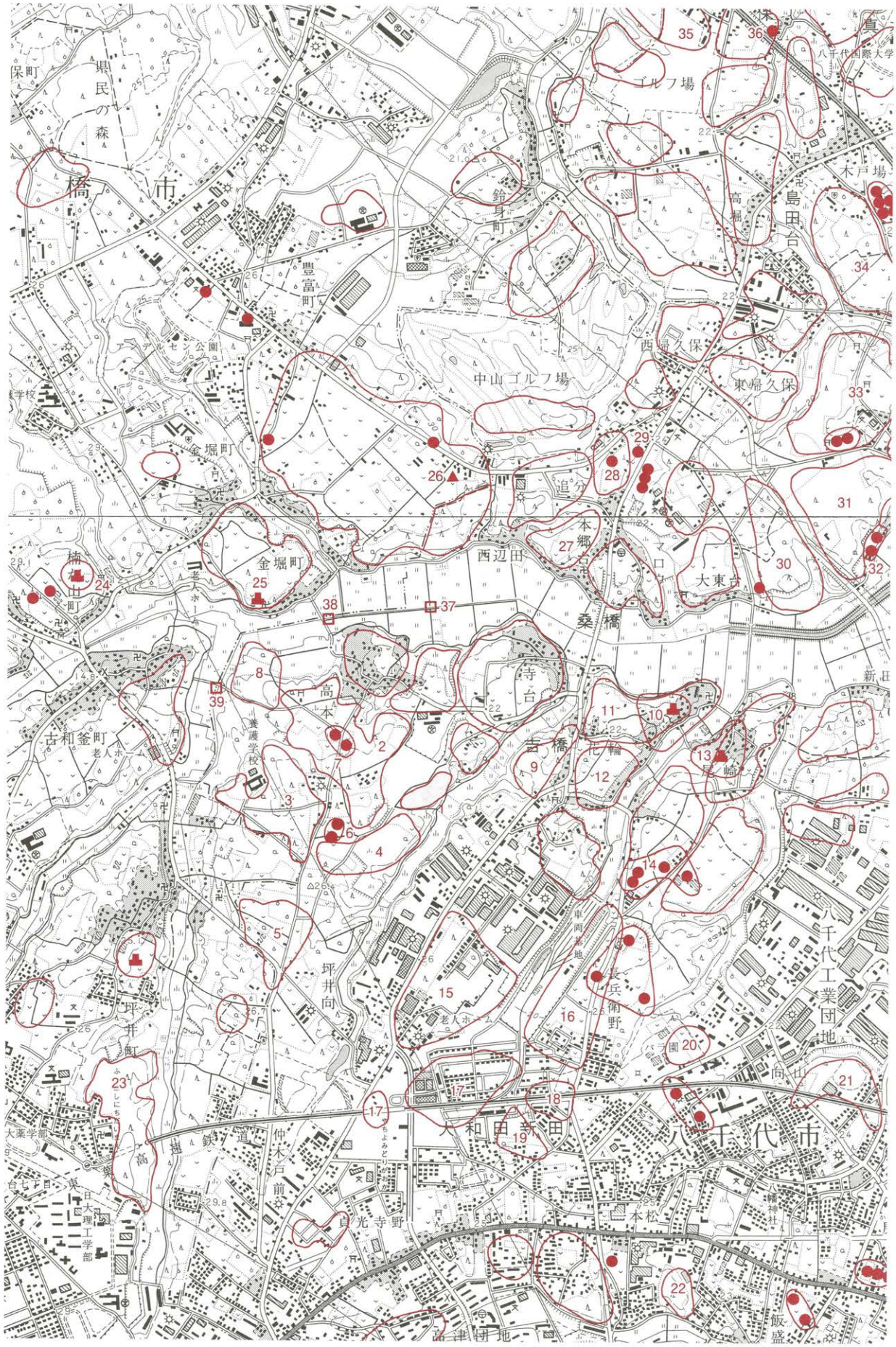
旧石器時代

調査事例は多くはないものの，比較的良好な資料が知られている。大和田新田芝山遺跡（16）ではⅨ層からⅢ層に至る７枚の文化層で，19か所の石器集中地点を検出した。特に，第１ブロック・第２ブロックとされた集中地点は，それぞれ規模の異なるいわゆる「環状ブロック群」で，同一台地上で隣接して検出されたものとして注目される[3]。仲の台遺跡（17）は，複数の報告書が刊行されており，Ⅸ層を中心とする石器集中地点と，Ⅳ・Ⅴ層中心の石器集中地点，Ⅶ～Ⅸ層の石器集中地点が検出されている[3][4][5]。ヲイノ作遺跡（18）でも，Ⅸ層を中心とする小規模な石器集中地点が１か所検出された[4]。両遺跡とも，桑納川本流から南へ延びる支谷の最奥部付近に位置する。向山遺跡（21）では，Ⅳ・Ⅴ層の石器集中地点１か所と，単独出土のナイフ形石器などが検出された[4]。一本松前遺跡（22）では，ソフトローム中で石器集中地点を検出した[6]。源七山遺跡（23）は，坪井地区土地区画整理事業に伴って千葉県教育振興財団により調査が実施され，現在整理途上にある遺跡であるが，多くの旧石器時代の石器集中地点が検出されている[7]。

以上の遺跡は，すべて東を新川，北を桑納川，南を新川の支流である高津川に挟まれた地域に存在する遺跡で，西八千代北部地区の遺跡を含めると，この地域には旧石器時代の遺跡がかなり密に存在する可能性が高い。第５図の範囲外の東側には，北海道遺跡など著名な旧石器時代遺跡が存在する萱田遺跡群が位置しており，西芝山遺跡周辺の地域は旧石器時代の資料集積が比較的進みつつある地域と評価できよう。

縄文時代

縄文時代では，桑納川本流の対岸に位置する，金堀台貝塚（26）が著名である。貝層を伴う後・晩期の集落遺跡と考えられ，該期の住居跡も検出された[8]。桑納川の北側では，本郷台遺跡（27）で早期の炉穴が検出され，後期・堀之内１式を中心とした土器が出土した[9]。新川と桑納川の合流点付近に位置する桑橋新田遺跡（30）では，中～後期の竪穴住居跡が確認された[10][11]。桑納前畑遺跡（31）では，中期後葉・



第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

加曽利E式期末葉の土坑が検出された[12]。

西芝山遺跡の所在する桑納川の南側では，西内野遺跡（9）で前～中期の住居跡を確認した[13]。

桑納川から南に延びる支谷の奥まった位置には，縄文時代の遺構・遺物が検出された遺跡が多く，特に前期前半・黒浜式期の竪穴住居跡の検出が目立つ。内野南遺跡（15）では，早期の炉穴や陥穴が検出されている[13][14][15]。大和田新田芝山遺跡（16）では，早期の炉穴と貝層を伴う土坑を検出し，斜面沿いに多数の陥穴を検出した。また，前期前半の竪穴住居跡を合わせて3軒検出し，中期後葉・後期中葉の住居跡も各1軒検出した。さらに前期末葉から中期初頭の土器が，資料的に充実している[3][5]。仲の台遺跡（17）では陥穴と前期前半・黒浜式期の竪穴住居跡10軒を検出した[4][5]。ヲイノ作遺跡（18）では陥穴，前期の住居跡1軒，後期中葉・加曽利B式期の住居跡1軒を検出した。また，前期末葉の土坑から良好なセット関係を示す土器群を検出した[4][5]。ヲイノ作南遺跡（19）では，前期前半・黒浜式期の竪穴住居跡を合わせて24軒検出しており，当該期の比較的規模の大きな集落と言えよう[5][16]。長兵衛野南遺跡（20）では，中期後葉の竪穴住居跡2軒を検出した[17]。

桑納川最上流部の谷の一つに位置する源七山遺跡（23）では，中期を中心とした遺構が検出されている[7]。

一本松前遺跡（22）は，桑納川より南に存在する，新川の支流である高津川の谷を望む位置にあり，陥穴と土坑を検出した[6]。

弥生時代

桑納川と新川の合流点付近にある，桑納遺跡（31）で後期の住居跡を検出している[18]。また，桑橋新田遺跡（30）では後期の住居跡と方形周溝墓が確認されている[11][18]。桑納川の本流である新川沿いから印旛沼最奥部にかけての地域では，多数の弥生時代後期遺跡が知られているが，「桑納川の中・上流域は状況不明」[19]とされ，現在までのところ西芝山遺跡周辺では弥生時代遺跡の分布は希薄である。

古墳時代

桑納川より北側で，遺構が検出された遺跡が存在する。桑橋新田遺跡（30）では，古墳時代前期の住居跡が100軒以上確認されており，該期の大規模な集落であることが予想される[10][11]。古墳としては，桑納川と新川との合流地点に桑納古墳群（32）がかつて存在し，1号墳では主体部から直刀や鉄鏃，鉄地金銅張りの飾り金具などが出土し，2号墳からは多数の埴輪が出土した[20]。

奈良・平安時代

西芝山遺跡近辺の桑納川南側では，内野南遺跡（15）で竪穴住居跡1軒を検出した[14]。大和田新田芝山遺跡（16）では，竪穴住居跡8軒と製鉄炉1基が検出された。竪穴住居跡の多くは9世紀後半～10世紀前半のものと考えられ，遺構のあり方などから製鉄炉とこれに付随する工人集団の居住地・工房跡と想定されている[3]。別の地点では8世紀代の竪穴住居跡も検出された[5]。仲の台遺跡（17）では，広い調査区内で散漫に分布する4軒の竪穴住居跡を検出した[5]。

桑納川より北側では，本郷台遺跡（27）で竪穴住居跡を1軒検出した[9]。また，追分遺跡（28）で住居跡を確認している[1]。新川沿いの地域として，桑納前畑遺跡（33）で，竪穴住居跡と多数の掘立柱建物跡を検出した[12][21]。北側に隣接する島田遺跡（34）でも竪穴住居跡1軒を検出した[22]。また，北に位置する神崎川に注ぐ支谷沿いに存在する原内遺跡（35）で平安時代の住居跡が確認されている[23]。

中・近世

中世の遺跡としては，桑納川沿いに中世城郭が点々と確認されている。新川に近い方から，南岸の尾崎

館跡（13），支谷を挟んだ対岸に吉橋城跡（10），やや遡った北岸に金堀城跡（25），さらに上流に楠ヶ山館跡（24）がある。いずれも桑納川の本流から支谷が分岐する地点につくられており，桑納川の水運と関わりのある立地であることが想像できる。

発掘調査例があるのは吉橋城跡（10）だけであるが，部分的な確認調査で，詳細は明らかでない[24]。また，吉橋城跡の隣接地で調査例があり，吉橋城跡との関連が窺われる。一部吉橋城跡と遺跡範囲を重ねて西側に隣接する妙見前遺跡（11）では，調査範囲は限られたものであったが，地形成形遺構・堀跡・土塁などを検出し，15世紀代の常滑産陶器が出土した[25]。吉橋城跡の南西側に隣接する渋内遺跡（12）では，窪地状に成形された部分の縁辺から，多数の地下式坑が検出された[26]。

桑納川最奥部に位置する源七山遺跡（23）では，掘立柱建物跡が検出され，いわゆる台地整形区画内から多数の陶磁器類が出土した[7]。

その他，この地域には中・近世の塚が多数存在し，特徴的である。第５図中に●で示したものの多くは古墳ではなく，塚として認識されているものである。西芝山遺跡周辺で調査例があるものとしては，追分塚（29）がある。一辺が20m以上もある方形の塚で，高さは２ｍを越える。報告では，盛土上層から出土した寛永通宝の存在と，塚上に存在した宝暦13年（1763）の銘がある大日如来像との関連で，これを祀るため塚がつくられた可能性が高いことを示唆している[27]。ただし，盛土下の旧表土直上からは北宋銭である元祐通宝が出土しており，塚の最初の築造が中世まで遡り得る可能性もあろう。また，塚中央部の旧表土下からは，線刻のある土師器が埋納された土坑が検出され，周囲に何ら遺構が存在しないことを考えると塚との関連が強く疑われる。調査時に現存した塚の築造が，この時期まで遡ることは考え難いが，この場所がある種の聖域として古代以来意識されていた可能性を示すものと考えられ，興味深い。周辺の塚としては他に，尾崎群集塚（14）の第01号塚で調査例がある[28]。この塚も一辺15m程の大きな塚である。また，神久保寺台塚（36）で発掘調査が実施されいる[29]。

低地遺跡

最後に，ごく最近報告された，周辺の低地遺跡について触れておきたい。西八千代北部地区の事業地付近に位置する桑納川の流路内で，３か所の遺跡が確認され，桑納川遺跡群と呼称された[30]。第５図には□で位置を示した。高本弁天下地点（37）では，桑納川の川底から復元可能な土器を含む大量の縄文時代後・晩期の資料が採集された。本地点の周囲に縄文時代後・晩期の低地遺跡が遺存している可能性が高い。金堀橋地点（38）では９世紀代の土師器杯などが，護岸工事時かと思われる排土中から採集された。高古橋地点（39）でも，９世紀代の土師器杯などが採集され，少なくとも９世紀代の遺物包含層が周囲に存在することは間違いない。高古橋地点付近から上流にかけては，平成17年度に当財団が確認調査を実施し，縄文土器・土師器などの遺物を検出した。

注1　千葉県教育委員会　1997『千葉県埋蔵文化財地図（1）－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』
遺跡の名称については基本的に本書に従った。

2　武藤健一ほか　1999『市内遺跡発掘調査報告書　平成11年度』八千代市教育委員会

3　落合章雄　1989『八千代市仲ノ台・芝山遺跡』（財）千葉県文化財センター

4　大鷹依子　1994『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他』（財）千葉県文化財センター

5　森　竜哉　1996『仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書』八千代市西八千代遺跡群調査会

6　秋山利光ほか　2005『市内遺跡発掘調査報告書　平成16年度』八千代市教育委員会

7　（財）千葉県文化財センター　2004『千葉県文化財センター年報№28－平成14年度－』

8　飯塚博和　2000「金堀台貝塚」『千葉県の歴史　資料編考古1（旧石器・縄文時代）』（財）千葉県史料研究財団

9　伊藤弘一ほか　2004『高津館跡b地点・本郷台遺跡』八千代市教育委員会

10　八千代市教育委員会　1993『市内遺跡発掘調査報告　平成4年度』

11　八千代市教育委員会　1994『市内遺跡発掘調査報告　平成5年度』

12　溝口勝美ほか　1978『桑納前畑遺跡』睦小学校北方遺跡調査会

13　蕨　茂美ほか　1999『市内遺跡発掘調査報告書　平成10年度』八千代市教育委員会

14　常松成人　2000『内野南遺跡a地点発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

15　武藤健一ほか　2004『市内遺跡発掘調査報告書　平成15年度』八千代市教育委員会

16　森　竜哉ほか　2000『ヲイノ山南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

17　森　竜哉　2000『長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

18　八千代市史編纂さん委員会　1991『八千代市の歴史　資料編　原始・古代・中世』

19　常松成人ほか　2003『川崎山遺跡d地点』八千代市遺跡調査会

20　八千代市史編纂さん委員会　1978『八千代市の歴史』

21　村田一男ほか　1981『睦小学校遺跡』八千代市遺跡調査会

22　渋谷　貢　1980『東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会

23　森竜哉　1991『市内遺跡群調査報告　平成3年度』八千代市教育委員会

24　秋山利光ほか　1987『埋蔵文化財発掘調査報告集』八千代市教育委員会

25　森　竜哉ほか　2003『公共事業関連遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

26　朝比奈竹男ほか　1983『北部遺跡群緊急発掘調査報告』八千代市教育委員会

27　武藤健一　1995『追分塚発掘調査報告書』八千代市追分塚調査会

28　朝比奈竹男　2002『不特定遺跡発掘調査報告書1』八千代市教育委員会

29　宮沢久史ほか　1997『市内遺跡発掘調査報告書　平成8年度』八千代市教育委員会

30　新井　徹・常松成人　2006「特集　桑納川川底から発見された土器について」資料館だより第86号　船橋市郷土資料館

第２章　旧石器時代

第１節　概要と方針

１　報告の方針

西芝山遺跡では，遺跡のほぼ全域を対象とした調査範囲で実施した下層確認調査の結果，８か所の拡張区を設け下層本調査を実施した。調査時には，それぞれの調査地点にC2区・C3区・D1区～D4区・E1区・E2区の調査区名称を付け，調査を実施した。この調査区名称は，北東－南西方向に細長い遺跡範囲において，大まかな位置関係を示しており，遺跡北東端付近で平成10年度に本調査範囲を決定した部分であるＣ区，遺跡西側で平成９年度に本調査範囲を決定した部分であるＤ区，遺跡南西端の斜面沿いで平成16年度に本調査範囲を決定した部分であるＥ区という区分である（Ａ・Ｂ区は上層本調査区の呼称として用いた）。

報告に際しては，出土層位・平面分布等を考慮して，石器集中地点を10か所に分離し，報告することとした。それぞれ石器集中１～10とするが，上述の調査区名も併記して用いることとしたい（第６図）。

出土層位の違いから，石器集中地点は形成が複数の時期にわたることが明らかであるが，本報告では芝山町金沢台遺跡[1]での方針を踏襲し報告したい。すなわち，姶良Tn火山灰（AT）を包含する，基本層序のⅥ層より下位の石器群をAT下位石器群，上位の石器をAT上位石器群と呼称することとした。AT下位石器群は石器集中１から石器集中６の６か所の石器集中地点が相当し，出土層位は第２黒色帯に相当するⅨ層からⅦ層である。AT上位石器群は石器集中７から石器集中10の４か所の石器集中地点が相当し，出土層位はⅥ層からⅢ層である。

石器の計測については，当財団で通常実施している方法に従った。注１文献などを参照いただきたい。

器種について，掻器・削器については，おおむね１側縁全体に広く剥離痕が見られるものとし，一部に見られるものは二次加工のある剥片（RF）とした。微細な剥離痕を有する剥片については，二次加工のある剥片（RF）と使用痕のある剥片（UF）に分離した。前者は意図的な調整加工を施したもの，後者は使用に伴う刃こぼれをもつものという判断であるが，厳密なものではなく，主観的な判断である。砕片としたものは，最大長・最大幅の両者が10㎜以下のものとした。

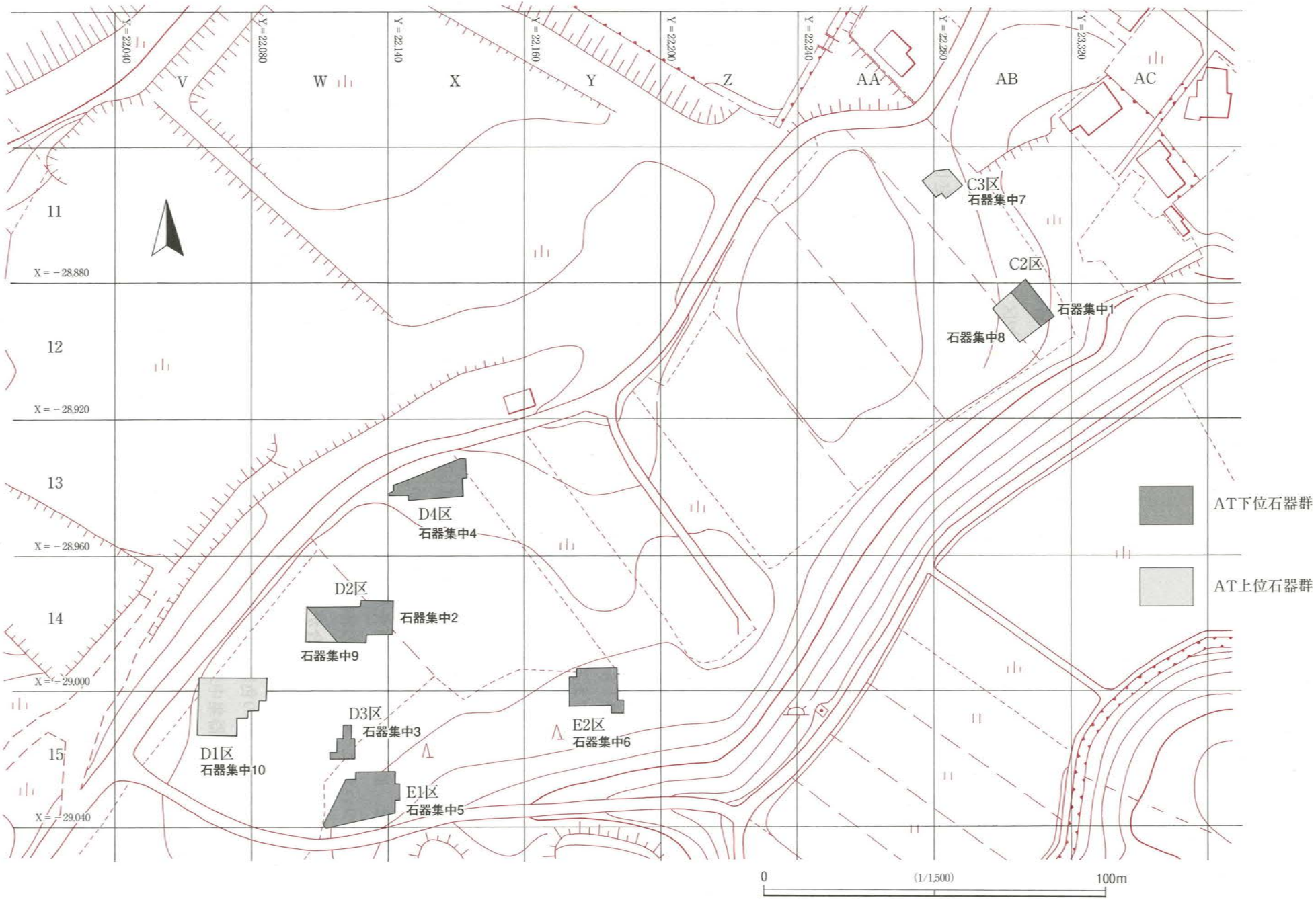
石材については，本文中でその特徴を記した。石材の名称はあくまで考古学的な名称であり，厳密な岩石学的特徴を反映していない場合がある。安山岩についてはＡ・Ｂに大別し，前者は「ガラス質黒色安山岩」「黒色緻密質安山岩」と呼称されているものであり，後者はいわゆる「トロトロ石」を指す。玉髄はメノウを含めた。石材の色調を示すため記した色調は，『新版　標準土色帖　1999年度版』を参照した。

母岩番号は，各石器集中地点ごとに，「石材名＋１～」の番号を付けた。

接合番号は，各石器集中地点ごとに「接１～」の通し番号を付けた。

石器一覧表中の標高は，遺物の出土レベルである。

なお，器種同定・石材の同定について，千葉県教育庁文化財課矢本節朗氏，東京大学大学院五十嵐修氏にご教示をいただいた。



第6図　下層本調査区及び石器集中地点位置図

2　基本層序

第７図に，西芝山遺跡における最も良好な土層堆積を示す例を以て基本層序とし，土層柱状図を示した。14W37地点の柱状図は，D2区北壁の土層断面図の一部である。15W57地点の柱状図は，D3区南壁の土層断面図の一部で，14W37地点を補足するものとして示した。

基本的な分層は，当財団の調査で通常用いられている土層区分[2)]に従っている。Ⅲ層より上位の土層については，耕作及び攪乱により調査範囲全域で残存状況が良くなく，この柱状図には示されていない。ただし，場所によってはⅡ層が存在した。

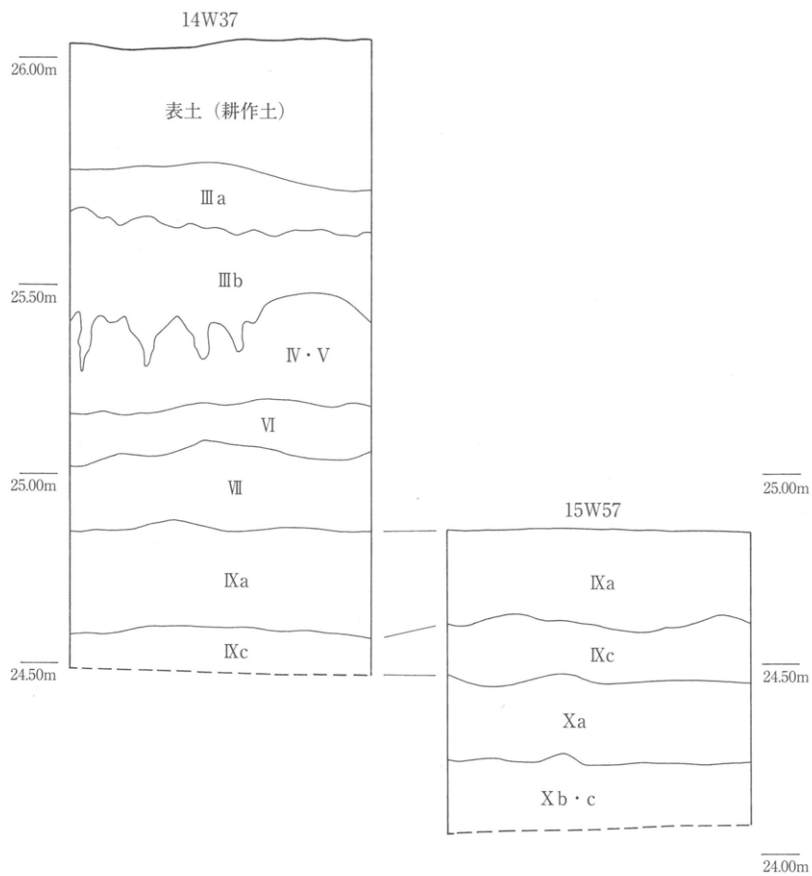
いわゆるソフトローム層に相当するⅢ層は，この柱状図で示されるように，上位のⅢa層と下位のⅢb層に分層可能であった。ただし，分層できない地点も存在した。また，上部の耕作や攪乱がこの層まで及んでいる場合もあるようで，地点によってはⅢ層の厚さが薄く，Ⅲ層上部が攪乱により消失してしまった場合もあるようである。

Ⅳ・Ⅴ層は本来２層に分層されうる土層であるが，本遺跡では明瞭に区分できなかった。Ⅴ層は武蔵野台地第１暗色帯に相当する。

Ⅵ層は，姶良Tn火山灰（AT）を集中的に包含する土層である。

Ⅶ層は，武蔵野台地第２黒色帯上部に相当する土層である。

Ⅸ層は第２黒色帯下部に相当し，上位のⅨa層と下位のⅨc層に区分した。調査時には間層であるⅨb層を認識できなかったため，上位をⅨa・b層，下位をⅨc層として分層したが，整理時に上位の層をⅨa層と判断した。



第７図　基本層序

X層は立川ローム最下層に相当し，上位のXa層と下位のXb・c層に区分した。X層の分層は，一部の地点でのみ可能であった。

土層の堆積状況は，上述のように，後世の耕作や攪乱によってⅡ層以上の土層がほとんど存在せず，一部Ⅲ層までこうした影響が及んでいるようで，ローム層最上部についての堆積状況は良好とは言い難いようである。また，遺跡内には所々に大規模な攪乱孔が存在しているようで，特にD4区ではこうした攪乱孔によって，石器集中地点が一部攪乱された可能性がある。

こうした，表土付近の土層の乱れや攪乱孔の存在はあるものの，Ⅲ層より下のローム層については，ほとんどの調査区で安定して確認できており，堆積状況は概ね良好と言えよう。Ⅵ層については，明るい色調とガラス質の感触が明瞭で，比較的認識しやすかった。また，Ⅸ層については，特に下部のⅨc層の色調がしっかりと暗く，分層は容易であった。

ただし，地点的な問題として，E1区の南側だけは，遺跡南側に貫入する小谷に向う斜面部にあたり，ローム層が安定していなかった。本来Ⅸ層であるはずの部分までがソフトローム化しており，こうした部分については，土層断面図中にⅢ′層と表記しておいた。

注1　永塚俊司　2004『建設センター・保全事務所用地内埋蔵文化財調査報告書　芝山町金沢台遺跡』（財）千葉県文化財センター

2　島立　桂・新田浩三・渡辺修一　1992「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成２・３年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号　（財）千葉県文化財センター

第２節　AT下位石器群

１　石器集中１（C2区）（第８・９図，第３・13表，図版２・７）

分　布

遺跡北東端のC2区で検出した，小規模な石器集中地点である。C2区全体で広く遺物が出土したが，遺物の出土レベルから見て北側の一群と，南側の一群に分離が可能であり，北側の一群を石器集中１とした。

12AB05・06・16・17・26グリッドにかけて，８ｍ×５ｍほどの範囲で帯状に分布する。１点だけ，12AB00グリッドで遺物が出土したが，厳密な出土位置が不明である。地形図を見ると，遺跡北東側に小谷が存在し，石器集中１はこの小谷に沿って分布しているように見える。

出土層位はX層からIX層にわたり，やや上下に拡散するが，IX層下部が中心であろう。断面図上に投影された遺物ドットを見ると，東方向に下がって分布している。

出土レベルの最大値は23.814m，最小値は23.035mで，平均値は23.382mである。遺物の出土レベルに約80cmの高低差があるが，地形の傾斜と関係しているのであろう。

器　種

二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片１点・剥片４点・礫４点の合計10点が出土した（第３表）。第９図１は玉髄１製の二次加工のある剥片である。左側縁に細かい調整を施す。２は黒曜石１製の使用痕のある剥片である。３はチャート１製の剥片である。

石　材

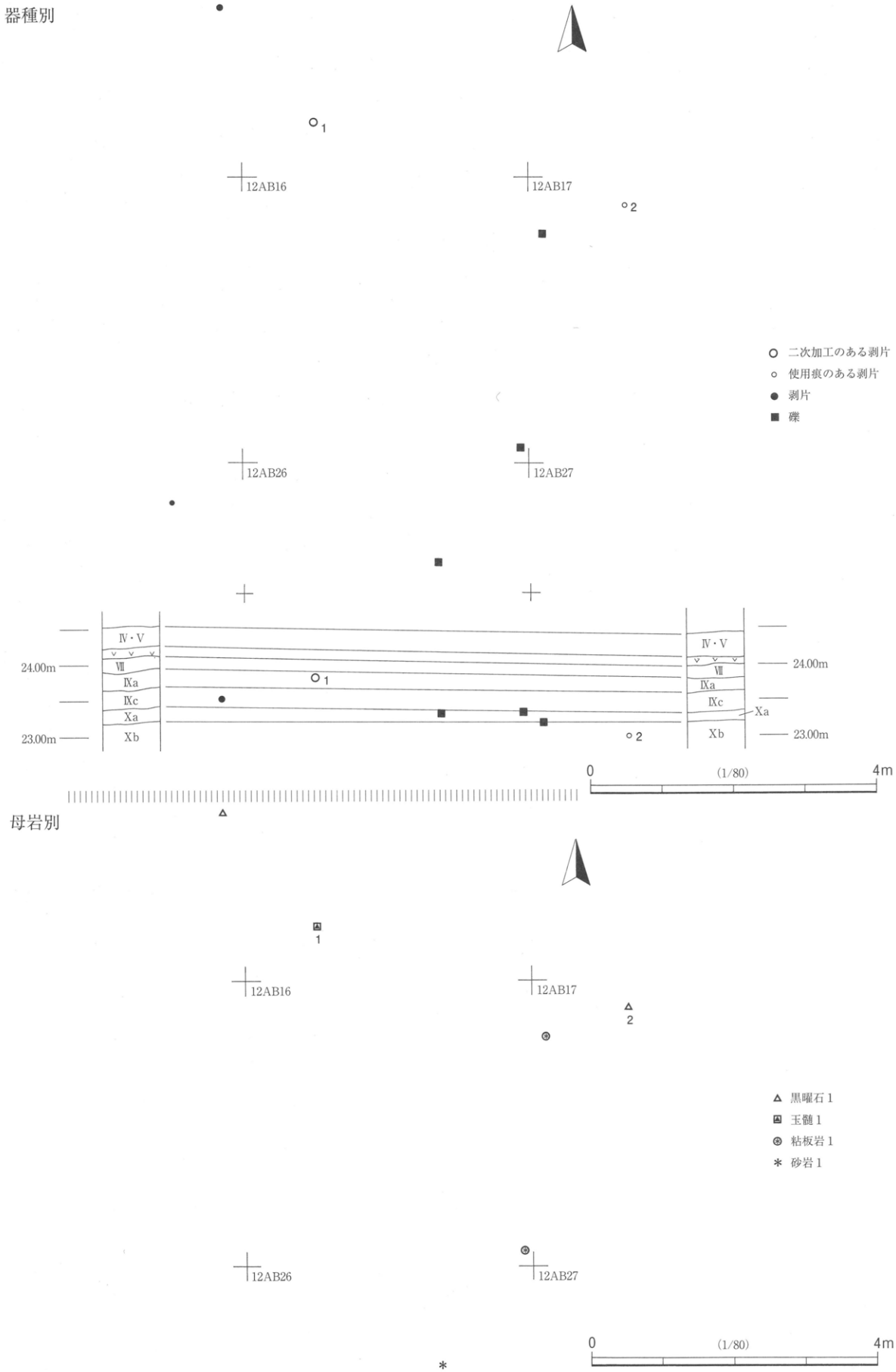
黒曜石２点・玉髄１点・チャート１点・安山岩１点・粘板岩２点・砂岩１点で構成される。

黒曜石は２母岩を判別した。黒曜石１は第９図２の使用痕のある剥片が相当し，透明度がにぶい黒色で，夾雑物が多く，縞状の節理が入る。黒曜石２は透明度はにぶく，やや灰色がかったくすんだ色調で，ごく細かな夾雑物が入るものである。小型の剥片のみのため，図化しなかった。

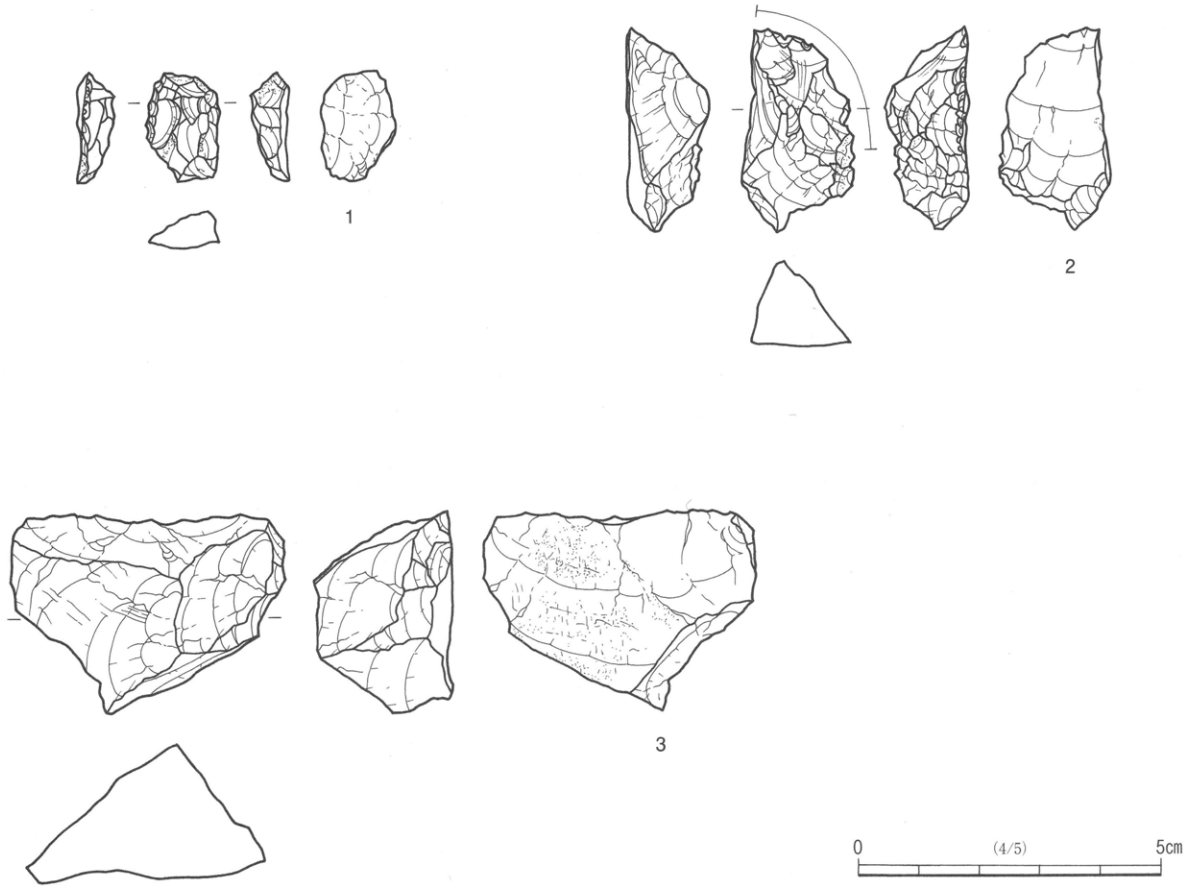
安山岩・粘板岩・砂岩はすべて礫である。

第３表　石器集中１　組成表

	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥　片	礫	合計	組成比
黒曜石１		1 7.44	1 1.69		2 9.13	20.0% 4.8%
黒曜石２			2 3.15		2 3.15	20.0% 1.7%
玉髄１	1 1.38				1 1.38	10.0% 0.7%
チャート１			1 30.46		1 30.46	10.0% 16.1%
安山岩１				1 71.75	1 71.75	10.0% 37.9%
粘板岩１				2 34.15	2 34.15	20.0% 18.1%
砂岩１				1 39.13	1 39.13	10.0% 20.7%
合計（点数） 合計（重量）	1 1.38	1 7.44	4 35.3	4 145.03	10 189.15	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	10.0% 0.7%	10.0% 3.9%	40.0% 18.7%	40.0% 76.7%	100.0% 100.0%	



第８図　石器集中１・分布状況



第９図　石器集中１

２　石器集中２（D2区）（第10～21図，第４・13表，図版３・４・８・９）

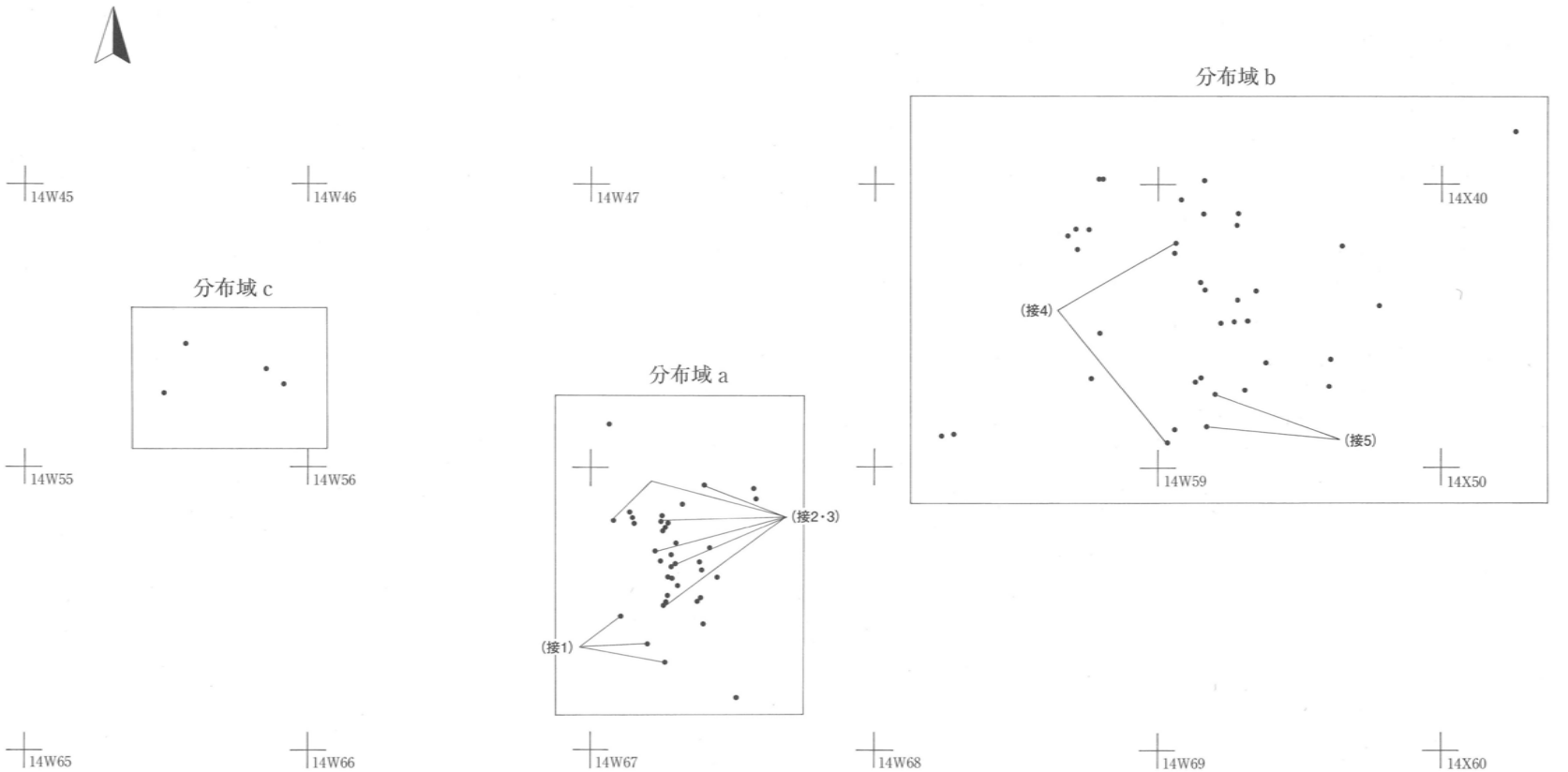
分　布

遺跡南西のD2区で検出した。D2区全体で広く石器を検出したが，D2区南西端付近で検出した小規模な集中域は出土レベルが明らかに異なるため，石器集中２とは別の石器集中地点と判断し，石器集中９として分離した。

石器集中２は，D2区内で東西方向に大きく広がっている。平面分布等を勘案し，分布域ａ～ｃに仮に分離した。中央を分布域ａ，東側を分布域ｂ，西側を分布域ｃとする（第10図）。分布域ａ～ｃは，分布域間を越えた接合関係は無いものの，同一母岩と判断される石材が相互に存在する。

分布域ａは，14W57グリッドを中心とした４ｍ×２ｍほどの範囲に分布する（第11図）。安山岩Ａ１とした母岩を中心とし，比較的点数の多い，密集度の高い分布域である。安山岩Ａ１による，接１・接２・３とした接合資料が存在する。

分布域ｂは，14W48・49グリッドを中心とした4.5m×８ｍほどの範囲に分布する（第15図）。分布域の東側には大規模な攪乱孔が存在し，本来の分布状況が乱されている可能性がある。いわゆるチョコレート色の珪質頁岩と，その他の多様な珪質頁岩を主とする。珪質頁岩１による接４・接５とした接合資料が存在する。



第10図　石器集中２・分布状況

分布域ｃは，分布域ａの北西側で，14W45グリッド内の１ｍ×２ｍほどの範囲に分布する（第11図）。珪質頁岩１・２で構成される，小規模な集中である。

出土層位は主にⅨc層からⅦ層にわたり，特に分布域ａ・ｂでは上下の拡散が見られるが，概ねⅨ層上部からⅦ層を主とするようである。出土レベルの最大値は25.400ｍであるが，この１点のみ飛び抜けて高く，攪乱等の作用によった可能性がある。次に高い値は25.108ｍである。最小値は24.580ｍ，平均値は24.853ｍである。

器　種

ナイフ形石器３点・削器３点・石核３点・二次加工のある剥片４点・使用痕のある剥片６点・剥片53点・砕片９点の合計81点が出土した（第４表）。図はａ～ｃの分布域ごとにまとめた。

（分布域ａ）

分布域ａには，ナイフ形石器１点・削器１点・剥片32点・砕片６点が分布する。分布状況を第11図に，実測図を第12～14図に示した。第12図１はナイフ形石器で，珪質頁岩１製である。小型で，右側面を中心に丁寧な調整が施される。裏面の基部付近は，入念にバルブが除去され整形剥離が施されている。削器は，接２・３に含まれる，第14図９である。右側縁の上部を中心に加工が施される。第12図２～５は剥片である。２はチャート１の剥片で，打面調整の痕跡を顕著に留める。３～５は安山岩Ａ１の剥片で，３は打面調整剥片であろう。

分布域ａ内でまとまる接合資料として，第13図接１，第14図接２・３がある。いずれも安山岩Ａ１とした，同一母岩と判断されるものである。安山岩Ａ１は，他に接合しない剥片類が29点存在し，その一部は第12図３～５として図化した。

第13図接１は剥片３点・砕片１点が接合する（第13図６～８）。６は剥片の上部が折れている。７・８は，剥片の半ばで折れたものが接合した。第14図接２・３は削器１点・剥片５点が接合する（第14図９～13）。９は削器としたもので，右側縁に調整を施し，刃部としている。10～13は剥片である。いずれも縦長の剥片となる。10・11は縦長の剥片が，縦方向に折れたものである。接２・３から推定しうる剥離の状況は，上方に打面を置いて９を剥離し，続いて10・11を同じ方向から剥離，打面を反転し下方から12・13を連続して剥離している。

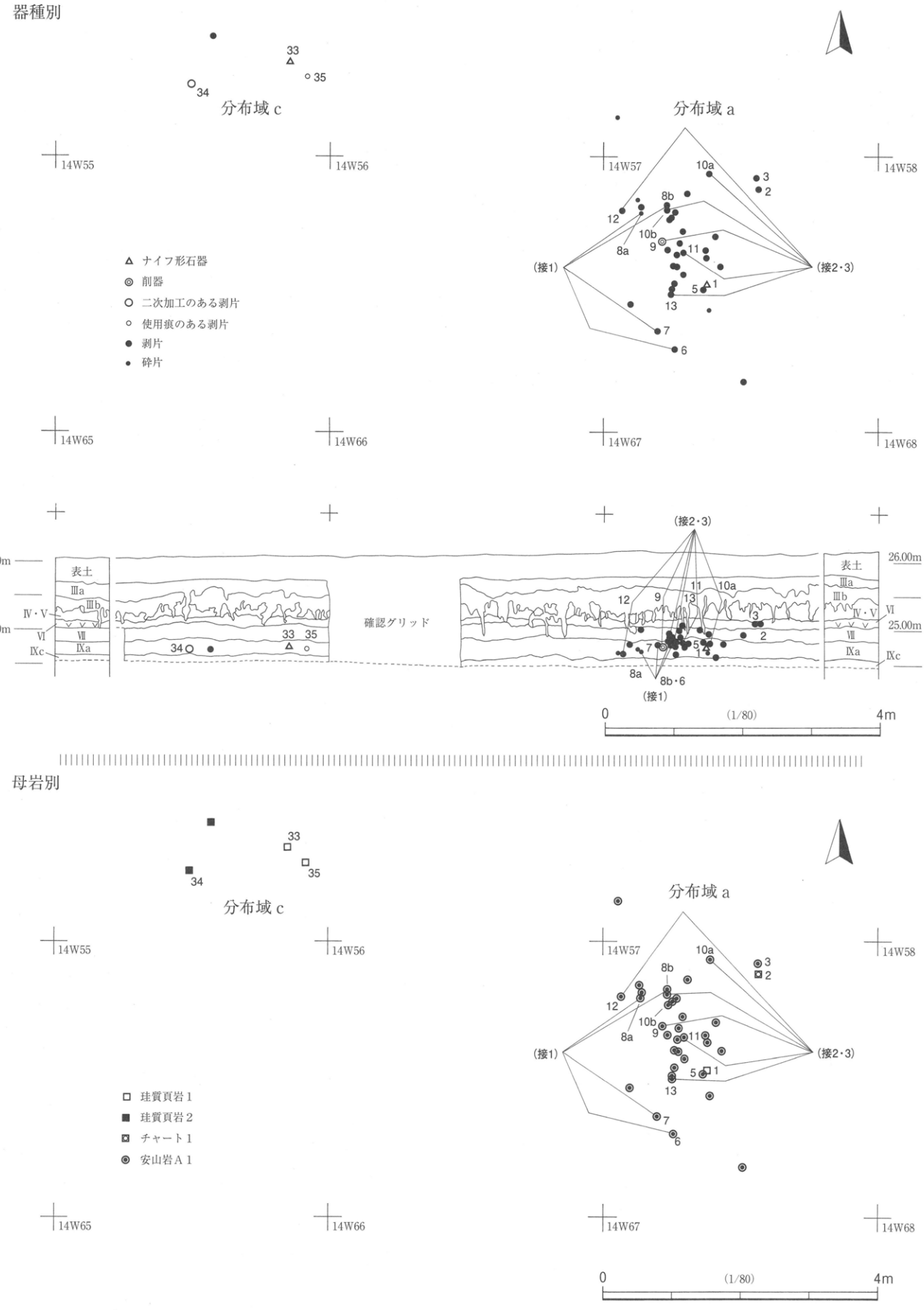
（分布域ｂ）

分布域ｂは，ナイフ形石器１点・削器２点・石核３点・二次加工のある剥片３点・使用痕のある剥片５点・剥片20点・砕片３点が分布する。いわゆるチョコレート色の珪質頁岩を素材としたものが多い。分布状況を第15図に，実測図を第16～20図に示した。

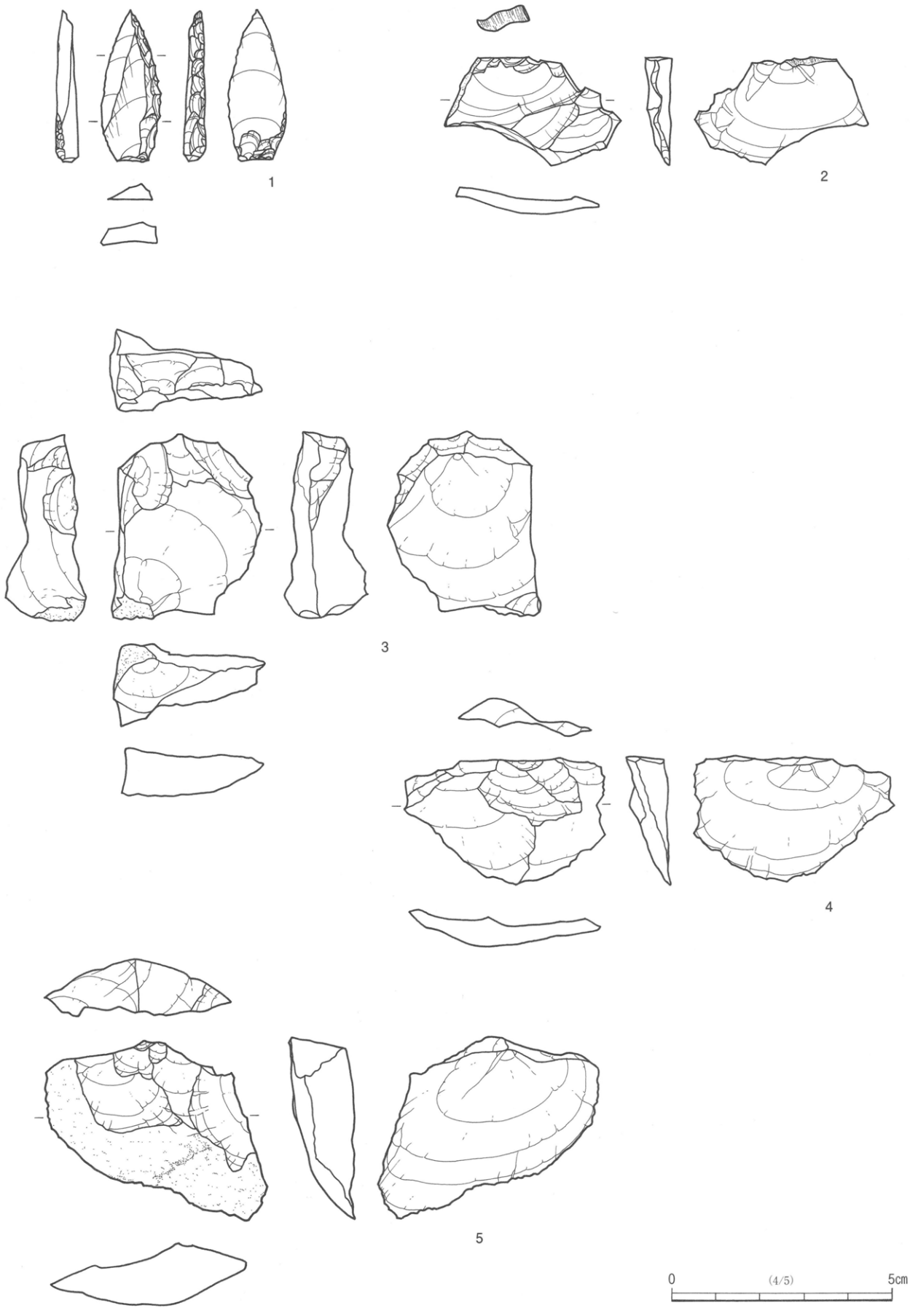
第16図14は小型のナイフ形石器で，頁岩１製である。右側面上部にブランティングが施され，裏面の基部付近は入念にバルブが除去されている。15・16は削器である。15は珪質頁岩３とした石材で，両側縁に入念な加工が施される。16は珪質頁岩１で，左側縁に加工が施される。

17～19は二次加工のある剥片としたものである。17は珪質頁岩２とした石材で，右側面上部にノッチ状に加工を施す。左側縁には使用に伴うと考えられる痕跡が残る。18・19はいずれも珪質頁岩１で，18はいわゆる小石刃であろう。19は小型の剥片を素材とするものである。

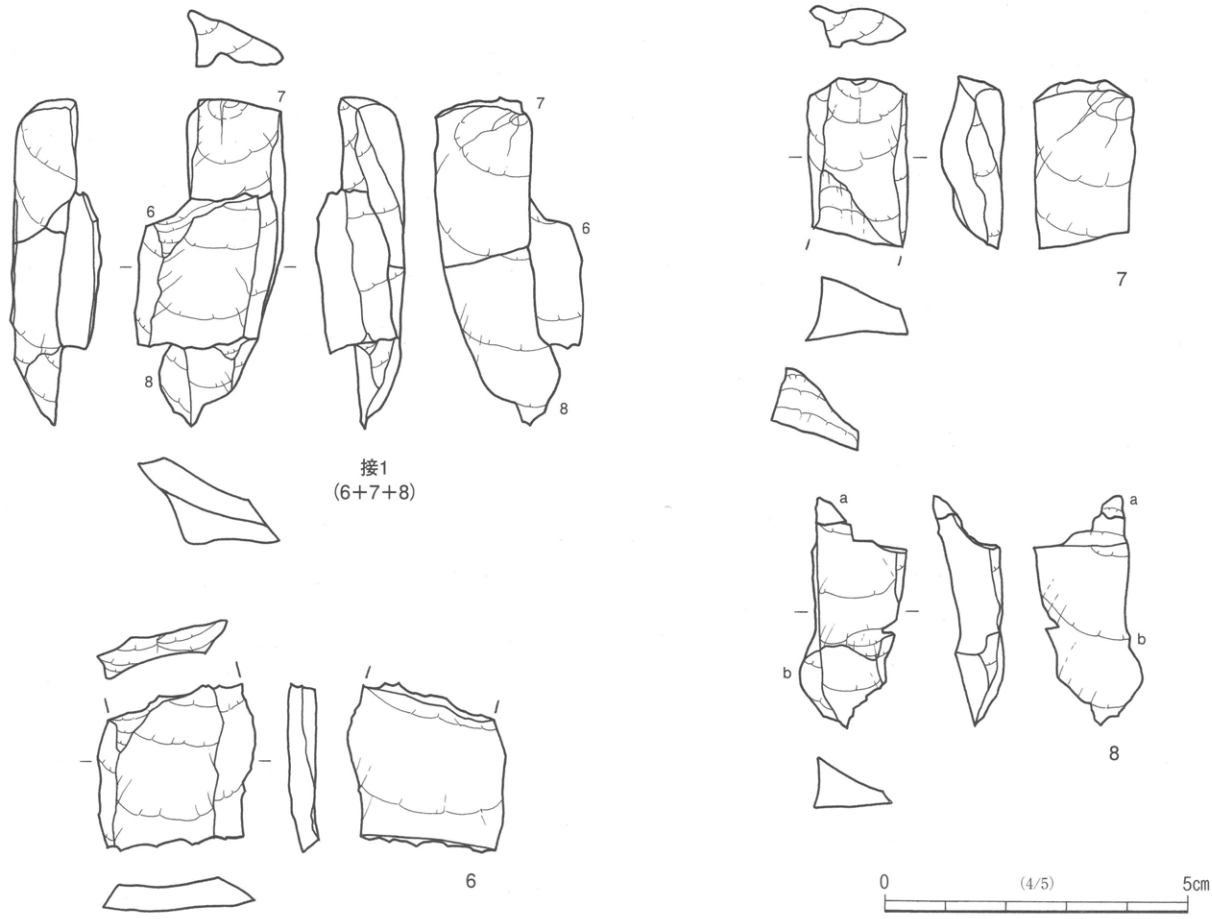
20～22は使用痕のある剥片としたものである。20は珪質頁岩４とした石材で，縦長剥片の右側縁に使用に伴うと考えうる微細な剥離痕が観察できる。21は珪質頁岩２で，下部の縁辺を中心に，顕著な使用の痕



第11図　石器集中２・分布域ａ・ｃ・分布状況



第12図　石器集中２・分布域ａ（１）



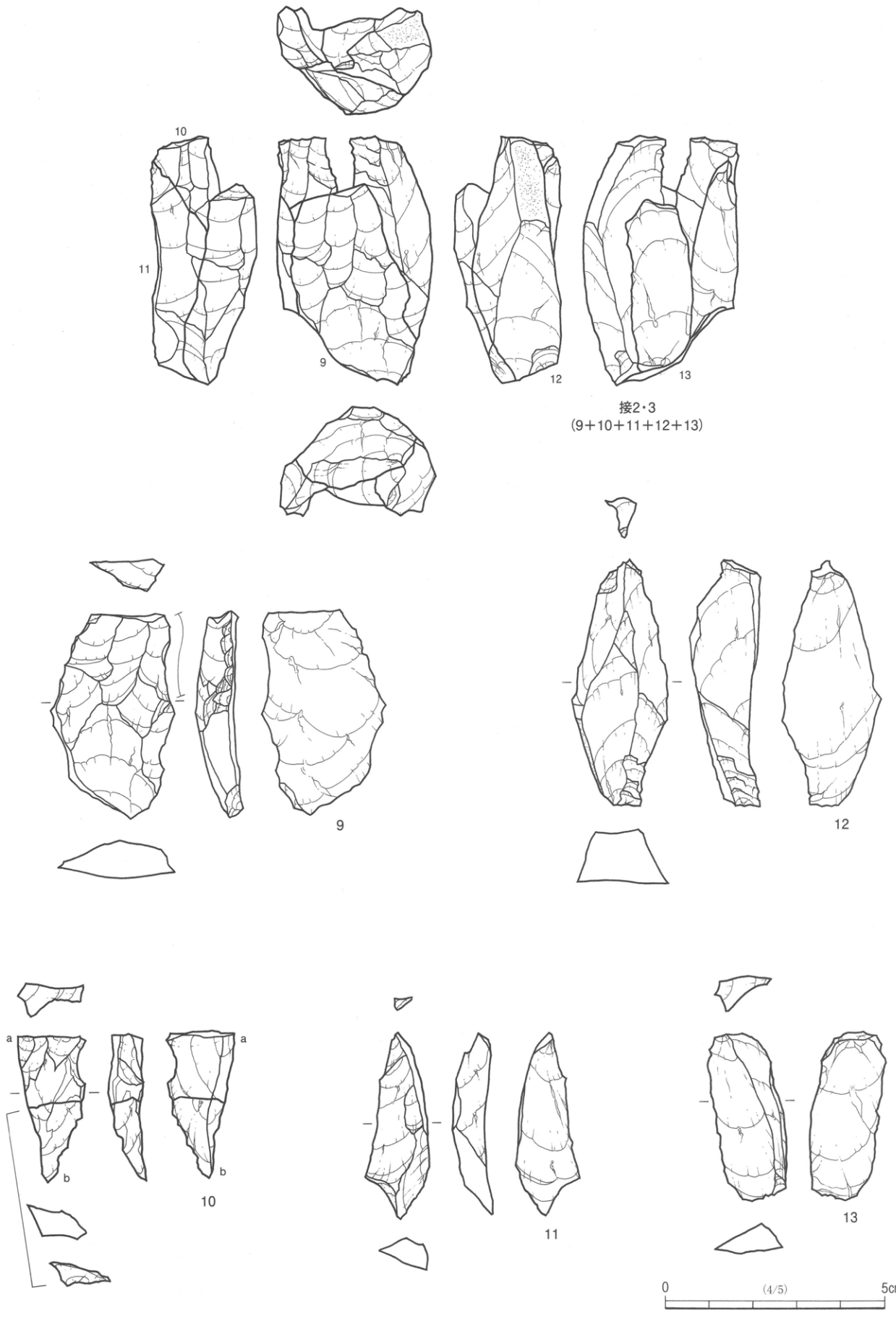
第13図　石器集中２・分布域ａ（２）

跡が認められる。第17図22は珪質頁岩１で，左側縁上部に使用の痕跡が認められる。他に使用痕のある剥片として，接４の第20図29・30がある。

第17図23～25は剥片である。22は珪質頁岩１，23は珪質頁岩２，24は珪質頁岩５，25は安山岩Ａ１である。

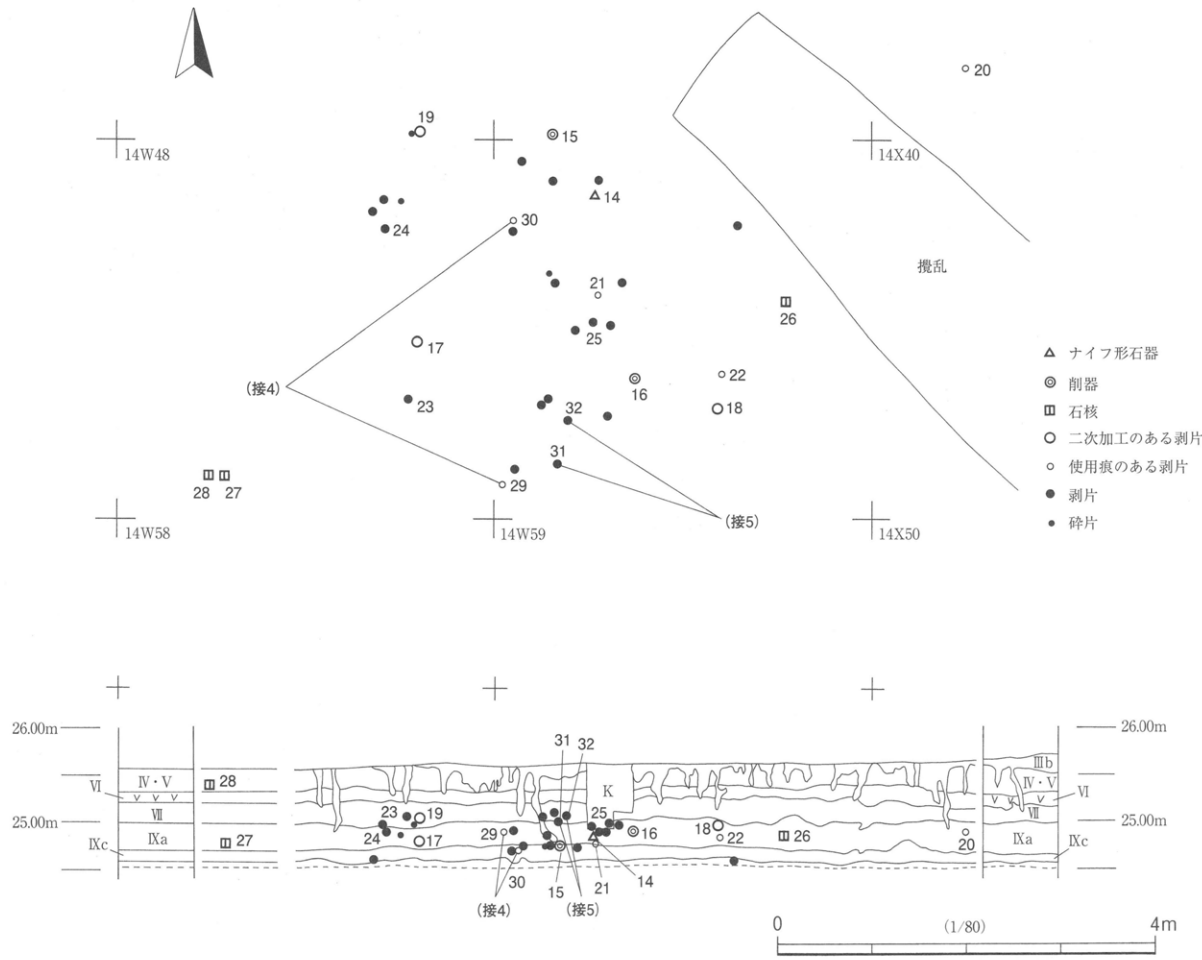
第18図26・27～第19図28は石核である。26は珪質頁岩２で，分厚い剥片を石核として用いている。27は珪質頁岩７で，打面転移を繰り返して剥片を剥離した後の残核である。28は珪質頁岩６で，礫の形状がある程度推定できる石核である。

分布域ｂ内でまとまる接合資料として第20図接４・接５がある。いずれも珪質頁岩１で，同一母岩と考えうる。珪質頁岩１は，他に接合しない製品類・剥片類が11点ある。接４は使用痕のある剥片２点が接合する（第20図29・30）。29・30はいずれも縦長の良好な剥片で，側縁に使用の痕跡と考えうる微細な剥離痕が存在する。接５は剥片２点の接合である（第20図31・32）。いずれも小型の剥片同士の接合である。

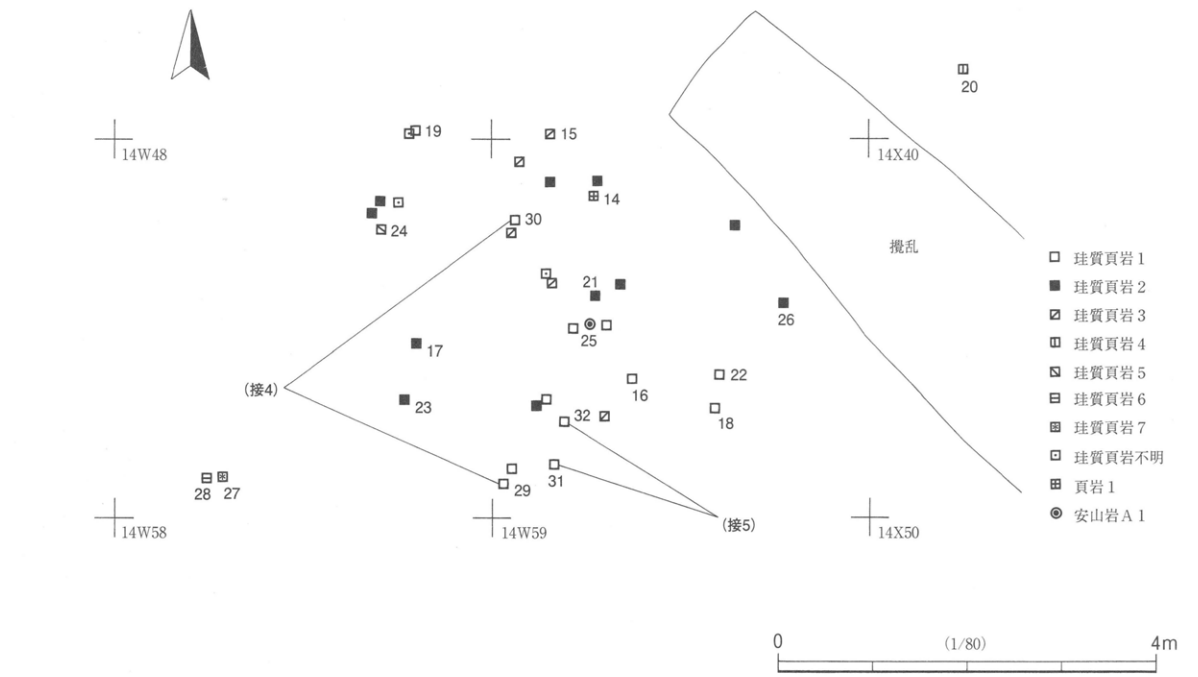


第14図　石器集中２・分布域ａ（３）

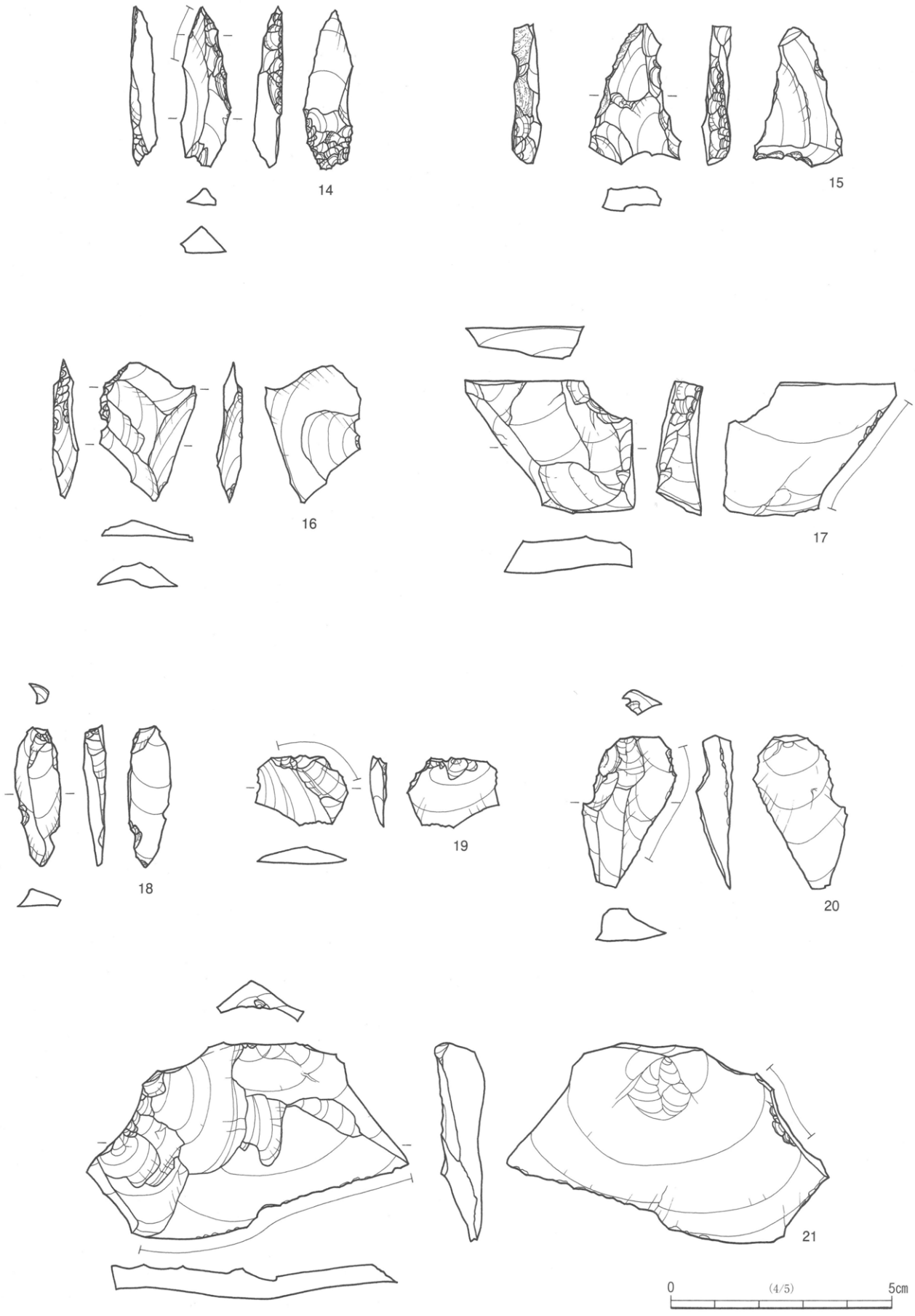
器種別



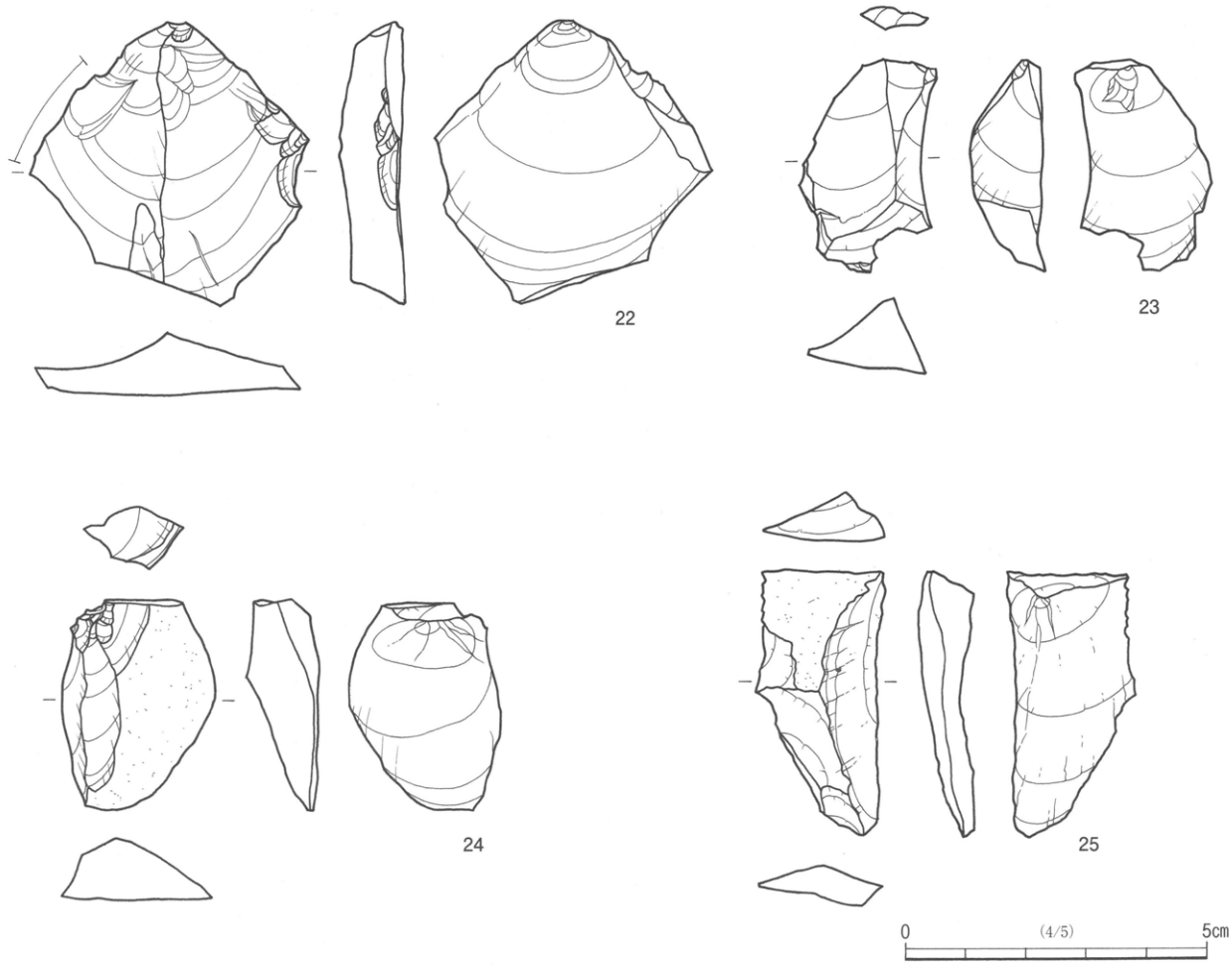
母岩別



第15図　石器集中２・分布域ｂ・分布状況



第16図　石器集中２・分布域ｂ（１）



第17図　石器集中２・分布域ｂ（２）

（分布域ｃ）

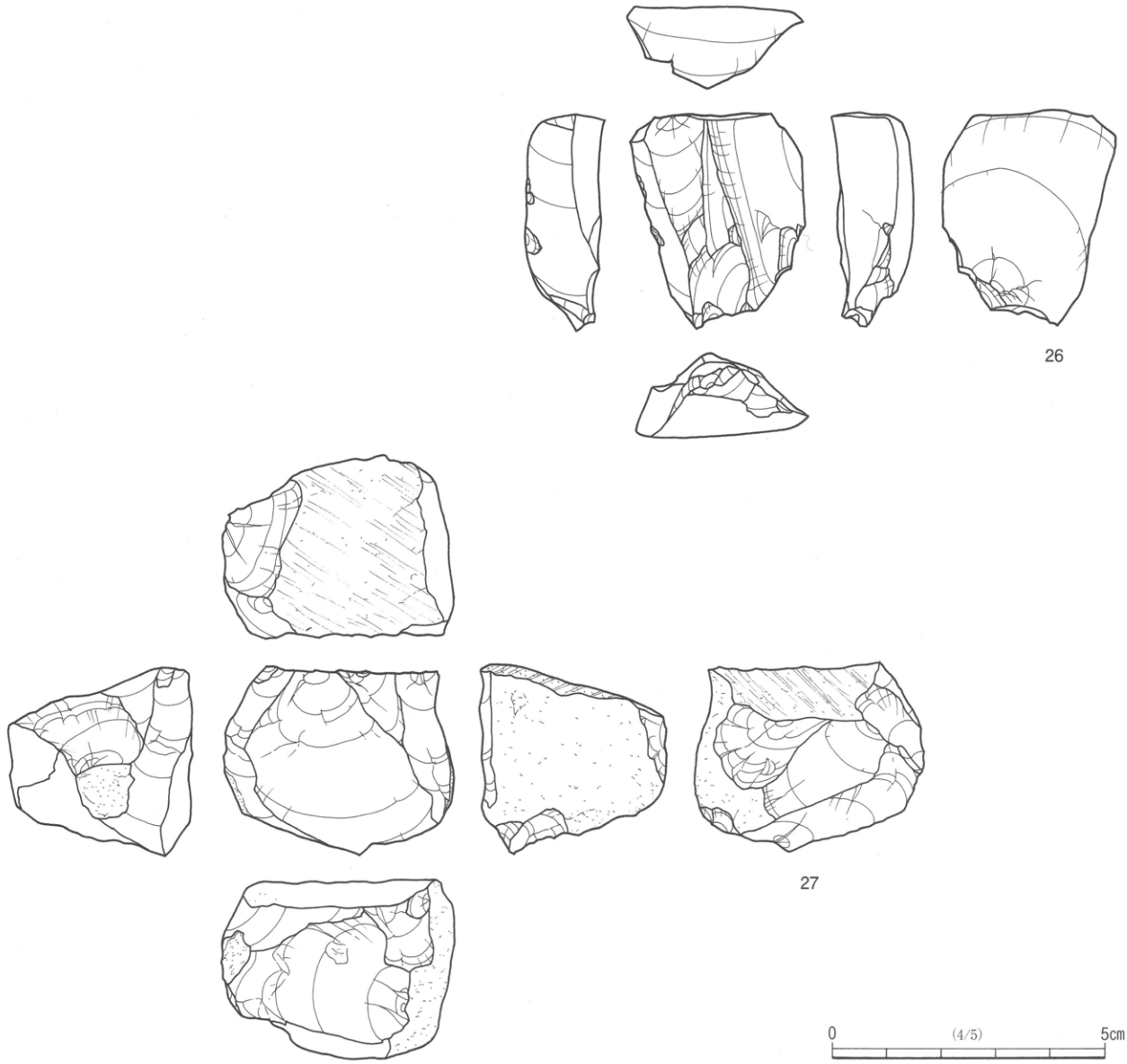
分布域ｃには，ナイフ形石器１点・二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片１点・剥片１点が分布する。分布状況を第11図に，実測図を第21図に示した。

33はナイフ形石器である。珪質頁岩１で，左側面上部と右側面下部に顕著な調整を施す。左側面下部はノッチ状に整形される。34は珪質頁岩２で，二次加工のある剥片である。下部縁辺に加工を施し，両側縁には使用の痕跡が認められる。35は珪質頁岩１で，使用痕のある剥片である。両側縁に使用の痕跡と考えうる微細な剥離痕が観察できる。

石　材

珪質頁岩40点・頁岩１点・チャート１点・安山岩Ａ39点で構成される。

珪質頁岩は７母岩を判別した。珪質頁岩１～３は良質のいわゆるチョコレート色の珪質頁岩である。珪質頁岩１は，色調が珪質頁岩２と珪質頁岩３の中間の濃さで，灰黄褐色～暗褐色・黒褐色を呈し，色調はグラデーション的に変化する。黒褐色の不純物がやや多い。ナイフ形石器（第12図１・第21図33）や削器（第16図16）の他，図示したものでは第16図18・19・第17図22・第21図35が相当する。接合資料として第20図接４・接５が存在する。珪質頁岩２は，色の薄い灰黄褐色で，不純物は比較的少ない。第16図17・第

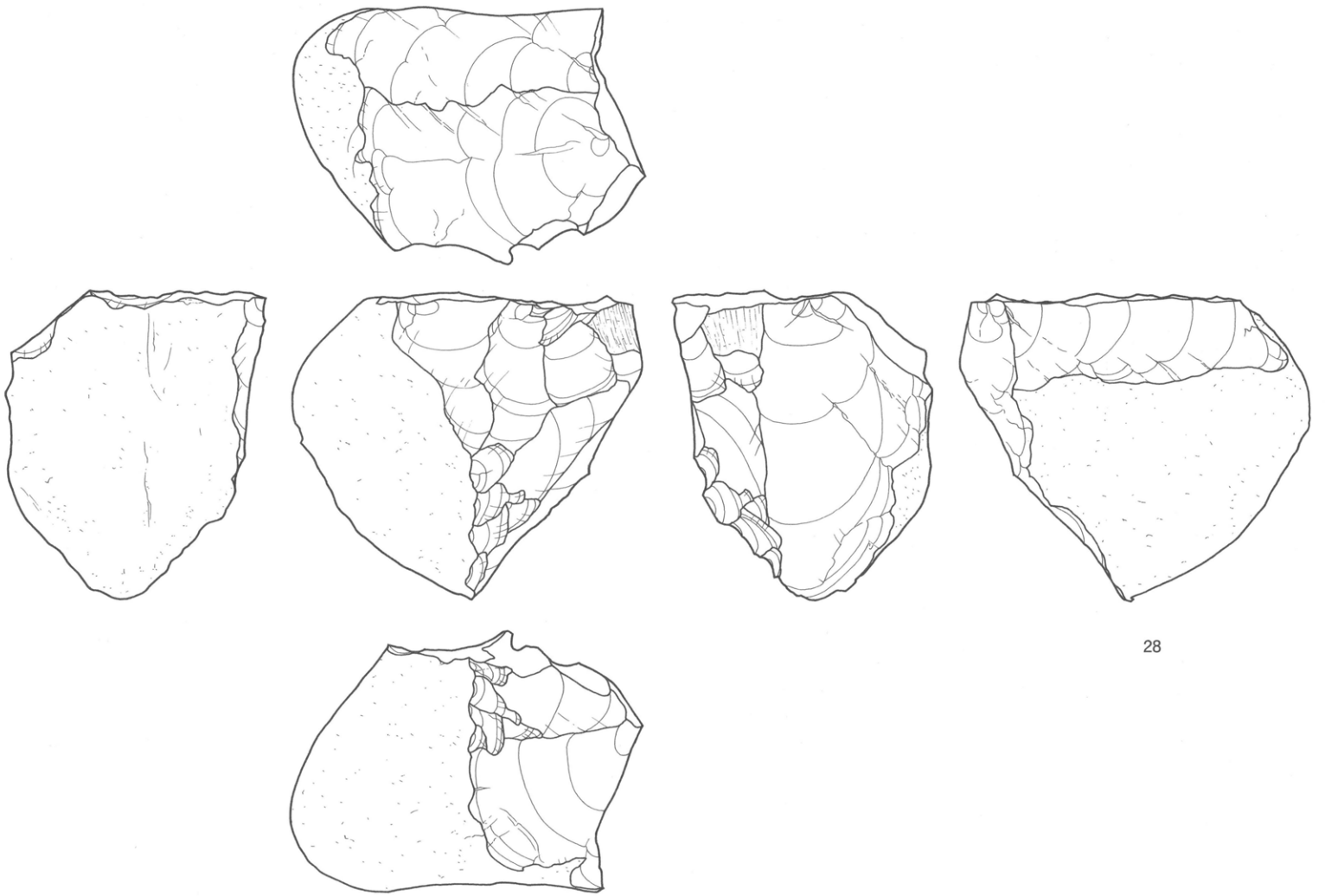


第18図　石器集中２・分布域ｂ（３）

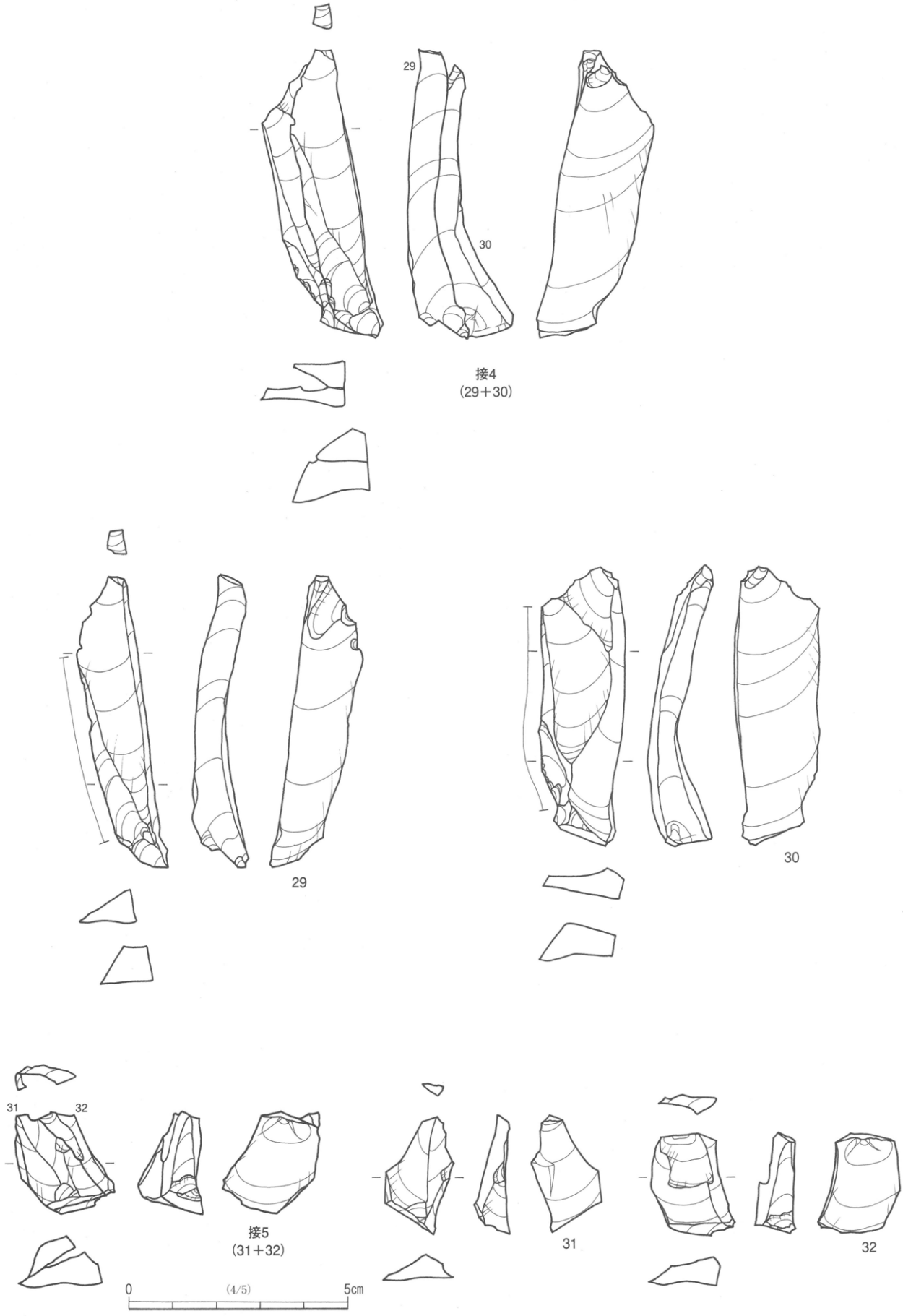
24図34の二次加工のある剥片や第18図26の石核の他，第16図21・第17図23が相当する。珪質頁岩３は，色の濃い黒褐色を呈する。第16図15の削器が相当する。

珪質頁岩１～３は，表面の色調や質感が似ており，本来は同じ石の別の相を見ている可能性もあるが，上記のような特徴によるグルーピングが可能であったため，一応別の母岩と認定しておく。珪質頁岩で不明としたものは，すべていわゆるチョコレート色の珪質頁岩であるが，珪質頁岩１～３のどれに相当するか判別できなかったものである。

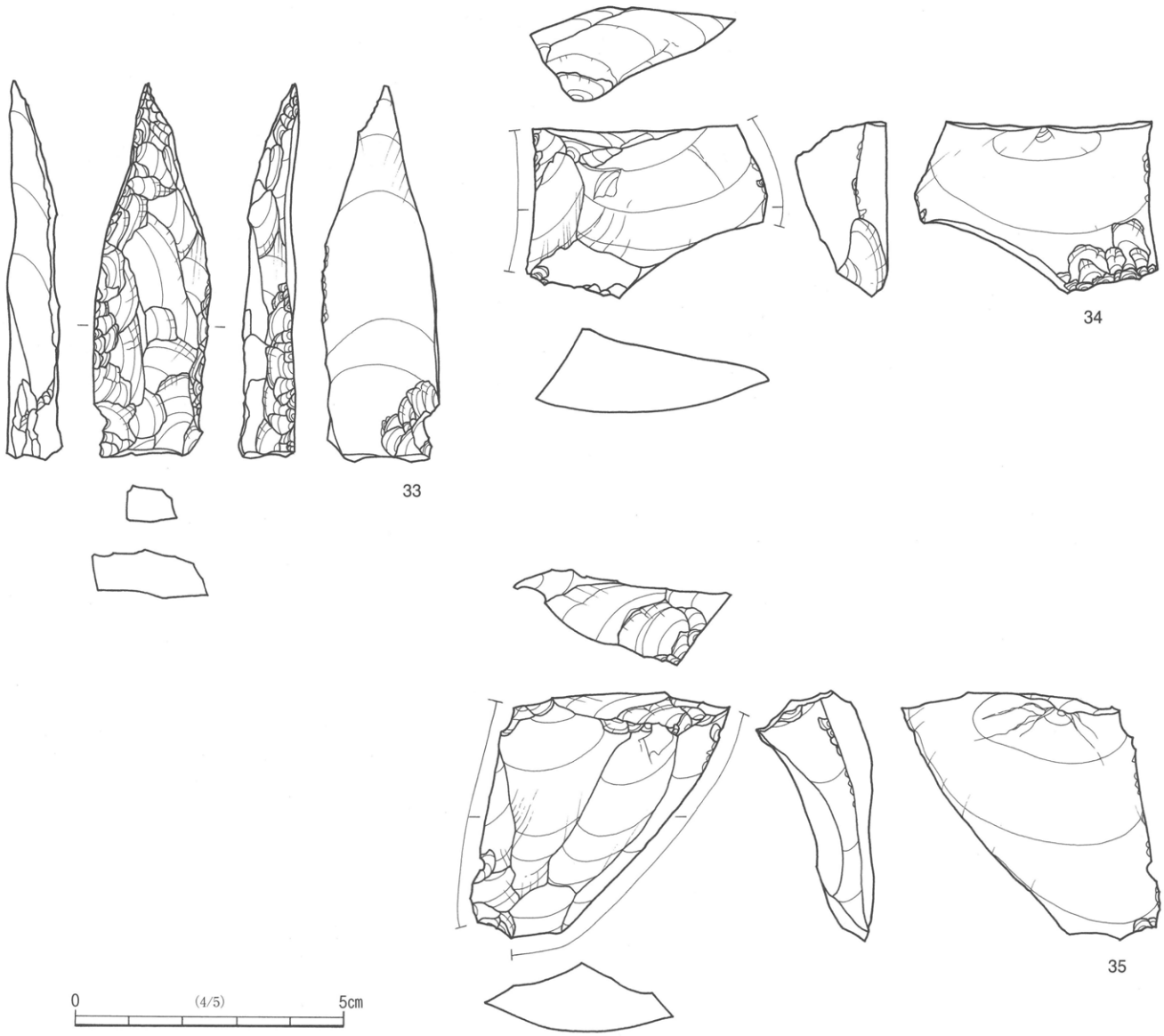
珪質頁岩４は，灰オリーブ色に暗青灰色の縞が若干入るものである。第16図20の使用痕のある剥片が相当し，単独母岩である。珪質頁岩５は，第17図24の剥片が相当し，単独母岩である。小型礫の形状を残し，自然面がオリーブ黄色で，剥離面は淡黄色を呈し，やや軟質のものである。珪質頁岩６は，第19図28の石



第19図　石器集中２・分布域ｂ（４）



第20図　石器集中２・分布域ｂ（５）



第21図　石器集中２・分布域ｃ

核が相当し，単独母岩である。自然面がにぶい黄色～オリーブ黄色，剥離面は灰オリーブ色で，節理の目立つあまり質の良くない石材である。珪質頁岩７は，第18図27の石核で，単独母岩である。自然面が浅黄色，剥離面は灰白色～淡黄色を呈する。

珪質頁岩の分布については，珪質頁岩１は分布域ａ～ｃのすべてで検出した。珪質頁岩２は分布域ｂ・ｃで検出した。珪質頁岩３～７は，すべて分布域ｂで検出した。

頁岩１はナイフ形石器（第16図14）が相当する。黒色，緻密なもので，単独母岩である。分布域ｂで検出した。チャート１は第12図２の剥片で，単独母岩である。暗緑灰色のやや節理が目立つものである。分布域ａで検出した。

安山岩Ａは全て同一母岩と判断し，安山岩Ａ１とした。灰色に近く，自然面や風化面では若干黄色味を帯びる。白色粒状の不純物がやや目立つ。分布域ａで大部分を検出し，接合資料として第13図接１・第14図（接２・３）が存在する。分布域ｂでも剥片１点（第17図25）を検出した。

石材と器種との関係は，ナイフ形石器は珪質頁岩１が２点，頁岩１が１点である。削器は珪質頁岩１・珪質頁岩３・安山岩Ａ１が各１点ずつ，石核は珪質頁岩２・珪質頁岩６・珪質頁岩７が各１点ずつである。二次加工のある剥片・使用痕のある剥片は珪質頁岩１・２が大部分である。

分布域ごとの石材をまとめると，分布域ａは安山岩Ａ１が38点と，珪質頁岩１・チャート１を各１点含む。分布域ｂは珪質頁岩１～７のすべてが揃い，珪質頁岩１が12点，珪質頁岩２が11点，珪質頁岩３が５点，珪質頁岩４・珪質頁岩５・珪質頁岩６・珪質頁岩７・頁岩１・安山岩Ａ１が各１点である。さらに珪質頁岩のうち判別不能であったものが３点ある。分布域ｃは珪質頁岩１が２点と，珪質頁岩２が２点による構成である。

第４表　石器集中２　組成表

	ナイフ形石器	削器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	合計	組成比
珪質頁岩１	2 26.34	1 2.69		2 2.39	4 43.4	6 8.59		15 83.41	18.5% 14.0%
珪質頁岩２			1 19.01	2 30.99	1 20.97	9 13.44		13 84.41	16.1% 14.2%
珪質頁岩３		1 3.14				4 1.54		5 4.68	6.2% 0.8%
珪質頁岩４					1 3.82			1 3.82	1.2% 0.6%
珪質頁岩５						1 8.89		1 8.89	1.2% 1.5%
珪質頁岩６			1 203.14					1 203.14	1.2% 34.2%
珪質頁岩７			1 45.8					1 45.8	1.2% 7.7%
珪質頁岩不明							3 0.24	3 0.24	3.7% 0.0%
頁岩１	1 2.11							1 2.11	1.2% 0.4%
チャート１						1 3.89		1 3.89	1.2% 0.7%
安山岩Ａ１		1 12.37				32 140.17	6 0.96	39 153.5	48.1% 25.8%
合計（点数） 合計（重量）	3 28.45	3 18.2	3 267.95	4 33.38	6 68.19	53 176.52	9 1.2	81 593.89	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	3.7% 4.8%	3.7% 3.1%	3.7% 45.1%	4.9% 5.6%	7.4% 11.5%	65.4% 29.7%	11.1% 0.20%	100.0% 100.0%	

3　石器集中３（D3区）（第22・23図，第５・13表，図版４・10）

分　布

遺跡南西のD3区で検出した。15W46・47グリッドにまたがる，１ｍ×0.5mほどのごく小規模な石器集中地点である。遺跡南側に存在する小谷の谷頭の北側に位置する。石器集中３の南側には，ほぼ同一層順出土の石器集中５が位置している。

出土層位はⅨa層である。出土レベルの最大値は24.958m，最小値は24.899m，平均値は24.931ｍである。

器　種

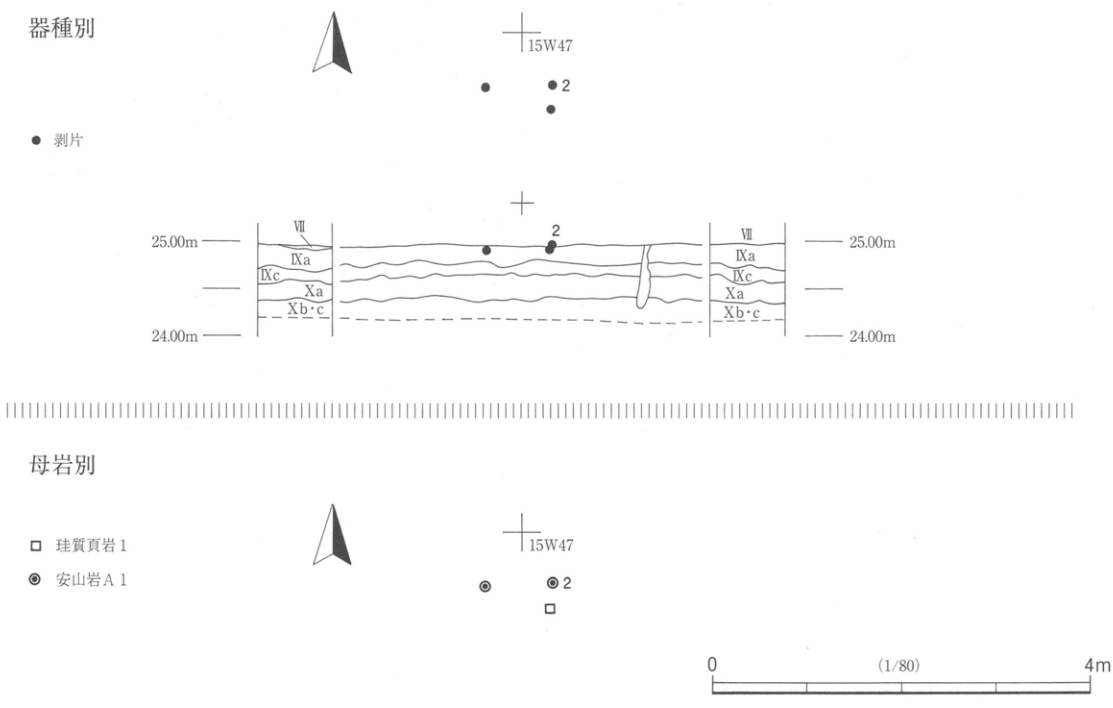
剥片４点が出土した（第５表）。第23図１は珪質頁岩１製の剥片である。第23図２は安山岩Ａ１製の剥片である。

石　材

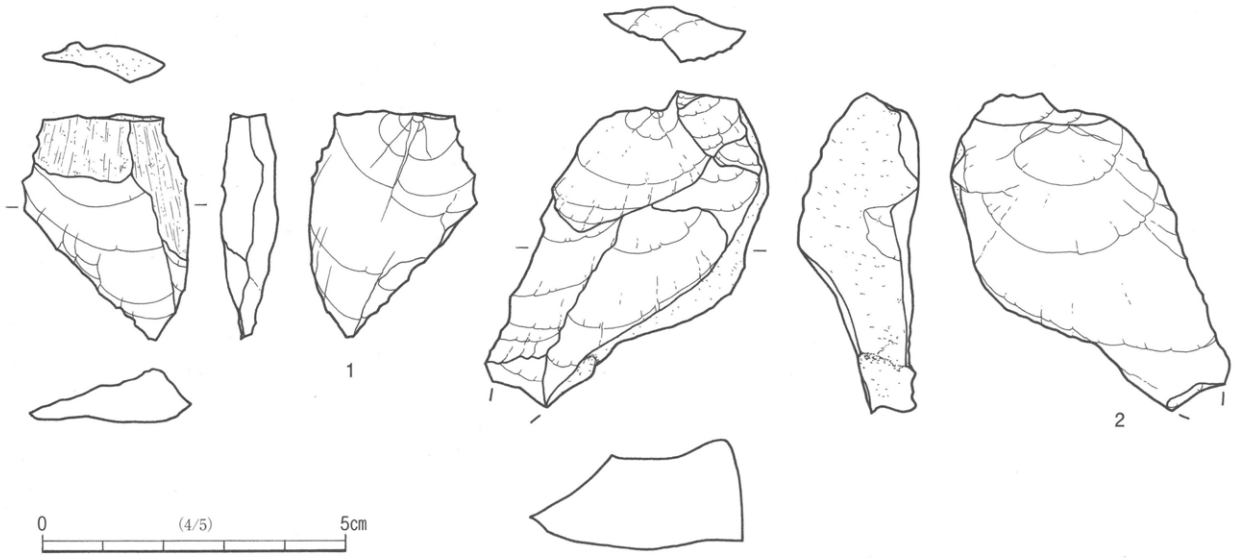
珪質頁岩２点・安山岩Ａ２点の構成である。珪質頁岩１は，暗オリーブ灰色で節理面はにぶい黄褐色を呈する。節理の多い，やや質の悪い石材である。安山岩Ａ１は，表面が風化により灰オリーブ色を呈するが，内部は黒色で，白色粒状の不純物をやや含む。

第５表　石器集中３　組成表

	剥片	合計	組成比
珪質頁岩１	2 10.2	2 10.2	50.0% 24.3%
安山岩Ａ１	2 31.85	2 31.85	50.0% 75.7%
合計（点数） 合計（重量）	4 42.05	4 42.05	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	100.0% 100.0%	100.0% 100.0%	



第22図　石器集中３・分布状況



第23図　石器集中３

４　石器集中４（D4区）（第26～28図，第６・13表，図版４・10）

分　布

遺跡中央西寄りのD4区で検出した。D4区の北壁に沿った７ｍ×18mほどの範囲に石器は分布する。図上では，13X42・52グリッド付近を境に，西側の分布域と東側の分布域に分離できるように見える。ただし，大規模な攪乱孔が複数存在し，本来あった遺物の分布を的確に捉えられていない可能性が高い。よって，ここでは大まかに西側分布域と東側分布域として把握しておくのみにとどめたい。西側分布域と東側分布域の間には，接合資料として接１が存在する。また，東側分布域内でまとまる接合資料である接２のうち１点が，出土したグリッドから見て西側分布域で出土した可能性がある。ただし確認調査中に出土したため，厳密な出土位置が不明である。

西側分布域は13X41・52グリッドにかけての，４ｍ×８ｍほどの範囲に石器が分布する。西側の分布域では調査範囲境界付近で石器が出土しており，分布域は調査区外のより北側に伸びていたことが予想される。ただし，調査区外北側の現状は，調査区内の現地表面よりもかなり削平されて道路が敷設されており，石器集中地点としての残存は期待できそうにはない。

東側分布域は13X33・34・44・45グリッドを中心とする，６ｍ×７ｍほどの範囲に石器が分布する。分布域内の接合資料として接２が存在する。

出土層位は，Xa層～Ⅶ層に及び，上下にかなり拡散する。Ⅸ層中で出土するものが多いようである。Ⅵ層より上部の土層は，調査開始以前にすでに攪乱されていたようで，遺存状況は必ずしも良いとは言えないようである。

出土レベルの最大値は24.402m，最小値は23.488m，平均値は23.859mである。出土レベルの差が１ｍ近くに及んでいるが，上部が削平されて，攪乱が激しいことと関係するのであろうか。

器　種

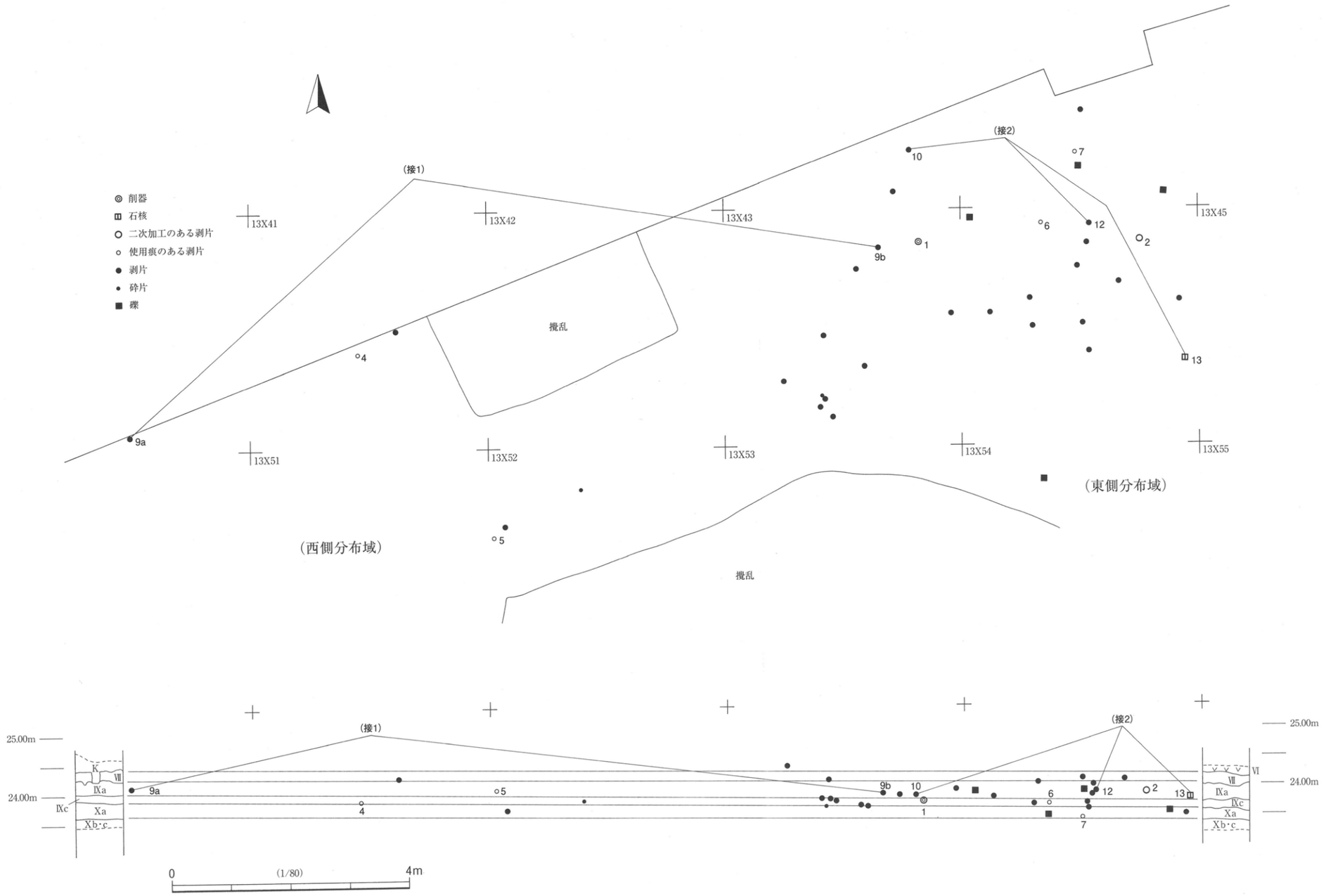
削器１点・石核１点・二次加工のある剥片２点・使用痕のある剥片５点・剥片26点・砕片２点・礫４点の合計41点の出土である（第６表）

第26図１は削器としたものである。左側縁全体に比較的丁寧な調整が連続する。ホルンフェルス１製である。２・３は二次加工のある剥片としたものである。２は，珪質頁岩２とした石材によるもので，縦長に近い剥片の右側縁に，部分的に調整を施す。３は珪質頁岩３とした石材で，自然面を残す不整形な剥片の一部に調整を施す。

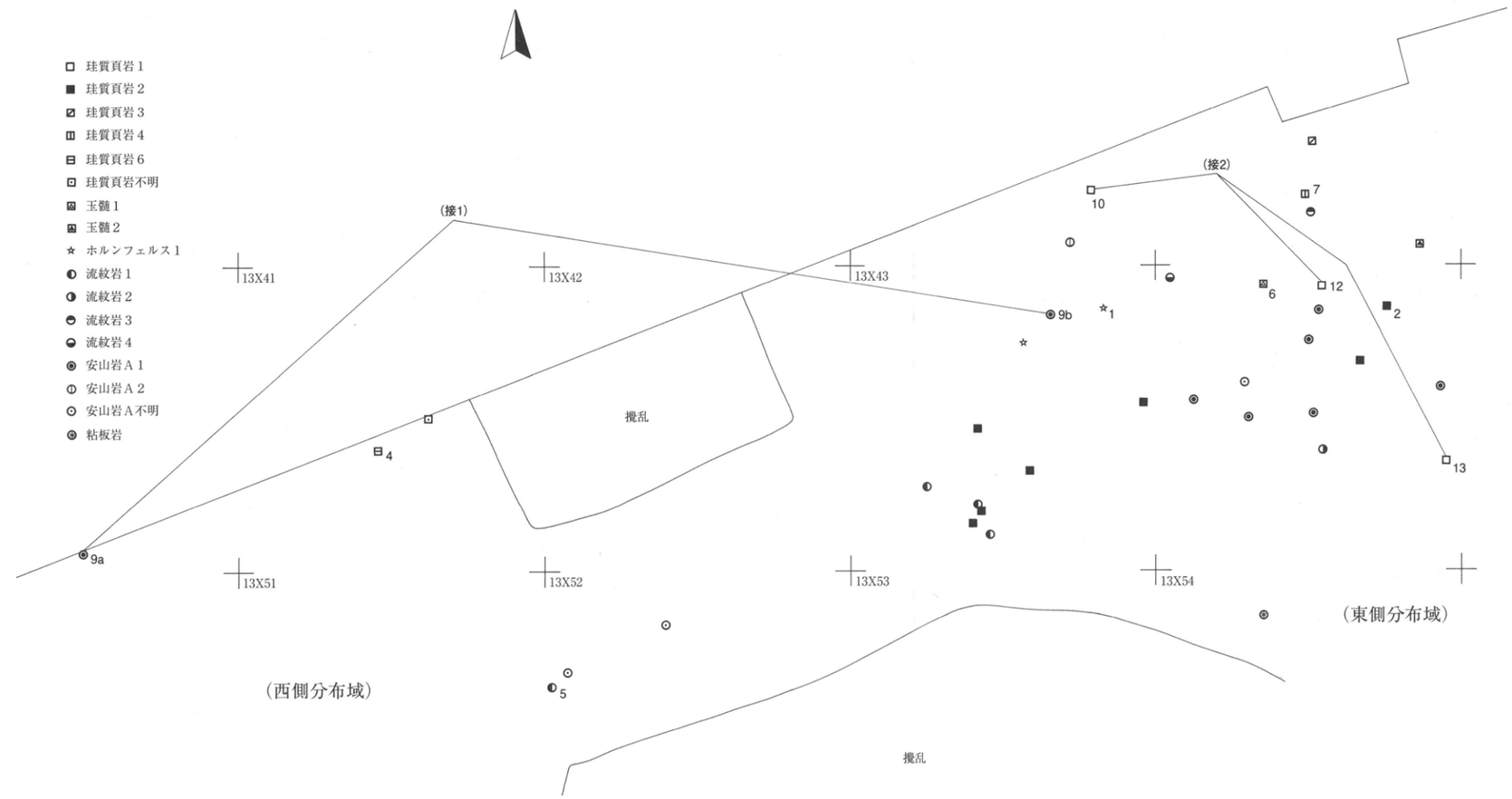
第26図４～７・第28図11は使用痕のある剥片としたものである。４は，小形の剥片の下部縁辺に，使用に伴うであろう微細な剥離痕が存在する。５～７・11は，いずれも縦長の剥片の側縁に，使用に伴うと考えうる痕跡を留めるものである。８は珪質頁岩５とした石材の，やや大きな剥片である。

第６表　石器集中４　組成表

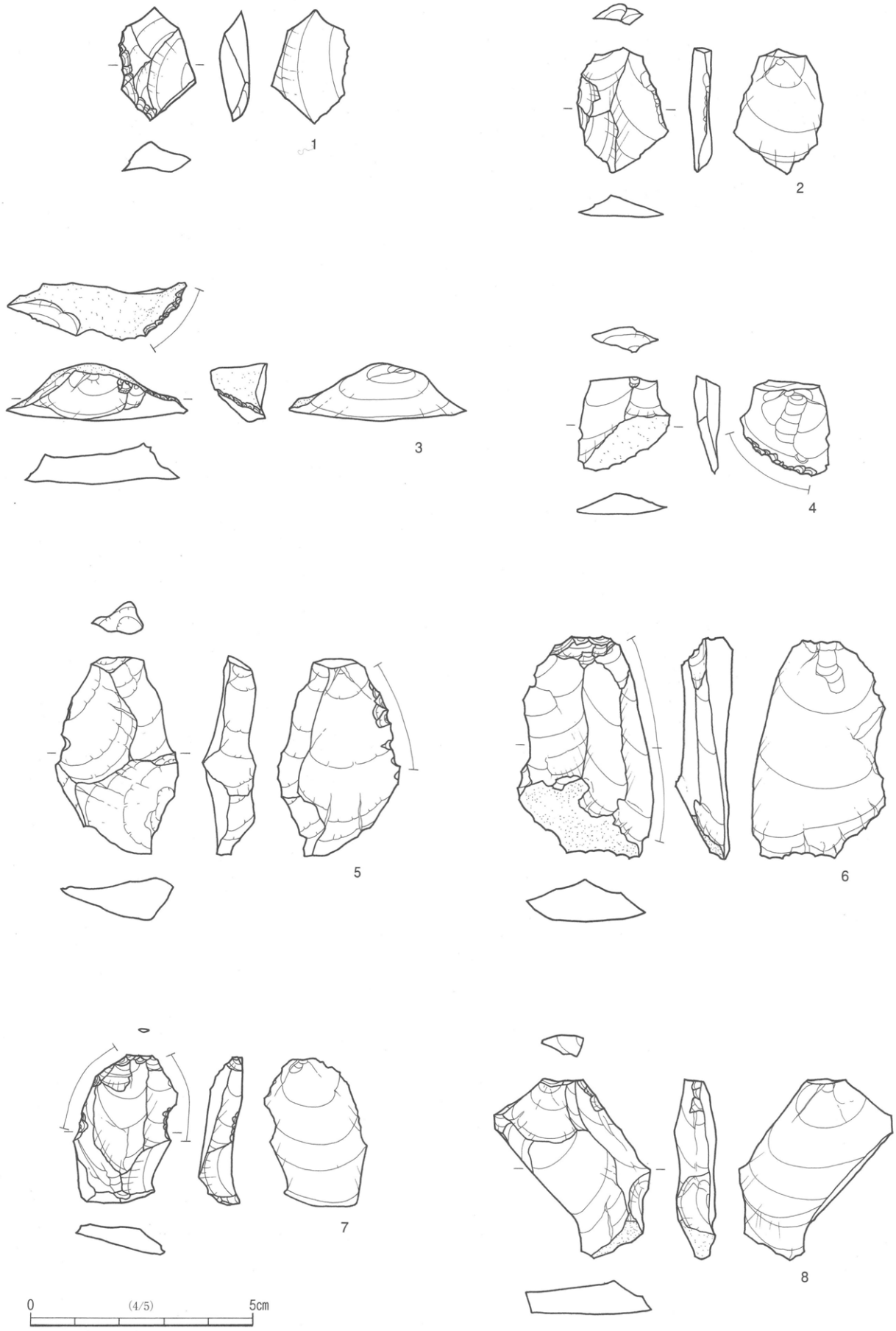
	削器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	礫	合計	組成比
珪質頁岩１		1 46.57		1 6.17	2 10.11			4 62.85	9.8% 35.4%
珪質頁岩２			1 2.28		6 10.73			7 13.01	17.1% 7.3%
珪質頁岩３			1 4.28		1 0.77			2 5.05	4.9% 2.8%
珪質頁岩４				1 3.68				1 3.68	2.4% 2.1%
珪質頁岩５					1 11.22			1 11.22	2.4% 6.3%
珪質頁岩６				1 1.94				1 1.94	2.4% 1.1%
珪質頁岩不明					1 0.06			1 0.06	2.4% 0.0%
玉髄１				1 16.26				1 16.26	2.4% 9.2%
玉髄２							1 0.6	1 0.6	2.4% 0.3%
ホルンフェルス１	1 2.38				1 0.24			2 2.62	4.9% 1.5%
流紋岩１				1 8.98	2 14.67	1 0.03		4 23.68	9.8% 13.3%
流紋岩２					1 2.9			1 2.9	2.4% 1.6%
流紋岩３							1 0.51	1 0.51	2.4% 0.3%
流紋岩４							1 0.14	1 0.14	2.4% 0.1%
安山岩Ａ１					8 30.23			8 30.23	19.5% 17.0%
安山岩Ａ２					1 0.78			1 0.78	2.4% 0.4%
安山岩Ａ不明					2 0.44	1 0.13		3 0.57	7.3% 0.3%
粘板岩							1 1.37	1 1.37	2.4% 0.8%
合計（点数） 合計（重量）	1 2.38	1 46.57	2 6.56	5 37.03	26 82.15	2 0.16	4 2.62	41 177.47	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	2.4% 1.3%	2.4% 26.2%	4.9% 3.7%	12.2% 20.9%	63.4% 46.3%	4.9% 0.09%	9.8% 1.5%	100.0% 100.0%	



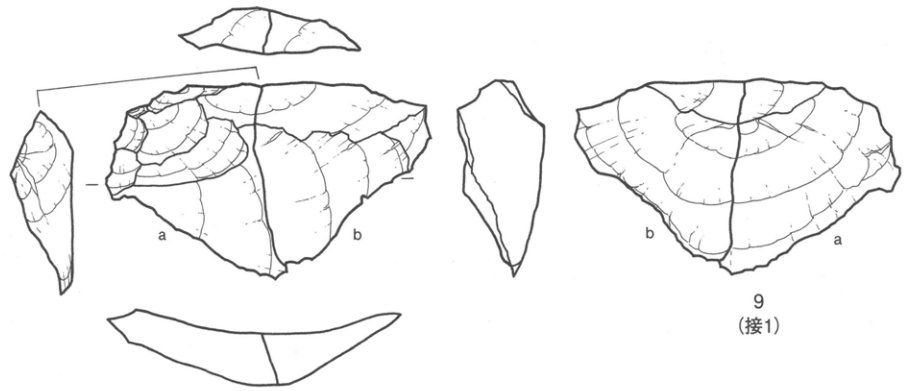
第24図　石器集中４・器種別分布状況



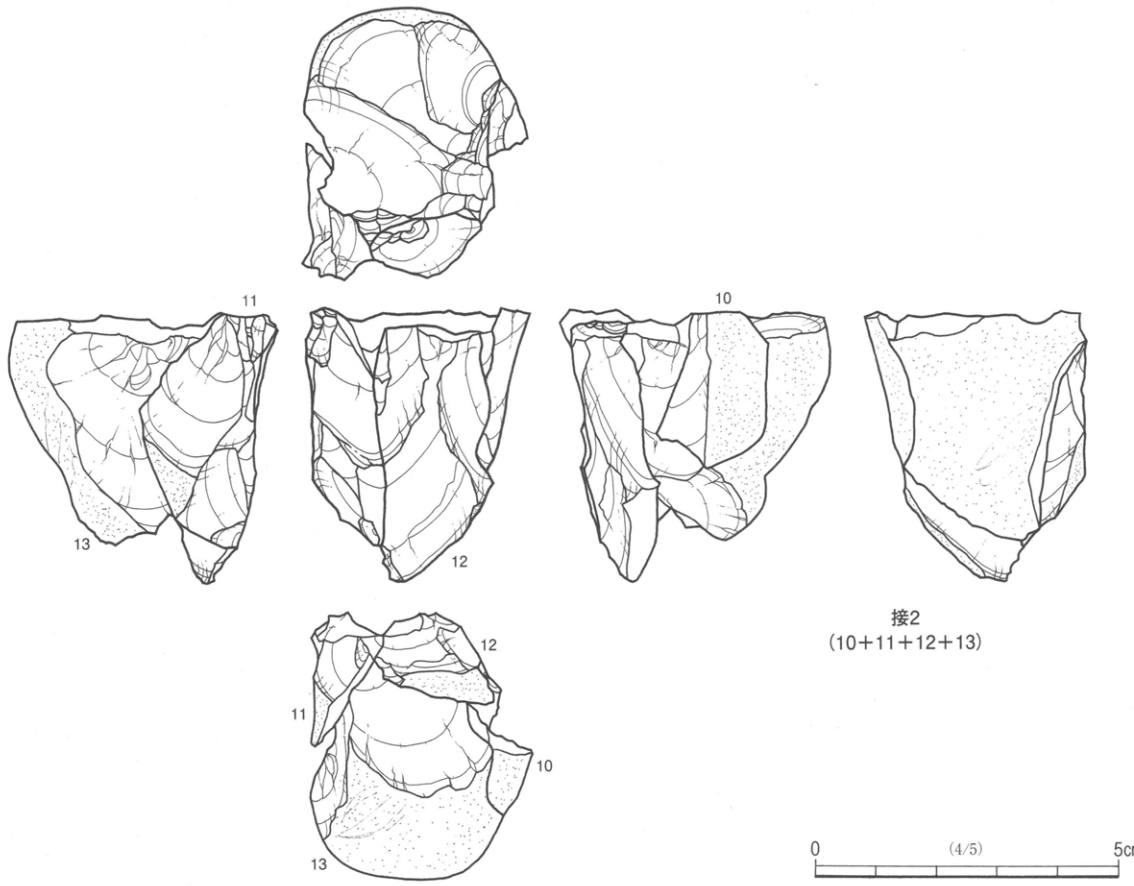
第25図　石器集中４・母岩別分布状況



第26図　石器集中４（１）

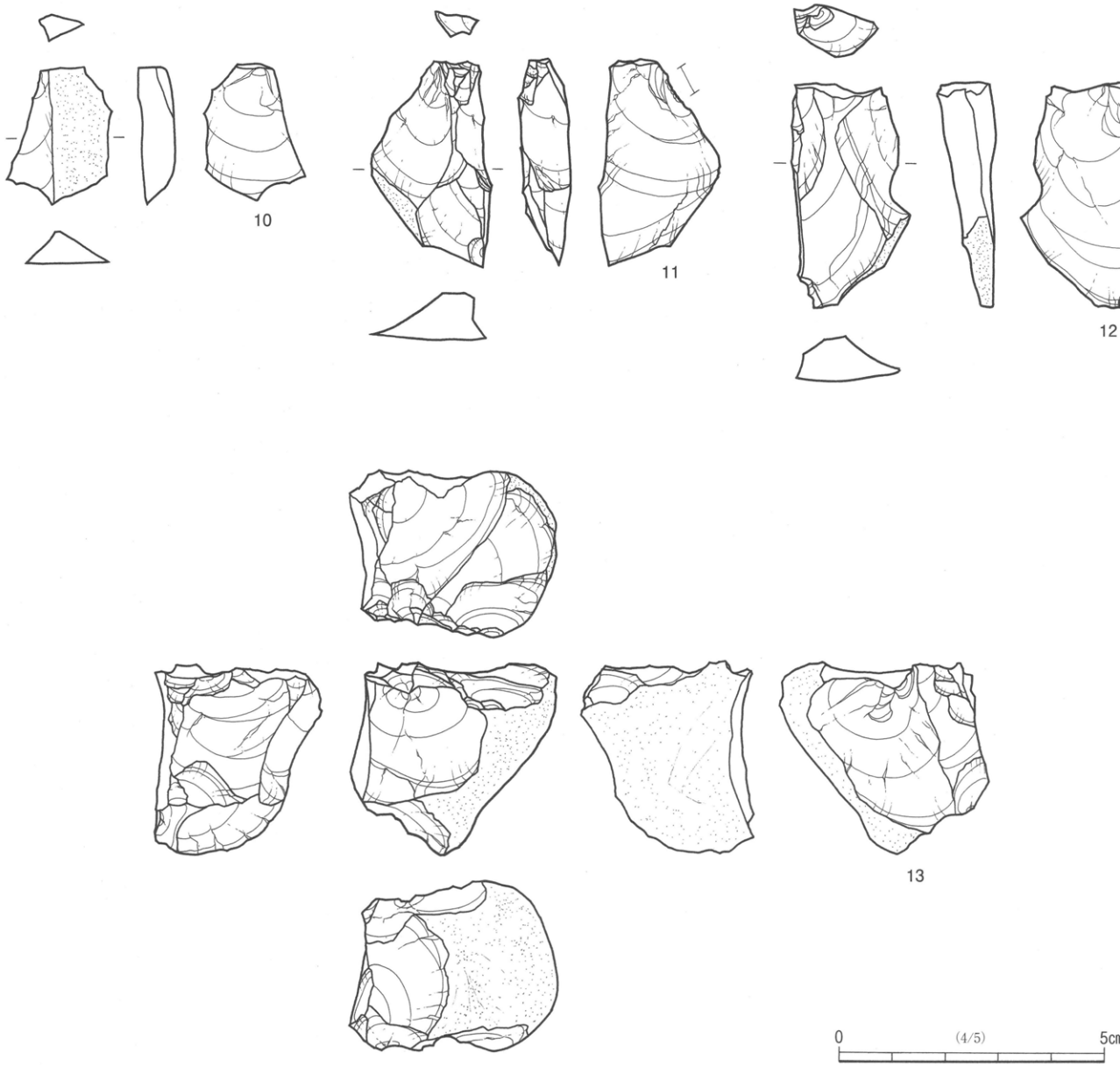


9
(接1)



接2
(10+11+12+13)

第27図　石器集中４（２）



第28図　石器集中４（３）

第27図９は接１とした接合資料である。安山岩Ａ１製で，横長の剥片の半ばで折れたものが，接合した。

第27図接２は，珪質頁岩１とした石材の接合資料である。石核１点・使用痕のある剥片１点・剥片２点が接合した（第28図10～13）。13が石核で，11が使用痕のある剥片，10・12が剥片である。おそらく石材を横方向に回転させながら，11→12→10の順で連続的に剥離をおこなった後，打面を転移してさらに剥離をおこない，最終的に13が残核として遺跡内に残されたようである。

器種別の分布は，第26図４・５の使用痕のある剥片，８の剥片が西側分布域で出土した。また，接１の一方が西側分布域で出土した。西側分布域には，その他図化しなかった剥片２点と砕片１点がある。なお，西側分布域でまとまって接合した接２に含まれる第28図11が，確認調査中に出土したため厳密な出土位置

が不明であるものの，出土したグリッドから見ると東側分布域で出土した可能性がある。その他のものは，東側分布域出土である。礫２点も東側分布域で出土した。

石　材

珪質頁岩17点・玉髄２点・ホルンフェルス２点・流紋岩６点・安山岩Ａ12点・粘板岩１点の構成である。

珪質頁岩は６母岩に判別した。珪質頁岩１は第27図接２が相当する。自然面はオリーブ黒色，剥離面は灰色がかった暗青灰色に近く，不純物をほとんど含まない。珪質頁岩２は，第26図２の二次加工のある剥片が相当する。緑灰色で，白色の不純物を多く含む。珪質頁岩３は３の二次加工のある剥片が相当する。灰オリーブ色で不純物をほとんど含まない。珪質頁岩４は７の使用痕のある剥片で，単独母岩である。自然面付近は流紋岩質である。全体に灰白色に近い色調で，灰黄褐色の縞が目立つ。珪質頁岩５は８の剥片で，単独母岩である。全体に灰オリーブ色がかっており，灰白色の細かい縞がある。珪質頁岩６は４の使用痕のある剥片が相当する。全体としては暗オリーブ灰色に近く，黄褐色の細かい縞と，暗青灰色の縞が少し認められる。珪質頁岩１と色調が似ているが，同一母岩と断定する根拠がなく，別母岩とした。

玉髄は２母岩に判別した。玉髄１は第26図６の使用痕のある剥片である。いわゆるメノウで，透明度がややにぶく，若干橙色に色が付く。玉髄２は小礫である。

ホルンフェルス１は暗オリーブ灰色に近い色調である。第26図１の削器が相当する。

流紋岩は４母岩に判別した。流紋岩１は第26図５の使用痕のある剥片が相当し，灰白色でオリーブ灰色の不純物が目立つものである。流紋岩２は，明黄褐色で，石英粒や細かい黒色粒などが目立つ。自然面を多く残す小型の剥片で，図化しなかった。流紋岩３は小礫片である。

安山岩Ａは２母岩に判別した。安山岩Ａ１は第27図接１が相当する。オリーブ灰色で，白色粒状物質がやや目立つ。安山岩Ａ２は，小型の剥片のため図化しなかったが，白色粒状物質が全く見られず，質感も異なるため，区別した。

粘板岩１は小礫である。

石材別の分布としては，西側分布域に珪質頁岩６，流紋岩１が１点，接１の安山岩Ａ１が１点と，さらに母岩判別不能であった珪質頁岩が１点と安山岩Ａが２点存在する。厳密な出土位置が不明だが，珪質頁岩１の接２のうち１点が西側分布域で出土した可能性がある。

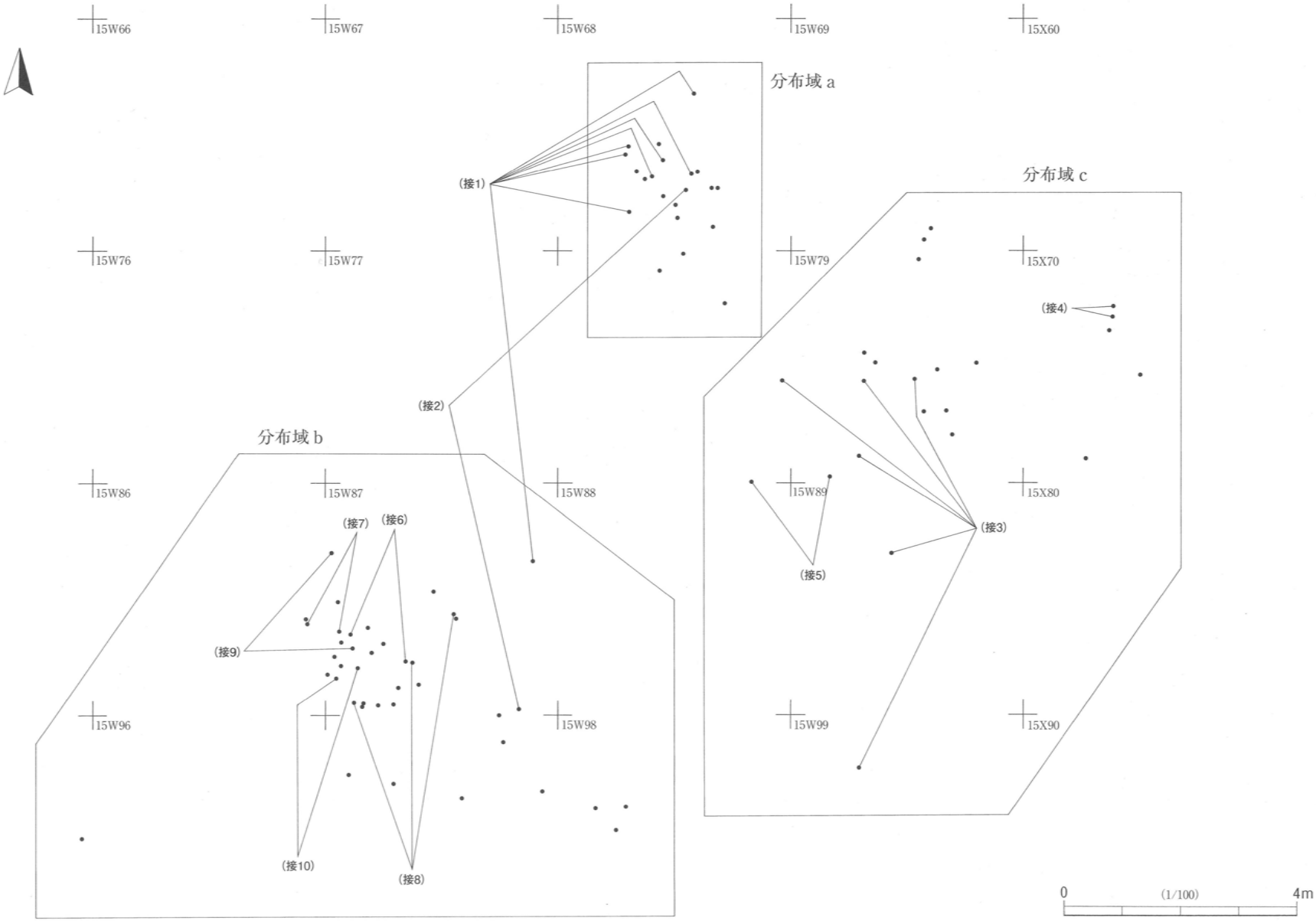
上記のもの以外は東側分布域で出土した。

５　石器集中５（E1区）（第29～45図，第７・13表，図版５・11～13）

分　布

遺跡南西端のE1区で検出した。遺跡南側に存在する小谷の，谷頭付近に形成された石器集中地点である。石器集中地点の位置する旧地形は，この谷頭に向かって南向きに傾斜していたようで，遺物も南方向に傾斜して出土している。調査区の南側では，ロームの遺存状況が悪く，一部Ⅸ層に相当する層準までソフトローム化していた。

E1区内で広く遺物が出土したが，接合関係及び平面分布等を勘案して，分布域ａ～ｃとして仮に分離した。北側に位置するものを分布域ａ，南西側のものを分布域ｂ，南東側のものを分布域ｃとした（第29図）。分布域ａと分布域ｂの間には，接１・接２とした接合資料がある。分布域ａと分布域ｃの間には接合資料はないものの，同一母岩と判断される石材が相互に存在する。



第29図　石器集中５・分布状況

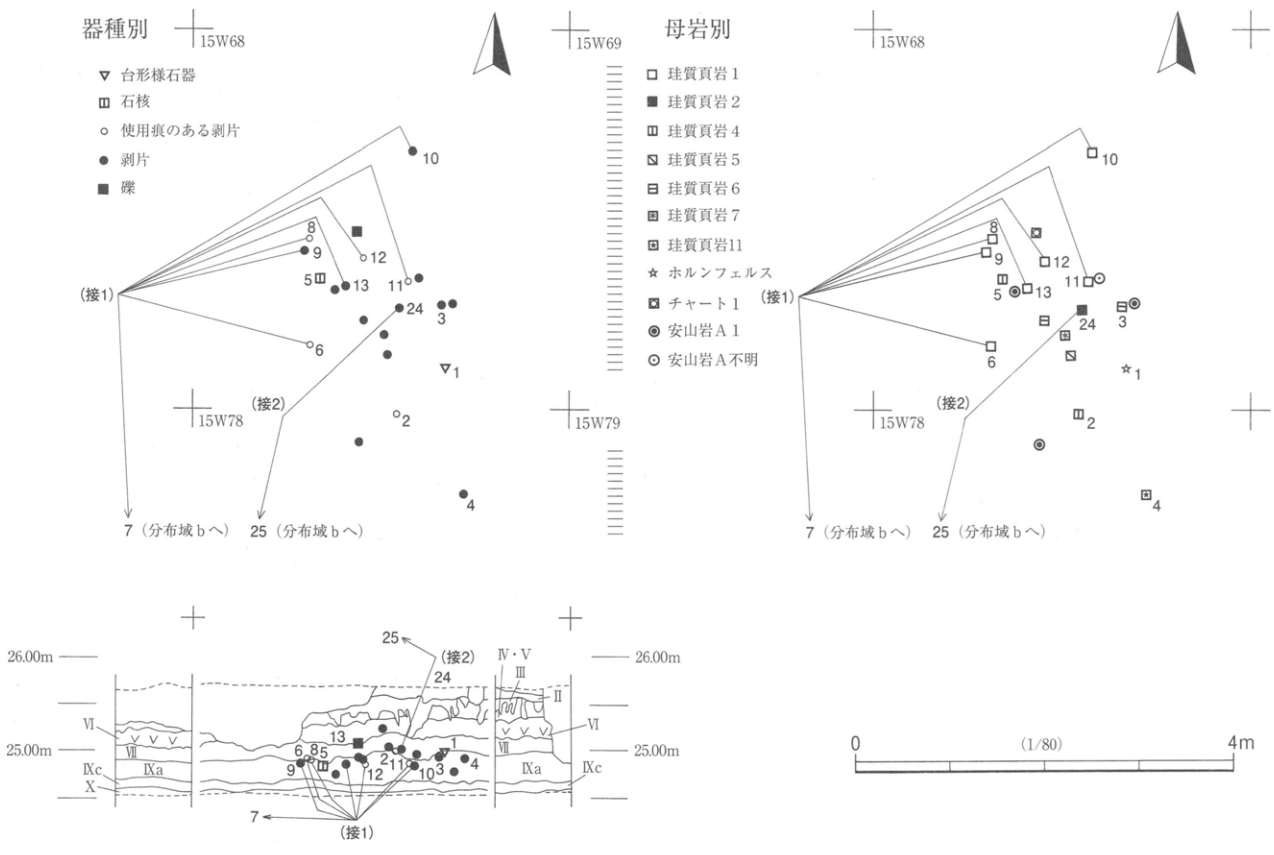
分布域ａは，15W68・78グリッド内の４ｍ×２ｍほどの範囲に分布する（第30図）。多様な珪質頁岩製の石器が主である。分布域ａ内でまとまる接合資料として接１が存在する。接１の内の１点は分布域ｂ内で出土し，分布域ａ・ｂ間の接合資料ともなる。

分布域ｂは，15W87グリッドを中心に３ｍ×３ｍほどの範囲で遺物が比較的密集し，その周囲の５ｍ×９ｍほどの範囲で遺物が拡散する（第35図）。安山岩Ａ製の石器が多く，多様な珪質頁岩製の石器を出土した分布域である。分布域ｂ内でまとまる接合資料として接６～接10がある。

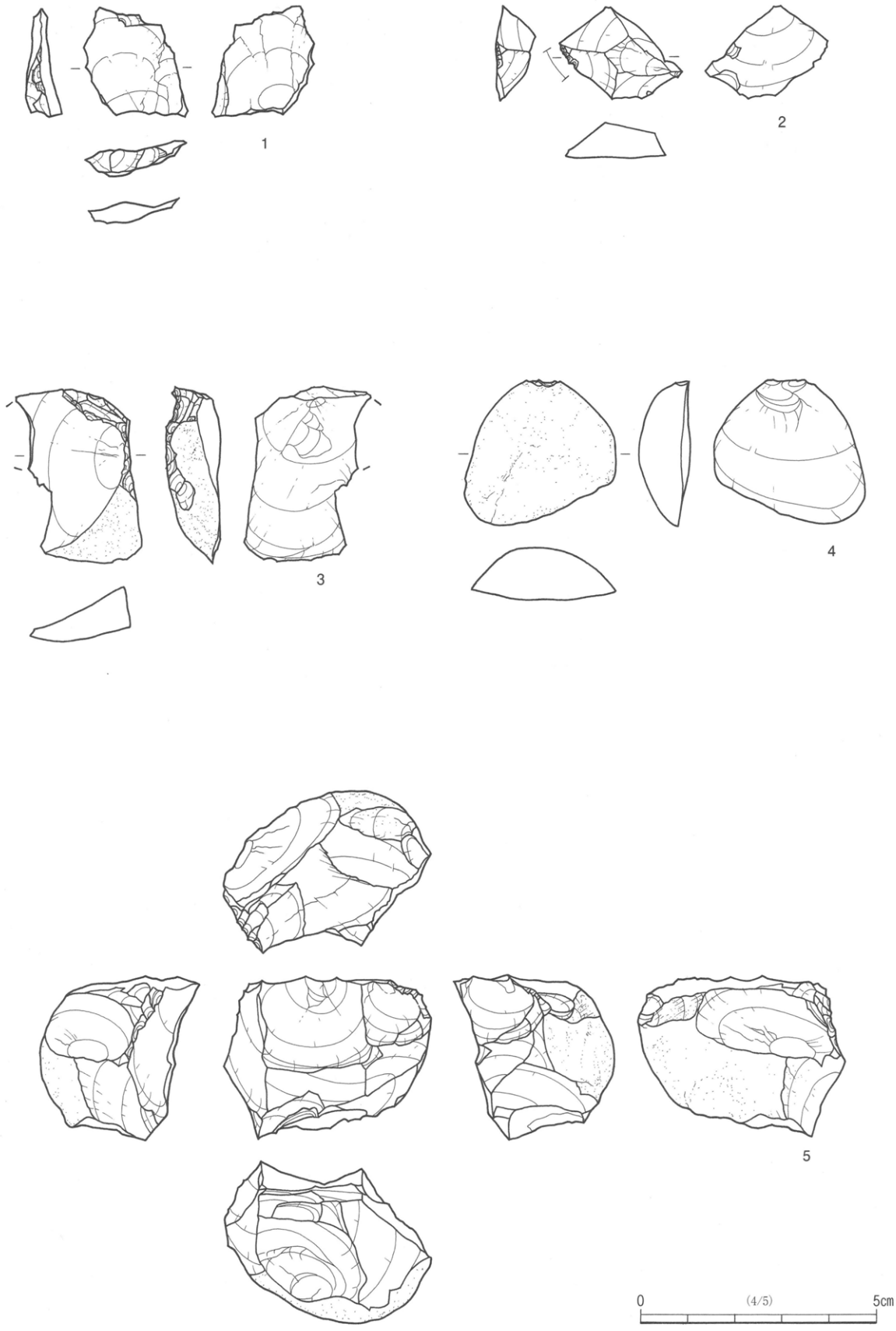
分布域ｃは，15W79グリッドを中心に，９ｍ×６ｍほどの範囲にやや拡散して分布する（第41図）。珪質頁岩製と安山岩Ａ製の石器が，同じくらいの量で存在する。分布域ｃ内でまとまる接合資料として，接３～接５がある。

出土層位は，断面図を見る限り上下に拡散が見られる。地形が傾斜していることと，南側の谷に近い部分ではロームの遺存状況が悪いことなどの条件が重なり，断面図に投影した遺物ドットが，的確に出土層位を反映し切れていない可能性があろう。ただし，概ねⅨ層～Ⅶ層に遺物ドットが集中するように見え，Ⅸa層から出土するものがもっとも多いようである。

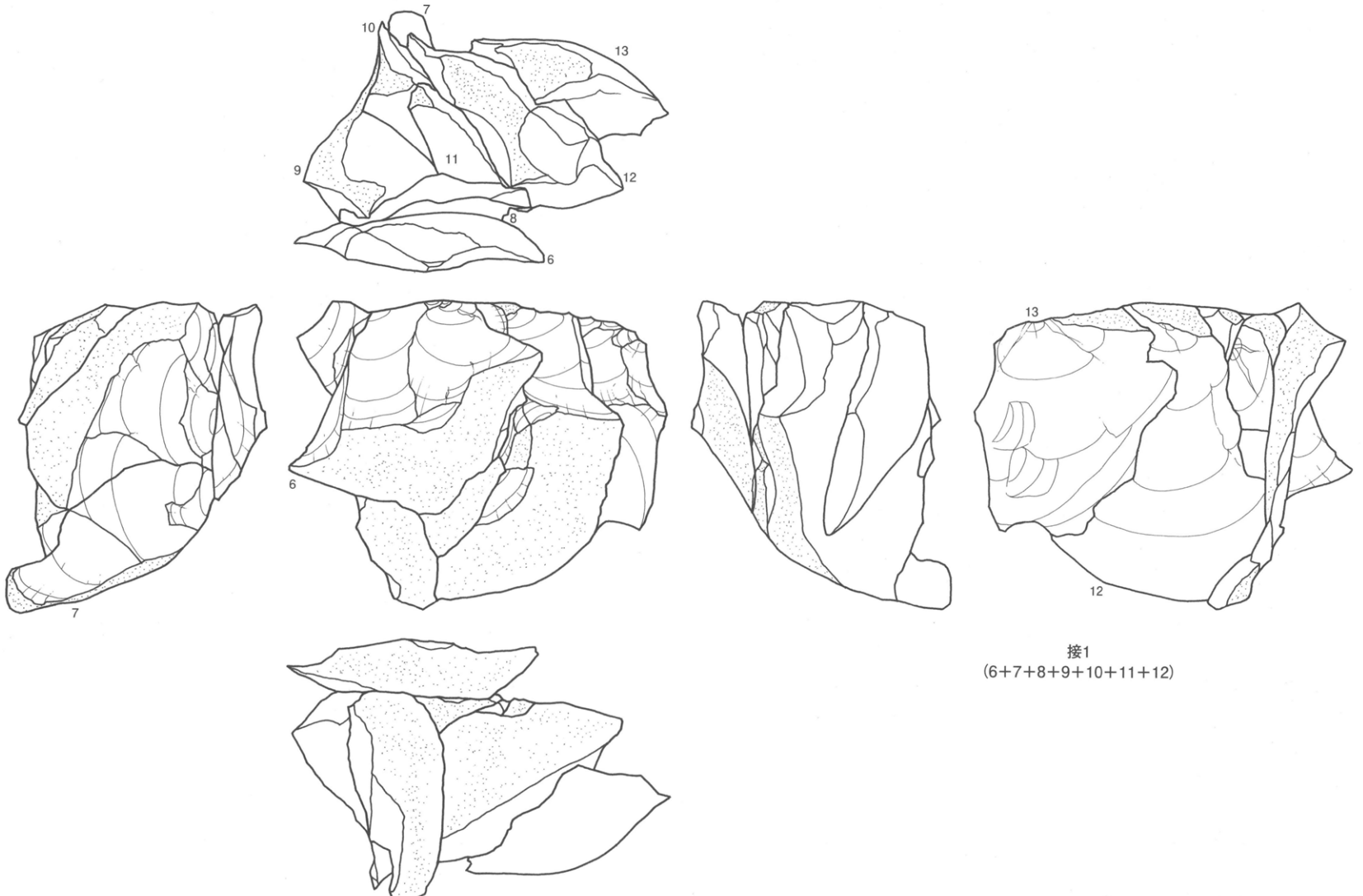
出土レベルの最大値は25.365m，最小値は24.336m，平均値は24.859mである。出土レベルの最大値と最小値の差が約１mあるのも，地形の傾斜が関係しているのであろう。



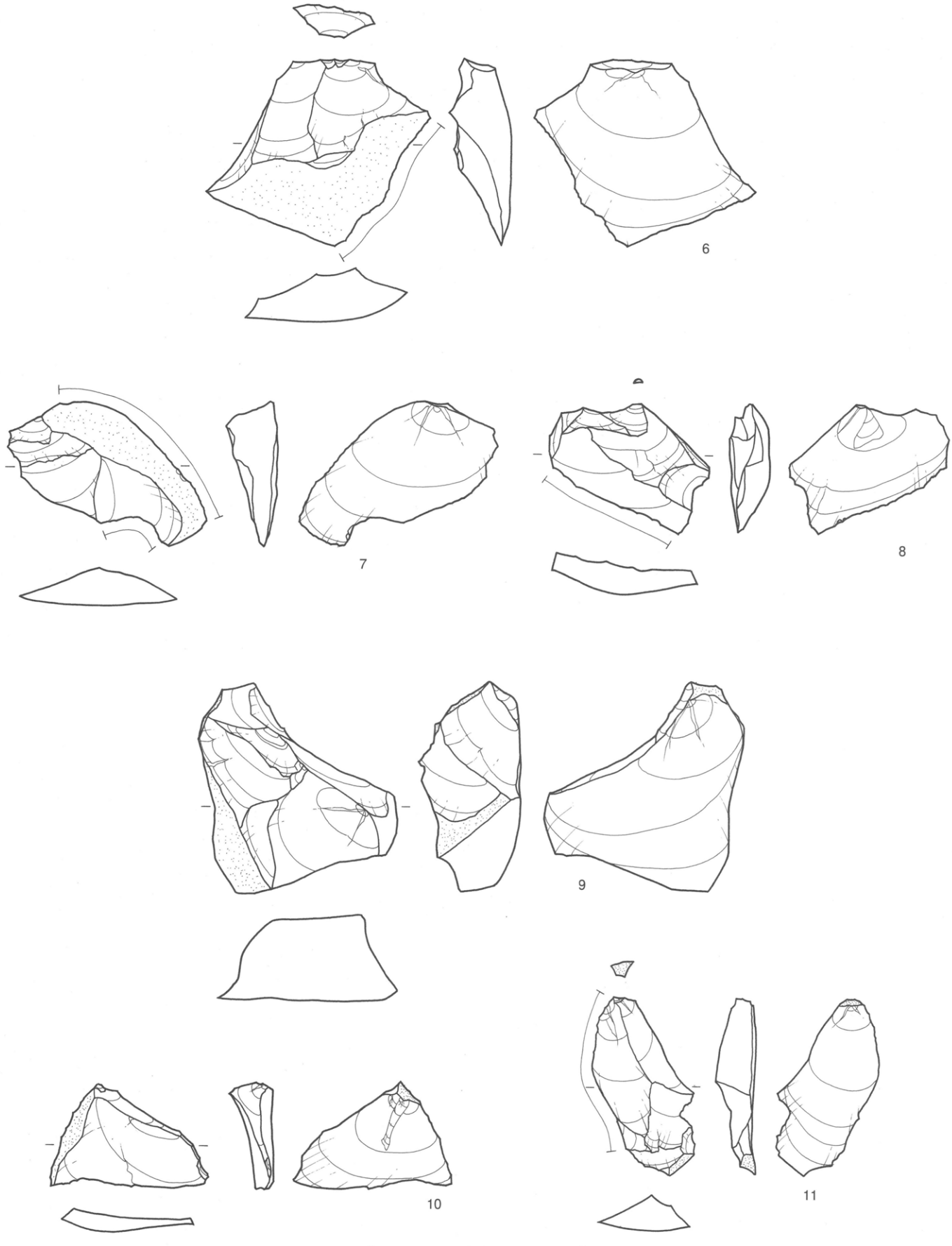
第30図　石器集中５・分布域ａ・分布状況



第31図　石器集中５・分布域ａ（１）



第32図　石器集中５・分布域ａ（２）



第33図　石器集中５・分布域ａ（３）

器　種

台形様石器１点・削器１点・石核８点・二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片11点・剥片61点・礫１点の合計84点が出土した（第７表）。図はａ～ｃの分布域ごとにまとめた。

（分布域ａ）

分布域ａは，台形様石器１点・石核１点・使用痕のある剥片５点・剥片13点・礫１点が分布する。分布状況を第30図に，実測図を第31～34図に示した。

第31図１は台形様石器と判断した。平面形は菱形に近く，先端が尖る。左側縁下部に調整を施す。ホルンフェルス１製である。２は使用痕のある剥片である。２はやや厚手で平面形が菱形に近い剥片の一端に，微細な剥離痕が存在する。珪質頁岩４製である。他に使用痕のある剥片として，第32図接１に含まれる第33図６～８・11・第34図12が存在する。

第31図３・４は剥片である。３は珪質頁岩６製の，不整形な剥片である。表面の稜となる部分に打面調整のためと思われる剥離痕が残る。４は珪質頁岩11製の剥片で，母岩となった礫の形状をよく残すものである。５は，珪質頁岩４製の石核である。打面を入れ替え，多方向から剥離をおこなったことが窺える。一部自然面を残す。

第32図接１は分布域ａ内で大多数がまとまる接合資料である。使用痕のある剥片５点・剥片３点が接合する（第33図６～第34図13）。このうち第33図７の使用痕のある剥片だけは，分布域ｂで出土した。珪質頁岩１製で，他に接合しない剥片類は存在しない。６～８・11・12は使用痕のある剥片で，使用に伴うと考えうる微細な剥離痕が顕著に観察できたものである。９・10・13は剥片である。接１から窺える剥離の状況は，上方を打面として６を剥離した後，下方に打面を転移し７を含む複数の剥片を剥離し，再び上方に打面を転移して８以降の剥片を連続して剥離したようである。

（分布域ｂ）

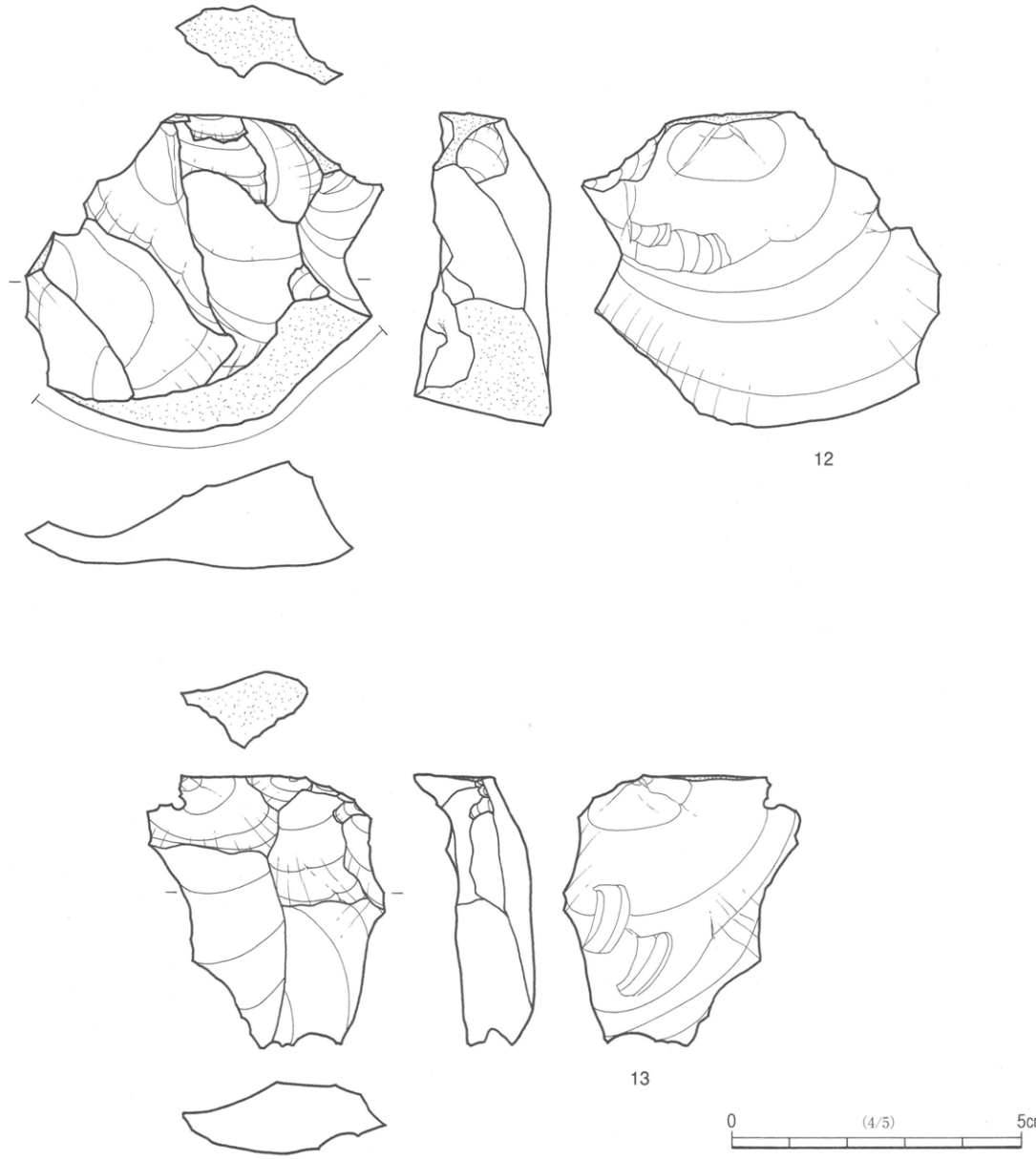
分布域ｂは，削器１点・石核５点・使用痕のある剥片３点・剥片31点が分布する。分布状況を第35図に，実測図を第36～40図に示した。

第36図14は削器としたものである。安山岩Ａ７とした石材で，下部の縁辺に調整を加え刃部としている。上部にも大ぶりな剥離による加工を加えている。15・16は使用痕のある剥片である。15は珪質頁岩９製の剥片で，下部の縁辺の一部に微細な剥離痕が存在する。16は珪質頁岩８製で，鋭利な縁辺の大半に微細な剥離痕が観察できる。他に使用痕のある剥片として，接１に含まれる第33図７が出土した。

第36図17～第37図22は剥片である。第36図17は珪質頁岩７製の剥片である。右側面の上部には頭部調整かと思われる古い剥離痕が存在する。18は珪質頁岩10製の剥片で，自然面を多く残すものである。19は安山岩Ａ２製で，打面調整剥片であろう。20は安山岩Ａ３製である。第37図21は，安山岩Ａ５で，横長で厚みのある剥片である。22は接７とした接合資料で，安山岩Ａ２製である。

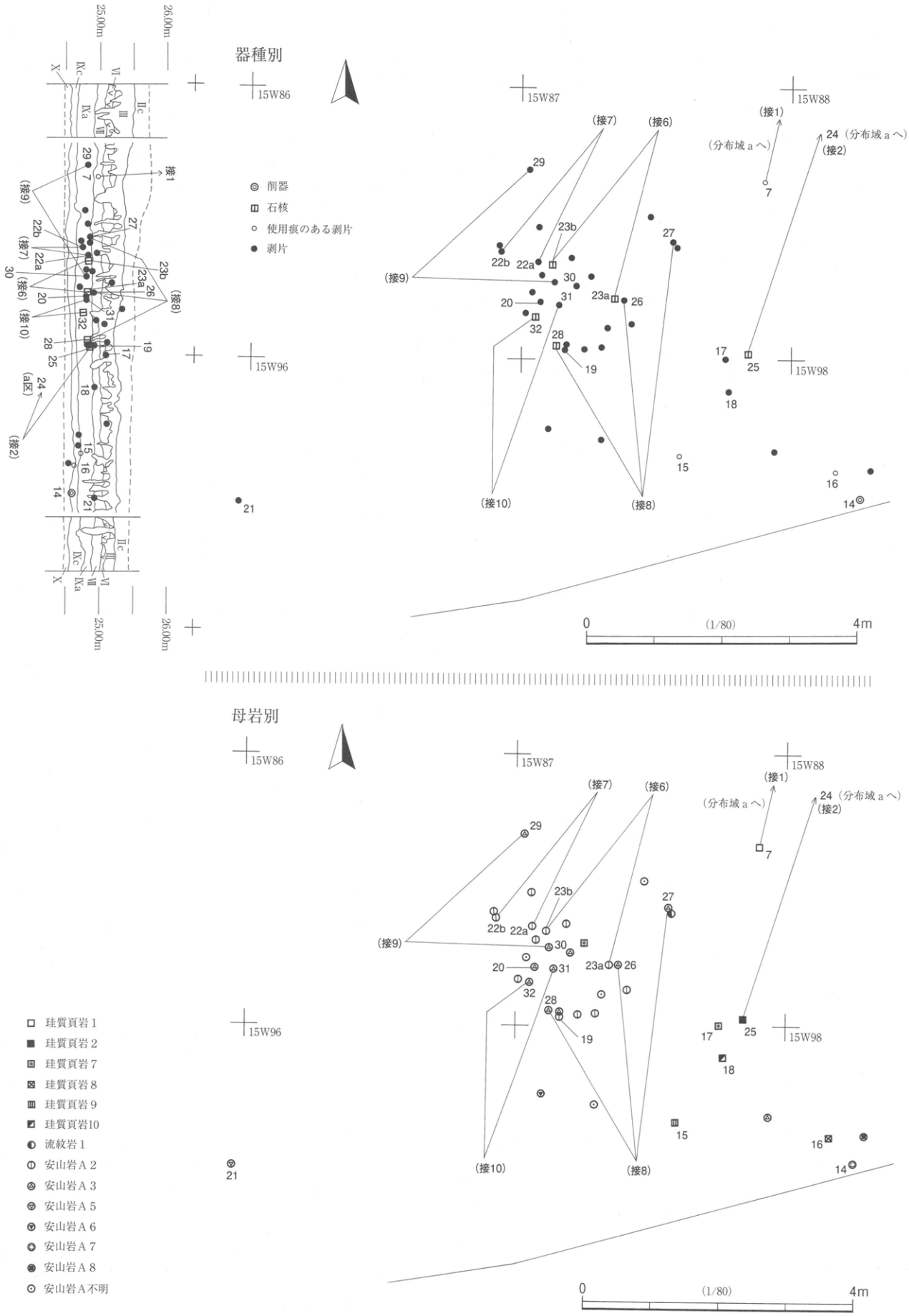
第37図23は石核で，接６とした接合資料である。ａとｂに折れた後，ａはさらに剥離がおこなわれているようで，ｂを最終的な残核とするべきかもしれない。安山岩Ａ２製で，多方向からの剥離の痕跡を残す。一部に自然面が残る。

第37図接２は分布域ａ・ｂ間で接合した資料である。石核１点・剥片１点が接合する（第37図24・25）。珪質頁岩２とした石材で，24が分布域ａで出土し，25が分布域ｂで出土した。24は小型の剥片で，表面には自然面が残る。25は礫の形状を良く残す石核で，扁平な円礫の1/2程度を残すように見える。

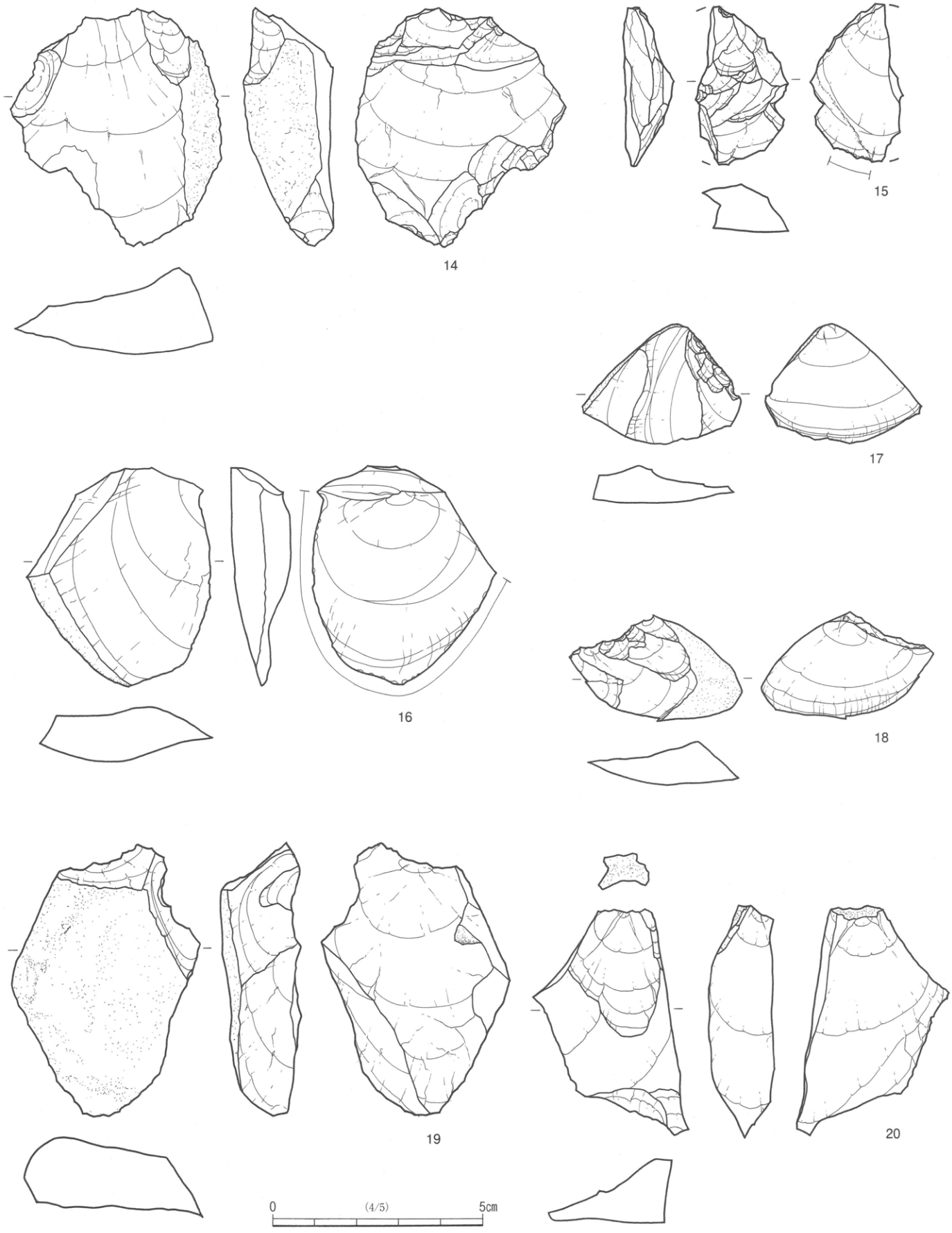


第34図　石器集中５・分布域ａ（４）

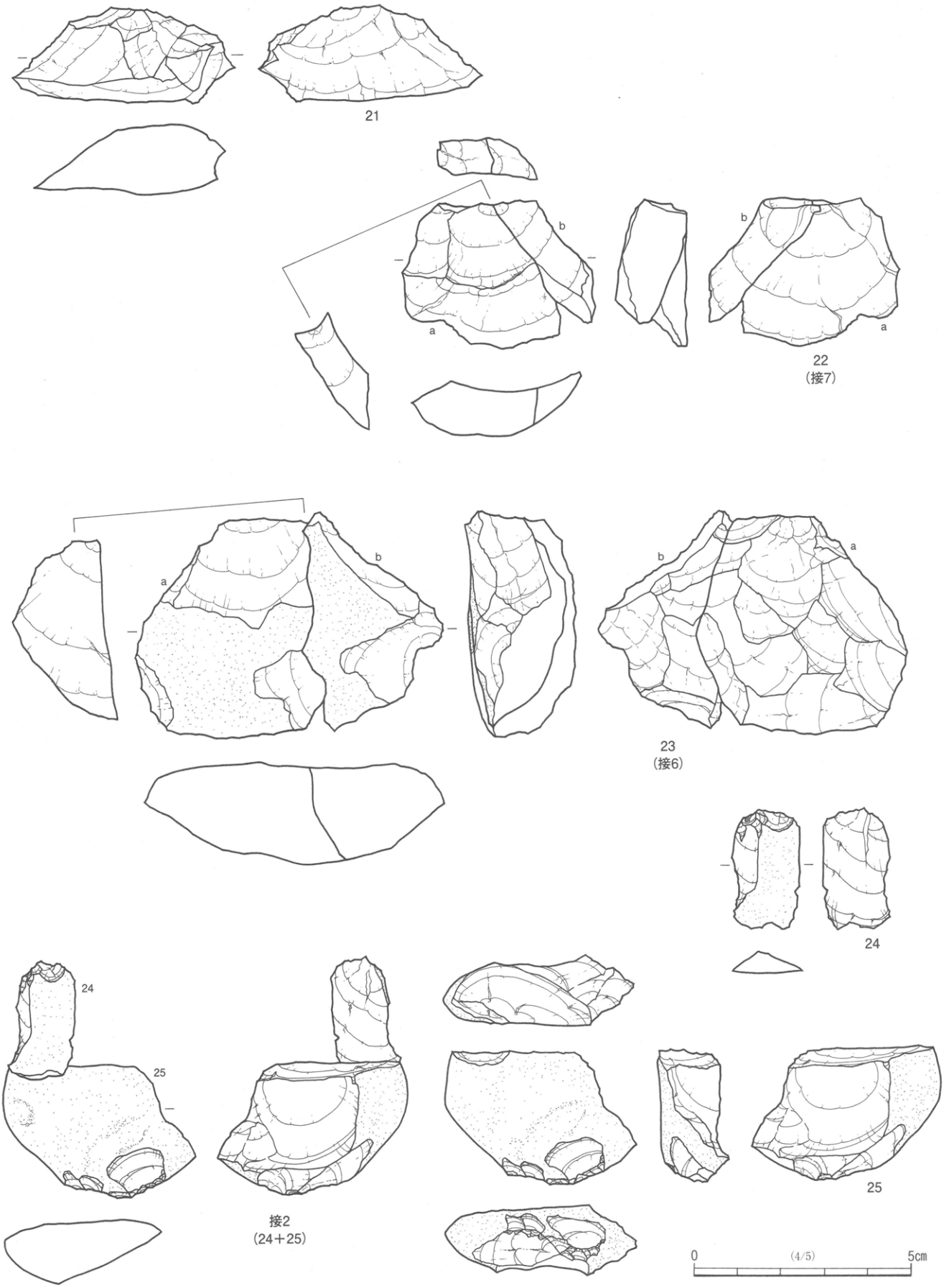
第38図接８・第39図接９・第40図接10は分布域ｂでまとまる接合資料である。いずれも安山岩Ａ３とした同一母岩である。安山岩Ａ３は，この他に接合しない剥片として，第36図20など４点がある。接８は石核１点・剥片２点が接合する（第38図26～28）。26・27が剥片で，28が石核である。接８は上部の打面調整が顕著におこなわれており，26・27の剥片はここを打面として剥離されている。27は下方からさらに剥離を加えている。接９は剥片２点が接合する（第39図29・30）。29と30は打面を約90°回転して剥離されている。接10は石核１点・剥片１点が接合する（第40図31・32）。31は不整形な剥片である。32は小型の石核であり，自然面を多く残す。同一母岩と判断した他の剥片類に比べ小さすぎるとも思えるが，接８の27のような，石材が瘤状に若干張り出した部分を用いたと考えた。



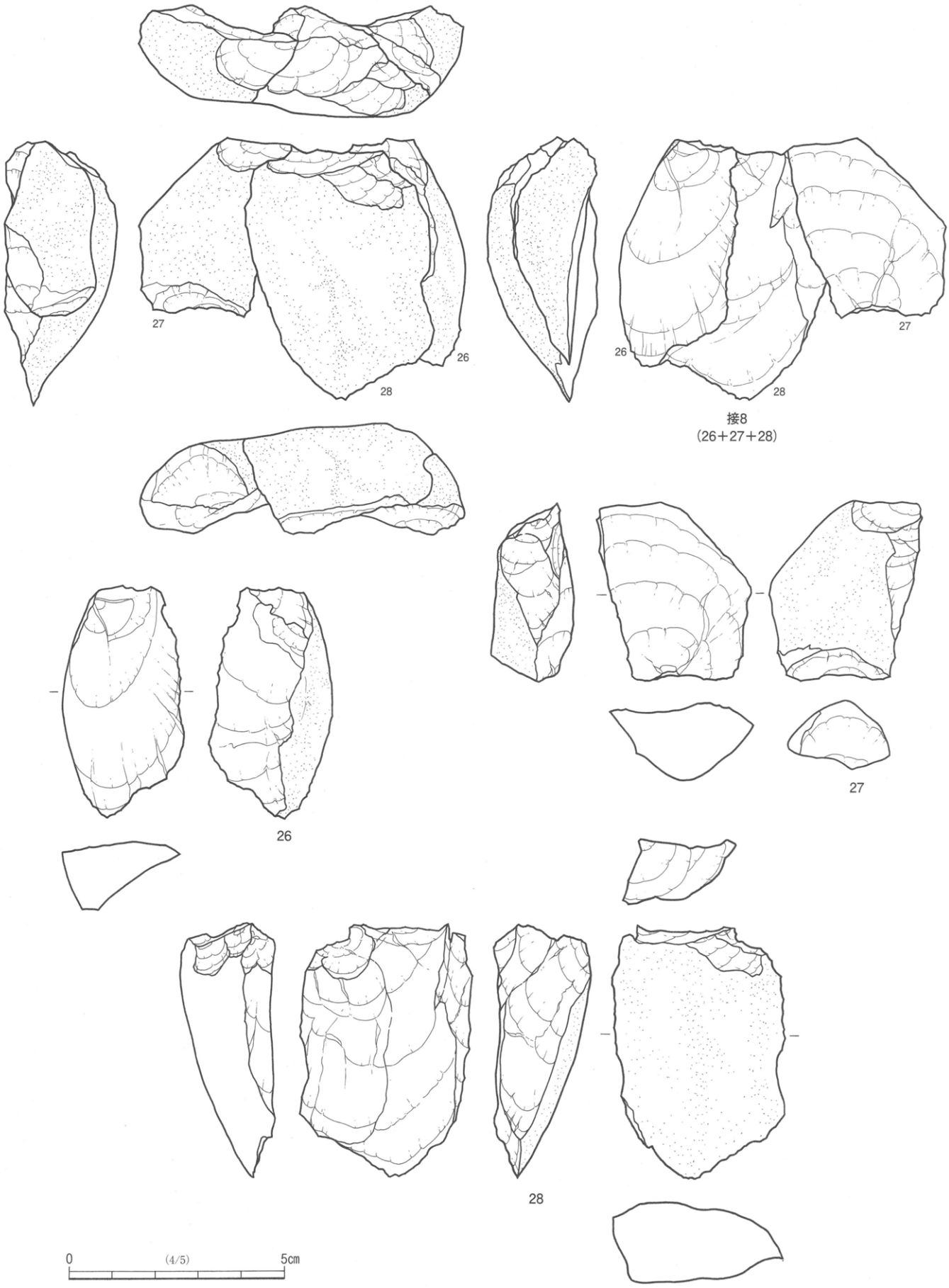
第35図　石器集中５・分布域ｂ・分布状況



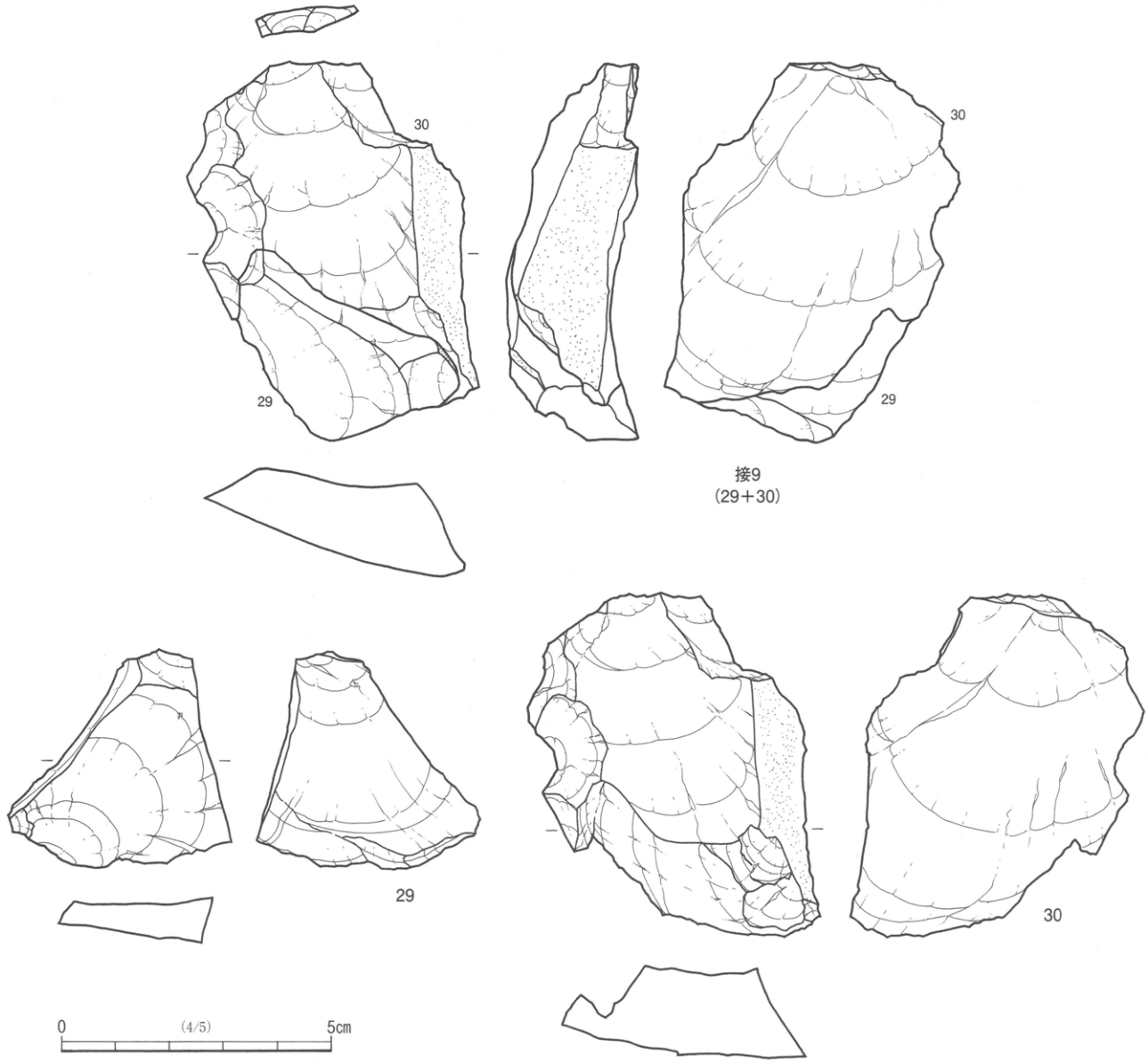
第36図　石器集中５・分布域ｂ（１）



第37図　石器集中５・分布域ｂ（２）



第38図　石器集中５・分布域ｂ（３）



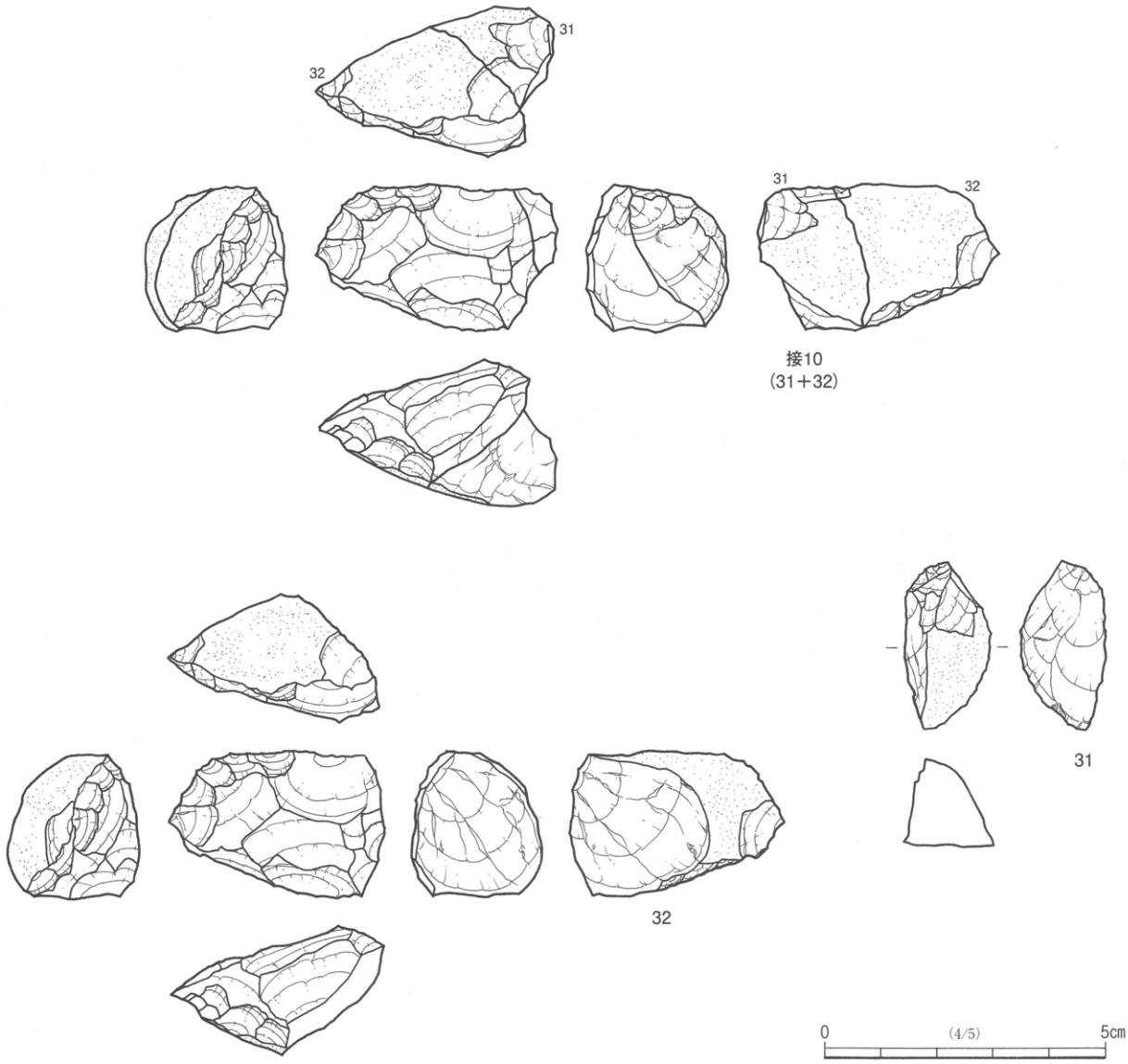
第39図　石器集中５・分布域ｂ（４）

（分布域ｃ）

分布域ｃは，石核２点・二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片３点・剥片17点が分布する。分布状況を第41図に，実測図を第42～45図に示した。

第42図33は，二次加工のある剥片としたものである。珪質頁岩５製で，縁辺のごく一部に細かい調整を施す。34・35は使用痕のある剥片である。34は安山岩Ａ１を用いたもので，左側縁から右側縁下部かけて，微細な剥離痕が観察できる。35は黒色頁岩１製のやや大型の剥片で，左側のやや鋭利な縁辺に微細な剥離痕が観察できる。使用痕のある剥片としては他に，接３に含まれる第45図43がある。

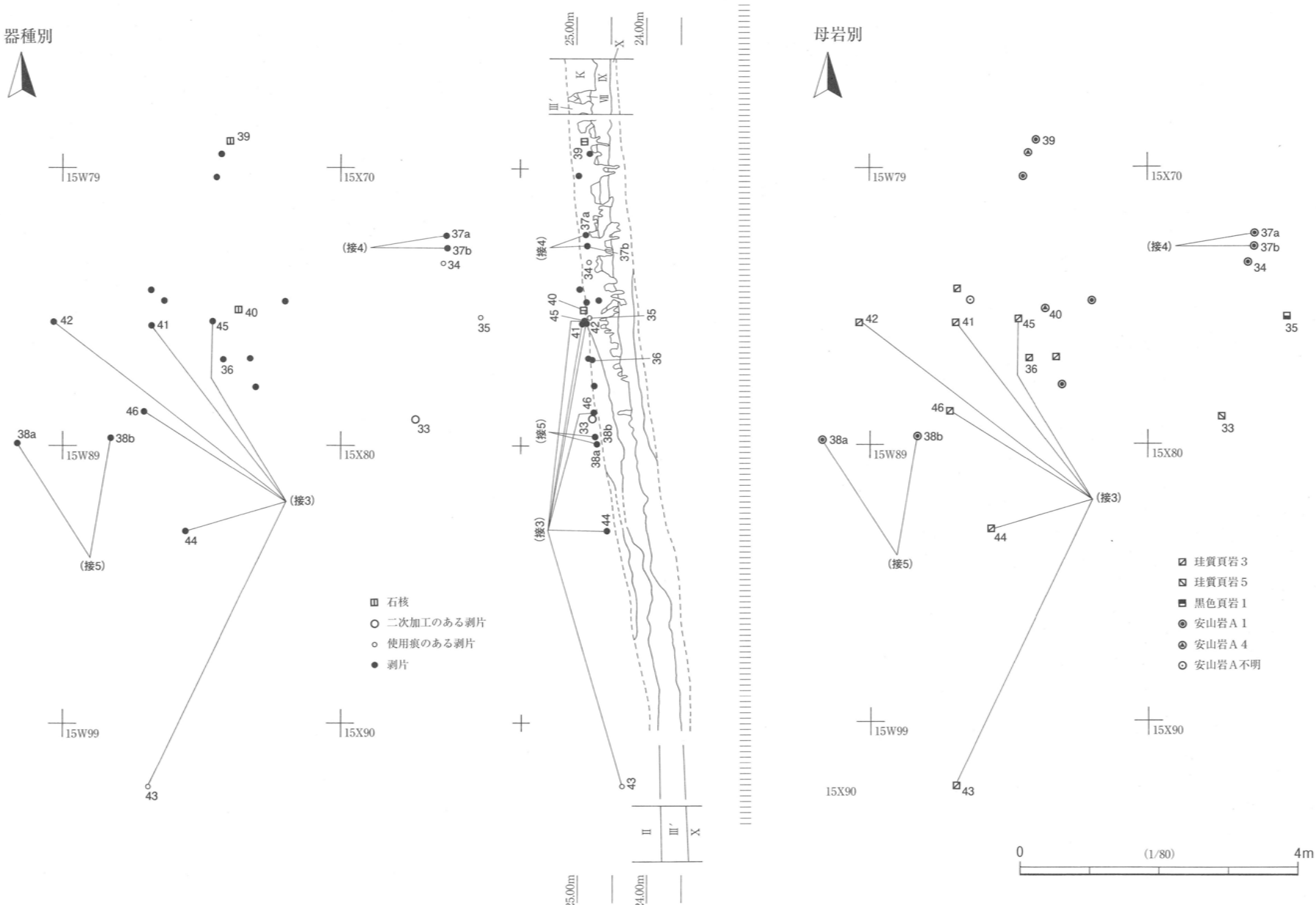
第42図36～第43図38は剥片である。第42図36は珪質頁岩３製の剥片である。表面には自然面が残り，こぶし大の礫の形状が窺える。接３とは同一母岩と判断した。第43図37は接４とした接合資料で，安山岩Ａ１製である。38は接５とした接合資料で，やはり安山岩Ａ１製である。37・38とも打面方向に自然面が残る。



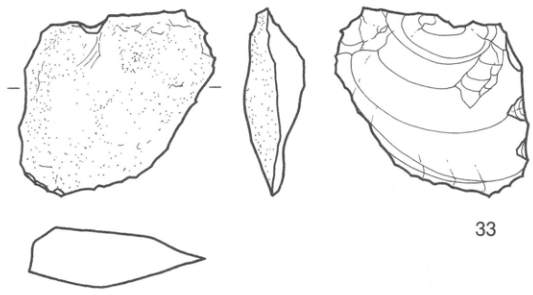
第40図　石器集中５・分布域ｂ（５）

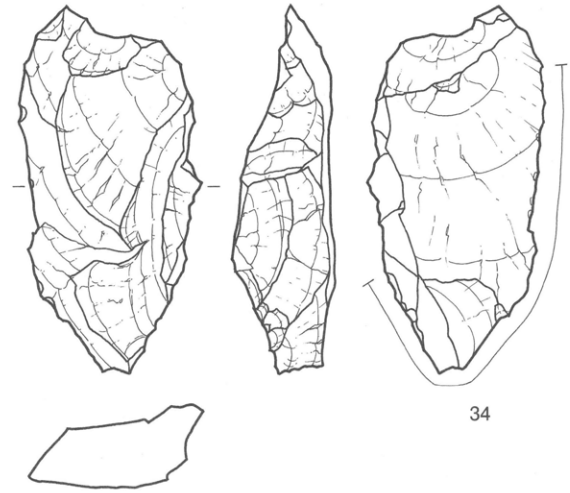
第43図39・40は石核である。39は安山岩Ａ１製の小型の石核である。図化しなかった右側面は自然面である。40は安山岩Ａ４製の石核である。打面転移を繰り返し，最終的には盤状の残核となっている。

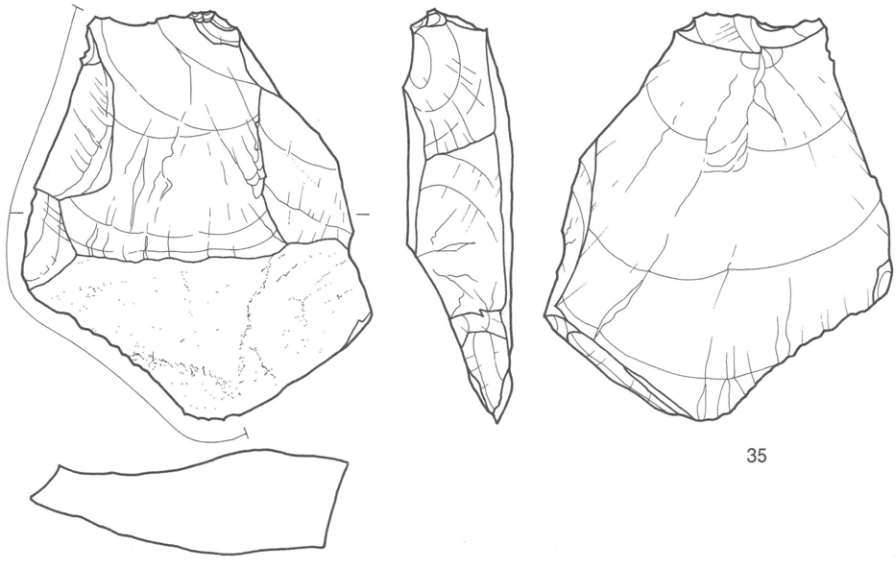
第44図接３は分布域ｃ内でまとまる接合資料である。珪質頁岩３とした母岩であり，使用痕のある剥片１点・剥片５点が接合する（第45図41～46）。珪質頁岩３は他に，第42図36の剥片を含め，接合しない剥片類３点が出土している。第45図43は使用痕のある剥片である。貝殻状の形態を呈する剥片の縁辺に，使用に伴うと考えうる微細な剥離痕が存在する。他の41・42・43～46は，すべて剥片である。接合した状況からは，角の取れた賽子状の礫の形状が窺える。剥離の順序は，まず41の剥片を礫の角を取るようにして剥離し，その後上方に打面を設定し42・43を剥離する。その後44・45を剥離するが，44と45の前後関係は不明瞭である。45は打面を下方に反転させ剥離している。その後打面を再び反転して，46を剥離したようである。

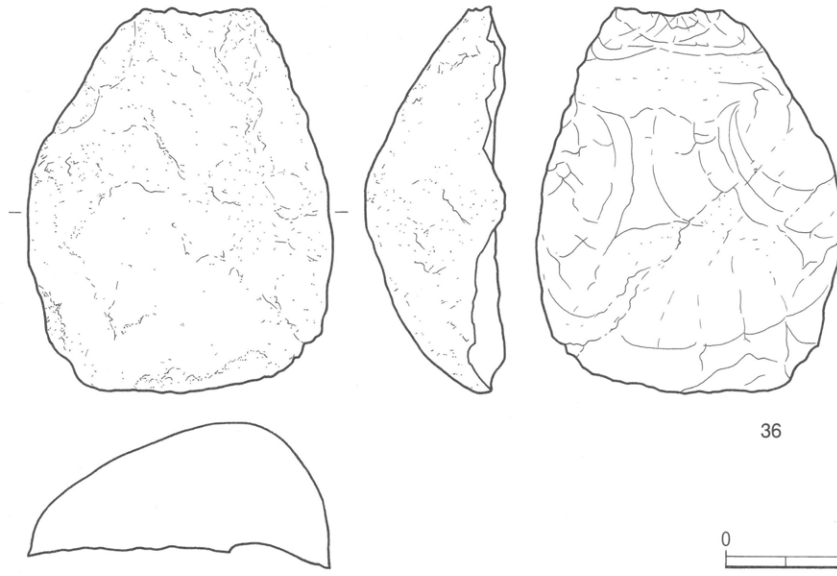


第41図　石器集中５・分布域ｃ・分布状況

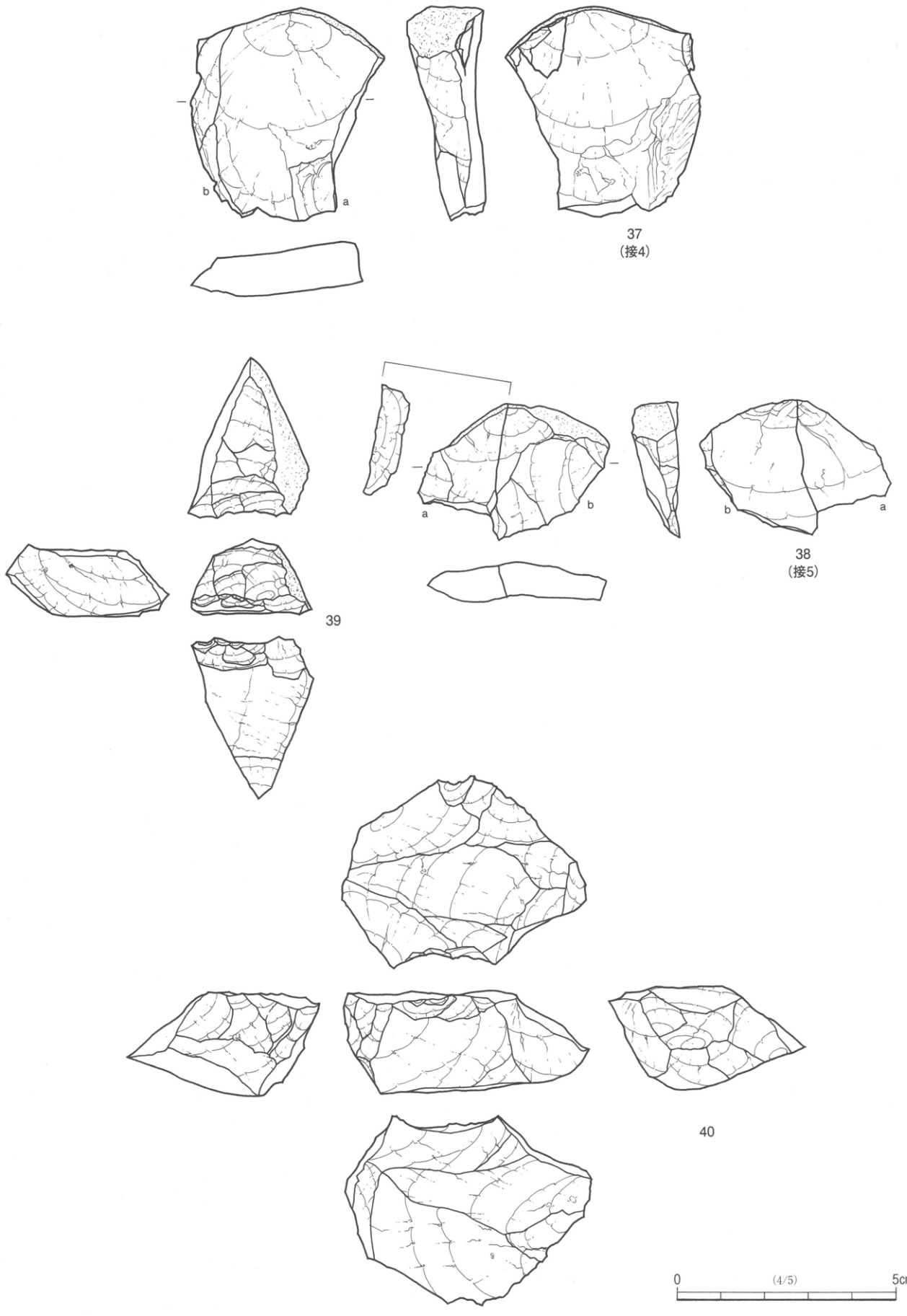








第42図　石器集中５・分布域ｃ（１）



第43図　石器集中５・分布域ｃ（２）

石　材

珪質頁岩32点・黒色頁岩１点・ホルンフェルス１点・チャート１点・流紋岩１点・安山岩Ａ48点の構成である。

珪質頁岩は11母岩を判別した。珪質頁岩１は第32図接１が相当する。暗灰色に近い色調で，不純物をあまり含まない。珪質頁岩２は第37図接２が相当する。自然面はにぶい黄褐色，内部は褐灰色で，白色の細かい不純物を少量含む。珪質頁岩３は，第44図接３と第42図36の剥片が相当する。自然面や節理面は褐色～暗褐色を呈し，良質な部分は灰色に近い。珪質頁岩４は，使用痕のある剥片（第31図２）と石核（第31図５）である。灰オリーブ色で，部分的に褐色を呈する。不純物の少ない，緻密な石材である。

珪質頁岩５は第42図33の二次加工のある剥片が相当し，灰白色で不純物をあまり含まない。珪質頁岩６は第31図３の剥片が相当する。自然面は暗褐色，内部は黒褐色で，白色粒状の細かい不純物を少量含む。色調だけ見ると，いわゆるチョコレート色の珪質頁岩のようだが，より軟質で，緻密さに欠ける。

珪質頁岩７は第36図17の剥片が相当する。灰オリーブ色を呈するもので，自然面は暗オリーブ色～褐色～暗赤褐色と変異に富むようである。珪質頁岩８は第36図16の使用痕のある剥片で，単独母岩である。青灰色に近く，不純物をあまり含まない緻密で良質な石材である。

珪質頁岩９は第36図15の使用痕のある剥片で，単独母岩である。オリーブ黒色に近い色調の，不純物の少ない比較的緻密な石材でである。珪質頁岩10は第36図18の剥片で，単独母岩である。自然面はにぶい黄色，内部は黄灰色で，不純物をあまり含まない。珪質頁岩２に質感が似るが，白色粒状の不純物を含まないため，別母岩と判断した。珪質頁岩11は第31図４の剥片で，単独母岩である。小礫の形状を残すもので，明黄褐色を呈する。

黒色頁岩１は，第42図35の使用痕のある剥片が相当し，単独母岩である。全体に灰色～暗青灰色で，非常に緻密な感触である。

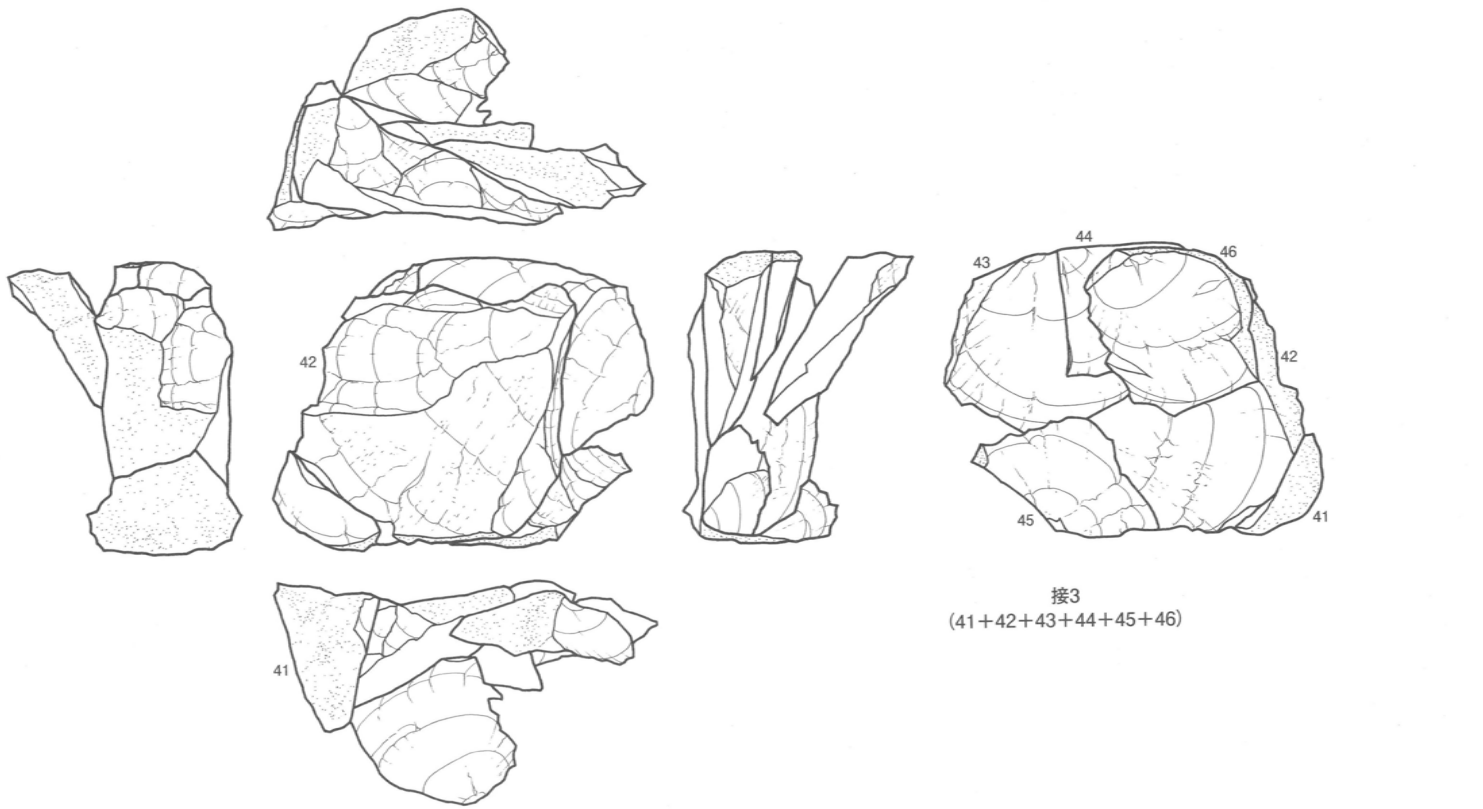
ホルンフェルス１は，台形様石器（第31図１）が相当し，単独母岩である。暗緑灰色に近い色調の石材である。

チャート１はごく小さな礫である。

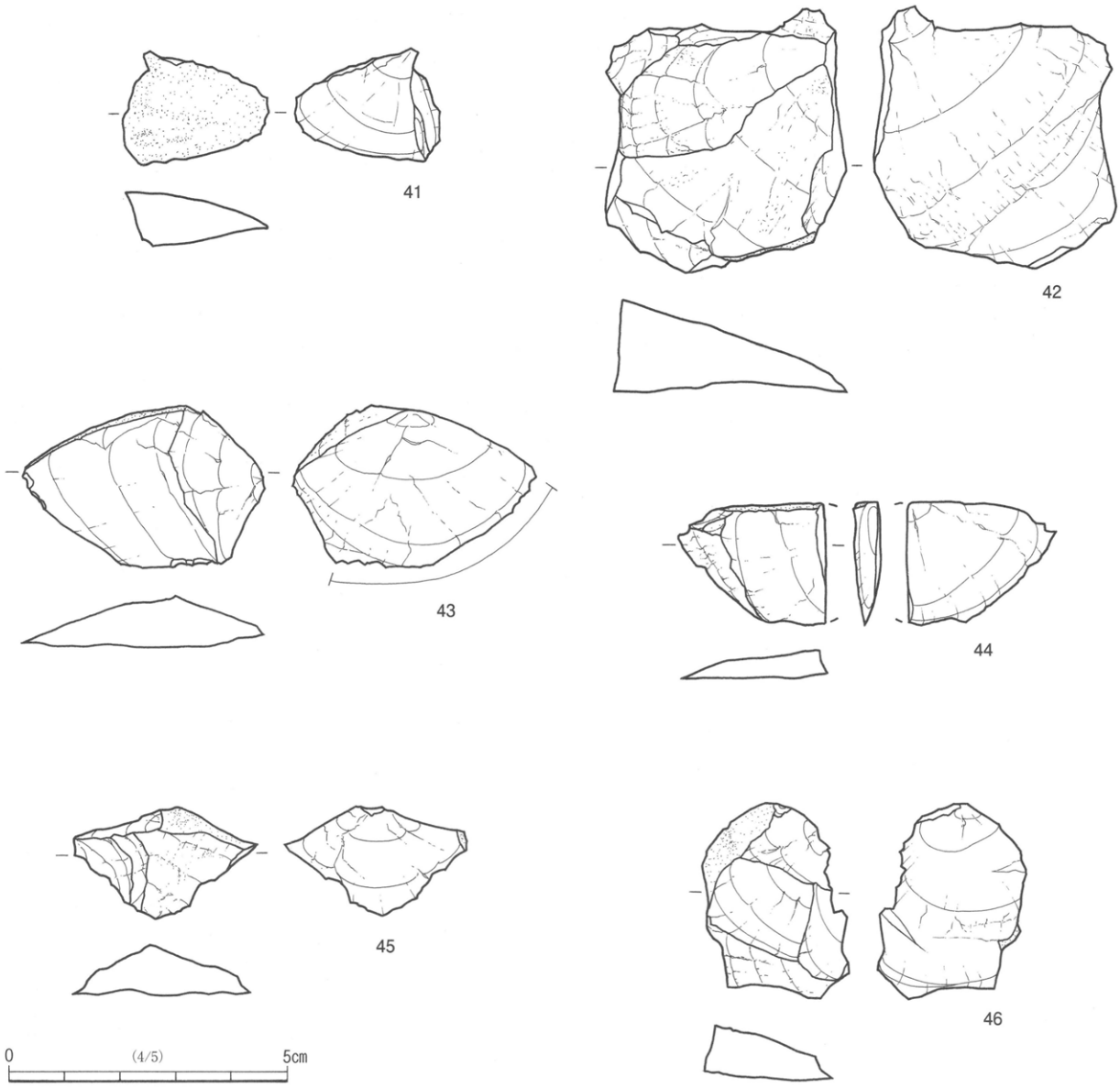
流紋岩１は黄褐色を呈するもので，小型の剥片のため図化しなかった。

安山岩Ａは８母岩を判別した。安山岩Ａ１は第43図39の石核，第42図34の使用痕のある剥片，第43図37接４・38接５の剥片が相当する。暗灰色に近く，白色粒状の不純物を少量含むが，あまり目立たない。自然面が残るものは，やや多孔質でざらつく。安山岩Ａ２は第36図19・第37図22接７の剥片や第37図23接６の石核が相当する。あまり質が良くなく，剥離面でも滑らかさがなく，皺が目立つ。白色粒状の不純物は目立たない。安山岩Ａ３は第36図20の剥片や第38図接８・第39図接９・第40図接10が相当する。灰色で，安山岩Ａ１に比べ若干薄い色調である。また，白色粒状の不純物が目立つ。自然面が残るものは，安山岩Ａ１に比べ滑らかである。

安山岩Ａ１・３と安山岩Ａ２の判別は比較的容易であるが，安山岩Ａ１と安山岩Ａ３の判別はそれほど明瞭ではない。本来は同一の母岩の，別の相を捉えている可能性もある。ただし，上記のような特徴によりグルーピングが可能であったため，一応別母岩と判断した。以下の安山岩Ａ４～８は，安山岩Ａ１～３と明らかに異なった特徴を有するものを判別したものである。



第44図　石器集中５・分布域ｃ（３）



第45図　石器集中５・分布域ｃ（４）

安山岩Ａ４は第43図40の石核が相当する。風化により黄褐色に近い色調で，少量の白色粒状の不純物と，黒色の不純物が少量含まれる。安山岩Ａ５は第37図21の剥片で，単独母岩である。暗オリーブ灰色に近く，青灰色の縞が目立つものである。安山岩Ａ６は，灰色の地に，白色粒状の不純物と黄褐色の縞が目立つものである。小型不整形の剥片のため図化しなかった。安山岩Ａ７は第36図14の削器が相当し，単独母岩である。濃い暗黄灰色で，白色粒を含まず，細かい黒色の不純物を少量含む。安山岩Ａ８は明るい黄灰色で，黒色の不純物が目立つものである。小型不整形の剥片のため，図化しなかった。

分布域ごとの石材の分布をまとめておく。分布域ａでは，台形様石器であるホルンフェルス１が分布する。接１の珪質頁岩１が多数分布し，接２の一端である珪質頁岩２が１点分布する。その他，珪質頁岩４～７・11が分布する。珪質頁岩５は分布域ｃでも１点出土している。また，分布域ｃで多数出土した安山岩Ａ１が１点だけ分布する。チャート１の礫も分布する。

分布域ｂでは，接６・接７を含む安山岩Ａ２，接８～10を含む安山岩Ａ３が多数を占める。珪質頁岩１（接１）・珪質頁岩２（接２）が１点ずつ分布し，分布域ａとの接合資料となっている。珪質頁岩７～10，流紋岩１，安山岩Ａ５～８が分布する。

分布域ｃはやや母岩数が少ない。接３を含む珪質頁岩３と，接４・接５を含む安山岩Ａ１が多数を占める。分布域ａで１点出土した珪質頁岩５が分布する。黒色頁岩１と安山岩Ａ４が分布する。

第７表　石器集中５　組成表

	台形様石器	削器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	礫	合計	組成比
珪質頁岩１					5 108.89	3 128.07		8 236.96	9.5% 17.3%
珪質頁岩２			1 19.4			1 1.86		2 21.26	2.4% 1.6%
珪質頁岩３					1 10.68	8 137.4		9 148.08	10.7% 10.8%
珪質頁岩４			1 51.87		1 2.92			2 54.79	2.4% 4.0%
珪質頁岩５				1 8.52		1 0.37		2 8.89	2.4% 0.6%
珪質頁岩６						2 13.06		2 13.06	2.4% 1.0%
珪質頁岩７						3 17.3		3 17.3	3.6% 1.3%
珪質頁岩８					1 24.66			1 24.66	1.2% 1.8%
珪質頁岩９					1 7.5			1 7.5	1.2% 0.5%
珪質頁岩10						1 9.4		1 9.4	1.2% 0.7%
珪質頁岩11						1 10.75		1 10.75	1.2% 0.8%
黒色頁岩１					1 63.28			1 63.28	1.2% 4.6%
ホルンフェルス１	1 2.43							1 2.43	1.2% 0.2%
チャート１							1 0.09	1 0.09	1.2% 0.01%
流紋岩１						1 1.08		1 1.08	1.2% 0.1%
安山岩Ａ１			1 17.36		1 23.78	10 81.45		12 122.59	14.3% 9.0%
安山岩Ａ２			2 92			11 150.03		13 242.03	15.5% 17.7%
安山岩Ａ３			2 75.98			9 163.26		11 239.24	13.1% 17.5%
安山岩Ａ４			1 56.56			1 5.43		2 61.99	2.4% 4.5%
安山岩Ａ５						1 15.94		1 15.94	1.2% 1.2%
安山岩Ａ６						1 4.11		1 4.11	1.2% 0.3%
安山岩Ａ７		1 51.07						1 51.07	1.2% 3.7%
安山岩Ａ８						1 7.72		1 7.72	1.2% 0.6%
安山岩Ａ不明						6 3.49		6 3.49	7.1% 0.3%
合計（点数） 合計（重量）	1 2.43	1 51.07	8 313.17	1 8.52	11 241.71	61 750.72	1 0.09	84 1,367.71	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	1.2% 0.2%	1.2% 3.7%	9.5% 22.9%	1.2% 0.6%	13.1% 17.7%	72.6% 54.9%	1.2% 0.0%	100.0% 100.0%	

6　石器集中６（E2区）（第46～50図，第８・13表，図版５・14）

分　布

遺跡中央南側のE2区で検出した。遺跡南側に存在する小谷に沿った，緩斜面に位置する。遺物は，14Y95グリッドと15Y05グリッドの境界付近にやや集中して分布し，その周囲6.5m×11mほどの範囲に拡散して分布する。接合資料として接１～接４が存在する。

出土層位はⅨa層～Ⅵ層にわたるが，Ⅶ層を中心とするようである。出土レベルの最大値は24.702m，最小値は24.207m，平均値は24.431mである。

器　種

削器２点・楔形石器１点・石核１点・二次加工のある剥片３点・剥片28点・剥片２点・砕片１点・礫１点の合計38点が出土した（第８表）。図化したものの石材は，第48図３の剥片が黒曜石１製である以外，すべて安山岩Ａ１製である。

第48図１は削器としたものである。小型の剥片の左側縁から下部にかけて，規則的な調整が加えられている。削器としては別に，接２とした接合資料に含まれる第49図７がある。横長の大型の剥片が半ばから折れたものを，削器としたものである。左側縁に規則的な調整が加えられている。

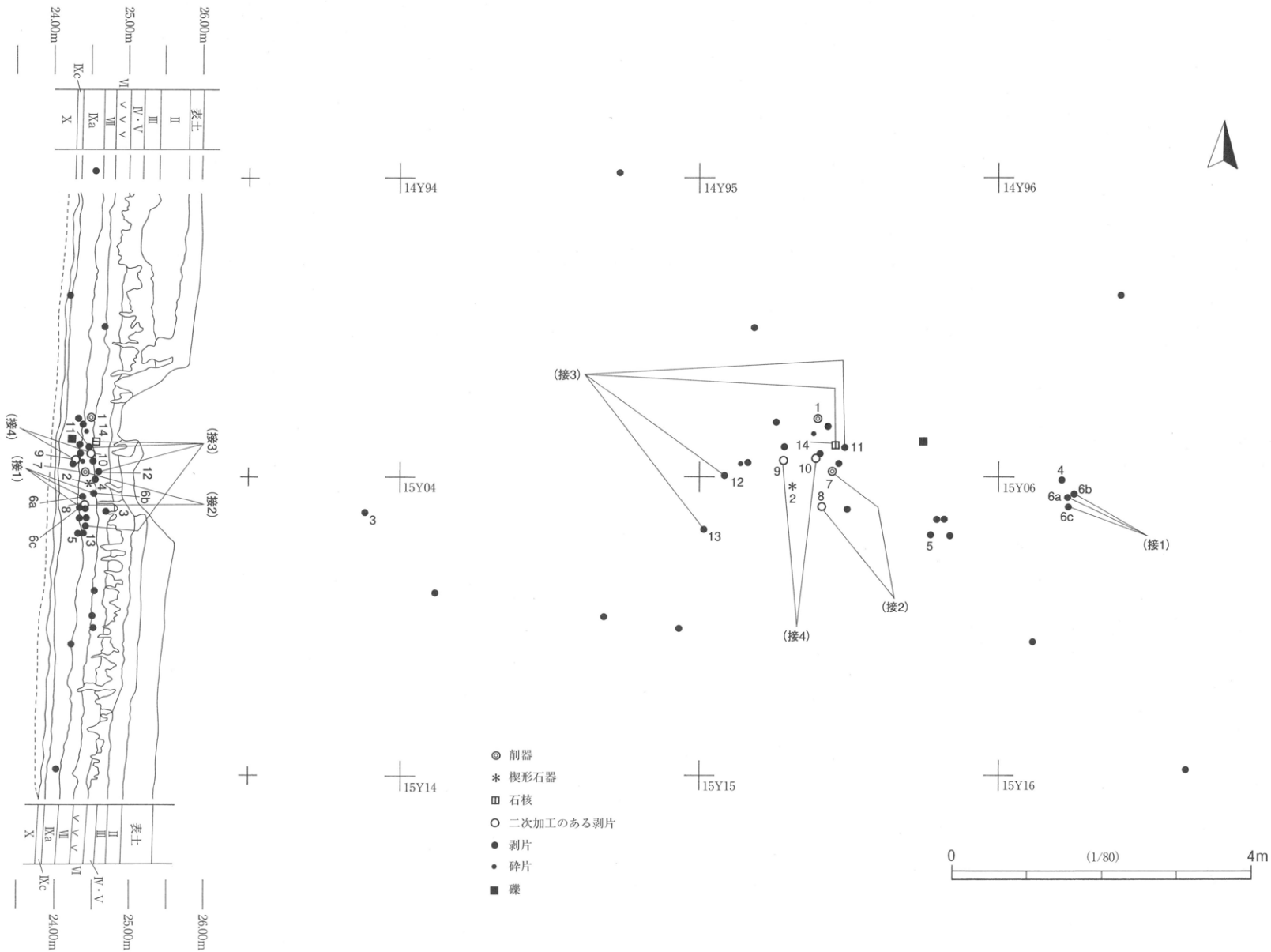
第48図２は楔形石器である。縦長の素材の上下から，両極剥離をおこなうものである。３～５は剥片である。３は黒曜石１製の剥片である。４・５は安山岩Ａ１製のもので，４は不整形な剥片，５は打面調整剥片であろう。

第48図６は，接１とした接合資料で，横長でやや大型の剥片の半ばで折れたもの同士が接合したものである。第49図接２は，削器１点・二次加工のある剥片１点が接合した（第49図７・８）。７・８は接合して，大型の横長剥片となる。７が削器であり，８は下部の縁辺に一部調整が施されており，二次加工のある剥片とした。７の縁辺の調整は，接合する８の縁辺まで連続していないことから，横長剥片が半ばから折れた後，それぞれに調整を施したものであろう。

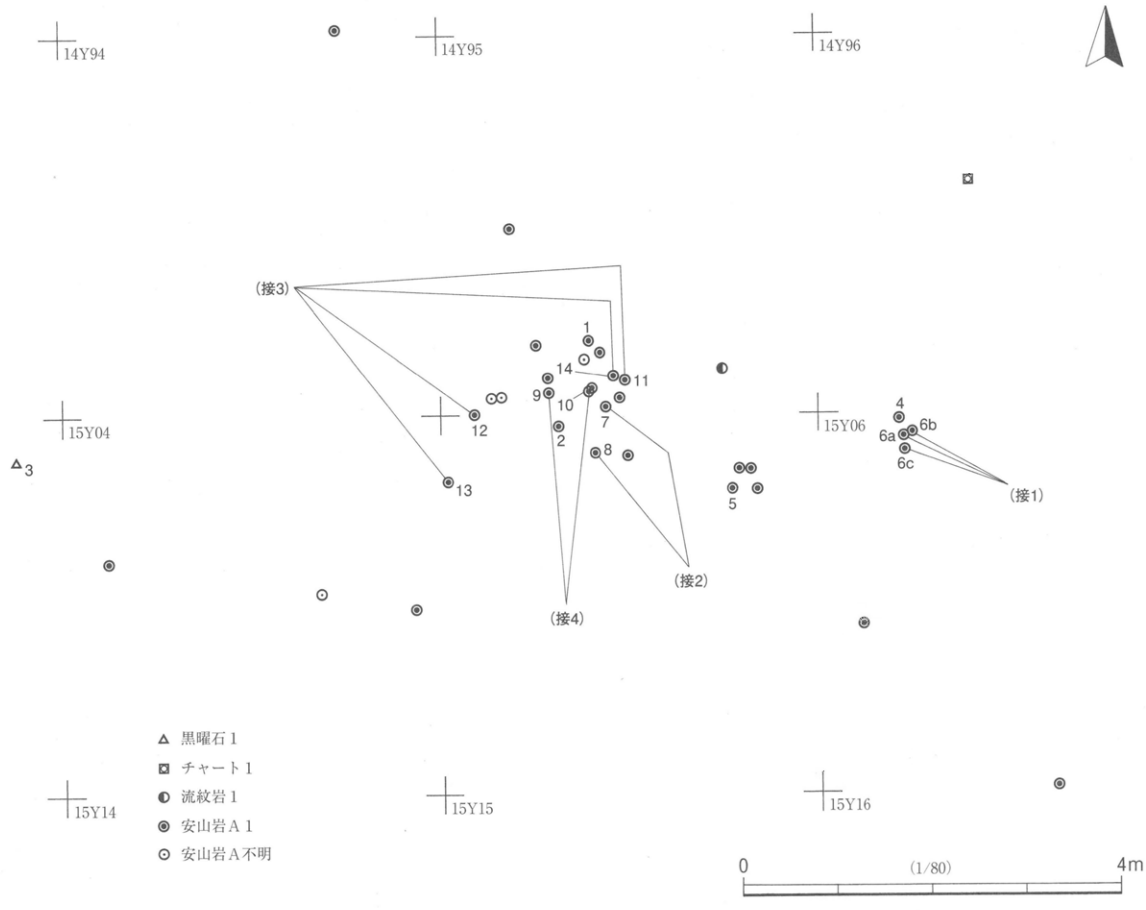
第49図接４は，二次加工のある剥片２点が接合した（第49図９･10）。９・10とも小型横長の剥片の下部縁辺に，あまり丁寧でない調整が加えられるものである。

第８表　石器集中６　組成表

	削器	楔形石器	石核	二次加工のある剥片	剥片	砕片	礫	合計	組成比
黒曜石１					1 7.11			1 7.11	2.6% 3.1%
チャート１					1 0.29			1 0.29	2.6% 0.1%
流紋岩１							1 0.48	1 0.48	2.6% 0.2%
安山岩Ａ１	2 14.7	1 18.6	1 7.57	3 33.58	24 145.1			31 219.55	81.6% 96.2%
安山岩Ａ不明					2 0.46	2 0.29		4 0.75	10.5% 0.3%
合計（点数） 合計（重量）	2 14.7	1 18.6	1 7.57	3 33.58	28 152.96	2 0.29	1 0.48	38 228.18	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	5.3% 6.4%	2.6% 8.2%	2.6% 3.3%	7.9% 14.7%	73.7% 67.0%	5.3% 0.1%	2.6% 0.2%	100.0% 100.0%	



第46図　石器集中６・器種別分布状況



第47図　石器集中６・母岩別分布状況

第50図接３は，石核１点・剥片３点が接合した（第50図11～14）。石核を中心とした接合資料で，11～13の剥片と，14の石核が接合したものである。11の下部と12の上部は接合し，縦長剥片の半ばで折れたものである。11・12と13は，それぞれ打面を上下に反転して剥離されている。14は小さな残核であるが，楔形石器として用いられた可能性もある。

石　材

黒曜石１点・チャート１点・流紋岩１点・安山岩Ａ35点の構成で，圧倒的に安山岩Ａが多数を占める。

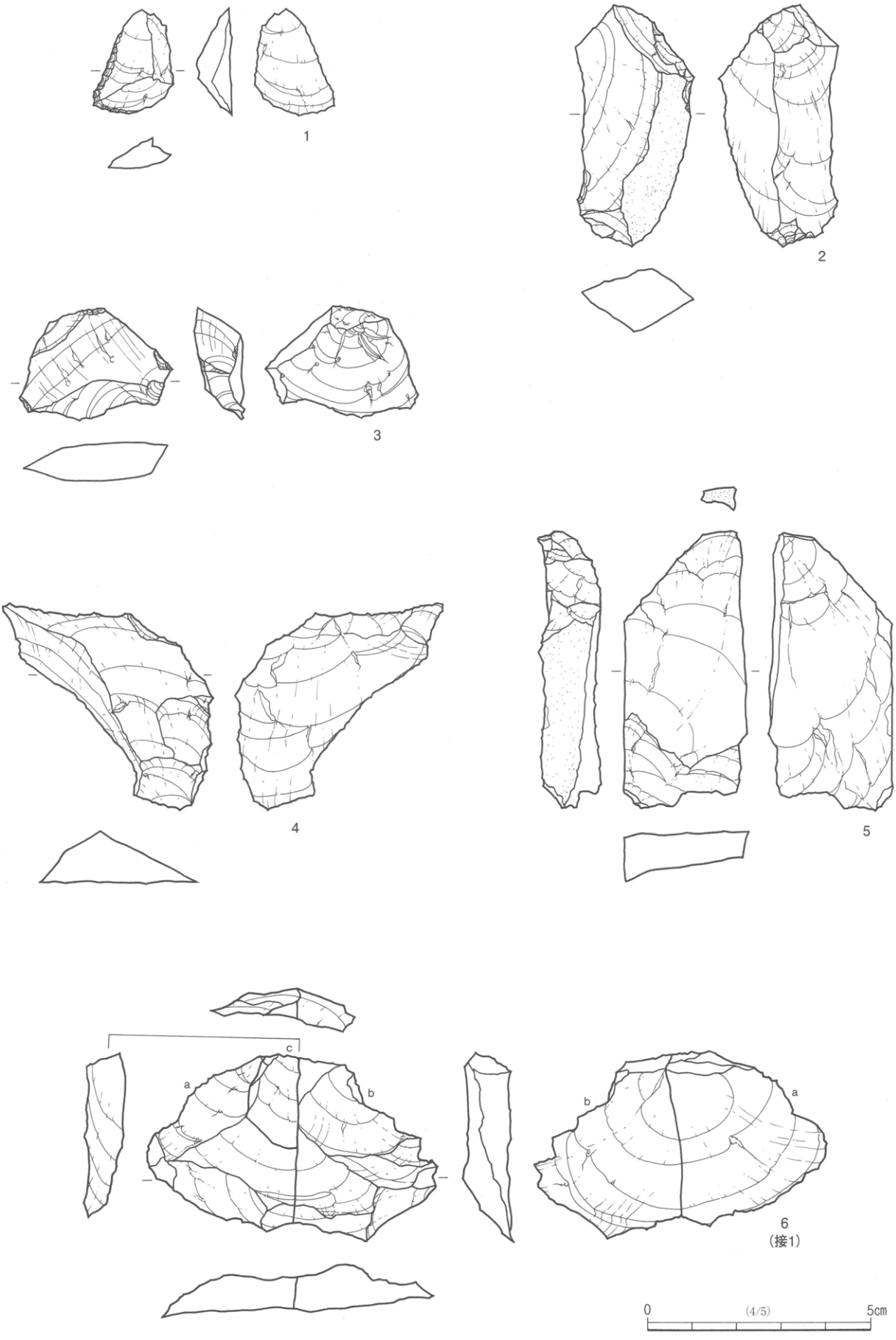
黒曜石１は第48図３の剥片で，単独母岩である。漆黒で透明度が高く，白色粒状の夾雑物を少し含む。

チャート１は，暗オリーブ灰色で，にぶい透明度をもつ。単独母岩である。ごく小さな剥片のため図化しなかった。

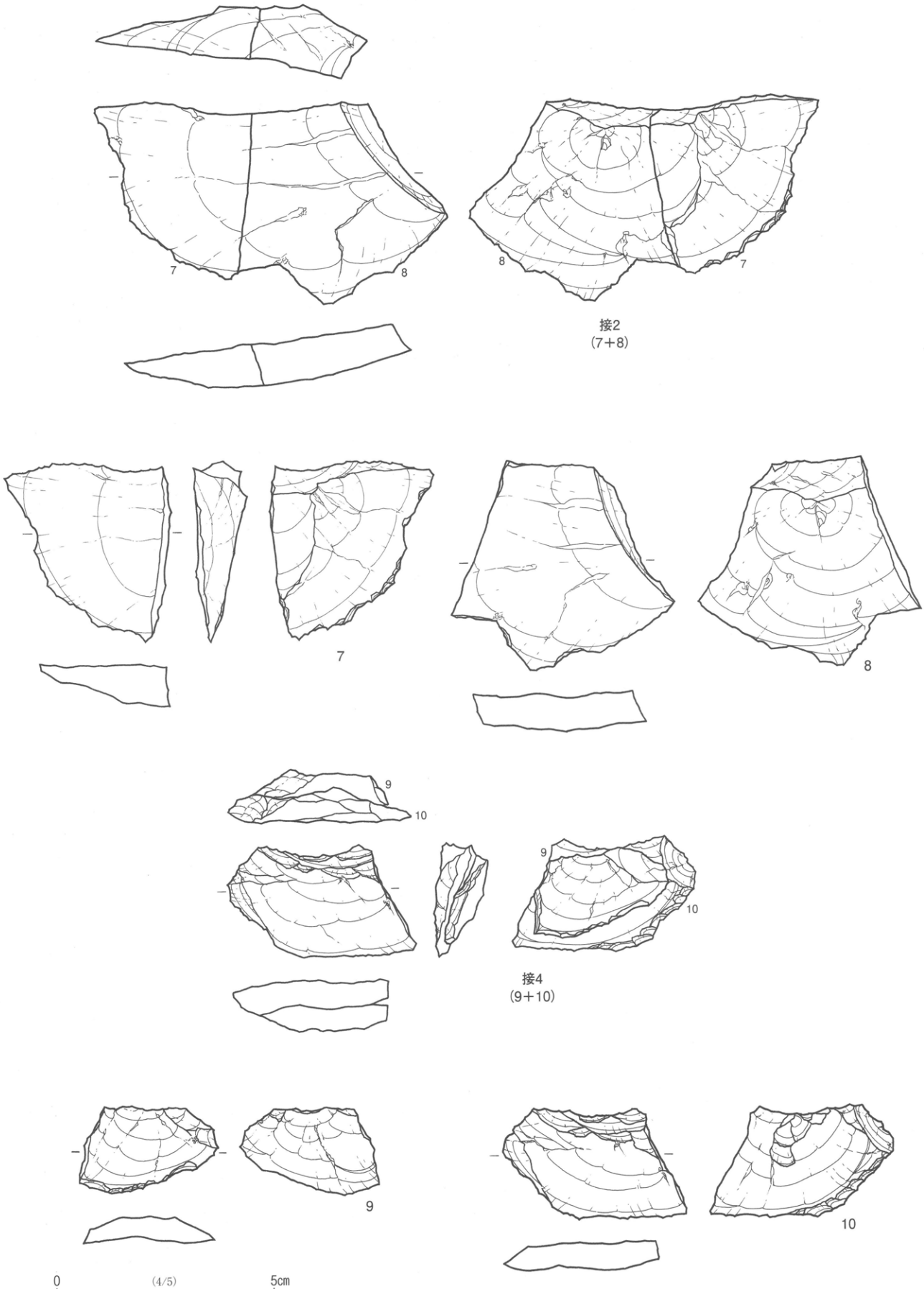
流紋岩１は小礫である。

安山岩Ａ１は，本集中地点の大多数の石器を構成する石材である。図化したものは，第48図３以外全てが，この石材に相当する。灰色に近い色調で，白色粒状物質をごく少量含む。比較的緻密で，新鮮なガジリ部分は黒色を呈する。

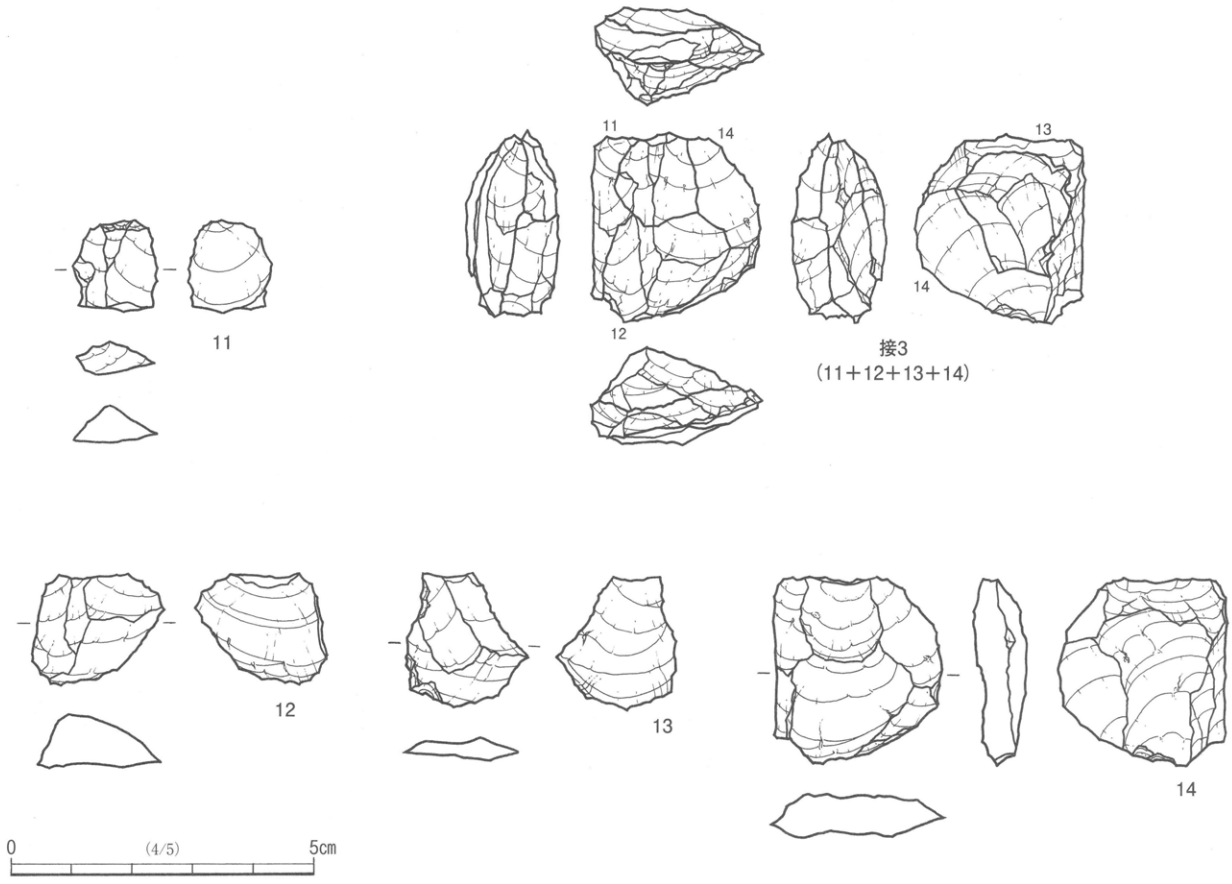
なお，安山岩Ａで不明としたものは，安山岩Ａ１とは判断できなかったが，別の母岩として積極的に認定することもできなかったものである。結果から見ると，安山岩Ａ１以外の安山岩Ａの母岩が認定できなかったことから，安山岩Ａ１に含めて考えても差し支えないかと思う。



第48図　石器集中６（１）



第49図　石器集中６（２）



第50図　石器集中６（３）

第３節　AT上位石器群

１　石器集中７（C3区）（第51・52図，第９・13表，図版３・15）

分　布

遺跡北端のC3区で検出した，小規模な石器集中地点である。11AB20グリッドを中心に４ｍ×４ｍほどの範囲内に分布する。地形図を見ると遺跡北東側には小規模な谷が存在し，石器集中７はこの小谷の谷頭部付近の緩斜面に位置すると見るしうる。ただし，C3区の土層断面図は調査区の南西側壁で作成されたため，この小谷の出口方向である南東方向への傾斜をうまく捉えていない可能性がある。

出土層位はⅦ層～Ⅵ層わたり，やや拡散する。断面図上に投影された遺物のドットは，南方向に下がって分布している。前述のように図化された断面図が，傾斜する地形を良好に反映していない可能性もあり，出土層位については，遺物の投影された位置がそのまま出土層位と判断して良いものか，検討の余地があろう。出土した石器群の様相から，一応Ⅵ層を主とすると判断した。

出土レベルの最大値は24.972m，最小値は24.563mで，平均値は24.756mである。

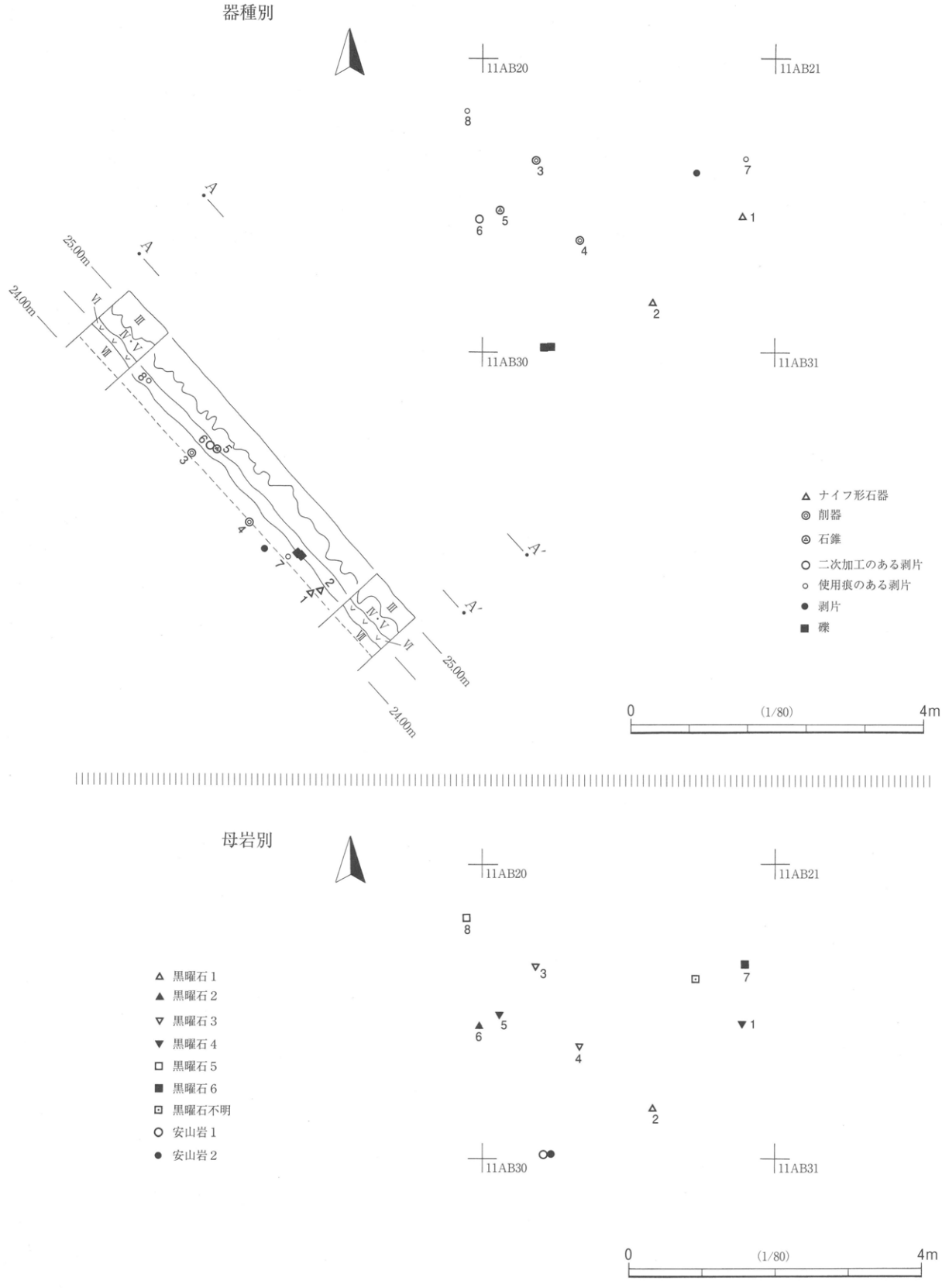
器　種

ナイフ形石器２点，削器２点，石錐１点，二次加工のある剥片１点，使用痕のある剥片２点，剥片３点，礫２点の合計13点が出土した（第９表）。全体の出土点数は少ないものの，豊富な製品類が出土したと言えよう。礫以外はすべて黒曜石製である。

第52図１・２はナイフ形石器である。１はやや幅広の縦長剥片の打面を基部として，基部付近から右側縁全体と左側縁の一部に調整を施す。２は石刃を逆位に用い，裏面の基部付近は整形剥離後に入念な調整を施している。先端部は切り出し状の形態であり，先端部付近の左側縁と切り出し状の先端部に細かい調整を加えている。

第９表　石器集中７　組成表

	ナイフ形石器	削器	石錐	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	礫	合計	組成比
黒曜石１		2 18.87						2 18.87	15.4% 5.5%
黒曜石２	1 10.94			1 0.6				2 11.54	15.4% 3.4%
黒曜石３	1 7.62							1 7.62	7.7% 2.2%
黒曜石４			1 2.43					1 2.43	7.7% 0.7%
黒曜石５					1 6.18			1 6.18	7.7% 1.8%
黒曜石６					1 1.03			1 1.03	7.7% 0.3%
黒曜石不明						3 1.16		3 1.16	23.1% 0.3%
安山岩１							1 241.21	1 241.21	7.7% 70.0%
安山岩２							1 54.37	1 54.37	7.7% 15.8%
合計（点数） 合計（重量）	2 18.56	2 18.87	1 2.43	1 0.6	2 7.21	3 1.16	2 295.58	13 344.41	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	15.4% 5.4%	15.4% 5.5%	7.7% 0.7%	7.7% 0.2%	15.4% 2.1%	23.1% 0.3%	15.4% 85.8%	100.0% 100.0%	



第51図　石器集中７・分布状況

第52図　石器集中７

3・4は削器である。3は厚みのある縦長剥片を用い，右側面に表裏から顕著な調整を施す。4は左側面全体と，右側縁上部に調整を施す。

5は石錐と判断した。おそらく横長の素材を用いて，周縁全体に入念な調整を施す。先端付近は左側をノッチ状に成形することで，錐部を作出している。

6は，剥片の右側縁に細かい調整が施されたものである。左側面は折れている可能性もあり，全体の形状がはっきりしないため，二次加工のある剥片とした。右側縁下部の細かい剥離は，ガジリの可能性がある。

7・8は使用痕のある剥片である。8は二次焼成を受けたようで，表面は白濁したような色調となっている。

石　材

黒曜石11点，安山岩2点で構成される。安山岩2点はいずれも礫である。

黒曜石は6母岩に判別した。複数の器種が認められるものは黒曜石1・2で，他は単独母岩である。

黒曜石1は透明度が鈍く，粒状の夾雑物が多い。第52図3・4の削器が相当する。黒曜石2は透明度が鈍く，白色～暗褐色の縞状の色調が顕著に入ることにより，やや暗褐色でくすんで見える。粒状の夾雑物が目立つ。1のナイフ形石器と6の二次加工のある剥片が相当する。

黒曜石3は漆黒でガラス質の光沢を帯び，夾雑物は少ない。2のナイフ形石器が相当する。黒曜石4は透明度は中間で，夾雑物をほとんど含まないものの，ややくすんだ色調である。5の石錐が相当する。黒曜石5は透明度は中間で，白色に近い色調が縞状に入り，夾雑物はごく少ない。8の使用痕のある剥片が相当する。黒曜石6は透明度が強く，夾雑物をほとんど含まない。7の使用痕のある剥片が相当する。

2　石器集中8（C2区）（第53～56図，第10・13表，図版2・15）

分　布

遺跡北東端のC2区で検出した。C2区全体で遺物を検出したが，遺物の出土レベルの差から，南側と北側の一群に分離し，南側を石器集中8とした。

12AB25グリッド内の2m×3mほどの範囲を中心とし，6m×10mほどの範囲に分散して分布する。遺跡北東側の小谷に沿って遺物が分布するようである。接合資料として接1～接3が存在する。

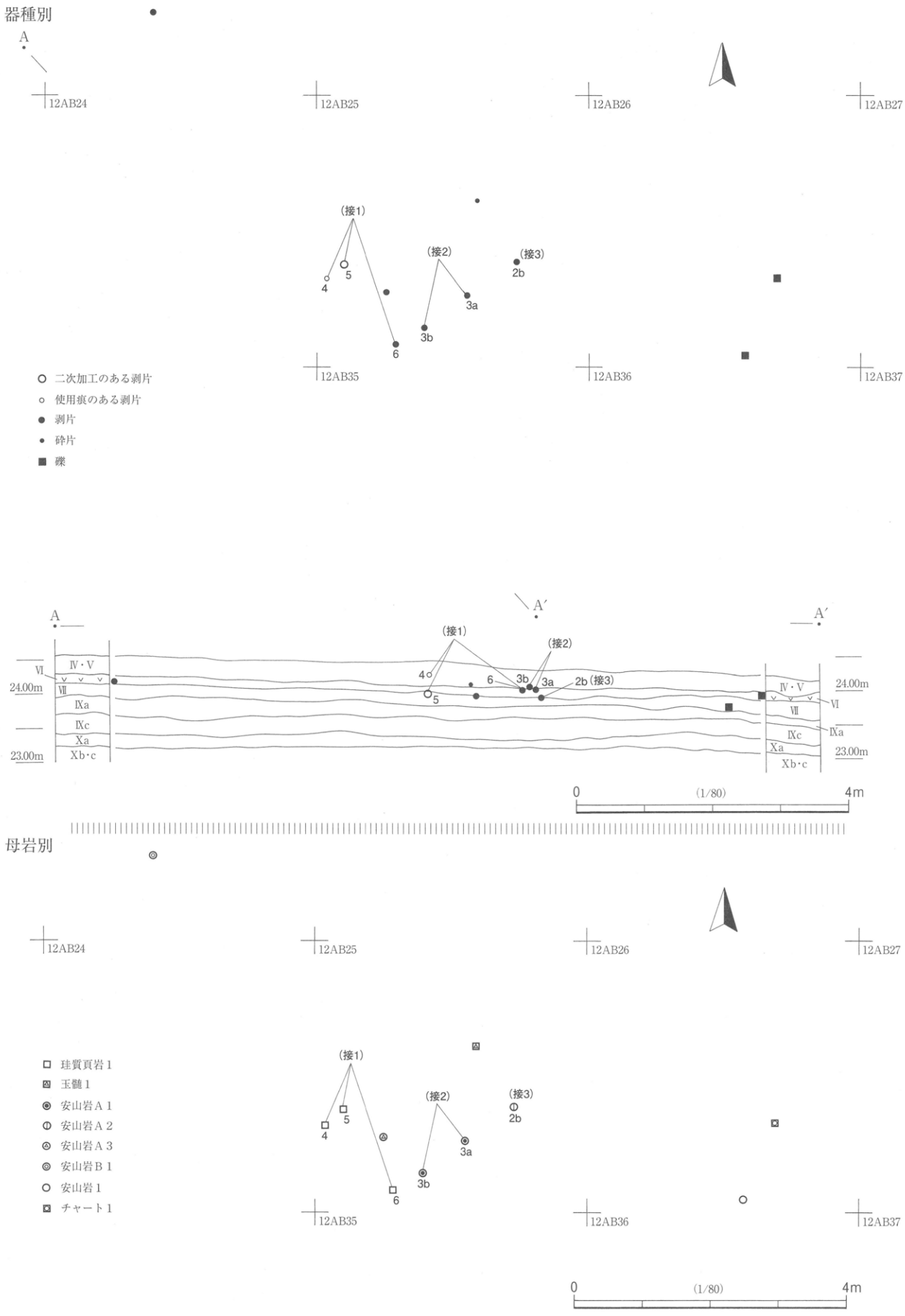
出土層位はⅦ層～Ⅳ・Ⅴ層にわたるが，Ⅵ層を中心とする。出土レベルの最大値は24.245m，最小値は23.791mで，平均値は24.025mである。

器　種

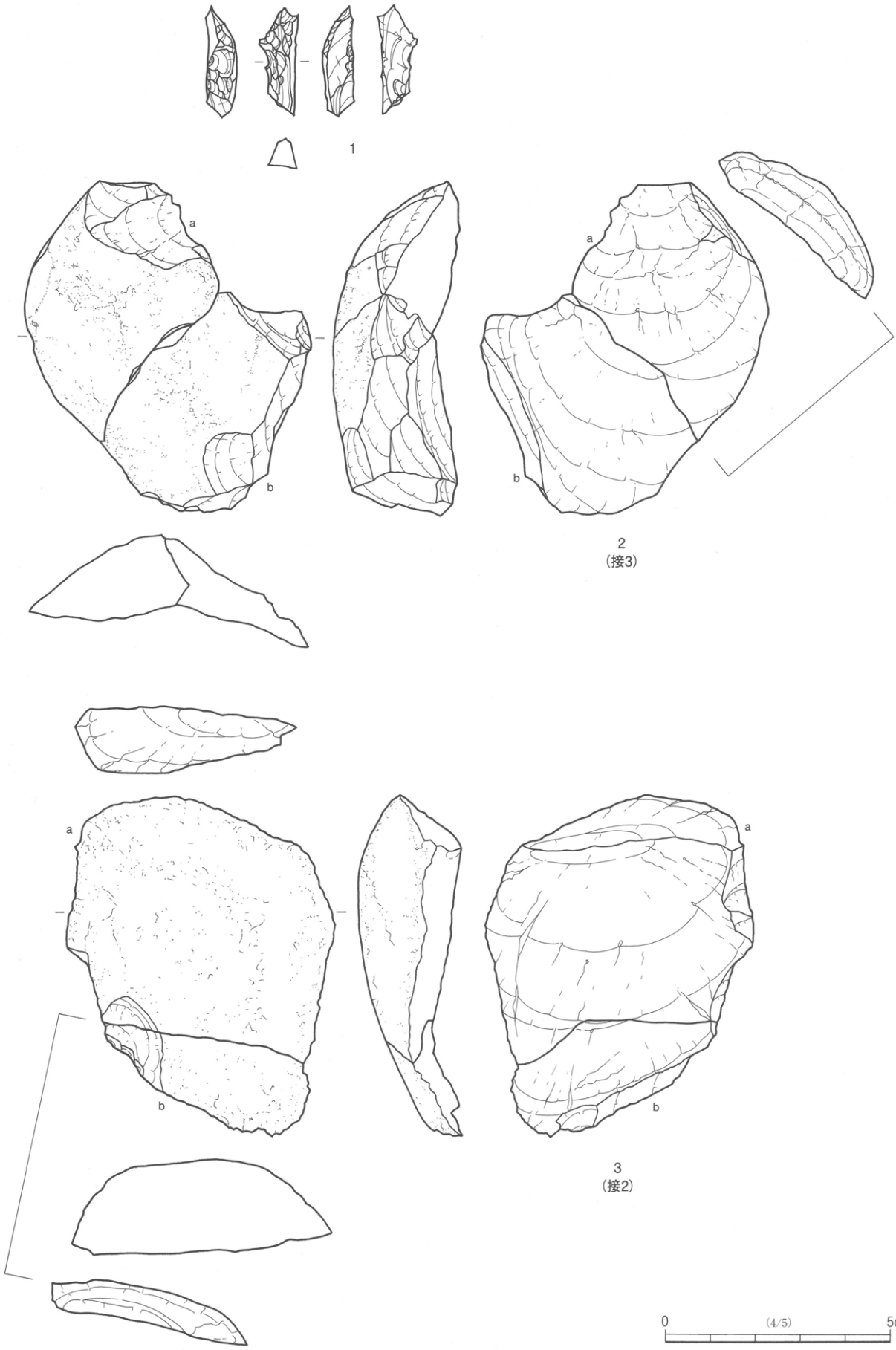
角錐状石器1点・石核1点・二次加工のある剥片1点・使用痕のある剥片1点・剥片7点・砕片1点・礫3点の合計15点で構成される（第10表）。なお，12AB26グリッドで，礫が1点出土したが，攪乱中出土との記録があり，混入と判断した。

第54図1は角錐状石器と判断したものである。黒曜石1製で，左側面を中心に調整をおこなう。平成10年度確認調査中に出土したものであり，厳密な出土位置の記録を欠く。記録された出土位置は12AB26・36グリッドとのことで，C2区内で隣接して検出された石器集中1に帰属する可能性もあるが，石器の器種判定からこちらに帰属させた。

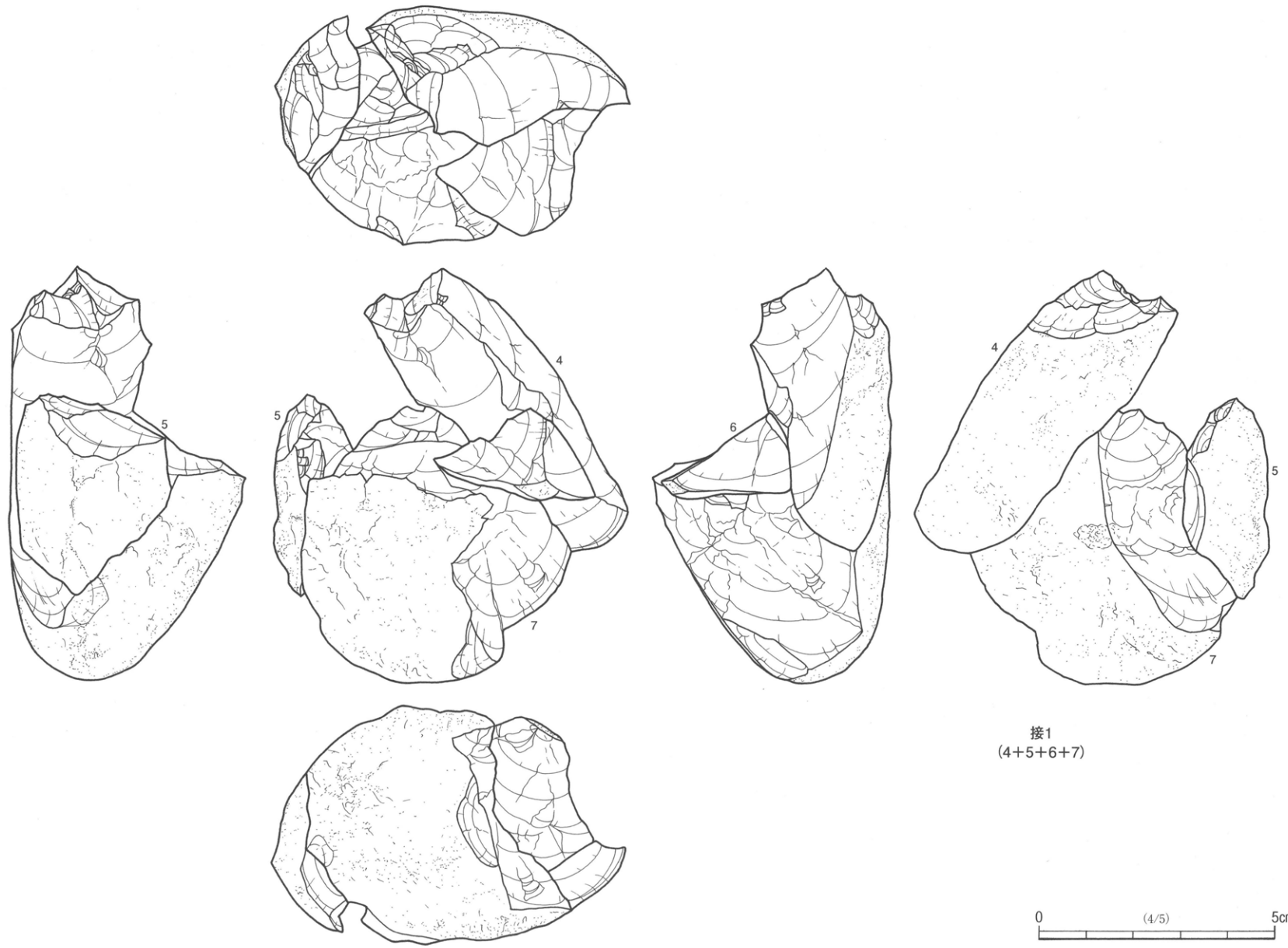
第54図2・3は剥片である。いずれも2点からなる接合資料で，自然面を残すものである。2は接3と



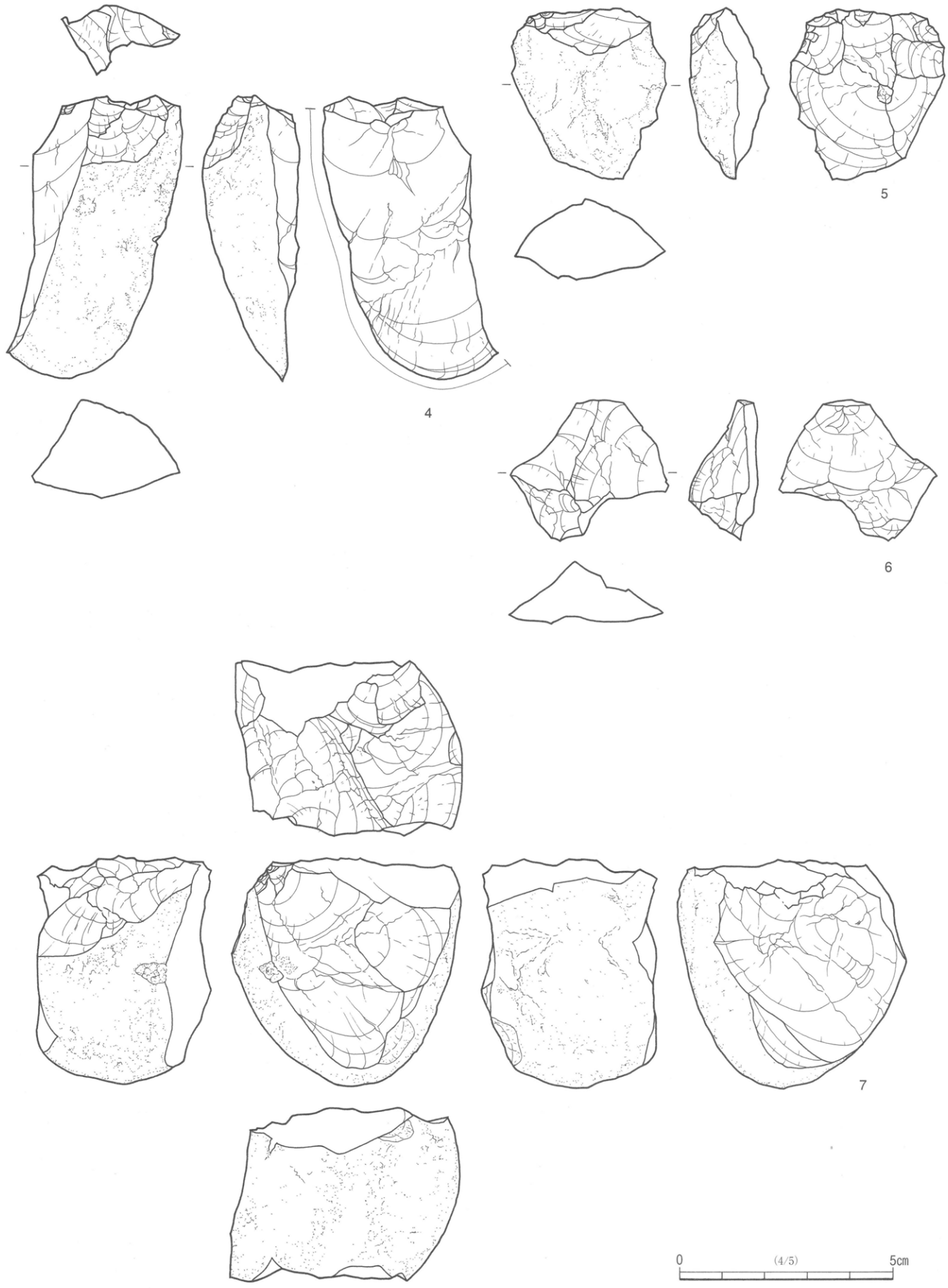
第53図　石器集中８・分布状況



第54図　石器集中８（１）



第55図　石器集中８（２）



第56図　石器集中８（３）

した接合資料で，安山岩Ａ２とした母岩である。３は接２とした接合資料で，安山岩Ａ１とした母岩である。

第55図接１は珪質頁岩１とした母岩の接合資料で，石核１点・二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片１点・剥片１点が接合する（第56図４～７）。他に接合しない同一母岩の剥片類は存在しなかった。４は使用痕のある剥片，５は二次加工のある剥片，６は剥片，７が石核である。打面転移を繰り返して，剥片を剥離している。残された剥片は，４→５→６の順序で剥離されているが，間にはブランクが存在し，おそらく良好な剥片は遺跡外に持ち出されたのであろう。

石　材

黒曜石１点・珪質頁岩１点・玉髄１点・チャート１点・安山岩Ａ６点・安山岩Ｂ１点・安山岩１点の構成である。

黒曜石１は，角錐状石器（第54図１）に用いられたもので，漆黒を呈し，粒状の夾雑物を少し含む。

珪質頁岩１は，第55図接１とした接合資料であり，こぶし大のノジュールの形状がほぼ復元できた。自然面は風化が進んで灰色～灰黄色を呈し，ノジュール内部の外側に近い部分は灰オリーブ色，中心付近はオリーブ黄色を呈する。

玉髄１は白色不透明の砕片で，図化しなかった。

安山岩Ａは４母岩に判別した。安山岩Ａ１は第54図接２で，全体に黄色がかり，白色粒状物質を多く含み，黒色の細かい粒状物質を少量含む。自然面には細かい皺が目立つ。安山岩Ａ２は第54図接３で，全体にやや黄色がかり，白色粒状物質を少量含む。自然面は安山岩Ａ１に比べ滑らかである。安山岩Ａ３は暗青灰色を呈し，不純物は少ない。安山岩Ａ４は，完形の小礫である。

第10表　石器集中８　組成表

	角錐状石器	石核	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	礫	合計	組成比
黒曜石１	1 1.32							1 1.32	6.7% 0.3%
珪質頁岩１		1 144.59	1 22.07	1 46.35	1 10.59			4 223.6	26.7% 42.9%
玉髄１						1 1.84		1 1.84	6.7% 0.4%
チャート１							1 10.31	1 10.31	6.7% 2.0%
安山岩Ａ１					2 99.77			2 99.77	13.3% 19.1%
安山岩Ａ２					2 111.81			2 111.81	13.3% 21.5%
安山岩Ａ３					1 2.4			1 2.4	6.7% 0.5%
安山岩Ａ４							1 0.93	1 0.93	6.7% 0.2%
安山岩Ｂ１					1 6.02			1 6.02	6.7% 1.2%
安山岩１							1 63.14	1 63.14	6.7% 12.1%
合計（点数） 合計（重量）	1 1.32	1 144.59	1 22.07	1 46.35	7 230.59	1 1.84	3 74.38	15 521.14	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	6.7% 0.3%	6.7% 27.7%	6.7% 4.2%	6.7% 8.9%	46.7% 44.2%	6.7% 0.4%	20.0% 14.3%	100.0% 100.0%	

チャート１・安山岩１は礫である。安山岩Ｂ１は風化がかなり進んだ，青灰色の剥片であり，図化しなかった。

３　石器集中９（D2区）（第57・58図，第11・13表，図版３・16）

分　布

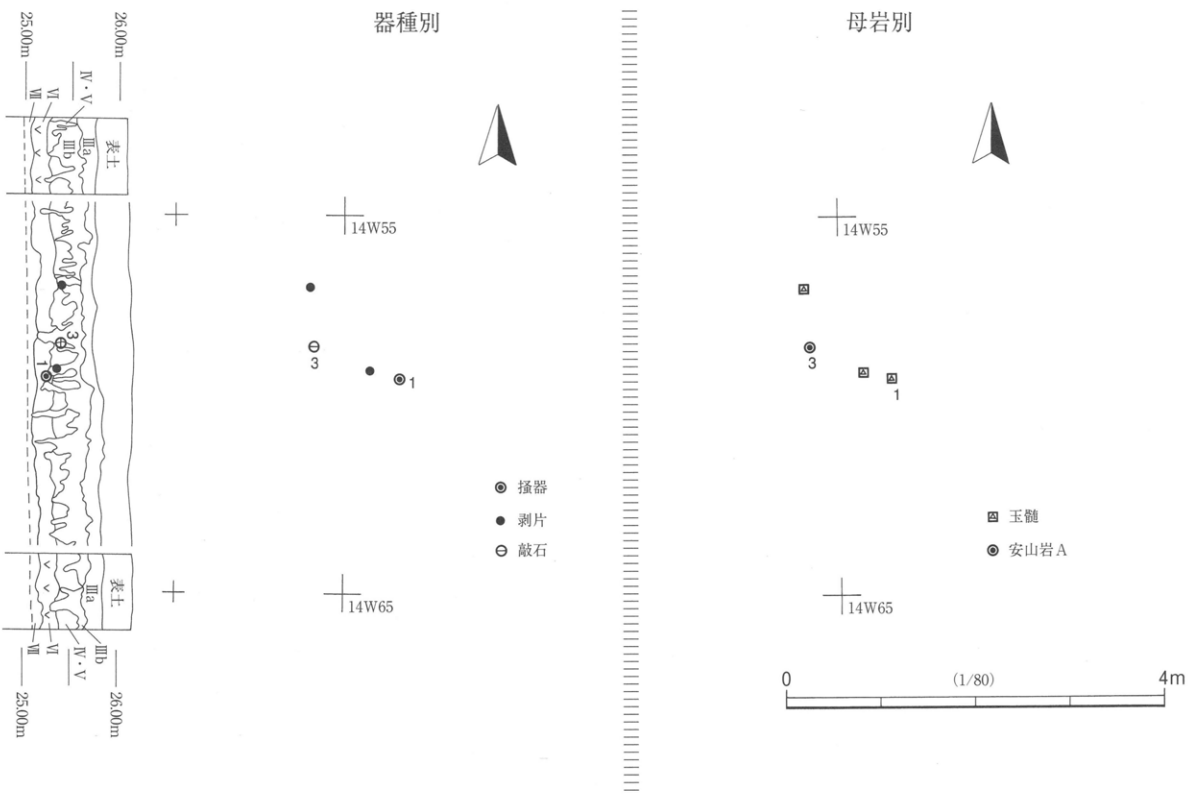
遺跡南西のD2区で検出した。D2区では，広い範囲にわたってⅨ層～Ⅶ層を主とする石器集中２を検出したが，D2区南西端付近の小規模な集中域は，出土レベルが明らかに異なるため，別の石器集中地点と判断し，石器集中９とした。

14W54グリッドと14W55グリッドをまたぐように，１ｍ×1.5mほどのごく狭い範囲に遺物が集中する。

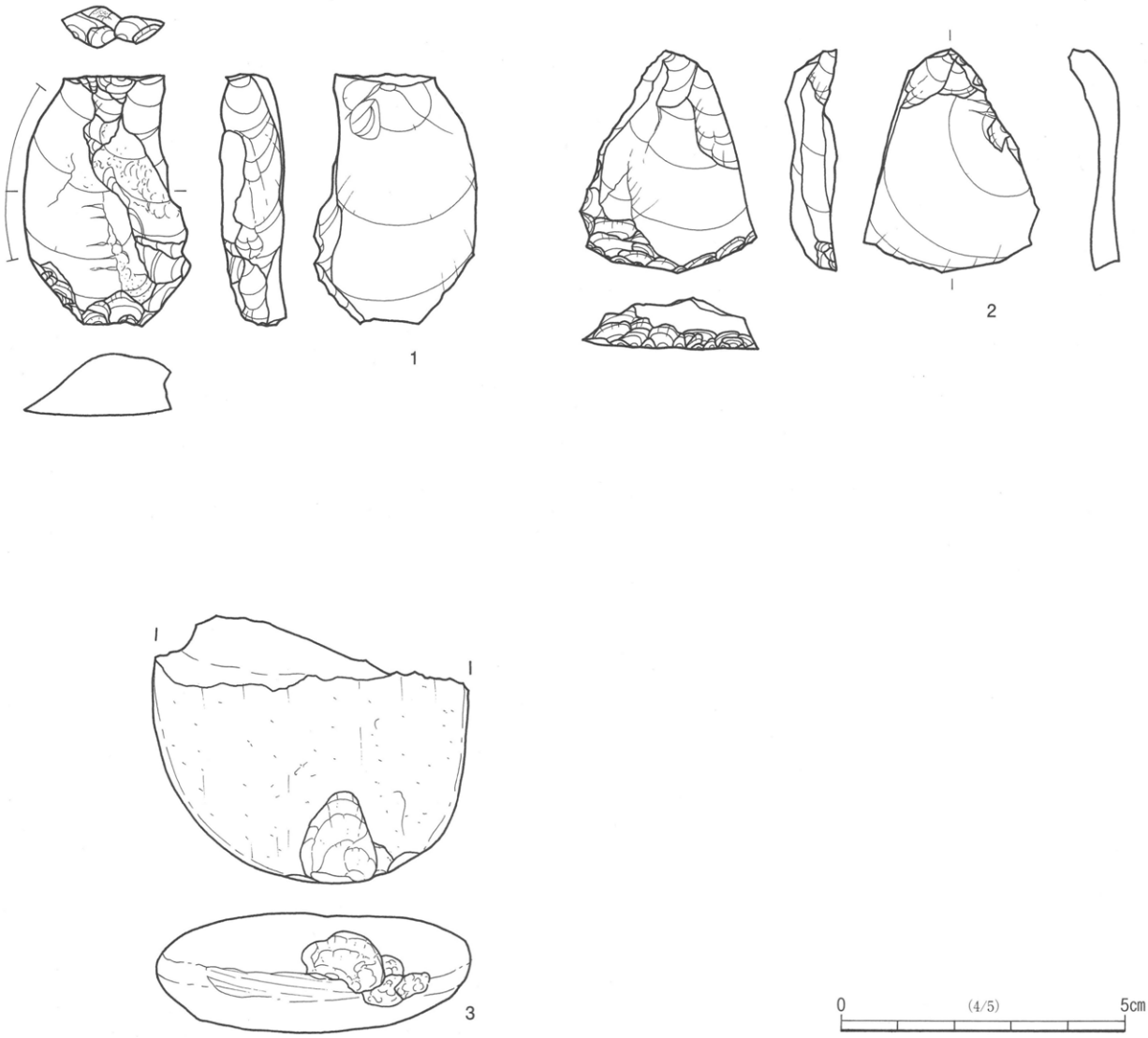
出土層位は１点だけⅥ層出土のものがあるが，Ⅳ・Ⅴ層を主体とする。出土レベルの最大値は25.435m，最小値は25.255m，平均値は25.375mである。

器　種

掻器２点・剥片３点・敲石１点の合計６点で構成される（第11表）。第58図１・２は玉髄１製の掻器である。１は縦長の剥片を用い，基部に急角度の調整が施される。左側縁には使用に伴うと思われる痕跡が認められる。２は比較的薄い剥片の基部に，急角度の調整が施される。調整は丁寧である。３は安山岩Ａ１製の敲石で，下端部に敲打痕と部分的に磨った痕跡が認められる。



第57図　石器集中９・分布状況



第58図　石器集中９

第11表　石器集中９　組成表

	掻器	敲石	剥片	合計	組成比
玉髄１	2 23.91		3 8.46	5 32.37	83.3% 32.5%
安山岩Ａ１		1 67.27		1 67.27	16.7% 67.5%
合計（点数） 合計（重量）	2 23.91	1 67.27	3 8.46	6 99.64	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	33.3% 24.0%	16.7% 67.5%	50.0% 8.5%	100.0% 100.0%	

石　材

玉髄５点・安山岩Ａ１点の構成である。玉髄１はいわゆるメノウで，透明度がやや鈍く，濁った白色～うすい褐色を呈する。白色の縞状の節理が目立つ。掻器２点と剥片３点がすべてこの石材による。安山岩Ａ１は敲石で単独母岩である。

４　石器集中10（D1区）（第59～62図，第12・13表，図版３・16）

分　布

遺跡南西端のD1区で検出した。15V17グリッド南側で２ｍ×２ｍほどの範囲に礫を中心とした遺物が集中するが，それ以外はD1区全体でやや拡散した状態で出土し，数点単位の集中はあるものの，顕著な集中域は認められないようである。

出土層位はⅢ層である。D1区では調査時にⅢ層は分層できず，また，遺物はⅢ層全体にやや拡散しており，Ⅲ層のどのあたりに集中するのかも不明である。出土レベルの最大値は25.915m，最小値は25.345ｍで，平均値は25.572mである。

15V17グリッドの内の集中域は前述のように礫を中心とし，接１・接２の礫同士の接合関係が認められる。礫のほとんどは赤化し，被熱した痕跡を留める。出土状況から見ると礫群と判断しても良さそうであるが，ほとんどの礫がごく小さな礫片で，大部分が10ｇ未満，最大でも28.5ｇである。この点では，一般的な礫群のイメージとはやや異なる。本来は礫群が存在したものの，再利用可能なサイズの礫は持ち去られ，小礫だけが残された可能性もあろう。大部分の礫が持ち去られた後の，礫群の残骸といった様相が想定できるかもしれない。

器　種

尖頭器１点・角錐状石器１点・石核１点・台石１点・二次加工のある剥片１点・使用痕のある剥片２点・剥片18点・砕片２点・礫20点の合計47点で構成される（第12表）。

第61図１は黒曜石２製の小型の尖頭器である。両側縁を中心に押厚剥離による丁寧な調整が施されている。２は角錐状石器とした。黒曜石１製で，基部から左側面を中心に急角度の調整が施されている。調整として剥離された部分以外は，燻されたようにくすんでおり，人為的に焼成を受けている可能性がある。

第61図３は二次加工のある剥片で，珪質頁岩１製である。厚みのある不整形の剥片の稜の部分に，一部調整を加えている。４・５は使用痕のある剥片である。両者とも玉髄１製の小型の剥片である。

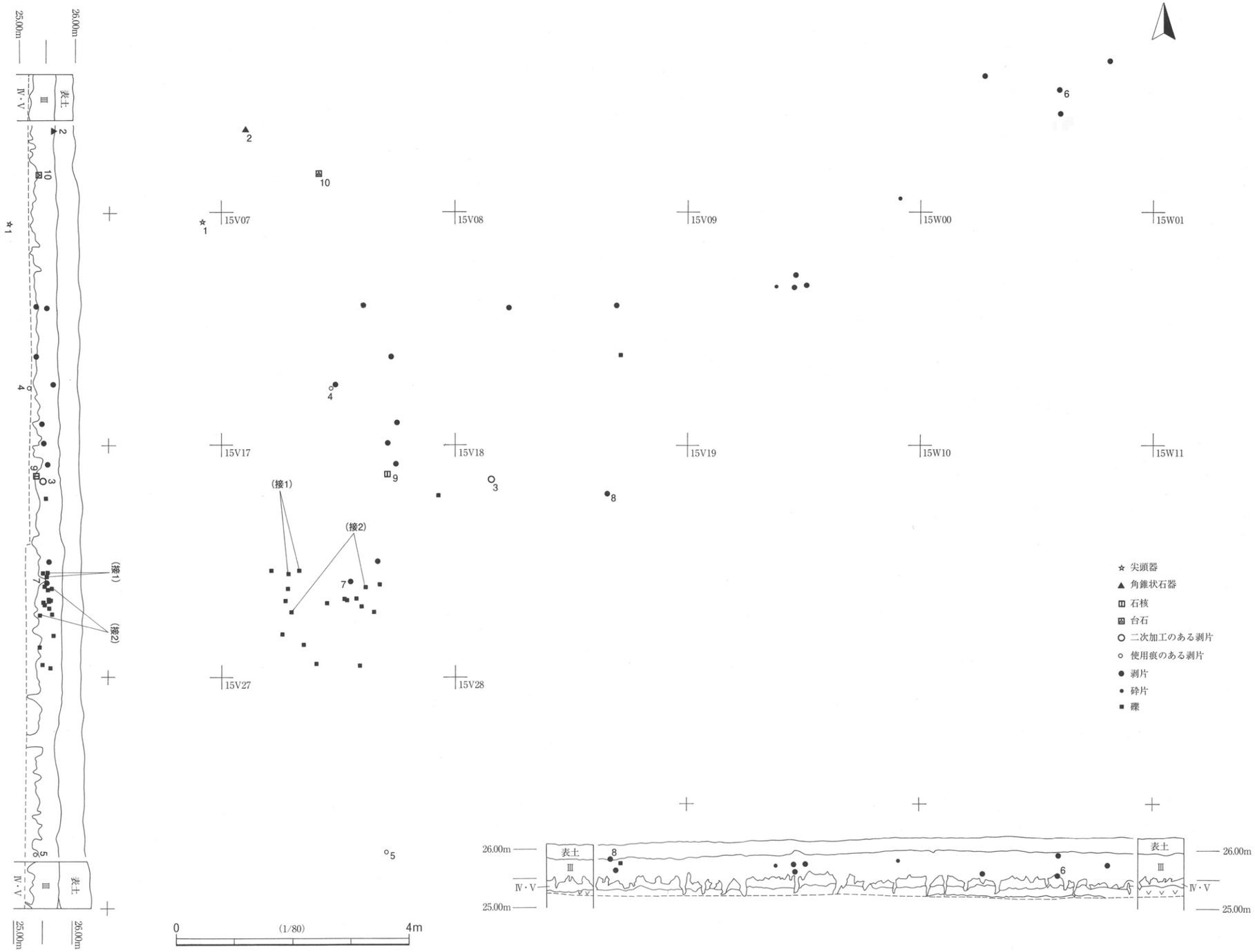
第61図６～第62図８は剥片である。第61図６・７は安山岩Ａ製のやや大型の剥片である。６は安山岩Ａ４とした母岩で，７は安山岩Ａ１とした母岩である。第62図８はホルンフェルス３製の縦長の剥片である。

第62図９は安山岩Ａ製の石核である。楕円形の小礫を用いている。安山岩Ａ３とした母岩である。10はホルンフェルス４製の台石である。中央が窪んだ扁平な円礫を用いており，表面の中央付近には，顕著な敲打痕を持つ。

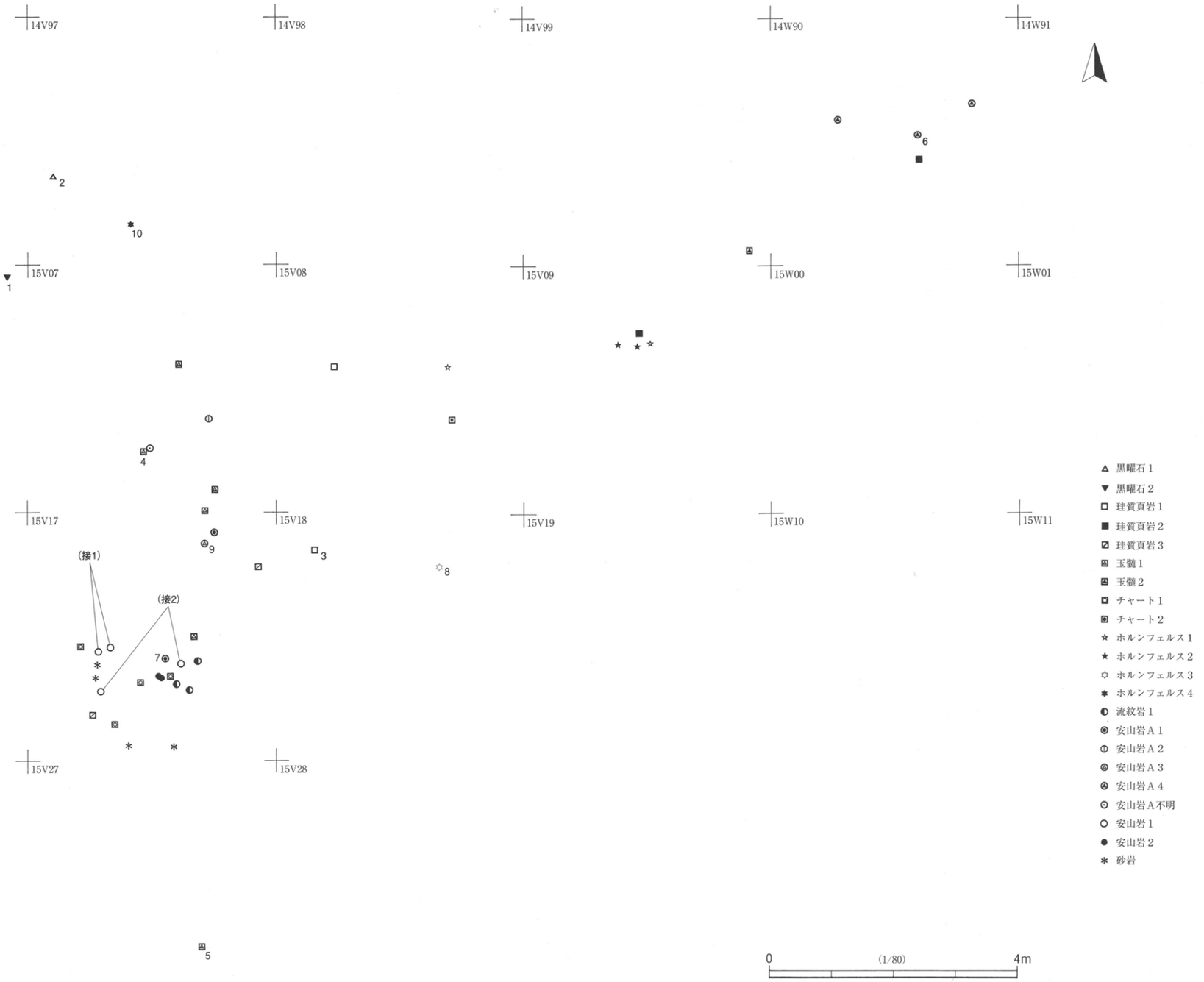
石　材

黒曜石２点・珪質頁岩６点・玉髄７点・チャート５点・ホルンフェルス６点・流紋岩３点・安山岩Ａ８点・安山岩６点・砂岩４点の構成である。

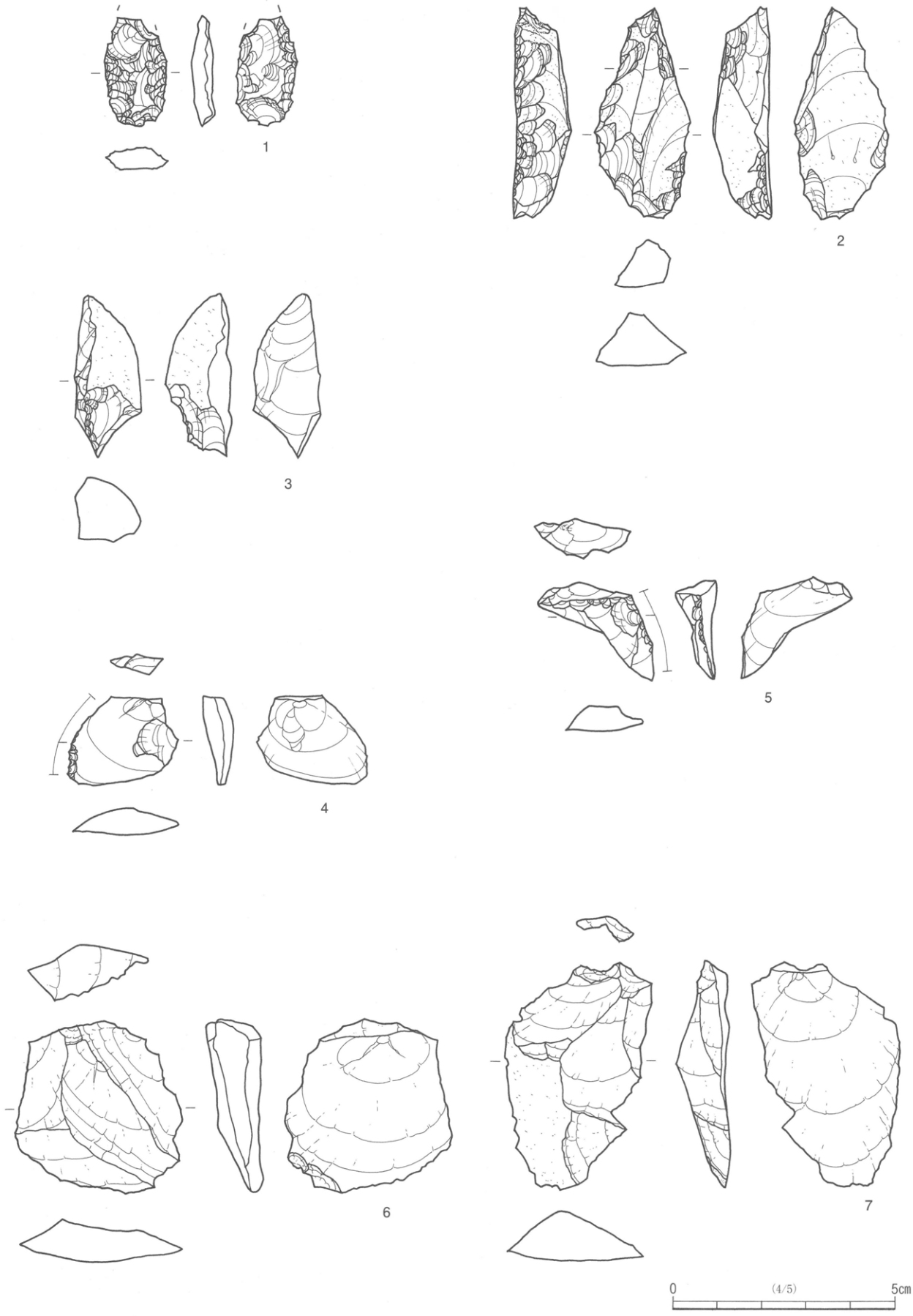
黒曜石は，器種として尖頭器と角錐状石器が相当し，それぞれ単独母岩である。黒曜石１は角錐状石器（第61図２）で，透明度は中間でやや灰色がかって見える。白色粒状の細かい夾雑物が目立つ。前述のよ



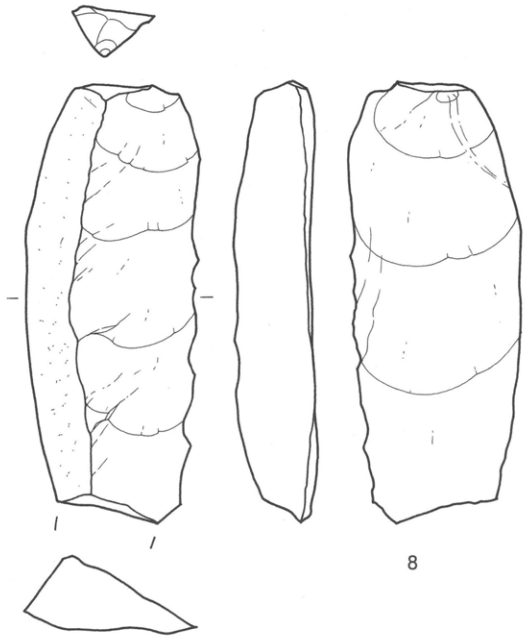
第59図　石器集中10・器種別分布状況

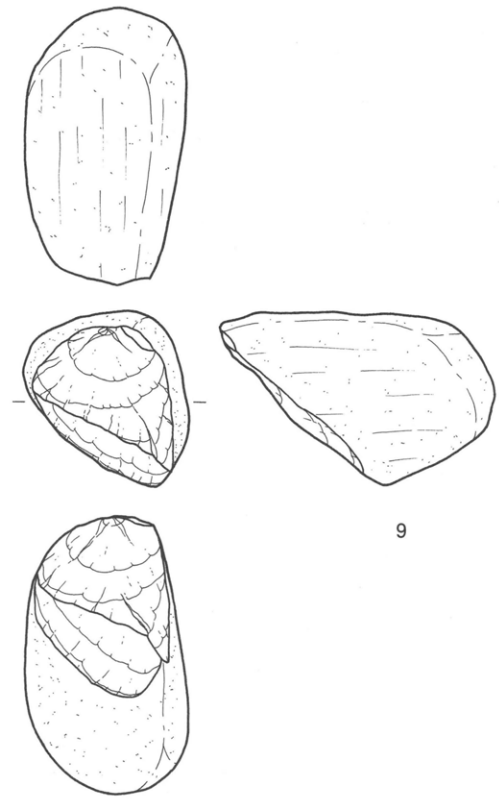


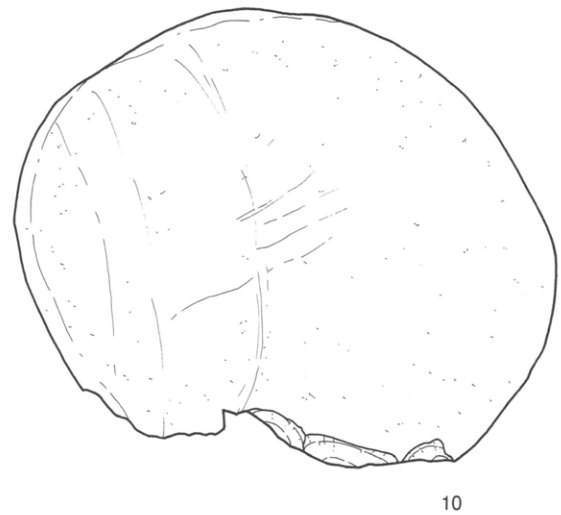
第60図　石器集中10・母岩別分布状況

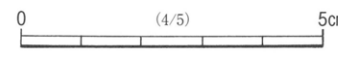


第61図　石器集中10（1）









第62図　石器集中10（２）

うに表面は灰色にくすみ，人為的に焼成を受けた可能性がある。黒曜石２は尖頭器（第61図１）で，透明度は鈍く夾雑物を多く含み，やや暗褐色に近い色調である。

珪質頁岩は３母岩に判別した。珪質頁岩１は第61図３の二次加工のある剥片が相当する。灰白～灰黄色を呈する比較的良質のものである。珪質頁岩２は，灰オリーブ色で青灰色の縞が特徴的である。ごく小さな剥片のみのため図化しなかった。珪質頁岩３は二次焼成を受けた礫片である。

玉髄は２母岩に判別した。玉髄１はいわゆるメノウで，透明度はやや鈍く橙色に近い色調である。第61図４・５を初め，やや多くの剥片が確認できた。玉髄２は砕片１点のみであるが，きわめて透明度の高い無色のものである。

ホルンフェルスは４母岩に判別した。ホルンフェルス１は緑灰色に近い色調で，やや風化が進んだものである。小型の剥片のみのため図化しなかった。ホルンフェルス２は暗緑灰色を呈するもので，小型の剥片と砕片のみのため図化しなかった。ホルンフェルス３は第62図８の剥片で，外面は風化が進みにぶい黄色を呈する。ホルンフェルス４は第62図10の台石で，全体に緑灰色気味で，青灰色の縞が目立つ。

安山岩Ａは４母岩に判別した。安山岩Ａ１は第61図７の剥片が相当し，風化が進み暗灰黄色～黄褐色を呈する。白色粒状物質がやや目立ち，剥離面でも滑らかさを欠く。安山岩Ａ２は，灰黄色で不純物が目立たない。単独母岩である。小型の剥片のため図化しなかった。安山岩Ａ３は第62図９の石核で，単独母岩である。小礫の形状を残す。灰オリーブ色～にぶい黄色を呈し，白色粒状物質はごく少ない。安山岩Ａ４は第61図６の剥片が相当する。灰色に近く，白色粒状物質を少量含む。剥離面の状態は安山岩Ａ１に比べ滑らかである。

チャート・流紋岩・安山岩・砂岩はすべて礫片である。チャートは２母岩であった。チャート１は被熱し，赤化した礫片である。チャート２は被熱の痕跡がない小礫片である。流紋岩１はおそらく被熱し，はじけた礫片である。安山岩１は接１・接２の接合資料を含む。被熱により若干赤化し，全体に風化が進んでいる。安山岩２はあまり風化の進んでいない小礫片である。

石材別の分布としては，15V17グリッド南側の集中域に，チャート２以外の礫片すべてが集中している。玉髄１は全体の西寄りに分布が偏り，15V07・17・27グリッドに帯状に分布する。珪質頁岩１・ホルンフェルス１・２は中央付近でまとまり，15V08・09・18グリッドに分布する。安山岩Ａ４は北西の14W90にまとまる。珪質頁岩２は中央付近の15V09グリッドと北西の14W90グリッドに分かれるように見える。

第12表　石器集中10　組成表

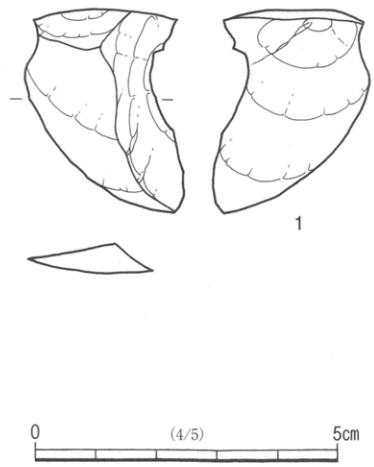
	尖頭器	角錐状石器	石核	台石	二次加工のある剥片	使用痕のある剥片	剥片	砕片	礫	合計	組成比
黒曜石1		1 11.23								1 11.23	2.1% 1.9%
黒曜石2	1 1.87									1 1.87	2.1% 0.3%
珪質頁岩1					1 6.26		1 1.17			2 7.43	4.3% 1.3%
珪質頁岩2							2 1.51			2 1.51	4.3% 0.3%
珪質頁岩3									2 18.81	2 18.81	4.3% 3.2%
玉髄1						2 4.78	4 2.29			6 7.07	12.8% 1.2%
玉髄2								1 0.02		1 0.02	2.1% 0.003%
チャート1									4 20.11	4 20.11	8.5% 3.4%
チャート2									1 2.41	1 2.41	2.1% 0.4%
ホルンフェルス1							2 4.36			2 4.36	4.3% 0.7%
ホルンフェルス2							1 0.22	1 0.03		2 0.25	4.3% 0.04%
ホルンフェルス3							1 32.4			1 32.4	2.1% 5.5%
ホルンフェルス4				1 299.53						1 299.53	2.1% 51.1%
流紋岩1									3 10.56	3 10.56	6.4% 1.8%
安山岩A1							2 19.63			2 19.63	4.3% 3.3%
安山岩A2							1 3.98			1 3.98	2.1% 0.7%
安山岩A3			1 41.29							1 41.29	2.1% 7.0%
安山岩A4							3 27.32			3 27.32	6.4% 4.7%
安山岩A不明							1 1.07			1 1.07	2.1% 0.2%
安山岩1									4 52.6	4 52.6	8.5% 9.0%
安山岩2									2 8.12	2 8.12	4.3% 1.4%
砂岩1									4 15.02	4 15.02	8.5% 2.6%
合計（点数） 合計（重量）	1 1.87	1 11.28	1 41.29	1 299.53	1 6.26	2 4.78	18 93.95	2 0.05	20 127.63	47 586.59	100.0% 100.0%
組成比（点数） 組成比（重量）	2.1% 0.3%	2.1% 1.9%	2.1% 7.0%	2.1% 51.1%	2.1% 1.1%	4.3% 0.8%	38.3% 16.0%	4.3% 0.01%	42.6% 21.8%	100.0% 100.0%	

第４節　単独出土の石器（第63図，第13表，図版16）

集中地点以外で単独出土したものとして，剥片２点・礫１点がある。

第63図１は平成16年度調査時に検出したもので，出土位置の詳細は不明である。上層調査中に出土したようである。オリーブ灰色の安山岩Ｂ製の剥片で，風化が進んでいる。

その他は，平成10年度の確認調査中に出土したものである。剥片１点が11Z49・59グリッドで出土した。Ⅸ層からⅦ層中の出土である。自然面付近が暗赤褐色で灰色を呈する珪質頁岩製である。小型の剥片のため図化しなかった。また，礫１点が11AA68・78グリッドで出土した。Ⅸ層からⅦ層中の出土で，石材は砂岩である。



第63図　単独出土石器

第13表　旧石器時代石器属性表

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
1		C2区			12AB00	2		剥片	黒曜石2		12.0	19.2	16.9	2.73	—	位置不明
1		C2区			12AB05	100		剥片	黒曜石1		15.2	16.3	7.1	1.69	23.556	
1		C2区	第9図	1	12AB06	100		R剥片	玉髄1		18.0	13.1	6.5	1.38	23.814	
1		C2区			12AB16	100		礫	粘板岩1		51.9	31.2	20.9	27.88	23.357	
1		C2区			12AB17	100		礫	粘板岩1		28.6	16.2	10.1	6.27	23.205	
1		C2区	第9図	2	12AB17	101		U剥片	黒曜石1		33.2	18.8	14.5	7.44	23.035	
1		C2区			12AB17	(B)4トレ1	a	礫	安山岩1		44.3	41.1	24.7	71.75	—	H10確認・被熱
1		C2区	第9図	3	12AB17	(B)4トレ1	b	剥片	チャート1		32.9	45.3	22.8	30.47	—	H10確認
1		C2区			12AB17	(B)4トレ1	c	剥片	黒曜石2		11.7	15.0	2.5	0.42	—	H10確認
1		C2区			12AB26	103		礫	砂岩1		43.1	36.5	23.1	39.13	23.325	
2	b	D2区	第16図	19	14W38	11		R剥片	珪質頁岩1		16.2	20.8	4.2	0.96	25.016	
2	b	D2区			14W38	12		砕片	珪質頁岩不明		6.7	5.4	0.9	0.03	24.999	
2	b	D2区	第16図	15	14W39	11		削器	珪質頁岩3		31.7	20.8	6.2	3.14	24.775	
2	c	D2区	第21図	34	14W45	11		R剥片	珪質頁岩2		32.1	44.9	16.8	20.10	24.751	
2	c	D2区			14W45	12		剥片	珪質頁岩2		18.0	13.5	3.1	0.64	24.736	
2	c	D2区	第21図	33	14W45	13		ナイフ形石器	珪質頁岩1		69.5	22.0	10.0	24.08	24.786	
2	c	D2区	第21図	35	14W45	14		U剥片	珪質頁岩1		45.2	47.9	21.6	7.17	24.762	
2	a	D2区			14W47	11		砕片	安山岩A1		5.1	4.8	2.0	0.05	24.688	
2	b	D2区	第19図	28	14W48	11		石核	珪質頁岩6		58.8	67.3	49.9	203.14	25.4	
2	b	D2区	第18図	27	14W48	12		石核	珪質頁岩7		34.4	42.2	34.1	45.80	24.775	
2	b	D2区	第17図	23	14W48	13		剥片	珪質頁岩2		35.4	27.7	12.5	7.16	25.026	
2	b	D2区	第16図	17	14W48	14		R剥片	珪質頁岩2		30.5	38.8	10.7	10.89	24.784	
2	b	D2区	第17図	24	14W48	15		剥片	珪質頁岩5		34.6	25.6	12.1	8.89	24.883	
2	b	D2区			14W48	16		剥片	珪質頁岩2		17.5	29.1	5.0	1.24	24.948	
2	b	D2区			14W48	17		砕片	珪質頁岩不明		9.2	7.1	2.7	0.13	24.841	
2	b	D2区			14W48	18		剥片	珪質頁岩2		13.9	24.4	5.3	1.17	24.589	
2	b	D2区			14W49	11		剥片	珪質頁岩1		13.1	12.7	4.3	0.52	24.895	
2	b	D2区	第20図	29	14W49	12		U剥片	珪質頁岩1	接4	66.6	21.0	13.2	8.61	24.896	
2	b	D2区	第20図	31	14W49	13		剥片	珪質頁岩1	接5	26.5	16.0	8.1	1.95	24.969	
2	b	D2区			14W49	14		剥片	珪質頁岩2		11.5	13.0	2.7	0.30	25.045	
2	b	D2区	第20図	32	14W49	15		剥片	珪質頁岩1	接5	23.0	17.2	9.0	3.64	25.068	
2	b	D2区			14W49	16		剥片	珪質頁岩4		9.1	12.5	3.3	0.31	24.886	
2	b	D2区	第16図	16	14W49	17		削器	珪質頁岩3		31.3	22.1	5.6	2.69	24.919	
2	b	D2区			14W49	18		剥片	珪質頁岩1		10.0	15.1	4.5	0.43	24.97	
2	b	D2区	第17図	25	14W49	19		剥片	安山岩A1		43.6	22.0	9.3	6.47	24.914	
2	b	D2区			14W49	20		剥片	珪質頁岩1		13.4	8.9	5.7	0.50	24.713	
2	b	D2区			14W49	21		剥片	珪質頁岩2		12.8	26.4	6.4	1.41	24.969	
2	b	D2区	第16図	21	14W49	22		U剥片	珪質頁岩2		45.8	73.4	11.7	20.97	24.765	
2	b	D2区			14W49	23		剥片	珪質頁岩3		14.5	7.5	4.6	0.41	25.075	
2	b	D2区	第16図	18	14W49	24		R剥片	珪質頁岩1		31.8	10.4	5.2	1.43	24.943	
2	b	D2区	第17図	22	14W49	25		U剥片	珪質頁岩1		47.3	47.0	11.1	15.22	24.828	
2	b	D2区	第18図	26	14W49	26		石核	珪質頁岩2		47.3	47.0	11.1	19.01	24.832	
2	b	D2区			14W49	27		剥片	珪質頁岩2		38.7	32.4	14.9	0.56	24.58	
2	b	D2区			14W49	28		剥片	珪質頁岩2		10.3	20.4	4.1	0.63	24.88	
2	b	D2区			14W49	29		剥片	珪質頁岩2		13.3	10.1	2.8	0.33	24.749	
2	b	D2区			14W49	30		剥片	珪質頁岩3		10.7	16.4	3.4	0.57	24.719	
2	b	D2区	第16図	14	14W49	31		ナイフ形石器	頁岩1		36.1	11.2	6.8	2.11	24.824	
2	b	D2区	第20図	30	14W49	32		U剥片	珪質頁岩1	接4	64.0	19.0	14.9	12.40	24.702	
2	b	D2区			14W49	33		剥片	珪質頁岩3		20.9	7.0	3.8	0.25	24.7	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
2	b	D2区			14W49	34		砕片	珪質頁岩不明		7.3	9.9	1.1	0.08	24.755	
2	b	D2区			14W49	35		剥片	珪質頁岩1		27.8	11.8	7.5	1.55	24.839	
2	a	D2区	第14図	12	14W57	11		剥片	安山岩A1	接2・3	55.8	22.9	16.0	15.80	24.688	
2	a	D2区			14W57	12		剥片	安山岩A1		17.1	8.2	2.4	0.36	25.013	
2	a	D2区	第14図	10b	14W57	13		剥片	安山岩A1	接2・3	19.0	13.6	5.4	0.76	24.977	
2	a	D2区			14W57	14		剥片	安山岩A1		34.1	16.7	7.6	3.30	24.8	
2	a	D2区	第14図	10a	14W57	15		剥片	安山岩A1	接2・3	16.8	14.7	7.2	2.15	24.815	
2	a	D2区	第12図	3	14W57	16		剥片	安山岩A1		41.9	34.3	18.3	21.27	25.108	
2	a	D2区	第12図	2	14W57	17		剥片	チャート1		24.6	39.3	6.4	3.89	25.1	
2	a	D2区			14W57	18		剥片	安山岩A1		30.6	12.2	6.5	2.50	24.64	
2	a	D2区			14W57	19		剥片	安山岩A1		16.8	20.6	3.2	1.14	25.086	
2	a	D2区			14W57	20		剥片	安山岩A1		26.5	21.5	8.0	3.29	24.825	
2	a	D2区			14W57	21		剥片	安山岩A1		17.3	19.5	6.6	2.39	24.951	
2	a	D2区			14W57	22		剥片	安山岩A1		18.2	15.3	8.4	2.39	25.003	
2	a	D2区			14W57	23		剥片	安山岩A1		27.5	13.2	4.2	1.28	24.94	
2	a	D2区	第14図	9	14W57	24		削器	安山岩A1	接2・3	46.8	28.0	10.1	12.37	24.773	
2	a	D2区	第14図	13	14W57	25		剥片	安山岩A1	接2・3	38.4	18.0	8.1	4.40	24.835	
2	a	D2区	第12図	5	14W57	26		剥片	安山岩A1		41.4	51.4	14.6	21.80	25.02	
2	a	D2区			14W57	27		砕片	安山岩A1		11.1	9.1	4.6	0.43	24.713	
2	a	D2区			14W57	28		剥片	安山岩A1		14.3	15.3	8.8	1.42	24.802	
2	a	D2区	第13図	7	14W57	29		剥片	安山岩A1	接1	27.7	16.8	10.9	5.48	24.799	
2	a	D2区	第13図	6	14W57	30		剥片	安山岩A1	接1	26.7	29.7	6.3	4.09	24.875	
2	a	D2区			14W57	31		剥片	安山岩A1		29.3	25.7	11.0	6.32	24.978	
2	a	D2区			14W57	32		剥片	安山岩A1		31.9	16.8	7.4	3.85	24.658	位置不明
2	a	D2区	第12図	4	14W57	33		剥片	安山岩A1		29.1	45.8	9.4	7.67	24.829	位置不明
2	a	D2区			14W57	34		剥片	安山岩A1		40.4	12.7	12.6	4.78	24.837	
2	a	D2区	第12図	1	14W57	35		ナイフ形石器	珪質頁岩1		34.1	13.5	4.9	2.26	24.775	
2	a	D2区			14W57	36		剥片	安山岩A1		13.6	10.4	3.0	0.42	24.798	
2	a	D2区			14W57	37		剥片	安山岩A1		17.1	14.1	2.5	0.55	24.826	
2	a	D2区			14W57	38		剥片	安山岩A1		25.5	22.8	8.8	3.23	24.916	
2	a	D2区			14W57	39		剥片	安山岩A1		9.6	14.4	3.3	0.41	24.915	
2	a	D2区	第13図	8a	14W57	40	a	砕片	安山岩A1	接1	5.4	4.2	3.3	0.07	24.7	
2	a	D2区			14W57	40	b	砕片	安山岩A1		3.1	5.3	1.6	0.01	24.7	
2	a	D2区	第14図	11	14W57	41		剥片	安山岩A1	接2・3	41.5	14.6	9.0	3.63	24.817	
2	a	D2区			14W57	42		剥片	安山岩A1		14.7	21.5	6.5	1.46	24.786	
2	a	D2区			14W57	43		剥片	安山岩A1		9.6	13.5	2.3	0.37	24.777	
2	a	D2区			14W57	44		砕片	安山岩A1		9.8	8.8	4.5	0.24	24.673	
2	a	D2区	第13図	8b	14W57	45		剥片	安山岩A1	接1	35.7	17.9	10.8	3.63	24.863	
2	a	D2区			14W57	46		剥片	安山岩A1		18.1	9.3	5.3	0.60	24.835	
2	a	D2区			14W57	47		剥片	安山岩A1		29.0	18.4	6.6	2.96	24.836	
2	a	D2区			14W57	48		砕片	安山岩A1		9.5	9.7	1.9	0.16	24.743	
2	b	D2区	第16図	20	14X30	11		U剥片	珪質頁岩4		35.1	21.3	8.3	3.82	24.895	
3		D3区	第23図	1	15W36	1		剥片	珪質頁岩1		37.6	27.4	9.5	8.92	—	H9確認
3		D3区			15W46	1		剥片	安山岩A1		13.7	22.8	4.0	0.86	24.899	
3		D3区			15W47	1		剥片	珪質頁岩1		13.4	26.4	4.6	1.28	24.937	
3		D3区	第23図	2	15W47	2		剥片	安山岩A1		52.1	46.3	19.6	30.99	24.958	
4	東	D4区	第26図	3	13X33	1		R剥片	珪質頁岩3		13.6	40.0	12.9	4.28	—	H9確認
4	東	D4区			13X33	11		剥片	安山岩A2		15.9	23.8	2.8	0.78	23.88	
4	東	D4区	第28図	10	13X33	12		剥片	珪質頁岩1	接2	25.9	19.8	6.7	2.21	23.87	
4	東	D4区			13X34	11		礫	玉髄2		11.5	8.8	4.2	0.60	23.589	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
4	東	D4区			13X34	12		礫	流紋岩3		8.7	11.2	5.6	0.51	23.937	
4	東	D4区	第26図	7	13X34	13		U剥片	珪質頁岩4		32.8	23.4	9.3	3.68	23.488	
4	東	D4区			13X34	14		剥片	珪質頁岩3		18.1	24.6	2.3	0.77	23.625	
4	西	D4区	第27図	9b	13X40	11		剥片	安山岩A1	接1	30.0	28.9	11.0	6.29	24.122	
4	西	D4区			13X41	11		剥片	珪質頁岩不明		11.1	6.4	1.1	0.06	24.2	
4	西	D4区	第26図	4	13X41	12		U剥片	珪質頁岩6		21.7	20.2	5.7	1.94	23.844	
4	東	D4区	第28図	11	13X42	1		U剥片	珪質頁岩1	接2	39.2	23.0	9.7	6.17	—	H9確認
4	東	D4区			13X43	11		剥片	珪質頁岩2		17.1	13.6	6.1	1.31	23.96	
4	東	D4区	第26図	1	13X43	12		削器	ホルンフェルス1		25.2	17.1	6.8	2.38	23.76	
4	東	D4区	第27図	9a	13X43	13		剥片	安山岩A1	接1	31.6	29.5	12.8	7.69	23.916	
4	東	D4区			13X43	14		剥片	ホルンフェルス1		11.0	10.5	2.6	0.24	23.712	
4	東	D4区			13X43	15		—	—		—	—	—	—	23.613	遺物なし
4	東	D4区			13X43	16		剥片	珪質頁岩2		17.2	7.2	5.0	0.38	24.153	
4	東	D4区			13X43	17		剥片	珪質頁岩2		10.8	16.3	4.0	0.74	23.699	
4	東	D4区			13X43	18		剥片	流紋岩1		16.9	39.6	25.9	14.13	23.821	
4	東	D4区			13X43	19		剥片	珪質頁岩2		23.4	23.0	9.8	3.76	23.844	
4	東	D4区			13X43	20		剥片	珪質頁岩2		19.0	22.9	10.4	3.81	23.84	
4	東	D4区			13X43	21		剥片	流紋岩1		14.6	13.9	3.5	0.54	24.402	
4	東	D4区			13X43	22		砕片	流紋岩1		7.7	7.7	0.8	0.03	23.71	
4	東	D4区	第28図	13	13X44	11		石核	珪質頁岩1	接2	36.4	39.1	32.2	46.57	23.825	
4	東	D4区			13X44	12		剥片	安山岩A1		26.3	10.0	7.4	2.12	23.543	
4	東	D4区	第26図	2	13X44	13		R剥片	珪質頁岩2		28.0	20.5	4.9	2.28	23.919	
4	東	D4区			13X44	14		剥片	珪質頁岩2		15.4	12.9	4.8	0.73	24.118	
4	東	D4区			13X44	15		剥片	流紋岩2		25.5	30.9	3.7	2.90	24.037	
4	東	D4区			13X44	16		剥片	安山岩A1		18.2	11.5	8.6	1.82	23.734	
4	東	D4区			13X44	17		剥片	安山岩A1		12.1	20.4	3.5	0.76	24.145	
4	東	D4区			13X44	18		剥片	安山岩A1		43.1	29.7	9.5	9.45	23.896	
4	東	D4区	第28図	12	13X44	19		剥片	珪質頁岩1	接2	42.8	22.9	11.0	7.90	23.907	
4	東	D4区			13X44	20		剥片	安山岩A1		10.9	12.9	3.3	0.38	24.078	
4	東	D4区			13X44	21		剥片	安山岩A不明		8.4	10.1	3.5	0.27	23.728	
4	東	D4区	第26図	6	13X44	22		U剥片	玉髄1		49.4	30.1	12.3	16.26	23.725	
4	東	D4区			13X44	23		剥片	安山岩A1		16.3	20.7	5.7	1.72	23.848	
4	東	D4区			13X44	24		礫	流紋岩4		6.4	6.1	3.4	0.14	23.93	
4	東	D4区	第26図	8	13X50	1		剥片	珪質頁岩5		40.2	34.6	9.3	11.22	—	H9確認
4	西	D4区			13X52	11		砕片	安山岩A不明		7.9	7.2	1.9	0.13	23.833	
4	西	D4区	第26図	5	13X52	12		U剥片	流紋岩1		44.1	27.3	12.8	8.98	24.018	
4	西	D4区			13X52	13		剥片	安山岩A不明		11.1	13.6	2.6	0.17	23.697	
4	東	D4区			13X54	11		礫	粘板岩		18.4	13.5	5.3	1.37	23.533	
5	a	E1区	第31図	1	15W68	1		台形様石器	ホルンフェルス1		23.5	22.1	7.4	2.43	24.99	
5	a	E1区	第31図	3	15W68	2		剥片	珪質頁岩6		37.3	27.0	11.5	8.90	24.916	
5	a	E1区			15W68	3		剥片	安山岩A不明		14.4	2.5	2.3	0.07	24.96	
5	a	E1区	第37図	24	15W68	4		剥片	珪質頁岩2	接2	29.9	16.0	5.2	1.86	25	
5	a	E1区			15W68	5		剥片	珪質頁岩5		11.2	13.3	2.3	0.37	25.025	
5	a	E1区			15W68	6		剥片	珪質頁岩7		14.3	24.1	6.8	1.92	25.218	
5	a	E1区	第33図	11	15W68	7		U剥片	珪質頁岩1	接1	41.8	24.2	10.0	5.18	24.875	
5	a	E1区	第33図	6	15W68	8		U剥片	珪質頁岩1	接1	44.3	52.6	14.3	18.94	24.89	
5	a	E1区	第34図	13	15W68	9		剥片	珪質頁岩1	接1	46.7	41.4	18.5	19.55	24.845	
5	a	E1区	第31図	5	15W68	10		石核	珪質頁岩4		34.4	43.9	34.0	51.87	24.818	
5	a	E1区			15W68	11		礫	チャート1		5.9	6.0	1.9	0.09	25.055	
5	a	E1区	第33図	8	15W68	12		U剥片	珪質頁岩1	接1	30.6	37.9	9.5	6.80	24.896	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
5	a	E1区	第33図	9	15W68	13		剥片	珪質頁岩1	接1	50.1	47.3	24.5	41.04	24.875	
5	a	E1区	第33図	10	15W68	14		剥片	珪質頁岩1	接1	25.4	37.3	10.6	4.08	24.85	
5	a	E1区	第34図	12	15W68	15		U剥片	珪質頁岩1	接1	54.7	63.0	23.6	67.48	24.865	
5	a	E1区			15W68	16		剥片	安山岩A1		23.1	19.1	6.2	2.97	24.785	
5	a	E1区			15W68	17		剥片	安山岩A1		35.3	22.7	9.3	5.46	24.737	
5	a	E1区			15W68	18		剥片	珪質頁岩6		21.1	17.3	12.9	4.16	24.88	
5	c	E1区	第43図	39	15W69	1		石核	安山岩A1		17.2	28.0	31.9	17.36	24.874	
5	c	E1区			15W69	2		剥片	安山岩A4		20.6	29.5	10.6	5.43	24.8	
5	a	E1区	第31図	4	15W78	1		剥片	珪質頁岩11		30.7	32.0	11.0	10.75	24.924	
5	c	E1区	第45図	42	15W78	2		剥片	珪質頁岩3	接3	47.6	44.6	17.1	33.07	24.877	
5	c	E1区	第43図	38b	15W78	3		剥片	安山岩A1	接5	32.0	24.2	10.4	7.51	24.707	
5	a	E1区	第31図	2	15W78	4		U剥片	珪質頁岩4		19.6	25.9	8.5	2.92	24.997	
5	a	E1区			15W78	5		剥片	安山岩A1		43.6	26.0	9.4	10.63	24.927	
5	c	E1区			15W79	2		剥片	安山岩A1		25.9	20.9	10.4	3.24	24.734	
5	c	E1区	第42図	36	15W79	3		剥片	珪質頁岩3		63.9	50.8	23.5	80.43	24.784	
5	c	E1区	第45図	45	15W79	4		剥片	珪質頁岩3	接3	19.8	33.0	11.6	4.57	24.871	
5	c	E1区	第43図	40	15W79	5		石核	安山岩A4		23.5	56.6	43.2	56.56	24.869	
5	c	E1区			15W79	6		剥片	安山岩A1		31.3	30.6	8.8	8.26	24.853	
5	c	E1区			15W79	7		剥片	安山岩A1		27.2	26.2	5.1	3.63	24.953	
5	c	E1区			15W79	8		剥片	珪質頁岩3		26.8	14.2	8.0	2.38	24.959	
5	c	E1区	第45図	41	15W79	9		剥片	珪質頁岩3	接3	20.3	26.2	10.0	4.68	24.899	
5	c	E1区	第45図	46	15W79	10		剥片	珪質頁岩3	接3	35.0	27.0	11.5	9.02	24.742	
5	c	E1区	第43図	38a	15W79	11		剥片	安山岩A1	接5	27.2	19.9	8.4	4.85	24.716	
5	c	E1区			15W79	12		剥片	珪質頁岩3		13.0	10.9	2.3	0.26	24.817	
5	c	E1区			15W79	13		剥片	安山岩A不明		12.8	14.8	7.3	0.67	24.68	
5	b	E1区			15W86	2		剥片	安山岩A2		30.4	28.9	6.4	4.84	24.74	
5	b	E1区	第37図	22a	15W86	3		剥片	安山岩A2	接7	37.4	16.5	8.3	4.30	24.778	
5	b	E1区	第39図	29	15W87	1		剥片	安山岩A3	接9	40.4	41.5	9.5	12.15	24.835	
5	b	E1区	第37図	25	15W87	2		石核	珪質頁岩2	接2	31.1	44.0	16.5	19.40	24.873	
5	b	E1区	第36図	17	15W87	3		剥片	珪質頁岩7		28.9	38.1	9.9	10.07	25.092	
5	b	E1区			15W87	4		剥片	安山岩A2		30.9	17.7	8.9	4.24	24.826	
5	b	E1区	第37図	22b	15W87	5		剥片	安山岩A2	接7	31.1	40.8	13.8	14.28	24.846	
5	b	E1区			15W87	6		剥片	安山岩A2		44.6	34.1	11.4	17.86	24.808	
5	b	E1区	第39図	30	15W87	7		剥片	安山岩A3	接9	64.1	54.6	21.0	54.42	24.811	
5	b	E1区	第36図	20	15W87	8		剥片	安山岩A3		54.7	36.1	15.8	26.01	24.8	
5	b	E1区	第40図	31	15W87	9		剥片	安山岩A3	接10	30.9	15.6	16.0	6.57	24.809	
5	b	E1区	第40図	32	15W87	10		石核	安山岩A3	接10	26.2	30.6	23.2	19.91	24.781	
5	b	E1区			15W87	11		剥片	珪質頁岩7		17.0	31.8	9.9	5.31	24.786	
5	b	E1区	第37図	23a	15W87	12		石核	安山岩A2	接6	51.6	48.2	24.3	66.14	24.866	
5	b	E1区			15W87	13		剥片	安山岩A不明		20.8	11.6	4.2	0.59	24.795	
5	b	E1区			15W87	14		剥片	安山岩A不明		14.2	8.7	7.4	0.77	24.706	
5	b	E1区	第38図	28	15W87	15		石核	安山岩A3	接8	59.1	40.7	22.7	56.07	24.847	
5	b	E1区			15W87	16		剥片	安山岩A2		34.7	29.5	10.7	8.73	24.812	
5	b	E1区	第38図	26	15W87	17		剥片	安山岩A3	接8	54.4	28.9	16.5	18.87	24.889	
5	b	E1区			15W87	18		剥片	安山岩A2		21.9	21.0	8.6	2.70	25.365	
5	b	E1区			15W87	19		剥片	安山岩A2		29.1	29.4	12.7	10.46	24.962	
5	b	E1区			15W87	20		剥片	安山岩A3		20.0	27.6	13.1	6.42	25.202	
5	b	E1区			15W87	21		剥片	安山岩A3		21.1	30.6	9.7	5.15	25.112	
5	b	E1区			15W87	22		剥片	安山岩A2		45.1	46.2	14.9	18.60	24.891	
5	b	E1区			15W87	23		剥片	安山岩A不明		20.7	6.8	6.4	0.66	25.098	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
5	b	E1区			15W87	24		剥片	安山岩A2		42.9	23.1	8.6	7.46	24.963	
5	b	E1区	第38図	27	15W87	25		剥片	安山岩A3	接8	41.4	35.8	20.1	30.30	24.867	
5	b	E1区			15W87	26		剥片	流紋岩1		16.1	19.0	5.2	1.08	24.871	
5	b	E1区	第33図	7	15W87	27		U剥片	珪質頁岩1	接1	34.4	47.3	11.9	10.49	24.936	
5	b	E1区	第37図	23b	15W87	28		石核	安山岩A2	接6	48.9	33.9	21.1	25.85	24.834	
5	b	E1区	第36図	19	15W87	29		剥片	安山岩A2		64.9	44.9	19.1	56.56	24.91	
5	c	E1区	第45図	44	15W89	1		剥片	珪質頁岩3	接3	22.4	26.7	4.9	2.99	24.588	
5	b	E1区	第37図	21	15W95	1		剥片	安山岩A5		22.3	51.4	17.0	15.94	24.908	
5	b	E1区			15W97	2		剥片	安山岩A3		23.5	39.4	6.5	3.37	24.716	
5	b	E1区	第36図	15	15W97	3		U剥片	珪質頁岩9		37.8	22.2	11.9	7.50	24.735	
5	b	E1区			15W97	4		剥片	安山岩A6		23.6	31.6	6.4	4.11	25.104	
5	b	E1区			15W97	5		剥片	安山岩A不明		15.8	14.7	5.0	0.73	24.74	
5	b	E1区	第36図	18	15W97	6		剥片	珪質頁岩10		25.4	41.0	11.0	9.40	24.944	
5	b	E1区			15W98	2		剥片	安山岩A8		32.6	36.1	7.3	7.72	24.595	
5	b	E1区	第36図	14	15W98	3		削器	安山岩A7		56.9	51.7	21.5	51.07	24.576	
5	b	E1区	第36図	16	15W98	4		U剥片	珪質頁岩8		52.0	43.6	14.1	24.66	24.65	
5	c	E1区	第45図	43	15W99	1		U剥片	珪質頁岩3	接3	29.4	44.0	9.9	10.68	24.336	
5	c	E1区	第42図	33	15X70	1		R剥片	珪質頁岩5		31.1	32.7	10.0	8.52	24.777	
5	c	E1区	第42図	35	15X70	2		U剥片	黒色頁岩1		67.5	58.0	18.1	63.28	24.799	
5	c	E1区	第42図	34	15X70	3		U剥片	安山岩A1		60.5	30.0	16.9	23.78	24.8	
5	c	E1区	第43図	37b	15X70	4		剥片	安山岩A1	接4	48.7	44.9	18.1	34.51	24.84	
5	c	E1区	第43図	37a	15X70	5		剥片	安山岩A1	接4	12.1	15.6	3.6	0.39	24.873	
6		E2区			14Y84	1		剥片	安山岩A1		39.6	33.6	12.8	15.47	24.55	
6		E2区			14Y95	1		剥片	安山岩A1		14.2	11.8	6.4	0.90	24.695	
6		E2区			14Y95	2		剥片	安山岩A1		16.2	10.8	9.5	1.23	24.358	
6		E2区			14Y95	3		剥片	安山岩A1		16.0	20.7	4.2	1.40	24.367	
6		E2区	第49図	9	14Y95	4		R剥片	安山岩A1	接4	20.8	31.2	6.3	3.52	24.315	
6		E2区			14Y95	5		剥片	安山岩A不明		6.3	12.6	2.4	0.23	24.53	
6		E2区	第50図	12	14Y95	6		剥片	安山岩A1	接3	17.8	21.3	8.4	3.27	24.637	
6		E2区	第48図	1	14Y95	7		削器	安山岩A1		23.9	18.0	8.0	2.06	24.508	
6		E2区			14Y95	8		剥片	安山岩A1		17.8	7.9	5.4	0.55	24.4	
6		E2区	第50図	13	14Y95	9		剥片	安山岩A1	接3	21.6	19.4	4.0	1.36	24.565	
6		E2区	第49図	10	14Y95	10		R剥片	安山岩A1	接4	25.6	42.4	7.6	7.31	24.501	
6		E2区	第50図	11	14Y95	11		剥片	安山岩A1	接3	14.5	13.2	5.6	1.06	24.459	
6		E2区	第49図	7	14Y95	12		削器	安山岩A1	接2	41.1	38.4	12.2	12.64	24.417	
6		E2区			14Y95	13		礫	流紋岩		10.4	10.8	3.6	0.48	24.246	
6		E2区			14Y95	14		砕片	安山岩A不明		8.6	5.7	2.6	0.23	24.38	
6		E2区			14Y95	15		砕片	安山岩A不明		5.9	6.7	1.8	0.06	24.449	
6		E2区			14Y95	16		剥片	安山岩A1		26.8	24.1	5.1	3.04	24.366	
6		E2区			14Y95	17		剥片	安山岩A1		26.9	23.6	9.2	3.41	24.278	
6		E2区			14Y96	1		剥片	チャート1		9.0	16.3	2.6	0.29	24.207	
6		E2区	第48図	3	15Y03	1		剥片	黒曜石1		25.0	33.9	11.1	7.11	24.702	
6		E2区			15Y04	1		剥片	安山岩A1		24.2	15.5	9.8	2.68	24.51	
6		E2区			15Y04	2		剥片	安山岩A不明		13.1	5.8	3.2	0.23	24.509	
6		E2区			15Y04	3		剥片	安山岩A1		24.3	13.8	8.1	2.23	24.525	
6		E2区			15Y05	1		剥片	安山岩A1		20.2	13.0	4.7	0.93	—	
6		E2区	第48図	2	15Y05	2		楔形石器	安山岩A1		54.1	27.0	14.0	18.60	24.487	
6		E2区	第49図	8	15Y05	3		R剥片	安山岩A1	接2	48.5	51.9	14.0	22.75	24.419	
6		E2区			15Y05	4		剥片	安山岩A1		32.7	33.6	12.4	8.64	24.41	
6		E2区			15Y05	5		剥片	安山岩A1		25.8	34.4	11.5	7.06	24.434	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
6		E2区			15Y05	6		剥片	安山岩A1		44.8	49.4	16.1	21.11	24.376	
6		E2区	第48図	5	15Y05	7		剥片	安山岩A1		72.0	28.0	14.0	22.92	24.345	
6		E2区			15Y05	8		剥片	安山岩A1		19.2	14.4	7.2	1.78	24.361	
6		E2区	第50図	14	15Y05	9		石核	安山岩A1	接3	30.6	27.8	8.0	7.57	24.419	
6		E2区	第48図	4	15Y06	1		剥片	安山岩A1		61.1	32.1	12.0	15.72	24.559	
6		E2区	第48図	6b	15Y06	2		剥片	安山岩A1	接1	32.6	39.9	9.4	9.99	24.552	
6		E2区	第48図	6c	15Y06	3		剥片	安山岩A1	接1	12.8	19.9	4.6	0.93	24.415	
6		E2区			15Y06	4		剥片	安山岩A1		20.2	14.9	3.3	1.02	24.247	
6		E2区			15Y06	5		剥片	安山岩A1		30.8	32.6	11.7	7.36	24.052	
6		E2区	第48図	6a	15Y06	6		剥片	安山岩A1	接1	38.0	34.7	8.1	11.04	24.383	
7		C3区	第52図	8	11AA29	1		U剥片	黒曜石5		26.6	25.1	10.8	6.18	24.91	被熱
7		C3区	第52図	6	11AA29	2		R剥片	黒曜石2		23.4	11.8	3.0	0.60	24.934	
7		C3区	第52図	3	11AB20	1		削器	黒曜石1		40.6	22.3	15.0	13.05	24.677	
7		C3区	第52図	5	11AB20	2		石錐	黒曜石4		30.3	16.7	6.7	2.43	24.972	
7		C3区	第52図	4	11AB20	3		削器	黒曜石1		27.1	26.2	10.1	5.82	24.641	
7		C3区			11AB20	4		礫	安山岩1		66.1	56.9	53.0	241.21	24.845	被熱
7		C3区	第52図	2	11AB20	5		ナイフ形石器	黒曜石3		46.8	18.1	9.0	7.62	24.759	
7		C3区	第52図	1	11AB20	6		ナイフ形石器	黒曜石2		48.4	30.3	11.0	10.94	24.664	
7		C3区			11AB20	7	a	剥片	黒曜石不明		12.4	12.0	4.1	0.42	24.563	
7		C3区			11AB20	7	b	剥片	黒曜石不明		10.2	13.4	3.1	0.26	24.563	
7		C3区	第52図	7	11AB20	8		U剥片	黒曜石6		13.6	25.4	4.1	1.03	24.704	
7		C3区			11AB20	9		礫	安山岩2		64.2	64.2	21.3	54.37	24.843	
7		C3区			11AA19	(B)3トレ1		剥片	黒曜石不明		11.5	9.7	5.8	0.48	—	H10確認
8		C2区			12AB14	100		剥片	安山岩B1		34.0	20.0	7.8	6.02	24.204	
8		C2区	第54図	2a	12AB15	5トレ1	a	剥片	安山岩A2	接3	59.1	46.8	21.3	56.12	—	H10確認
8		C2区			12AB15	5トレ1	b	礫	安山岩A4		16.7	13.6	6.4	0.93	—	H10確認
8		C2区	第54図	2b	12AB25	100		剥片	安山岩A2	接3	41.1	46.1	22.5	55.69	23.915	
8		C2区			12AB25	101		砕片	玉髄1		11.3	14.7	8.7	1.84	24.127	
8		C2区	第54図	3a	12AB25	102		剥片	安山岩A1	接2	54.4	59.9	21.9	87.18	24.048	
8		C2区	第54図	3b	12AB25	103		剥片	安山岩A1	接2	21.2	45.5	11.3	12.59	24.095	
8		C2区	第56図	6	12AB25	104		剥片	珪質頁岩1	接1	37.0	33.0	15.9	10.59	24.034	
8		C2区			12AB25	105		剥片	安山岩A3		27.9	12.2	8.3	2.40	23.956	
8		C2区	第56図	5	12AB25	106		R剥片	珪質頁岩1	接1	40.0	36.2	18.7	22.07	24.019	
8		C2区	第56図	4	12AB25	107		U剥片	珪質頁岩1	接1	66.5	41.2	22.9	46.35	24.245	
8		C2区	第56図	7	12AB25	108		石核	珪質頁岩1	接1	53.8	54.9	41.1	144.59	—	
8		C2区			12AB26	100		礫	チャート1		30.4	25.4	21.1	10.31	23.791	
8		C2区			12AB26	101		礫	安山岩1		53.0	44.1	26.6	63.14	23.935	被熱
8		C2区			12AB26	102		(バラス)	—		—	—	—	8.51	23.934	攪乱中
8		C2区	第54図	1	12AB26・36	(B)5トレ2		R剥片	黒曜石1		24.2	9.1	6.9	1.32	—	H10確認
9		D2区	第58図	2	14W54	11		敲石	安山岩A1		48.0	55.4	20.0	67.27	25.386	
9		D2区			14W54	12		剥片	玉髄1		19.0	13.6	5.5	0.90	25.42	
9		D2区	第58図	3	14W55	11		掻器	玉髄1		39.3	30.8	9.2	8.23	25.435	位置不明
9		D2区	第58図	1	14W55	12		掻器	玉髄1		44.7	29.1	12.4	15.86	25.255	
9		D2区			14W55	13		剥片	玉髄1		26.2	20.6	4.7	1.64	25.378	
9		D2区			14W66	1		剥片	玉髄1		28.7	31.5	8.2	5.92	—	H9確認
10		D1区	第62図	10	14V97	11		台石	ホルンフェルス4		75.2	89.2	36.3	299.53	25.392	
10		D1区	第61図	2	14V97	12		角錘状石器	黒曜石1		48.0	21.3	13.2	11.23	25.357	被熱
10		D1区			14V99	11		砕片	玉髄2		3.7	5.4	1.6	0.02	25.825	
10		D1区			14W90	11		剥片	安山岩A4		26.1	30.3	5.7	3.76	25.6	
10		D1区			14W90	12		剥片	珪質頁岩2		12.0	24.0	4.6	1.09	25.915	

石器集中	(分布域)	地区	挿図	No.	グリッド	遺物番号	枝番	器種	母岩	接合No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	標高(m)	備考
10		D1区			14W90	13		剥片	安山岩A4		47.1	35.3	12.0	10.26	25.755	
10		D1区	第61図	6	14W90	14		剥片	安山岩A4		39.9	38.3	13.3	13.30	25.55	
10		D1区	第61図	1	15V06	11		尖頭器	黒曜石2		24.7	14.1	5.3	1.87	25.7	
10		D1区			15V07	11		剥片	玉髄1		22.3	17.4	5.3	1.32	25.501	
10		D1区			15V07	12		剥片	玉髄1		14.3	20.6	2.4	0.67	25.48	
10		D1区			15V07	13		剥片	安山岩A不明		13.6	16.2	6.4	1.07	25.635	
10		D1区			15V07	14		剥片	安山岩A2		22.4	27.3	6.7	3.98	25.345	
10		D1区			15V07	15		剥片	玉髄1		9.3	7.9	1.6	0.07	25.345	
10		D1区	第61図	4	15V07	16		U剥片	玉髄1		20.3	25.3	7.1	2.62	25.244	
10		D1区			15V08	1		剥片	ホルンフェルス1		27.2	25.0	4.8	3.37	25.661	H9確認
10		D1区			15V08	11		剥片	珪質頁岩1		17.4	18.6	5.2	1.17	25.511	
10		D1区			15V08	12		礫	チャート2		11.1	27.8	6.9	2.41	25.747	
10		D1区			15V09	11		砕片	ホルンフェルス2		5.6	7.1	1.0	0.03	25.735	
10		D1区			15V09	12		剥片	ホルンフェルス2		9.7	13.8	2.1	0.22	25.731	
10		D1区			15V09	13		剥片	ホルンフェルス1		22.4	12.0	4.0	0.99	25.73	
10		D1区			15V09	14		剥片	珪質頁岩2		15.6	17.2	2.7	0.42	25.629	
10		D1区			15V17	11		礫	砂岩1		22.7	17.8	10.7	3.50	25.655	被熱
10		D1区			15V17	12		礫	珪質頁岩3		26.2	28.8	23.5	11.45	25.68	
10		D1区			15V17	13		礫	砂岩1		18.6	19.5	13.5	3.51	25.517	被熱
10		D1区			15V17	14		礫	砂岩1		15.7	21.1	4.5	1.02	25.595	被熱
10		D1区			15V17	15		礫	チャート1		31.7	22.2	21.0	13.54	25.506	
10		D1区			15V17	16		礫	安山岩1	接1	18.3	25.5	18.6	7.41	25.537	
10		D1区			15V17	17		礫	安山岩1	接1	36.7	28.8	22.6	28.50	25.515	
10		D1区			15V17	18		礫	チャート1		19.2	16.8	14.2	4.56	25.514	
10		D1区			15V17	19		礫	安山岩2		18.2	9.4	8.1	1.55	25.617	
10		D1区			15V17	20		礫	安山岩2		25.4	19.1	16.8	6.57	25.615	
10		D1区			15V17	21		礫	チャート1		11.0	14.5	14.5	1.57	25.668	
10		D1区	第61図	7	15V17	22		剥片	安山岩A1		50.9	33.2	12.0	15.05	25.557	
10		D1区			15V17	23		礫	安山岩1	接2	18.4	28.9	17.6	12.58	25.638	
10		D1区			15V17	24		剥片	玉髄1		12.5	9.1	2.8	0.23	25.571	
10		D1区			15V17	25		礫	流紋岩1		17.7	15.1	4.2	0.74	25.554	被熱
10		D1区			15V17	26		礫	流紋岩1		31.6	42.3	5.4	4.14	25.655	被熱
10		D1区			15V17	27		剥片	安山岩A1		25.3	15.8	9.3	4.58	25.507	
10		D1区			15V17	28		礫	珪質頁岩3		15.9	21.4	19.3	7.36	25.53	
10		D1区			15V17	29		礫	砂岩1		22.1	26.6	10.8	6.99	25.49	被熱
10		D1区			15V17	30		礫	安山岩1	接2	16.2	15.5	16.2	4.11	25.435	
10		D1区			15V17	31		礫	チャート1		10.2	7.8	5.5	0.44	25.464	
10		D1区			15V17	32		礫	流紋岩1		36.6	22.7	8.2	5.68	25.588	被熱
10		D1区	第62図	9	15V17	33		石核	安山岩A3		28.9	27.8	45.9	41.29	25.365	
10		D1区	第62図	8	15V18	1		剥片	ホルンフェルス3		73.0	29.2	13.7	32.40	25.855	H9確認
10		D1区	第61図	3	15V18	11		R剥片	珪質頁岩1		36.7	15.1	15.5	6.26	25.492	
10		D1区	第61図	2	15V27	11		U剥片	玉髄1		22.3	25.4	9.3	2.16	25.391	
		単独			11Z49·59	7トレ1		剥片	珪質頁岩		19.0	13.3	5.5	0.97	—	H10確認
		単独			11AA68·78	6トレ1		礫	砂岩		99.7	41.2	24.5	107.26	—	H10確認
		単独	第63図	1	—	(C)表採2	b	剥片	安山岩B		33.8	24.8	6.2	3.49	—	

※二次加工のある剥片はR剥片，使用痕のある剥片はU剥片と記した。

第３章　縄文時代

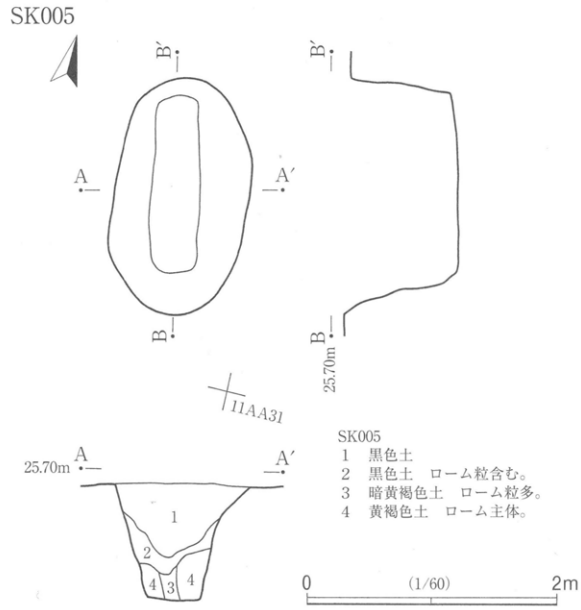
第１節　陥穴

SK005（第64図，図版６）

11AA20グリッドで検出した陥穴である。いわゆる溝状陥穴に近い形態で，開口部は細長い楕円形，底面は細長い隅丸長方形を呈する。長軸方向最大長で約92.5cm，幅約54cm，深さ約46cmである。

壁は，長軸方向によくあるオーバーハングは見られず，急な立ち上がりである。

覆土は黒色土が主であるが，底面付近に明るい色調でローム主体の土がたまっている。遺物は出土しなかった。



第64図　陥穴

第２節　グリッド出土遺物

１　縄文土器（第65・66図，第15表，図版17）

縄文土器は，遺構に伴って出土したものはなく，すべていわゆるグリッド中出土である。主に平成９・10年度の確認調査時に出土した。出土した縄文土器のうち，時期比定が可能な文様のある破片を中心に図化した。縄文土器の出土量に関する集計は，全体の出土量が少なかったためおこなわなかった。

土器の記載は古い時期のものから順におこなった。土器の胎土・色調等については第15表にまとめ，本文中では土器の時期等に関して簡単に記載した。胎土中に繊維を含む土器について，特に断面図に網掛け等はおこなわなかった。土器内面の拓本を示す場合，向かって左側に外面の拓本，中央に断面図，向かって右側に内面の拓本を置いた。縄文の表記については，『日本先史土器の縄紋』[1]を参考として，１段右撚りの縄をR，左撚りの縄をL，２段正撚りの縄はRL・LR，３段正撚りの縄はRLR・LRLなどと，簡略化して表記することとしたい。

第65図１・２は早期前葉の撚糸文系土器である。１は，井草Ⅱ式で，多数の同一個体と思われる破片が出土しているため，図上で復元をおこなった。小破片のみで推定復元しているため，器高などはあまり正確とは言えないが，残された破片から井草Ⅱ式でよくある，口縁部があまり開かない丸底の器形と推定した。口唇部は強く肥厚し，口唇部外面にRL単節縄文を横方向に回転施文する。口唇直下は狭い無文帯となり（部分的に縄文が施文される），以下の胴部は口唇部と同じ原体による縄文を縦走させる。２は口縁部内面にも縄文を施す土器で，井草Ⅰ式であろう。口唇部の肥厚はあまり強くない。口縁部内面と口唇部にLR単節縄文を横方向に回転施文する。胴部にも同じ原体による縄文を縦走させる。

第65図３～16は，前期前半の胎土中に繊維を含む，いわゆる繊維土器である。文様要素が乏しいものが多く，細別型式が明らかにしにくいが，概ね黒浜式に相当するものが多そうである。

3～5は口縁部破片である。3は地文に，端部を結束したLR単節縄文を用いる。拓本の左端の部分には，円形竹管文の一部かと思われる文様が残るが，押捺があまりしっかりとしておらず，明瞭ではない。4は器面の状態が悪く，あまり明瞭でないが，口縁端部にキザミを持つ。地文はL無節か。補修孔を有する。5は口縁部断面が角頭状を呈する。地文の縄文は，LR単節縄文を施文方向を変えて施したものか。

6a～6cは同一個体と判断した土器で，6aは口縁部破片である。地文の縄文を欠き，雑な横位と斜位の沈線を組み合わせた文様を持つ土器であろう。7・8は，6とよく似た土器であるが，沈線の方向や太さなどが若干異なるため，同一個体との判断を保留した。9は6とは別個体の土器であり，やや密な横位の沈線を施すものである。10は器面が荒れているためあまりはっきりしないが，格子目状撚糸文を持つ土器であろう。

11a～11cは同一個体と判断した土器であり，11aは口縁部破片である。口縁部断面がしっかりとした角頭状で，口唇上には間隔が粗な押捺を施す。外面の縄文は，おそらく0段多条のLR単節縄文であろう。12もLRとRLの異なった単節縄文を用いて，羽状縄文を施す土器である。13・14はおそらく0段多条の縄文を施す土器であり，13は11と同一個体の可能性もある。両者とも原体はLRである。

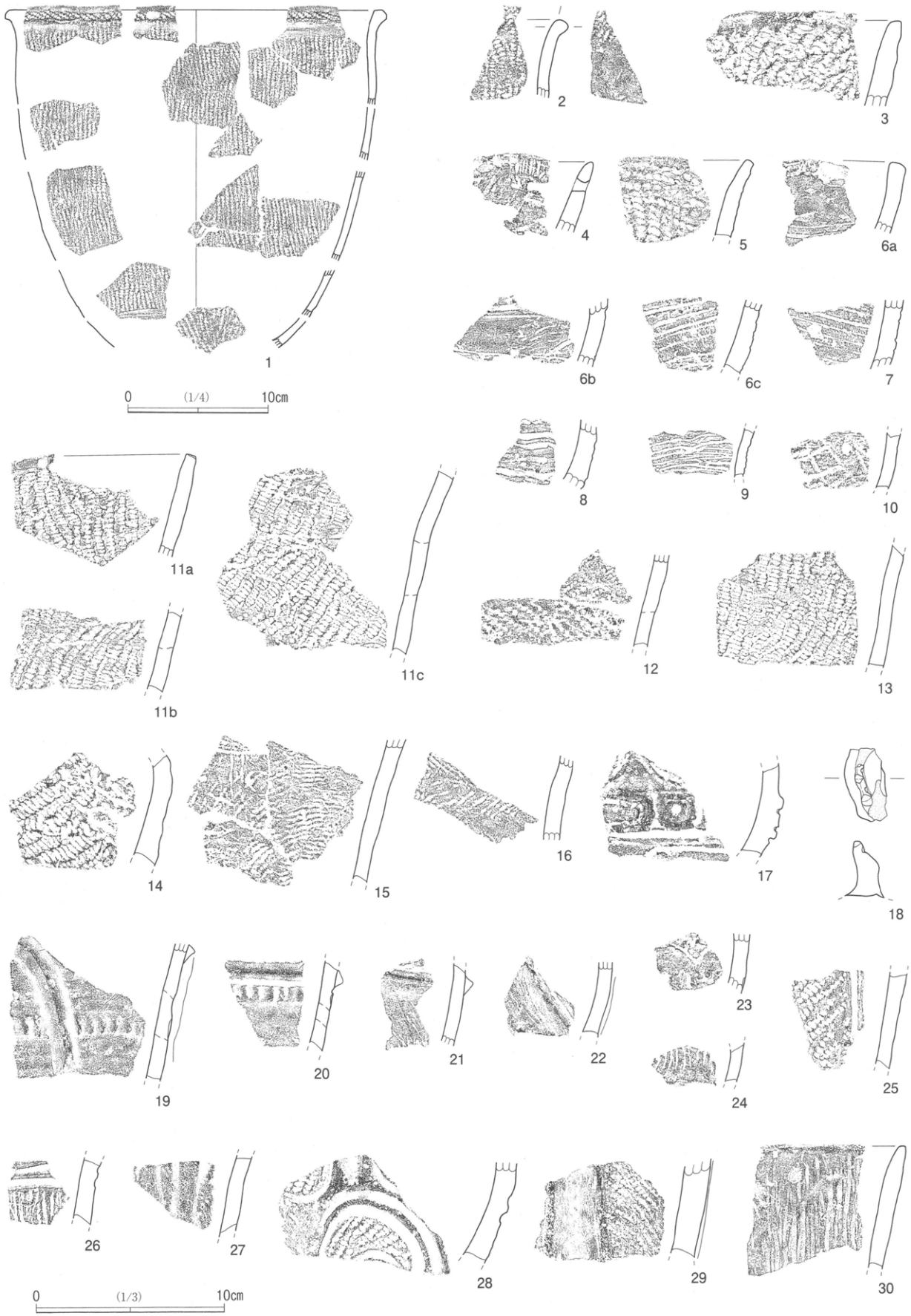
15はR無節の縄文を縦位に回転施文するものである。16はLとRの無節縄文により，羽状縄文を施すものである。

第65図17～30は中期の土器である。17～24は中期前葉の阿玉台式前半の土器であろう。17は単列の押引文による施文で，狭い枠状区画と円形の貼付が存在する。阿玉台Ib式である。18は阿玉台式前半の把手などに貼り付けられる，鰭状の装飾の一部であろう。19～24は阿玉台式前半の土器の胴部破片と思われるもので，19・20には明瞭な輪積部分のキザミと，断面三角形の隆線が存在する。19・20は同一個体の可能性もある。21・22は断面三角形の隆線をもつものである。23は細い単列の押引文による文様を持つもので，24はヘラ状工具による横位のキザミを持つものである。

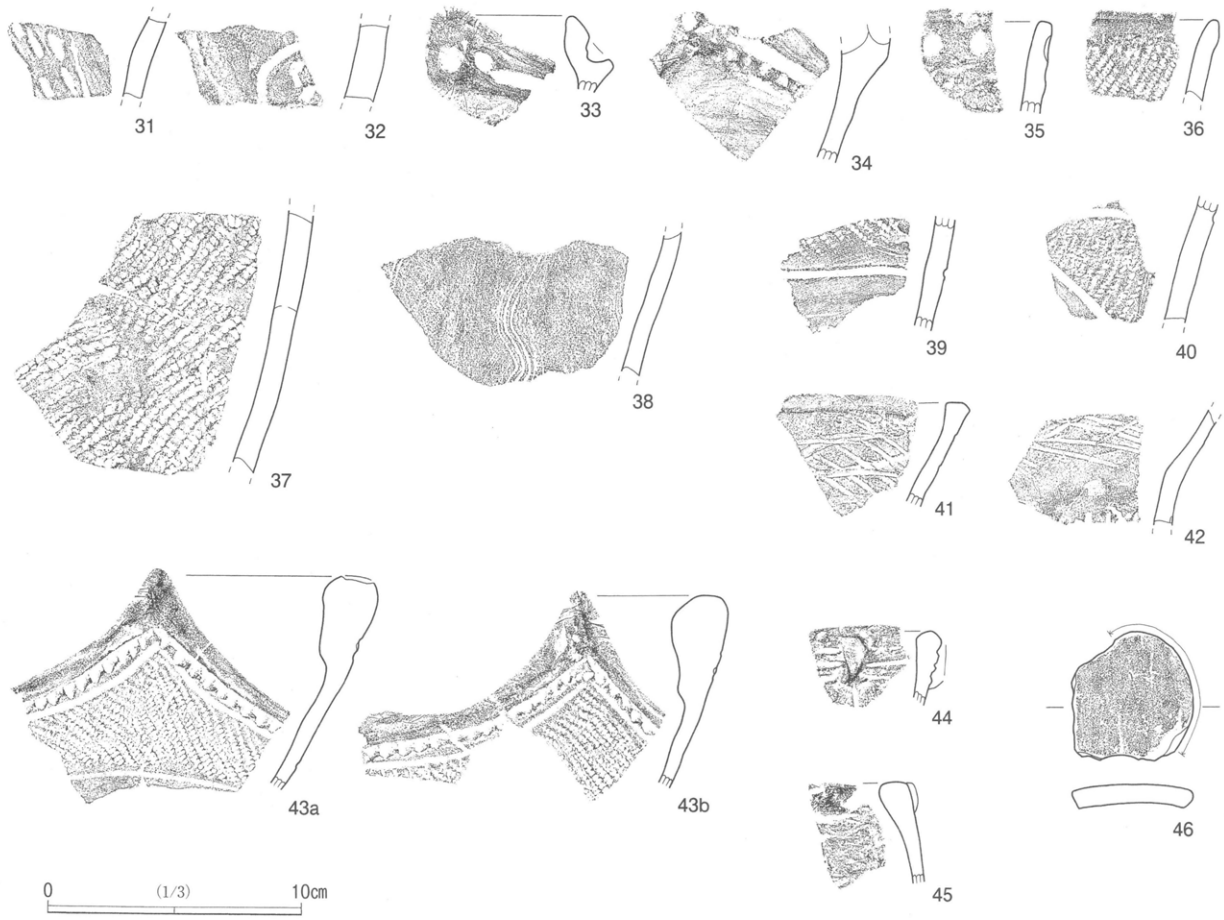
25～30は中期後葉の加曽利E式土器である。25は地文縄文上に沈線による懸垂文が垂下するが，懸垂文間の縄文の磨り消しが明瞭でなく，加曽利E式古い部分に相当する土器である。26はLの原体による撚糸文を地文として，横位の2条の沈線を引くもので，連弧文系土器である。27は懸垂文間の縄文の磨り消しが明瞭な土器で，加曽利E式新しい部分に相当するものである。28・29も加曽利E式新しい部分に相当する土器で，28は隆線脇のナゾリが明瞭な隆線により，渦巻き状の文様を描くものである。40は隆線による文様で，隆線間の磨り消しが明瞭である。縄文は部分的に隆線にかかるが，意識的に隆線上に施文しているのではないようである。30は一見早期後葉の条痕文に見えるが，胎土中に繊維を含んでおらず，焼成や口縁部断面の形態が整っていることなどから，加曽利E式に少数伴う条線文系の土器と判断した。

第66図31～45は後期の土器である。31・32は沈線区画内に連続刺突を施すもので，後期初頭のいわゆる称名寺Ⅱ式である。33～37は，後期前葉の堀之内1式である。33・34はやや肥厚した狭い口縁部に単沈線を持つもので，口辺部の縄文を欠く。33は波頂部に円形刺突を施す。34は口縁部下端にキザミを施す。35は口縁部に円形刺突を連続させるものである。以下に縄文を施すようだが判然としない。36は縄文のみを施す口縁部破片である。37は縄文を施した胴部破片である。38は後期初頭から前葉に見られる，櫛歯状工具による蛇行線文を持つ土器である。

39・40は後期前葉後半の堀之内2式である。39は横位の沈線区画の一部と充填された縄文が残る。縄文が施されない部分はミガキが顕著である。40は直線的な沈線区画内に，縄文が充填される。比較的細かい


1
2
3
4
5
6a
6b
6c
7
8
9
10
11a
11b
11c
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0 (1/4) 10cm
0 (1/3) 10cm

第65図　縄文土器（1）



第66図　縄文土器（２）・土製品

整った縄文や，内面の調整などが丁寧なことから，堀之内２式と判断した。

41は後期中葉・加曽利Ｂ２式の斜線文土器の口縁部破片である。口縁部付近に斜線文帯を持つ土器であろう。42も加曽利Ｂ２式斜線文土器と思うが，斜線文帯の区画横線を欠き，41よりも時間的には後出であろう。43は加曽利Ｂ３式である。鋭角な波頂部を持つ波状口縁で，波底部にはコブを持つ。口縁端部には刻文帯を持ち，以下は縄文帯となる。縄文帯の下端は沈線で画される。

44は後期後葉の曽谷式である。表面を欠損するが，口縁部に短い瘤を貼り付け，数条の横位の沈線を引くものである。45は，器面が荒れて判然としない部分があるが，加曽利Ｂ式後半に伴う紐線文系粗製土器であろう。

２　土製品（第66図，図版17）

第66図46は，土器片再利用の土製円盤である。文様を持たない土器のため，時期ははっきりしないが，焼成等から見ると後期の土器のようである。図の上部から右側は，顕著に磨ることで円形に近く整形しているが，これ以外の部分は土器が破損した際の面がそのまま残っているように見える。整形途中で破棄されたものかもしれない。

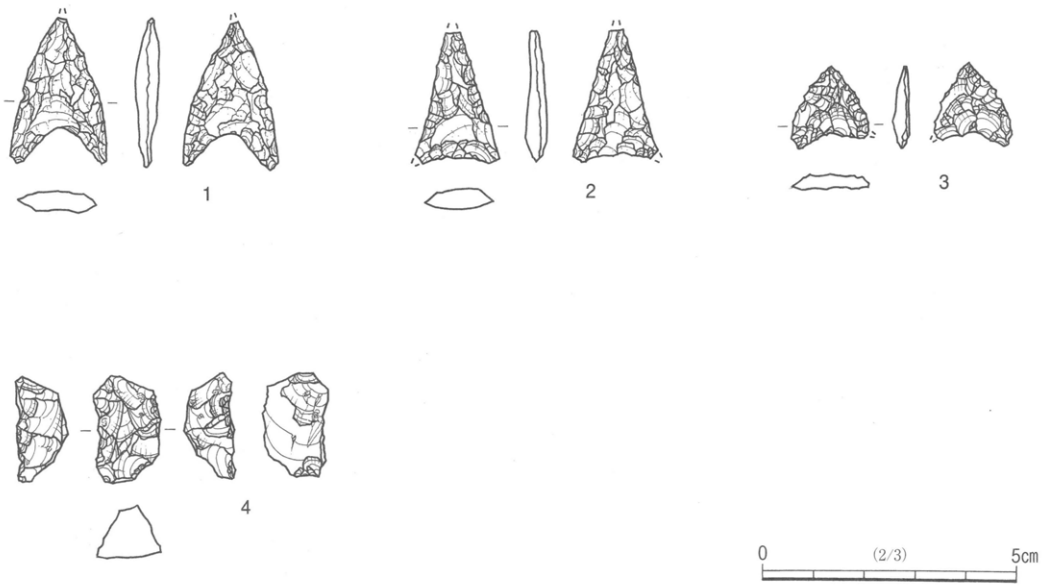
最大長5.1cm，最大幅4.8cm，厚さ0.8cm，重量23.63ｇである。

3　石器（第67図，第14表，図版18）

遺構に伴わず出土し，縄文時代の石器と判断したものをここにまとめた。計測値等は第14表に示した。

１～３は石鏃である。１は平成９年度の確認調査中に出土したものである。灰白色に近い色調のチャート製で，基部の抉りが深く，最大長も比較的長い。優品と言えよう。先端部を一部欠損する。２は平成10年度の確認調査で出土したものである。灰白色に近い色調のチャート製で，基部の抉りは弱い。最大長が比較的長く，細身の石鏃である。３は平成９年度の確認調査中に出土したもので，透明度の高い黒曜石製である。最大長と最大幅がそれほど変わらない，寸詰まりの形態である。４は平成16年度調査の遺跡北側本調査区内で出土した。黒曜石製の楔形石器で，両側縁と基部の裏面に細かい調整をおこなうものである。

注１　山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会（1997再刊　示人社）



第67図　縄文時代石器

第14表　縄文時代石器属性表

図	No.	器種	注記	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	遺存度	備　考
第67図	1	石鏃	（A）6トレ001	2.92	1.92	0.47	1.89	チャート	先端部欠損	
	2	石鏃	（B）10トレ001	2.61	1.68	0.44	1.46	チャート	先端部欠損	
	3	石鏃	（A）002	1.70	1.57	0.34	0.57	黒曜石	右脚部先端欠損	遺跡一括
	4	楔形石器	（C）11AA29－3	1.36	1.36	1.03	2.41	黒曜石		

第15表　縄文土器観察表

図	No.	枝番	時期・型式名等	注記	部位	焼成	色調	胎土	重量(g)	備　考
第65図	1		早期前葉・井草Ⅱ	(B)7トレ－1，(B)9トレ－1，(B)11Z00－1，(B)11AA00－1	r～m	良	暗褐～褐色	砂・赤少	229.58	重量石膏分・同一個体分含む。
	2		早期前葉・井草Ⅰ	(A)00－1	r	良	にぶい褐色	白少・砂少	10.41	
	3		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	r	良	暗褐色	白少・砂少・繊維	39.60	
	4		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	r	やや良	黒褐色	白少・繊維	14.75	補修孔あり。
	5		前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	r	良	にぶい褐色	白少・繊維少	20.22	
	6	a	前期前半・繊維土器	(B)12Z00－00	r	良	にぶい黄褐色	砂少・繊維少	14.65	
	6	b	前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	にぶい褐色	砂少・繊維少	22.67	
	6	c	前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	m	良	褐色	砂少・繊維少	18.74	
	7		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	暗赤褐色	砂少・繊維少	17.78	6と同一個体か。
	8		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	にぶい褐色	白少・繊維少	12.37	6と同一個体か。
	9		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	黒褐～暗褐色	白少・繊維	9.00	
	10		前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	m	良	暗褐色	白少・繊維	11.04	
	11	a	前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	r	良	にぶい黄褐色	砂・繊維	36.66	
	11	b	前期前半・繊維土器	(A)00－3	m	良	にぶい黄褐色	砂・繊維	35.50	
	11	c	前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	m	良	黒褐～灰黄褐色	砂少・繊維	81.32	重量石膏分含む。
	12		前期前半・繊維土器	(B)12Z00－1	m	良	褐色	砂少・繊維	30.61	重量石膏分含む。
	13		前期前半・繊維土器	(A)00－3	m	やや良	黒色	白・繊維	51.89	11と同一個体か。
	14		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	褐色	砂・雲母少・繊維少	48.54	
	15		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	赤褐色	白・繊維	72.37	
	16		前期前半・繊維土器	(B)12AA00－1	m	良	黒褐色	白少・砂・繊維	21.14	外面炭化物付着。
	17		中期前葉・阿玉台Ⅰb	(C)12AB00－1	m	良	褐色	白やや多・砂・雲母少	44.68	
	18		中期前葉・阿玉台前半	(B)5トレ－1	m	良	褐色	白少・砂・雲母	17.55	把手部分。
	19		中期前葉・阿玉台前半	(C)表採3	m	良	黒褐～褐色	白・砂	53.81	
	20		中期前葉・阿玉台Ⅰb	(C)表採3	m	良	黒褐色	白少・砂	20.61	19と同一個体か。
	21		中期前葉・阿玉台前半	(C)表採	m	良	暗褐色	白・雲母少	12.18	
	22		中期前葉・阿玉台前半	(C)12AA04－1	m	良	暗褐～褐色	白少・砂多・雲母	15.55	
	23		中期前葉・阿玉台Ⅰb	(C)表採3	m	良	褐色	白(大)・砂・雲母少	11.57	
	24		中期前葉・阿玉台前半？	(C)表採3	m	良	褐色	白少・砂・雲母少	7.49	
	25		中期後葉・加曽利Ｅ前半	(A)00－1	m	良	暗褐色	白	24.89	
	26		中期後葉・連弧文系	(C)SD002－1	m	良	暗褐色	砂少	14.35	
	27		中期後葉・加曽利Ｅ後半	(B)6トレ－1	m	やや良	にぶい黄褐色	砂	16.42	
	28		中期後葉・加曽利Ｅ後半	(A)00－1	m	良	暗褐色	白少・砂少	72.96	外面炭化物付着。
	29		中期後葉・加曽利Ｅ後半	(A)1トレ－1	m	良	赤褐色	白少・砂	72.27	
	30		中期後葉・条線文系	(C)14Z87－1	r	良	暗褐色	白・砂少・赤少	55.93	
第66図	31		後期初頭・称名寺Ⅱ	(B)13AA00－1	m	良	にぶい黄褐色	白少・砂・赤少	16.75	
	32		後期初頭・称名寺Ⅱ	(B)10トレ－1	m	良	黒褐～暗褐色	白・砂	26.36	
	33		後期前葉・堀之内１	(B)12AA00－1	r	良	黒褐～にぶい黄褐色	白・砂・赤少	15.38	
	34		後期前葉・堀之内１	(C)12AA13－1	r	良	暗赤褐色	白少・砂・赤少	35.21	
	35		後期前葉・堀之内１	(C)12AA01－1	r	やや良	明褐色	砂	14.00	
	36		後期前葉・堀之内１	(B)8トレ－1	r	やや良	にぶい褐色	白・砂少	12.31	
	37		後期前葉	(C)12AA13－1	m	良	黒褐～褐色	砂やや多・赤	106.48	
	38		後期初頭～前葉	(C)12AA12－1	m	やや良	暗赤褐色	白多・砂・赤	56.30	外面炭化物付着。
	39		後期前葉・堀之内２	(C)15W79－1	m	良	暗褐色	砂・赤少	24.36	
	40		後期前葉・堀之内２	(B)13AA00－1	m	良	褐色	白・砂・赤少	29.86	
	41		後期中葉・加曽利Ｂ２	(A)1トレ－1	r	良	暗褐色	白・砂少	21.05	
	42		後期中葉・加曽利Ｂ２	(A)00－1	m	良	黒褐～暗赤褐色	白・砂・赤少	22.99	
	43	a	後期中葉・加曽利Ｂ３	(C)15W98－1	r	良	暗赤褐色	白・砂やや多・赤少	78.44	
	43	b	後期中葉・加曽利Ｂ３	(C)15W97－1,98－1	r	良	暗赤褐色	白・砂やや多・赤少	61.09	重量石膏分含む。
	44		後期後葉・曽谷	(B)14トレ－1	r	良	暗褐色	白・砂少・赤少	10.99	
	45		後期中葉・粗製	(C)表採	r	良	黒褐色	白やや多	11.97	

※部位欄の記号は，ｒが口縁部，ｍが胴部，ｂが底部を意味する。
※色調は外面の色調である。
※胎土欄の記号は，白が白色粒子，砂が砂粒，赤が赤褐色粒子，黒が黒色粒子，(大)は大粒を意味する。

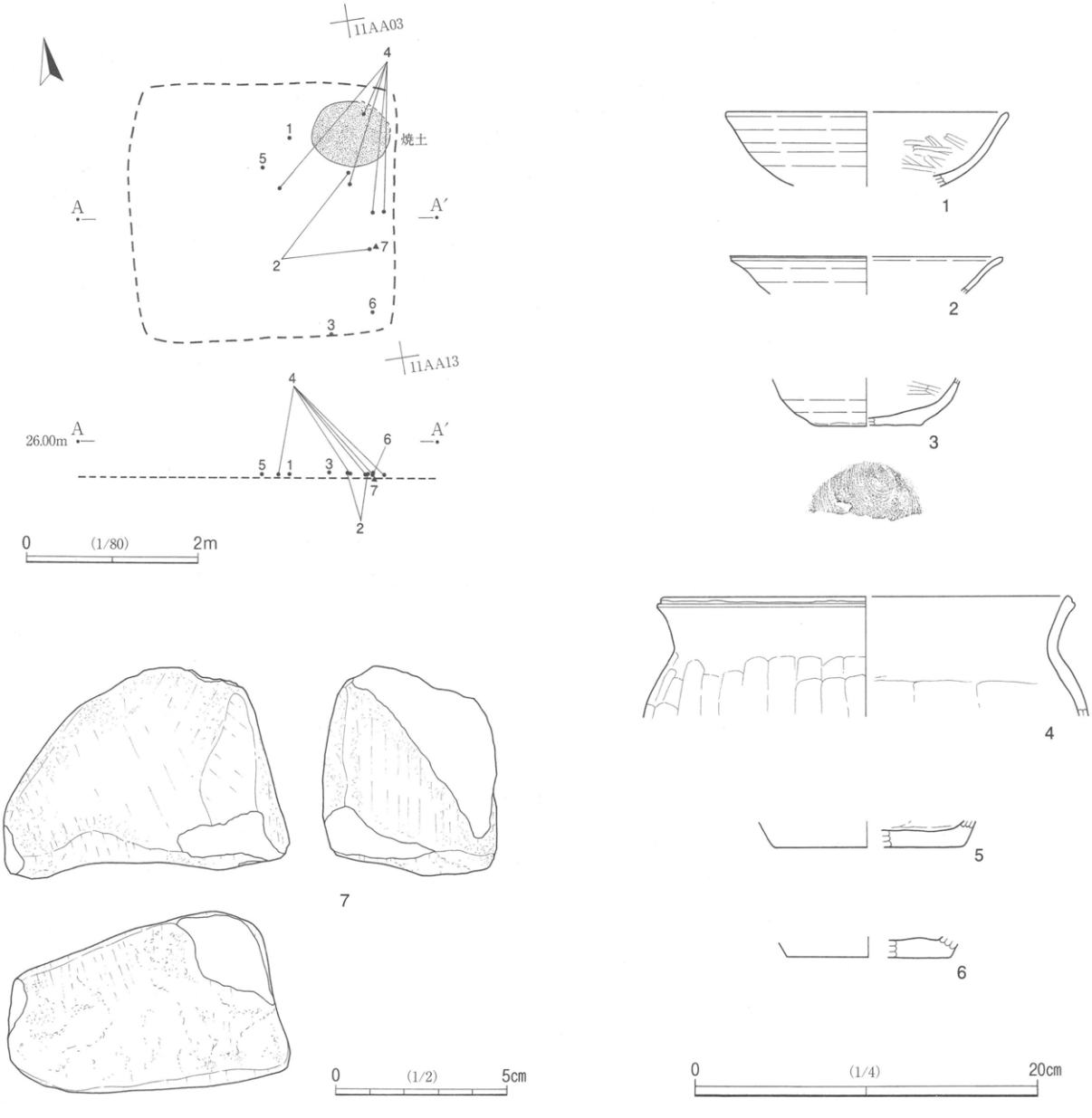
第４章　平安時代

第１節　住居跡

SI001（第68図，第16表，図版６・18）

出土した土器から，平安時代の住居跡と考える。調査区北寄りの11AA02・03グリッドに位置する。１辺約３ｍの方形のプランと，その北東のコーナー付近で焼土の堆積を確認した。

平成10年度の確認調査で検出した住居跡である。調査時のメモによれば，「遺構を確認した段階ですでに床面が露呈しており，遺物も多数出土したため，検出したプランを図化し遺物を取り上げた」とのことであった。耕作等によりもともと遺構の遺存状況が悪く，掘り込み等が検出できなかったため，平面プラ



第68図　SI001

ンは残存した床面からの推定である。

推定平面プランの北東コーナー付近に位置する焼土の堆積は，調査時にカマドの痕跡と判断された。そうであるならば，隅カマドを持つ住居跡の可能性があろう。

検出した遺構の範囲内で，多数の遺物が出土した。断面図に投影した遺物のドットを見ると，概ね同じレベルで出土しているようであり，住居の床面付近に遺存していた遺物である可能性があろう。出土した遺物のうち，土器の計測値等については第16表にまとめた。

１～３はロクロ土師器杯である。１はナデによりロクロ目がかなり消されている。内面は細かいヘラによるミガキの痕跡が残る。２は口縁部が若干外反する杯で，やはりロクロ目が消されている。３は底面が遺存するもので，内面にはミガキの痕跡が若干残る。底面は回転糸切り後無調整で，かなりゆがんで，凹凸がある。

４～６は土師器甕で，４は口縁部付近の破片で，唯一器形が窺えるものである。５・６は底部の小破片である。６は底面の調整が回転糸切り後手持ちヘラケズリで，糸切り痕が若干残っている。

７は，安山岩製の砥石と考える。おそらくは縄文時代の円礫製加工具を転用したものであろう。正面の右端と右側面が主要な作業面のようで，顕著に使い込まれており，縄文時代の磨石よりも表面が滑らかになっている。上部から左側縁にかけては，縄文時代の円礫製加工具の形状を留めるようである。下部は欠損面の凹凸を磨り・敲きによって，目立たなくしている。最大長6.14cm・最大幅8.34cm・最大厚5.1cm・重量314.89ｇである。

第２節　土坑

SK001（第69図，第16表，図版６・18）

出土した土器から平安時代の土坑であろう。

調査区中央付近の13Z72・73グリッドに位置する。ややいびつな円形のプランで，残存した掘り込みは浅く，壁は緩やかに立ち上がる。最大長約1.7m，深さは約７cmである。

底面はほぼ平坦で，小ピットが５か所存在する。小ピットの深さは約14cm～19cmで，あまり深くない。覆土は２層に分層され，中央に黒色系の土がたまっているようである。

遺物は土師器の小片が少数出土した。１は土師器高台付き杯で，高台部分が遺存したものである。計測値等は第16表に記した。

SK002（第69図，図版６）

SK001に隣接して存在し，形態的にも類似する。平安時代の土坑である可能性があろう。

調査区中央付近の13Z92・93グリッドに位置する。いびつな円形プランで，残存した掘り込みは浅く，壁は緩やかに立ち上がる。最大長約1.4m，深さ約７cmである。

底面はやや凹凸があり，中央にごく浅い小ピットを持つ。覆土は２層に分層され，黒褐色～暗褐色の土層である。

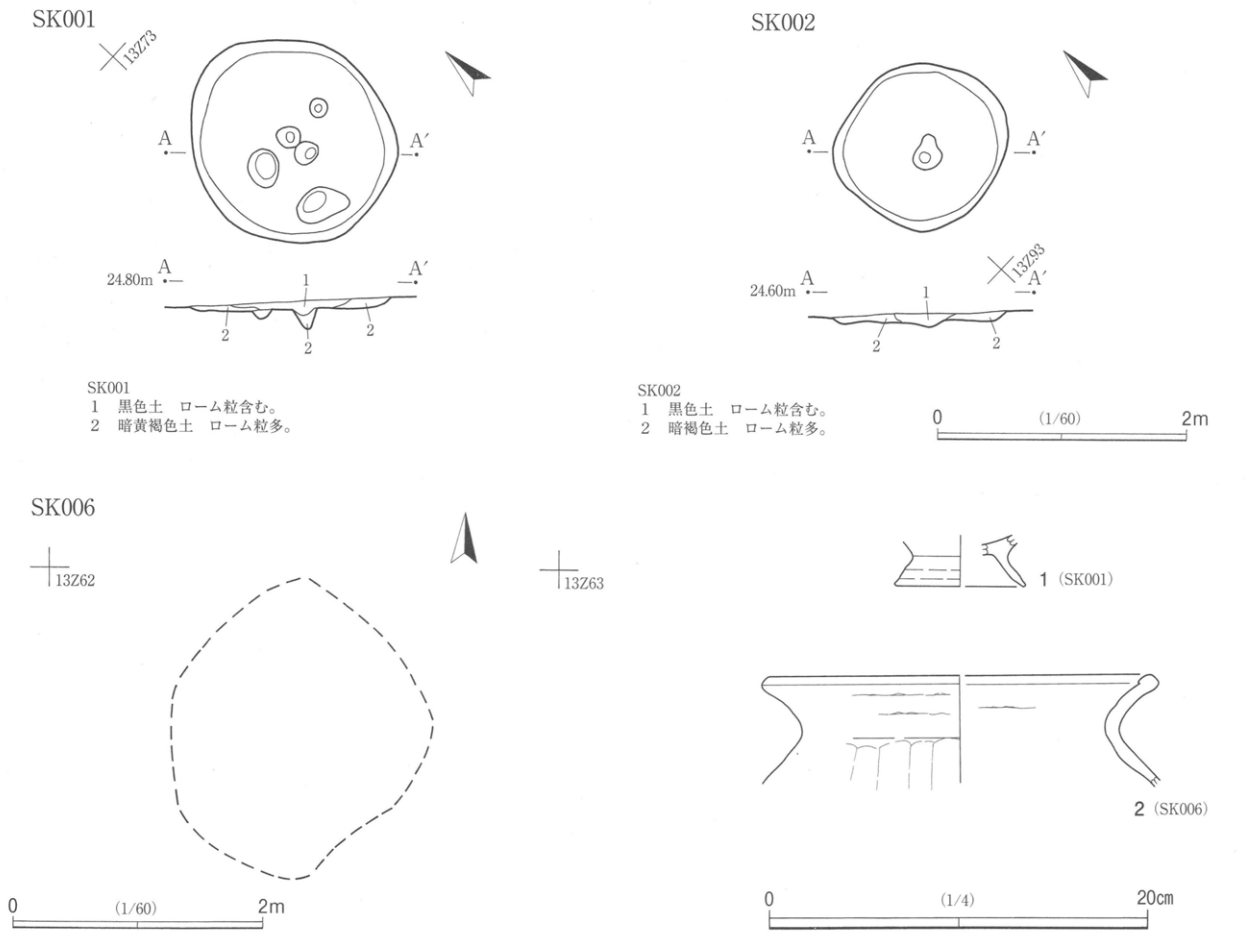
遺物は出土しなかった。

SK006（第69図，第16表，図版18）

出土した土器から平安時代の土坑と考える。平成９年度の調査では「Ｔ１仮３」という遺構名が付されたが，整理時にSK006の名称を新たに与えた。遺存状況がきわめて悪く，掘り込みはほとんど確認できなかった。平面プランは調査時の推定線である。

13Z63グリッドに位置し，SK001の南側に隣接する。推定プランはいびつな形態で，最大長約2.4mである。

確認したプラン内から土師器及び須恵器の小片がやや多く出土した。２はSK006から出土した土師器甕で，口径の約1/8が遺存したものを図上復元したものである。計測値等は第16表に記した。



第69図　平安時代の土坑

第16表　平安時代土器観察表

図	No.	遺構	注　記	器種	遺存度	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調　整	胎　土	色　調	焼成	備　考
第68図	1	SI001	(A)SI001－27	土師器杯	口1/6	(16.6)	—	〈4.3〉	外面ロクロナデ，内面ミガキ	砂粒，白色粒少	褐色	良	
	2	SI001	(A)SI001－14・18	土師器杯	口1/4	(16.0)	—	〈2.2〉	内外面ロクロナデ	砂粒	にぶい赤褐色	良	
	3	SI001	(A)SI001－2	土師器杯	底部完	—	(6.4)	〈2.8〉	外面ロクロナデ，内面ミガキ，底面回転糸切り後無調整	砂粒，白色粒，雲母	外面赤褐色，内面褐灰色	良	
	4	SI001	(A)SI001－16・22	土師器甕	口1/8，体部1/4	(24.5)	—	〈7.0〉	口縁部ヨコナデ，外面ヘラケズリ，口縁部内面ヨコナデ，内面ヘラケズリ	砂粒，白色粒少，赤色粒少	褐色	良	同一固体破片（SI001－10・11・19）あり。
	5	SI001	(A)SI001－23	土師器甕	底部1/6	—	—	〈1.5〉	外面ヘラケズリ，底面ヘラケズリ	砂粒，赤色粒	外面明褐色，内面暗褐色	良	底部内面に爪痕あり。
	6	SI001	(A)SI001－3	土師器甕	底部1/6	—	—	〈1.2〉	外面ヘラケズリ，内面回転ナデ，底面回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒，白色粒	外面褐灰色，内面にぶい黄褐色	良	
第69図	1	SK001	(C)SK001－1	土師器高台付杯	底部1/3	—	(7.0)	〈2.7〉	外面ロクロナデ，高台内面ロクロナデ	砂粒，白色粒	にぶい黄褐色	良	
	2	SK006	(A)T1仮3(SK006)－1	土師器甕	口1/8	(21.0)	—	〈5.7〉	口縁部ヨコナデ，外面ヘラケズリ，口縁部内面ヨコナデ	砂粒やや多	にぶい褐色	良	

※（　）内は推定値，〈　〉内は残存値である。

第５章　中・近世

第１節　土坑

SK003（第70図，図版６）

形態から近世のいわゆるシシ穴であろう。調査区北寄りの11AA38・39グリッドに位置する。北西側に隣接してSD002が走る。

平面形は上面はいびつな楕円形で，底面は隅丸方形に近い。開口部の長軸方向最大長は約1.7ｍで，底面は長軸方向最大長で約85㎝である。長軸方位は約Ｎ－40°－Ｗである。

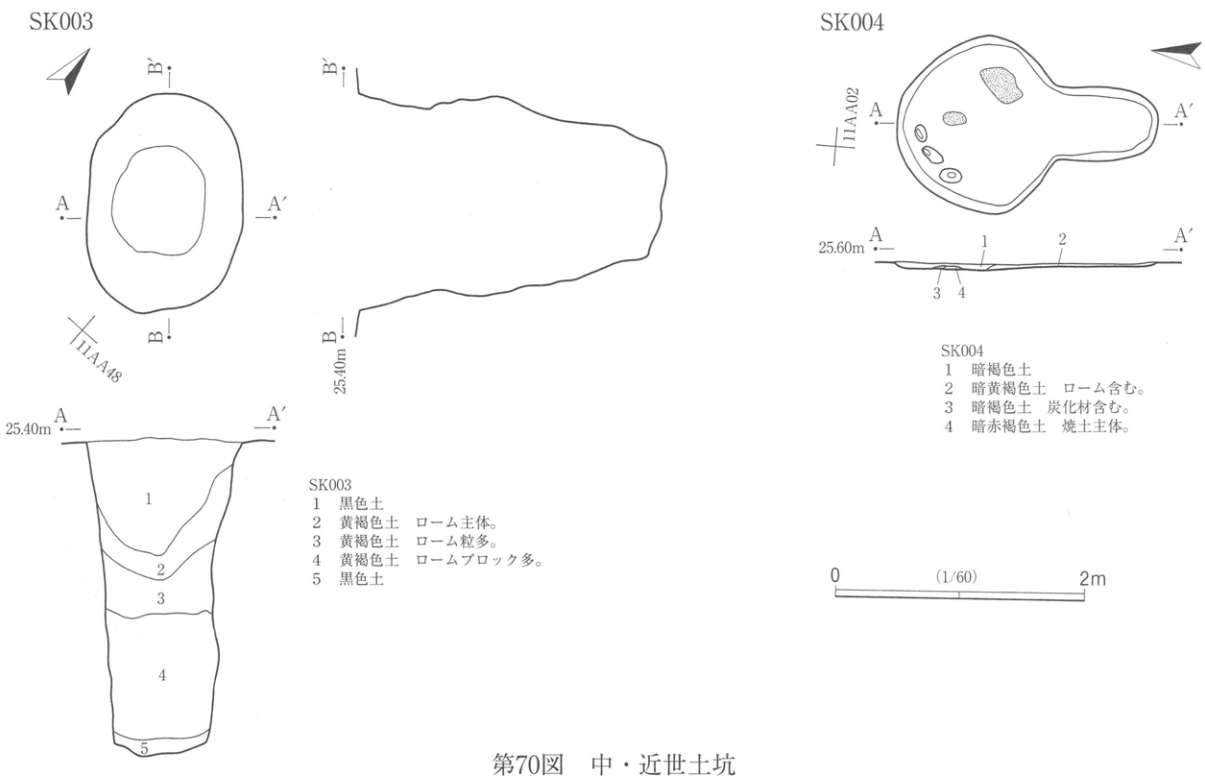
掘り込みは極めて深く，最深部で約2.5ｍである。壁はほぼ直に立ち上がり，長軸方向の壁は立ち上がり半ばで若干オーバーハングする。底面には若干凹凸がある。

遺物は出土しなかった。

SK004（第70図，図版６）

覆土中に焼土や炭化材を含み，規模や形状から見て火葬施設と判断した。調査区北寄りの11AA01・02グリッドに位置する。

平面形は，円形あるいは隅丸方形の部分に，細長い楕円形の部分が張り出した形である。長軸方向の最大長で約2.05ｍで，円形部分の幅が約1.4ｍ，張り出し部分の幅が約60㎝である。長軸方位は約Ｎ－5°－Ｗである。深さはごく浅く，円形の部分で約５㎝である。張り出しの部分の方が若干浅く，約２㎝である。



第70図　中・近世土坑

底面の北側で小ピットが３か所検出された。小ピットの深さは，約９㎝～12㎝である。床面に貼り付くようにして焼土が検出された。覆土は暗褐色～暗黄褐色土で，ロームを含む土が主体である。

遺物は土師器の小片が少量出土した。

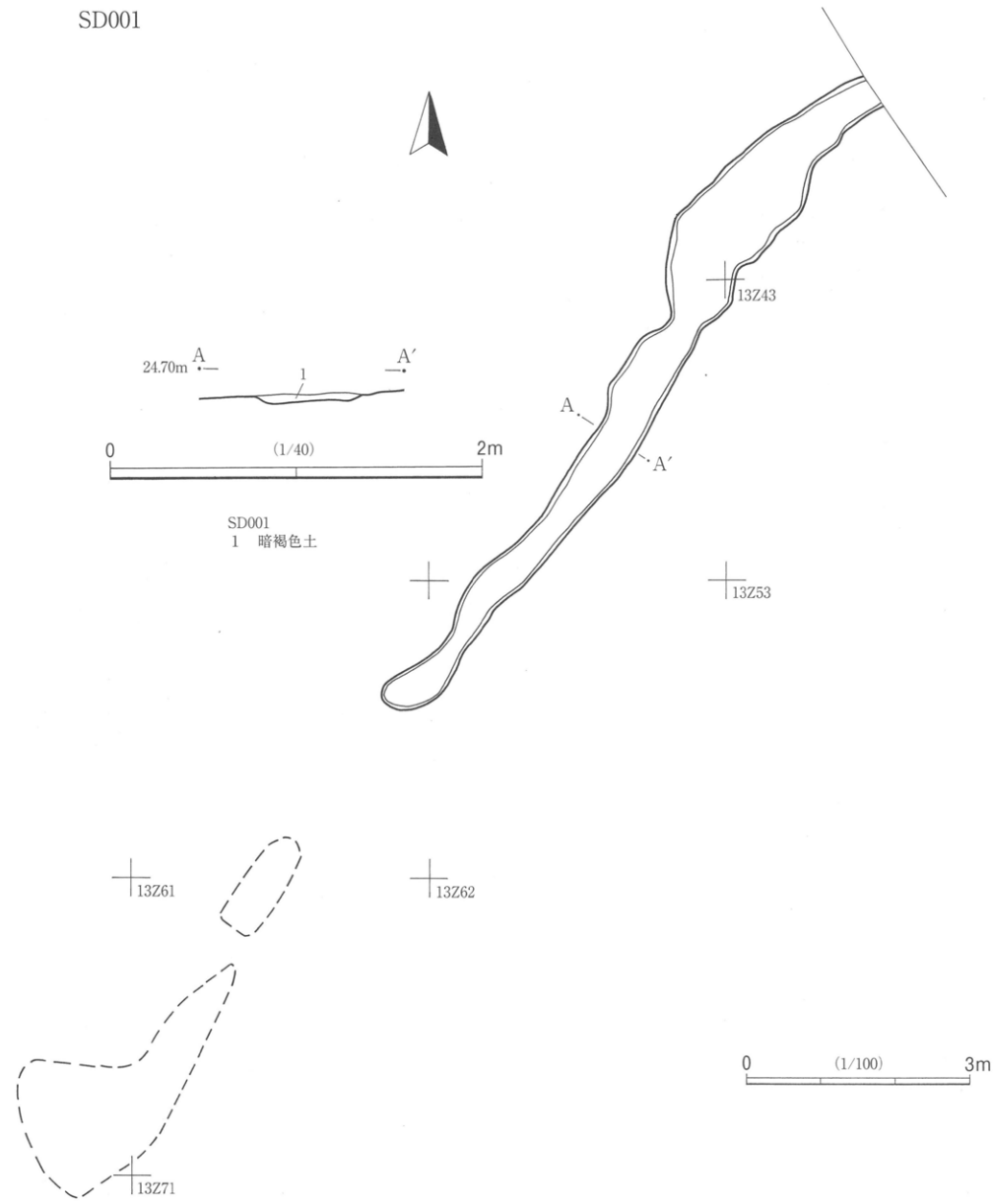
第２節　溝状遺構

SD001（第71図，図版６）

調査区中央付近の13Z32・33・42・51・52・60・61・70グリッドに位置する。

北東－南西方向に走り，幅約0.5m～1.2mで一定せず，掘り込みは約５㎝とごく浅い。方向的には調査区の北寄りで検出されたSD002に接続する可能性もあるが，形態等がかなり異なり確証はない。

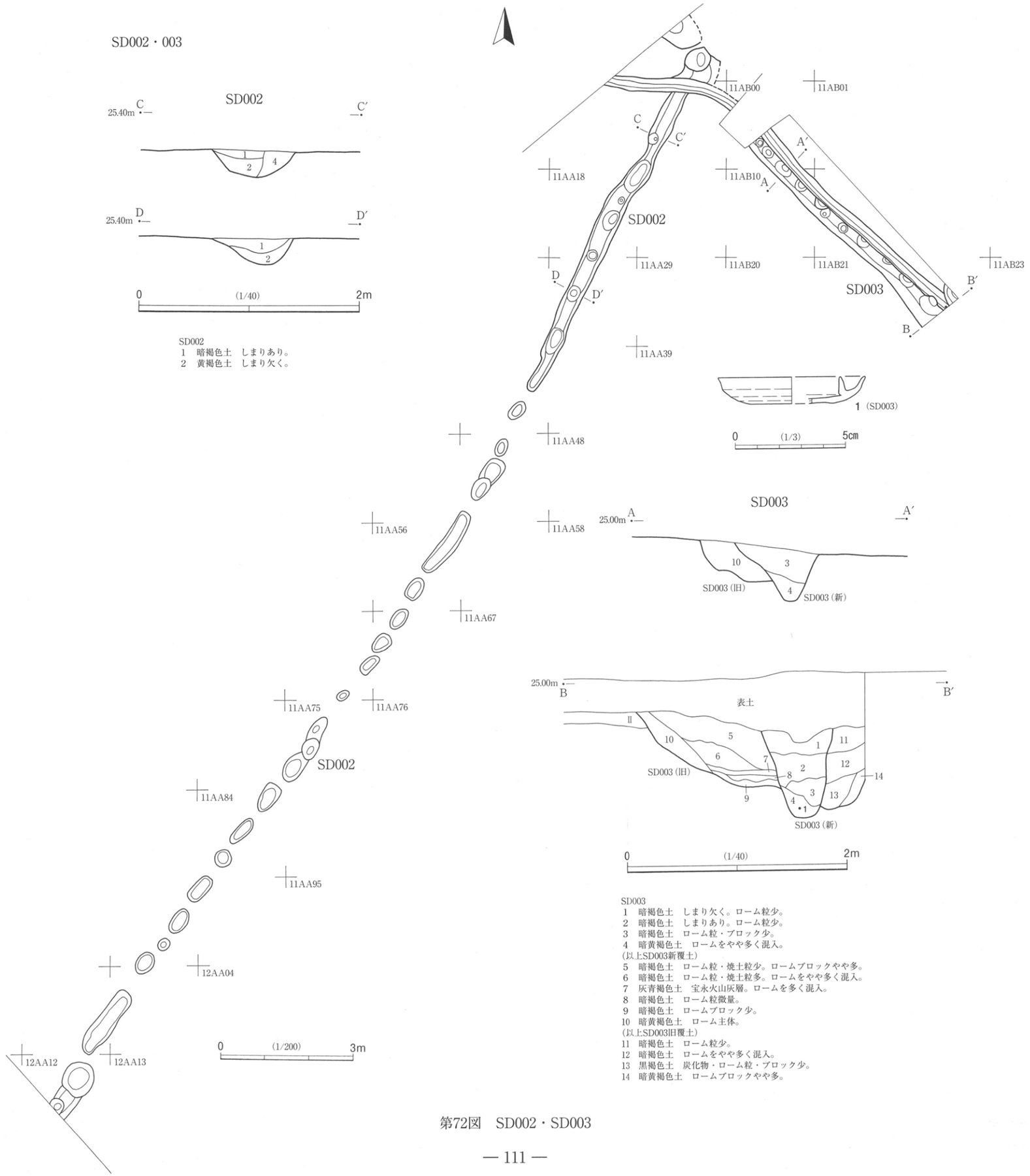
遺物はごく少量の縄文土器片と，土師器の小片が若干出土した。



第71図　SD001

SD002・003

SD002
1　暗褐色土　しまりあり。
2　黄褐色土　しまり欠く。



SD003
1　暗褐色土　しまり欠く。ローム粒少。
2　暗褐色土　しまりあり。ローム粒少。
3　暗褐色土　ローム粒・ブロック少。
4　暗黄褐色土　ロームをやや多く混入。
(以上SD003新覆土)
5　暗褐色土　ローム粒・焼土粒少。ロームブロックやや多。
6　暗褐色土　ローム粒・焼土粒多。ロームをやや多く混入。
7　灰青褐色土　宝永火山灰層。ロームを多く混入。
8　暗褐色土　ローム粒微量。
9　暗褐色土　ロームブロック少。
10　暗黄褐色土　ローム主体。
(以上SD003旧覆土)
11　暗褐色土　ローム粒少。
12　暗褐色土　ロームをやや多く混入。
13　黒褐色土　炭化物・ローム粒・ブロック少。
14　暗黄褐色土　ロームブロックやや多。

第72図　SD002・SD003

SD002（第72図，図版７）

調査区北寄りの10AA99・11AA09・18・28・37・47・56・65・66・75・84・93・12AA02・03・12グリッドに位置する。北東－南西方向に直線的に走る。11AA09グリッドで，SD003とほぼ直交する。

北側では溝の底面に小ピットが連続する形状で，南側では小ピットの連なりとして検出された。幅は約0.7m～1.0mであり，溝部分の深さは概ね約25cm，小ピットの深さはややばらつきがあるものの，10cm～20cmのものが多い。

溝の底面に小ピットが連続する形状は，野馬土手に伴う野馬堀によく見られるものであり，SD002も野馬堀の可能性のある溝としておきたい。ただし，西芝山遺跡付近は，近世小金牧の範囲からははずれていることから，野馬堀であったとしても官営の牧に伴うものではなく，害獣よけとしての意味が強いものであろう。

遺物は土師器の小片が若干出土した。

SD003（第72図，図版18）

調査区北寄りの10AA09・11AA08・09・11AB00・10・11・21・22グリッドで検出した。北西－南東方向に走る溝で，11AA09グリッドでSD002とほぼ直交する。

少なくとも２条の溝が切り合っている。南東側では幅50cm～70cm程度の細い溝（SD003新）と，これに切られる，より幅が広く底面にピットが連続する溝（SD003旧）が並行して走り，SD002と交差する地点で２条の溝が分岐するようである。細いSD003新は真西に向きを若干変え，底面にピットを持つSD003旧はまっすぐ北西に向かうようである。SD003旧は，形態的にSD002に類似し関連が窺える。SD003旧の覆土下層には，宝永火山灰が堆積しており，溝の堀削が18世紀初頭以前であることを示す。一方，SD003新は，おそらくはより西側で検出されたSD004に繋がる可能性が高い。

遺物は土師器の小破片と第18図１が出土した。１は出土した位置からSD003新に伴うものであろう。近世の灯明皿である。全面に鉄釉が薄くかかり，暗褐色を呈する。胎土中に黒色粒を微量含む。調整は外面ロクロナデ，底面は回転ヘラケズリである。推定口径10.0cm，推定底径5.7cm，器高1.8cmである。

SD004（第73図，図版７）

調査区北西端で部分的に検出した溝である。検出したグリッドは（１）11AA06・07，（２）10AA90・11AA00・01，（３）11Z29・39の３か所で，それぞれトレンチ状に調査区を拡張して部分的に検出した。図示したのはこのうちの（１）と（２）の２か所である。

調査時には，SD003新に繋がる東から，（１）を経由して西に向い，（２）の部分で方向を南西に変え，（３）方向に向かうことが想定された（第４図遺構全測図参照）。しかし（２）では２条の溝が切り合っているようにも見え，SD003新から繋がった東－西方向に走る細い溝が，（２）の地点で北東－南西方向の溝と合流した可能性もあろう。

（１）の地点では，幅約90cm，深さ約45cm，（２）の地点では幅約1.7m，深さ約45cmである。（３）地点は，立ち上がり等がはっきりせず詳細不明である。

遺物は出土しなかった。

SD005（第73図，図版７）

調査区北寄りの11Z47・57グリッドで検出した。数条の細い溝と土坑状の掘り込みが組み合わさり，複雑な形状である。深さはそれほど深くなく，数cmから10cm程度である。

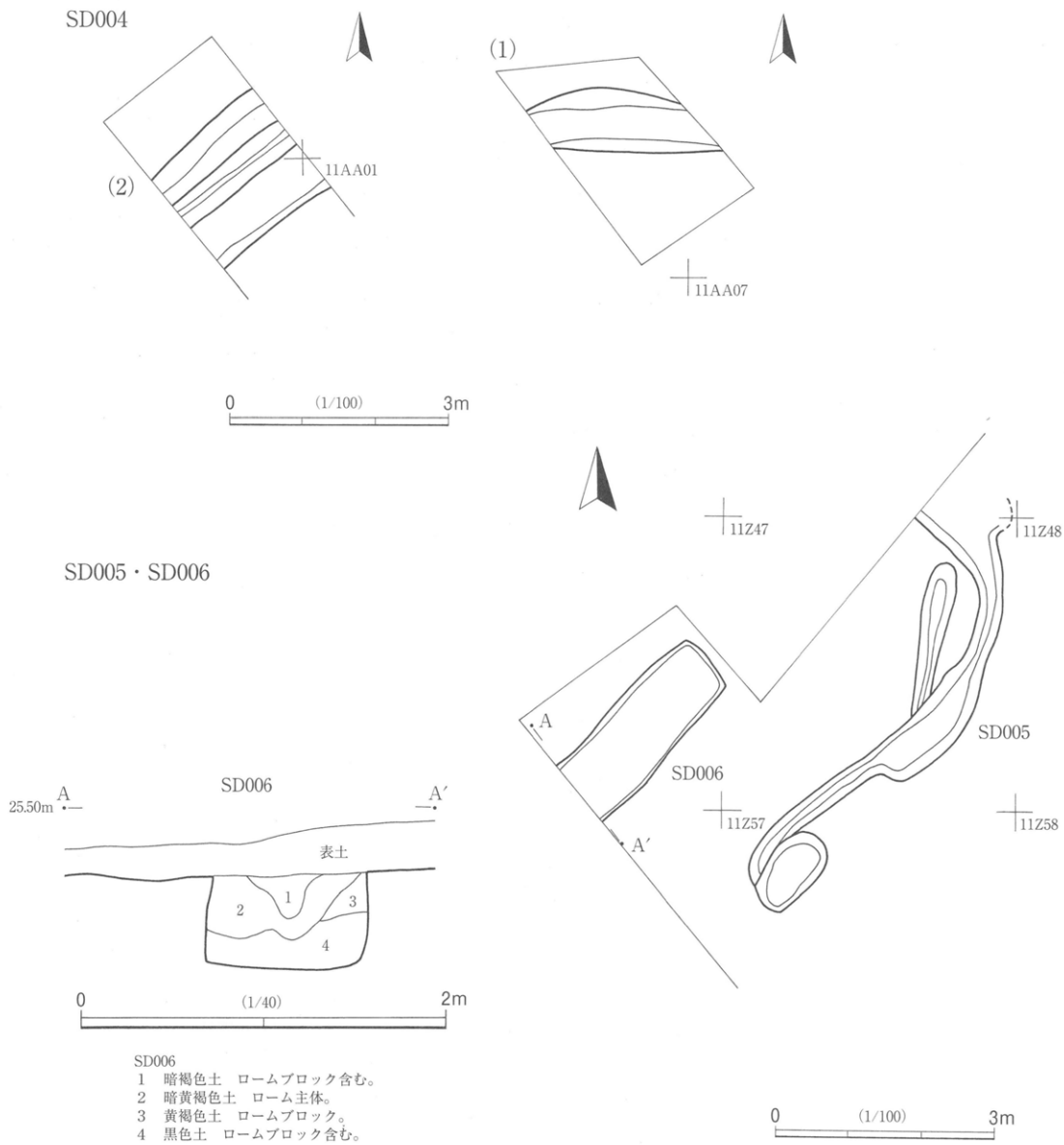
調査時には，SD004につながる可能性が考えられたが，確証はなく，別の遺構として扱っておく。

遺物は出土しなかった。

SD006（第73図，図版７）

11Z46・56グリッドで検出した。幅約１ｍで，深さは約50cmである。断面形は箱形を呈しており，いわゆるイモ穴である可能性もあろう。

遺物は，ごく少数の土師器小片と陶器小片が出土したが，図化可能なものはなかった。



第73図　SD004・SD005・SD006

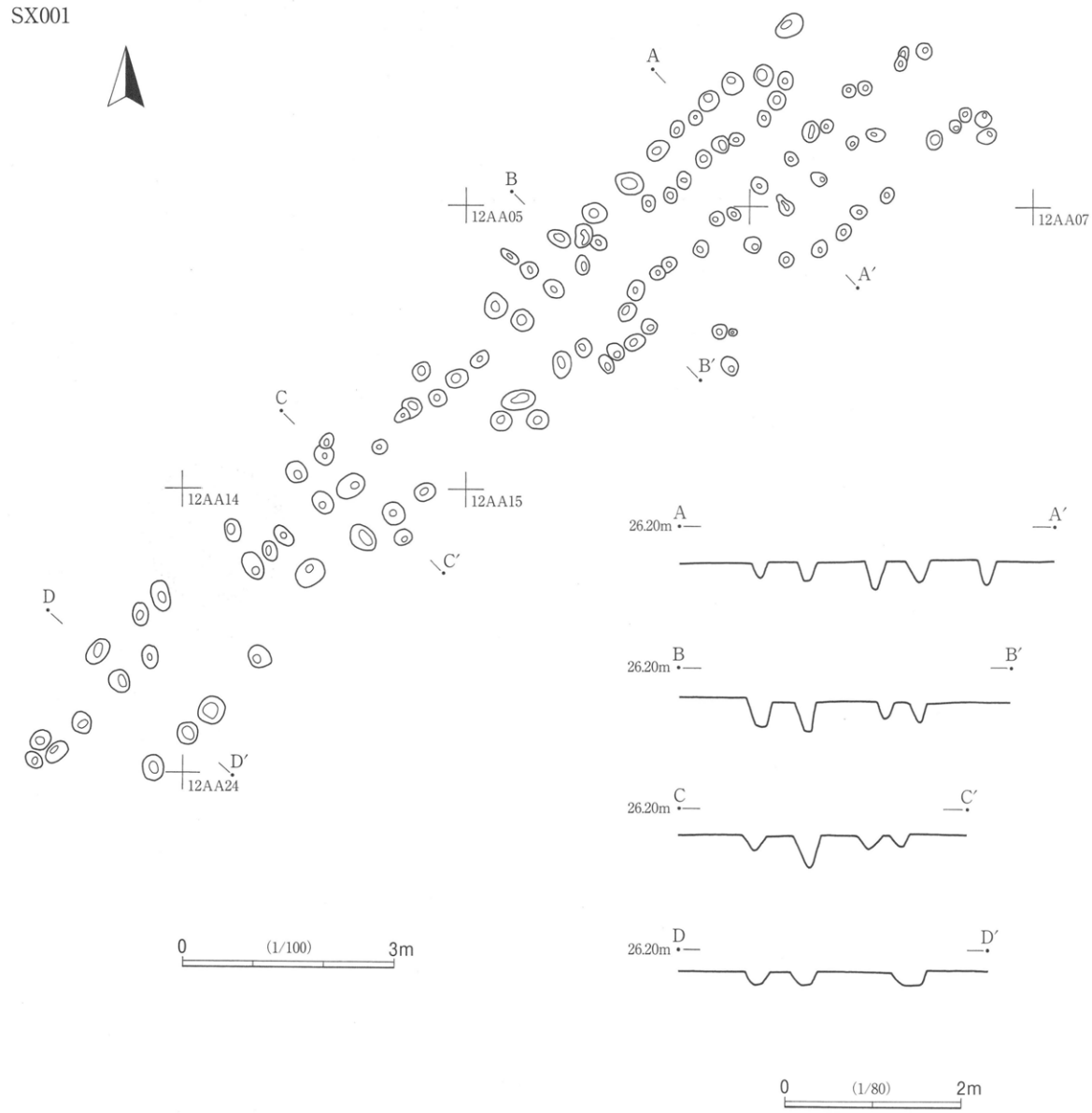
第３節　柵列

SX001（第74図，図版７）

11AA05・06，12AA04・05・06・13・14グリッドで検出した。北側には，ほぼ軸を同じくして，SD002が存在する。

長さ約17m，幅約2.5m～3.5mの範囲に，小ピットを104基検出した。小ピットは北東－南西方向に連なっており，大きく見ると，２基１対の小ピット列が２条あるようにも見える。小ピットは，最大径約20cm～50cm，深さ約20cm～40cmのものが多い。

遺物は出土しなかった。



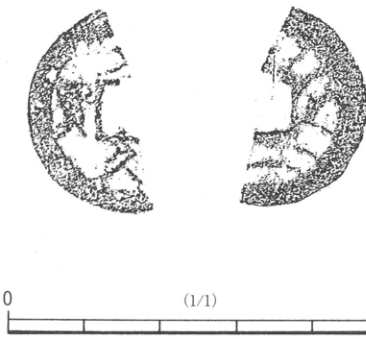
第74図　SX001

第４節　グリッド出土遺物

銭貨（第75図，図版18）

11AA74グリッドで出土した。近世後期の文久永宝である。約1/2が残存する。

計測値は，外縁外径26.83㎜，外縁内径19.62㎜，内郭外径8.41㎜，内郭内径5.84㎜（いずれも１か所で計測），外縁厚1.13㎜（３点計測の平均値），文字面厚1.05㎜（２点計測の平均値），重量1.74ｇである。



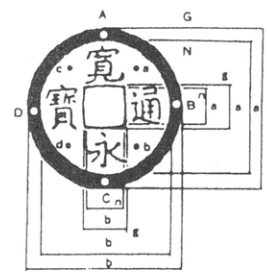
第75図　銭貨

＊銭貨の各部測点については下のとおりである。

外縁外径 $G = \frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内径 $N = \frac{Na+Nb}{2}$，内郭外径 $g = \frac{ga+gb}{2}$

内郭内径 $n = \frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T = \frac{A+B+C+D}{4}$，文字面厚 $t = \frac{a+b+c+d}{4}$



第６章　まとめ

八千代市西芝山遺跡では西八千代北部地区土地区画整理事業に伴い，記録保存のための埋蔵文化財発掘調査をおこなった。調査は遺跡範囲のかなりの部分に及ぶと考えられる24,000㎡あまりを対象として，断続的に３か年に及ぶものであった。この調査は西芝山遺跡における初めての考古学的調査であり，旧石器時代から中・近世に至るまでの貴重な成果が得られた。特に旧石器時代の資料は充実していると言えよう。以下，調査の成果について簡単にまとめてみたい。

第１節　旧石器時代

１　概要

旧石器時代の遺物は，調査範囲の北西部と南西部でまとまった遺物集中地点が検出された。西芝山遺跡は印旛沼に注ぐ新川の支流である桑納川から，南へ細長く入り込む支谷の左岸台地上に存在する。旧石器時代の遺物が検出された地点は，調査区の南北に存在するこの狭長な支谷に向かう，二つの小谷の谷頭付近を中心としている。遺物の出土総数は343点に及び，八千代市北西部における新たな，しかも良好な旧石器時代遺跡として評価し得るものであろう。第１章の歴史的環境でも触れたが，西芝山遺跡の位置する新川・桑納川・高津川に囲まれた範囲は，萱田遺跡群などの旧石器時代遺跡が比較的多く知られており，本遺跡もこの地域における旧石器時代の資料集積にさらに厚みを加える資料と言えよう。

本報告書では，検出した石器群を出土状況等の検討から，石器集中１～10までの10地点の石器集中地点として分離した。さらに出土層位に基づいて，石器集中１～６までをAT下位石器群，石器集中７～10をAT上位石器群として報告した。平面的な分布としては，上述の二つの小支谷のうち，北側の小支谷付近に，AT下位石器群として石器集中１，AT上位石器群として石器集中７・８が位置する。南側の小支谷付近には，AT下位石器群として石器集中２～６が位置し，AT上位石器群として石器集中９・10が位置する。以下，各地点ごとに，近年の印旛郡内出土資料を用いて編まれた旧石器時代編年の成果[1]と対比しつつ概観してみたい。

２　AT下位石器群

（石器集中１）

概ねⅨ層下部を中心とした小規模な石器集中地点である。出土した石器が少なく詳細は不明である。出土層位からは印旛Ⅲa期に相当する可能性がある。

（石器集中２）

概ねⅨ層上部からⅦ層を中心とした石器集中地点である。東西方向で約20mの範囲にわたって石器が出土している。全体で同一母岩と考え得る石材を共有するが，平面分布と接合関係などを勘案し，ａ～ｃの３つの分布域に分けて考えた。分布域ａは石材としては安山岩Ａ製の石器を主体とし，珪質頁岩製の小型のナイフ形石器を含む。ナイフ形石器は素材を逆位に用い，バルブを入念に除去している。比較的整った縦長剥片の製作過程を窺わせる接合資料が存在する。分布域ｂは，石材として，良質ないわゆるチョコレ

ート色の珪質頁岩が多い。頁岩製の小型のナイフ形石器と，チョコレート色珪質頁岩製の削器が存在する。チョコレート色珪質頁岩製の石器としては，他に中型の石刃の接合資料が存在し，またいわゆる小石刃[2]の存在が認められる。分布域ｃはチョコレート色珪質頁岩製が主体の小規模な集中で，やや大型のナイフ形石器を含む。全体として，大型の石刃を欠くものの，石材の特徴，ナイフ形石器が入念にバブル除去をおこなう点，小石刃の存在などからすると，おそらく印旛Ⅳ期に相当するであろう。

（石器集中３）

Ⅸa層中のごく小規模な石器集中地点である。剥片のみの構成で詳細は不明である。出土層位からは印旛Ⅲb期に相当する可能性がある。

（石器集中４）

かなり上下への拡散が大きいものの，概ねⅨ層中で出土するものが多い。大規模な攪乱坑が存在し，Ⅵ層より上位の層は調査開始以前に攪乱されており，土層の遺存状況があまり良くない。石材としては珪質頁岩と安山岩Ａが多く，玉髄・ホルンフェルス・流紋岩など多彩である。製品類が少なく判然としないが，剥片は縦長剥片の比率が高い。出土層位と併せて考えると，印旛Ⅲb期に相当する可能性があろう。

（石器集中５）

概ねⅨ層上部を中心とした石器集中である。東西方向で約20ｍの範囲で石器が出土する。接合関係や平面分布等からａ～ｃの分布域に分けて考えた。分布域ａは，多種の珪質頁岩を用い，ホルンフェルス製の台形様石器を含む。分布域ｂは，安山岩Ａと多種の珪質頁岩が主で，安山岩Ａ製の削器が存在する。分布域ｃは安山岩Ａが主体で，剥片と石核で構成される。全体として，石材は多様な珪質頁岩と安山岩Ａが主体で他の石材も若干含む。製品類は少なく不明な点が多いが，台形様石器を含み，ナイフ形石器を欠く。石刃は見られず，剥片で整ったものは少ない。出土層位と併せて考えると印旛Ⅲｂ期に相当する可能性があろう。

（石器集中６）

Ⅶ層を中心とした石器集中である。石材は安山岩Ａでほぼ占められる。製品類は少ないが，楔形石器と，楔形石器の可能性がある小型の石核がある。出土層位と併せて印旛Ⅳ期に相当する可能性があろう。

３　ＡＴ上位石器群

（石器集中７）

おそらくⅥ層を中心とした小規模な石器集中地点である。出土点数は少ないものの，豊富な製品類を出土した。石材はすべて黒曜石で占められ，ナイフ形石器，削器，石錐が出土した。出土したナイフ形石器の１点は，先端部が切り出し状になるものの，石刃を用いた二側縁加工の細身のものである。印旛Ⅴ期に相当しよう。

（石器集中８）

Ⅵ層を中心とする小規模な石器集中である。石材としては黒曜石・珪質頁岩・安山岩Ａなどで構成され，多彩である。製品類は少なく，角錐状石器を含む。出土層位からは印旛Ⅴ期に相当する可能性がある。

（石器集中９）

Ⅳ・Ⅴ層を中心とするごく小規模な石器集中である。玉髄が主体で，２点の掻器を含む。出土層位と併せて，印旛Ⅵ期の可能性があろう。

（石器集中10）

Ⅲ層中の石器集中地点である。東西方向で約16mの範囲に石器が出土する。礫群の痕跡かと思われる小型の破砕礫の集中があるが，その他は石器の顕著な集中は見られず，散在する。石材は黒曜石・珪質頁岩・玉髄・チャート・ホルンフェルス・安山岩Aなど多彩である。製品類として黒曜石製の小型尖頭器と角錐状石器がある。層位的には判断が難しいが，小型の尖頭器の存在からすると，印旛Ⅸ期に相当する可能性があろう。

4　小結

各石器集中地点について，旧石器時代のいわゆる印旛編年に対比を試みた。不確実な要素もあるが，大まかな変遷がたどれよう。AT下位石器群では，石器集中１が印旛Ⅲa期の可能性があり，西芝山遺跡で最も古く遡る可能性がある。印旛Ⅲb期は，石器集中３～５が相当する可能性があり，この３地点は調査区南側の小支谷付近に位置する。いずれも多様な珪質頁岩と安山岩Aを主要な石材とすることで共通する。印旛郡Ⅳ期の可能性があるのは，石器集中２と石器集中６で，この２地点も南側の小支谷付近に位置する。石材や石器群の構成が，該期の特徴とされる石器群の特徴と比較的良く一致する。

AT上位石器群では，印旛Ⅴ期に石器集中７・８が相当する可能性がある。この２地点は調査区北側の小支谷沿いに位置する。印旛Ⅵ期には，石器集中９が相当する可能性がある。印旛Ⅸ期には石器集中10が相当する可能性があり，西芝山遺跡の旧石器時代の最後を飾るものである。

第２節　縄文時代以降

縄文時代の遺構・遺物は少なく，遺構としては陥穴１基が検出されたのみである。遺物は早期から後期の土器と石器が少量検出された。土器は各時期のものが少量ずつ検出されただけで，いずれの時期もそれほど活発な活動の痕跡が窺えるものではない。ただし，早期前葉の井草式が，図上で復元できたのは僥倖であった。

古代では，平安時代の住居跡１基と土坑３基を検出した。いずれも断片的な資料であるが，比較的古代の遺構の検出が少ない西八千代北部地区において，該期の確実な居住痕跡として重要であろう。中・近世ではいわゆるシシ穴１基と火葬施設１基，及び溝５条，柵列１条が検出された。溝のうち１条は野馬堀の可能性がある。

注１　酒井弘志・宇井義典　2004『印旛の原始・古代－旧石器時代編－』（財）印旛郡市文化財センター

２　矢本節朗ほか　1996『多古町千田台遺跡』（財）千葉県文化財センター

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（S=約1/10,000）

図版2

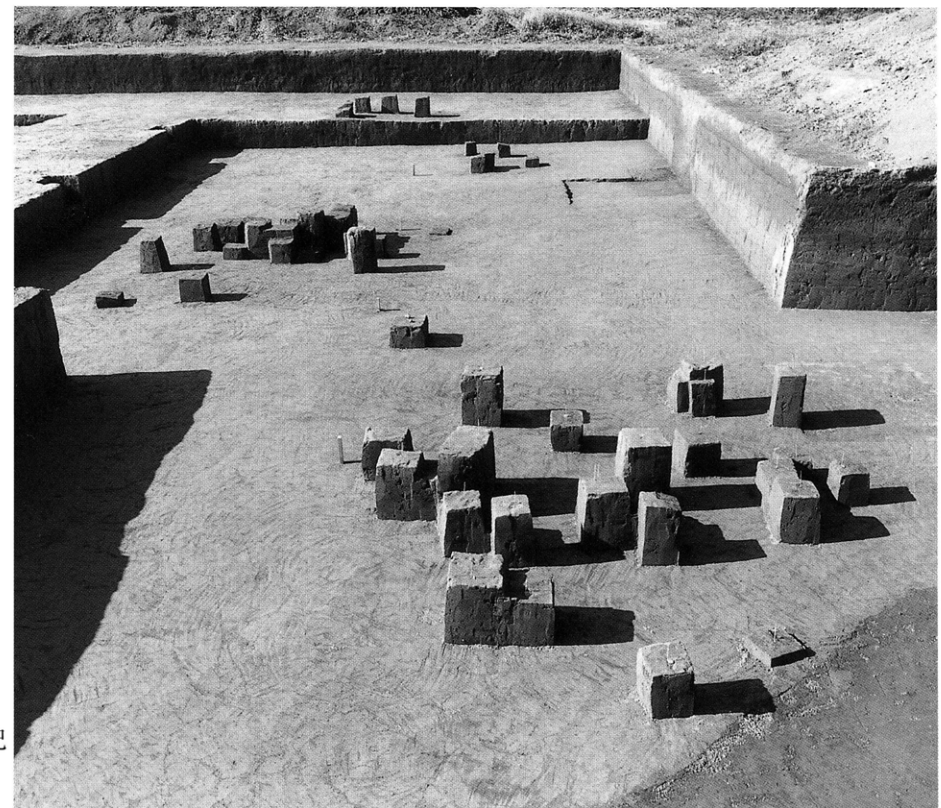
調査前状況（平成９年度）

調査前状況（平成10年度）

C2区遺物出土状況
（石器集中１・８）

C3区遺物出土状況
（石器集中７）

D1区遺物出土状況
（石器集中 10）

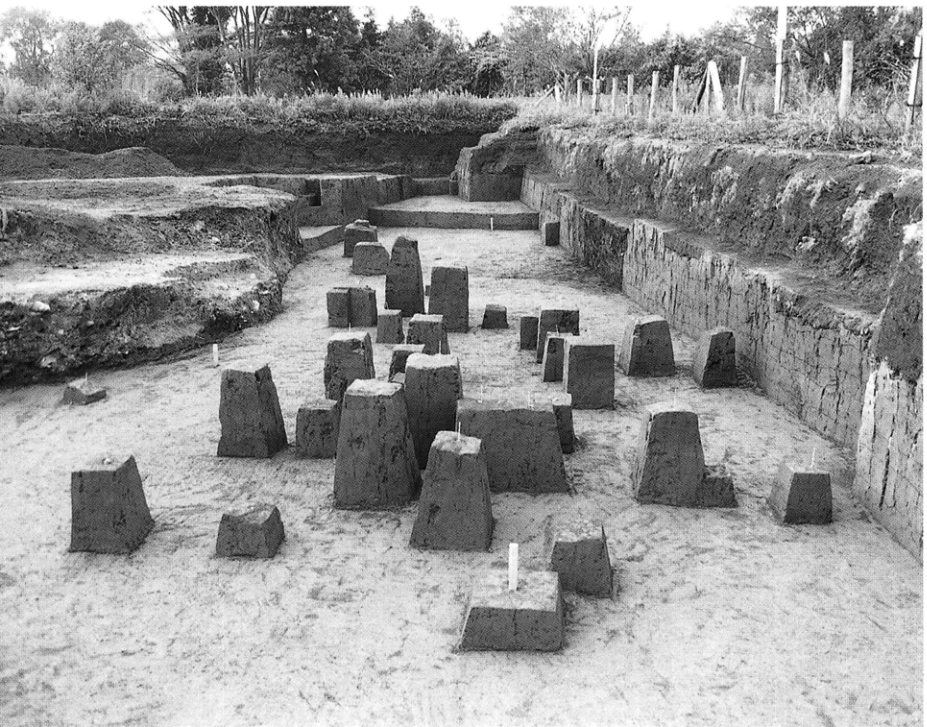


D2区遺物出土状況
（石器集中２・９）

図版4

D2区遺物出土状況
（石器集中２・９）

D3区遺物出土状況
（石器集中３）



D4区遺物出土状況
（石器集中４）

E1区遺物出土状況
（石器集中５）

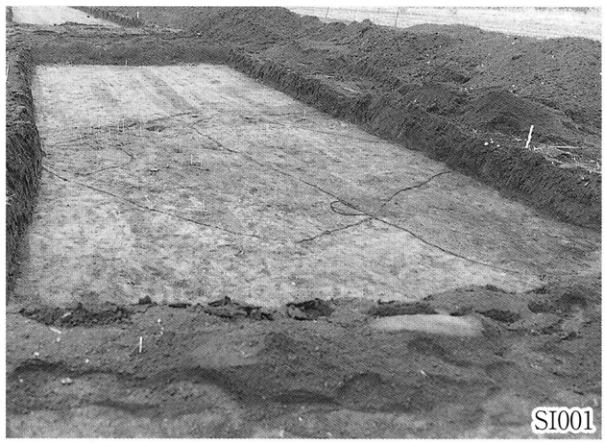
E1区土層断面

E2区遺物出土状況
（石器集中６）

図版6

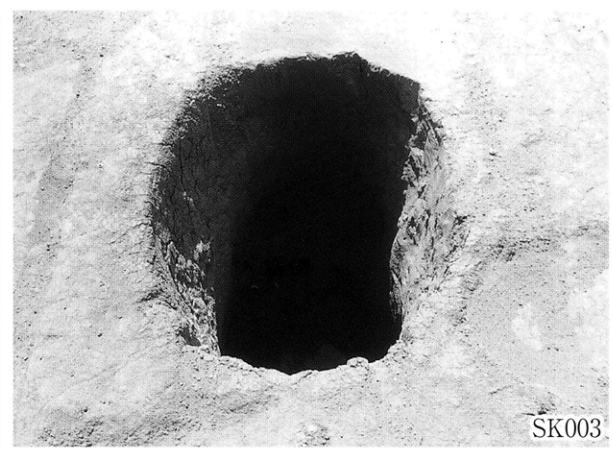
SK005

12AAグリッド


SI001

SK001

SK002


SK003

SK004

SD001

SD002

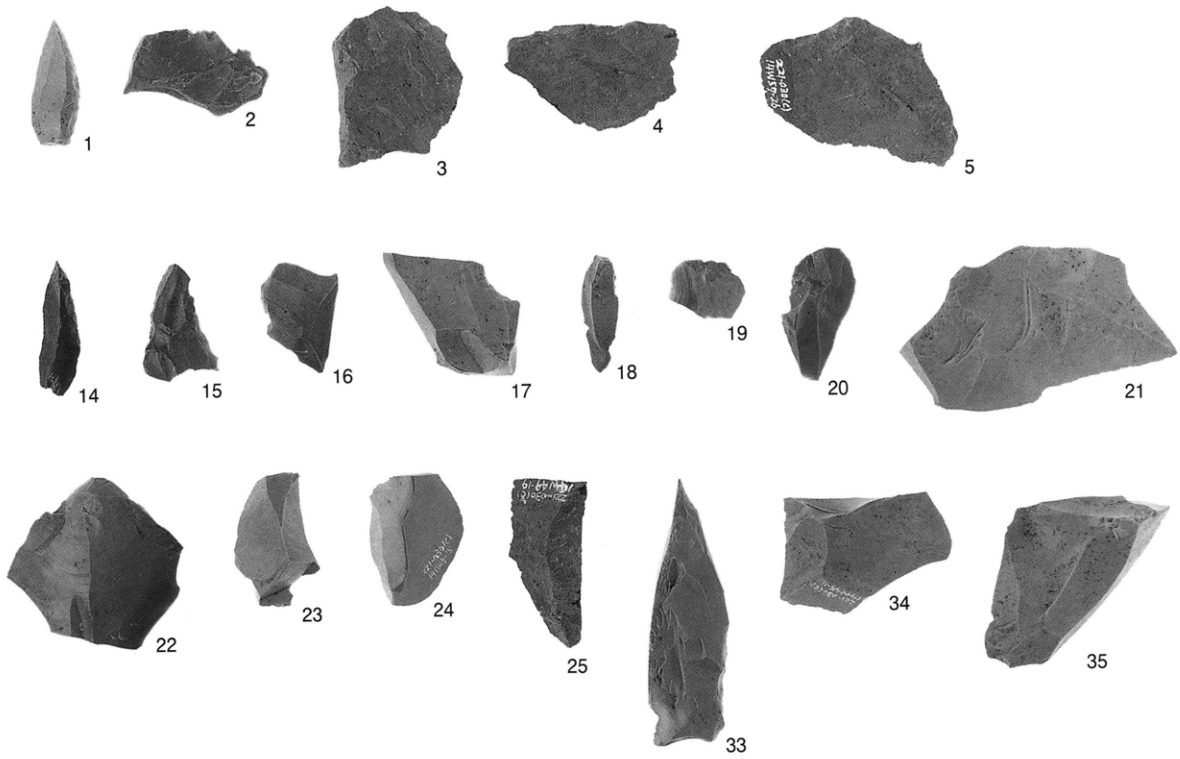
SD004

SD005
SD006

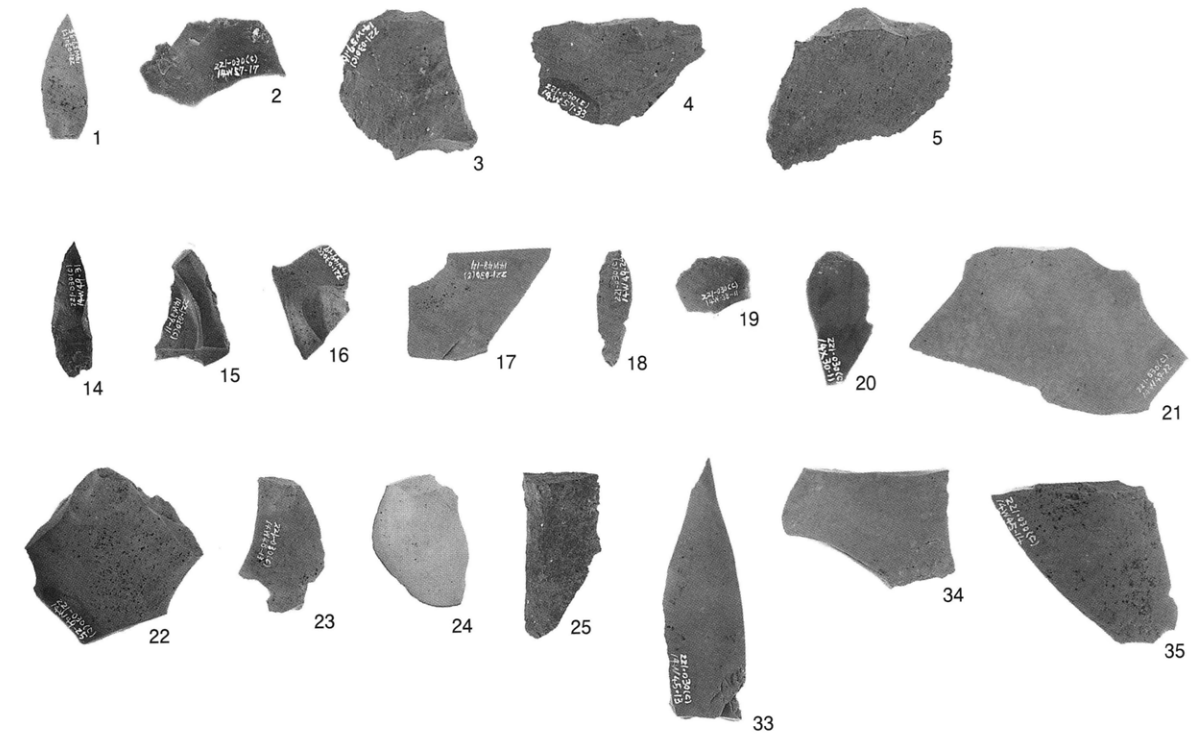
SX001

表　　裏

石器集中１

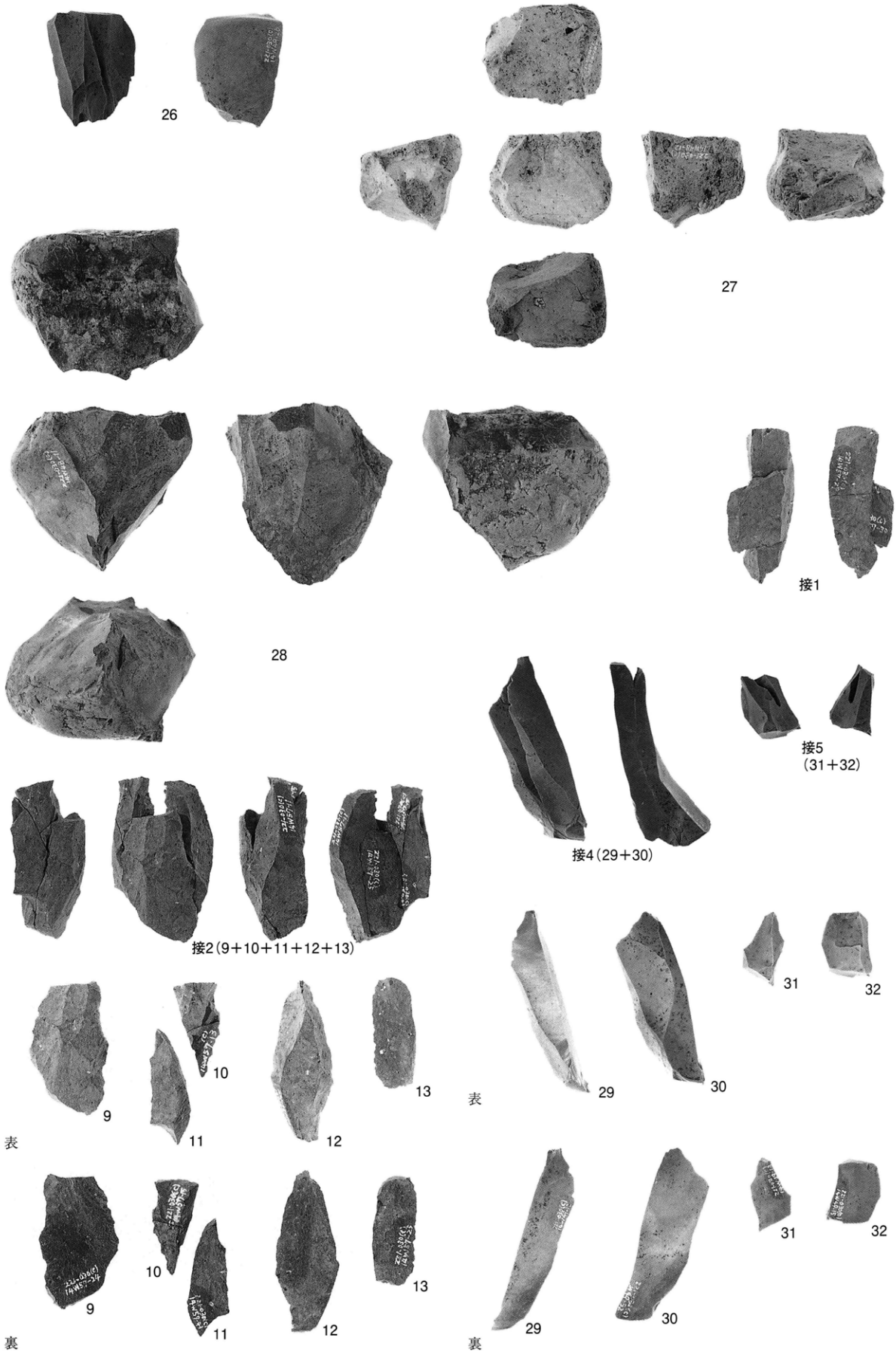

1
2
3
4
5
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
33
34
35

表


1
2
3
4
5
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
33
34
35

裏

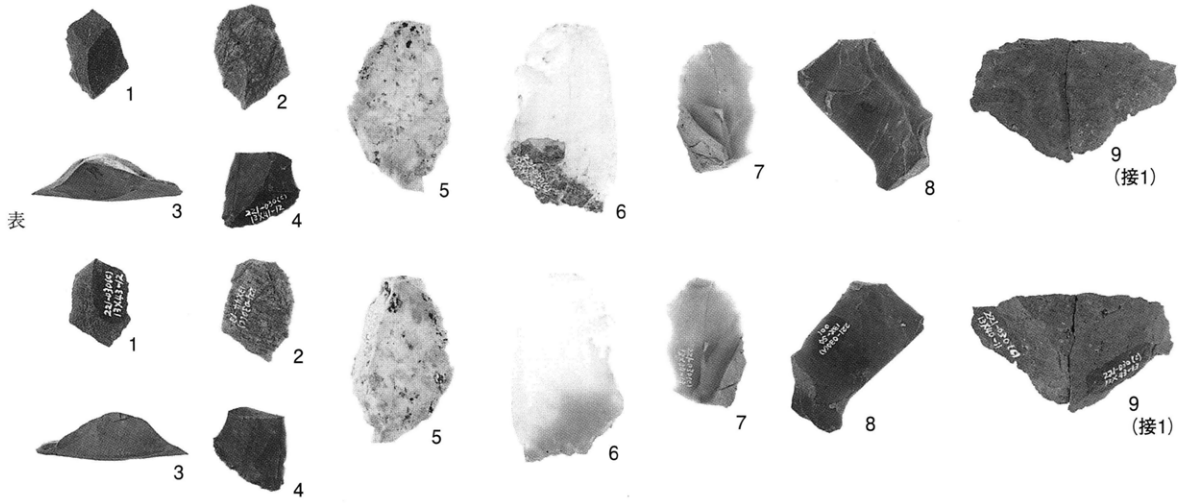
石器集中２（１）

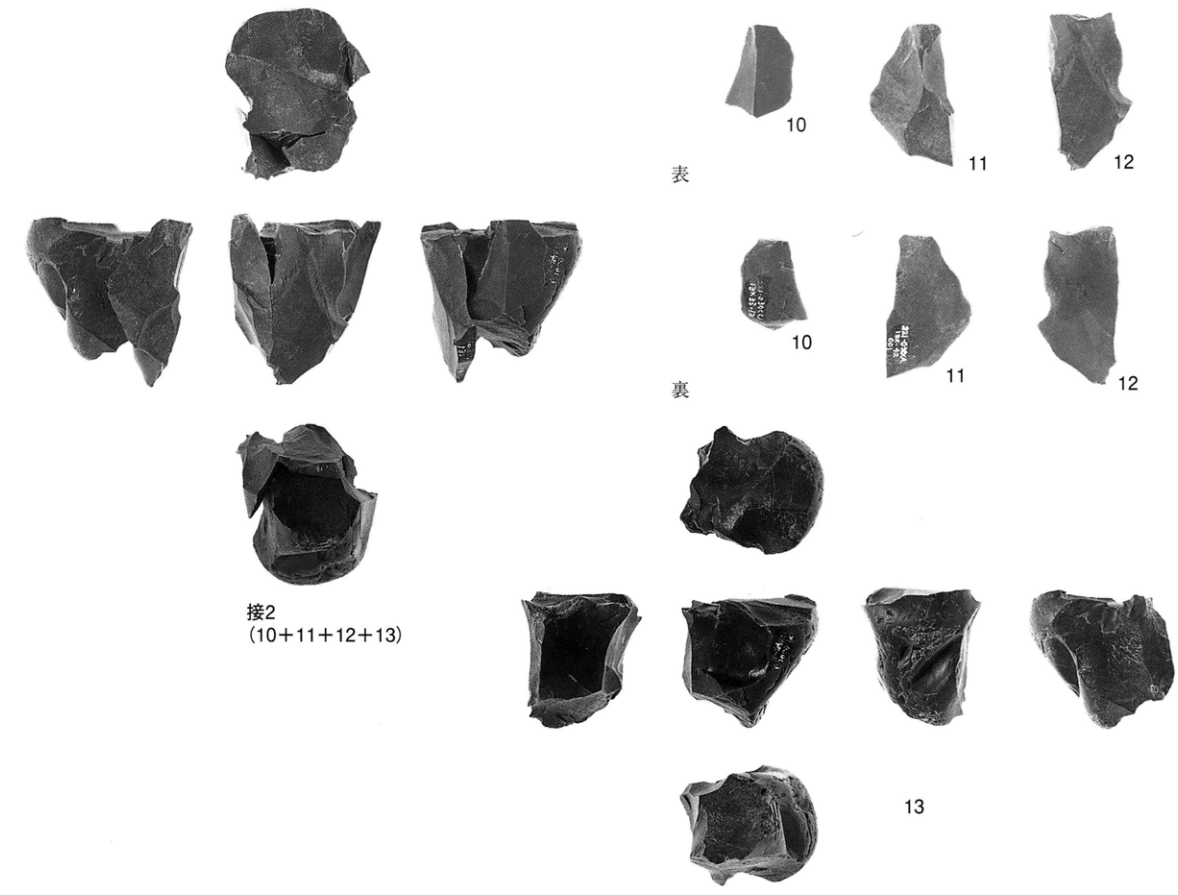

26
27
28
接1
接2(9+10+11+12+13)
接4(29+30)
接5
(31+32)
9
10
11
12
13
29
30
31
32
表
裏

石器集中２（２）

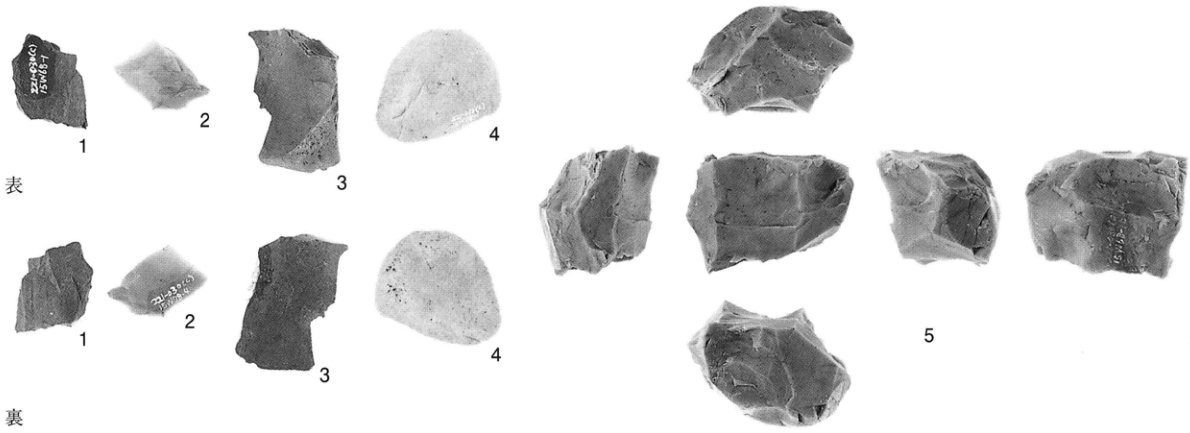
1
2
1
2
表
裏

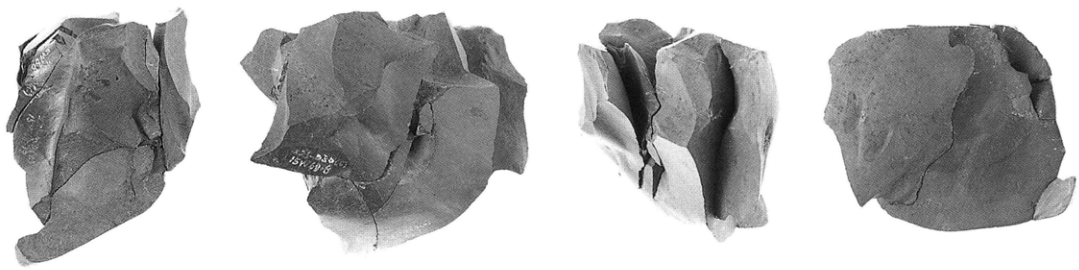
石器集中３


1
2
3
4
5
6
7
8
9
(接1)
表
1
2
3
4
5
6
7
8
9
(接1)
裏

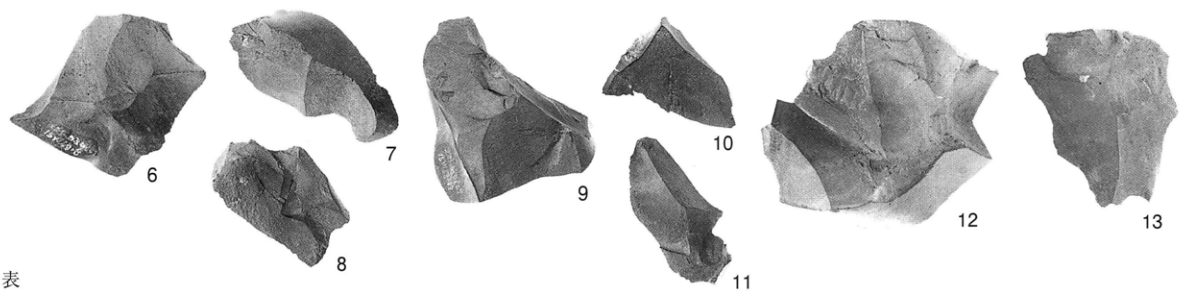

10
11
12
表
10
11
12
裏
接2
(10+11+12+13)
13

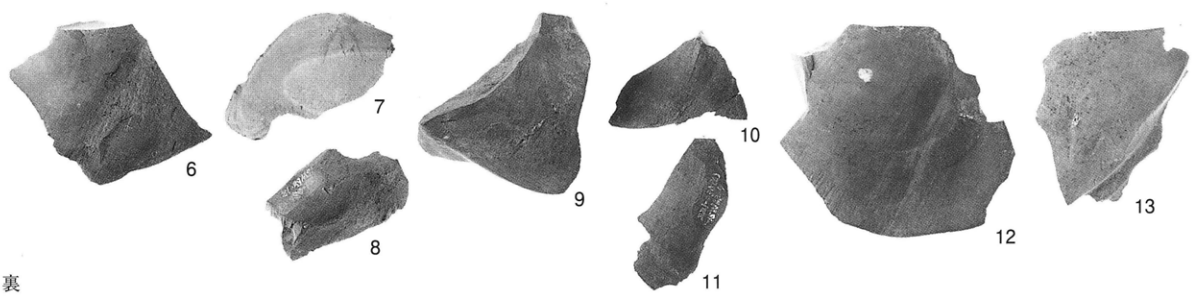
石器集中４



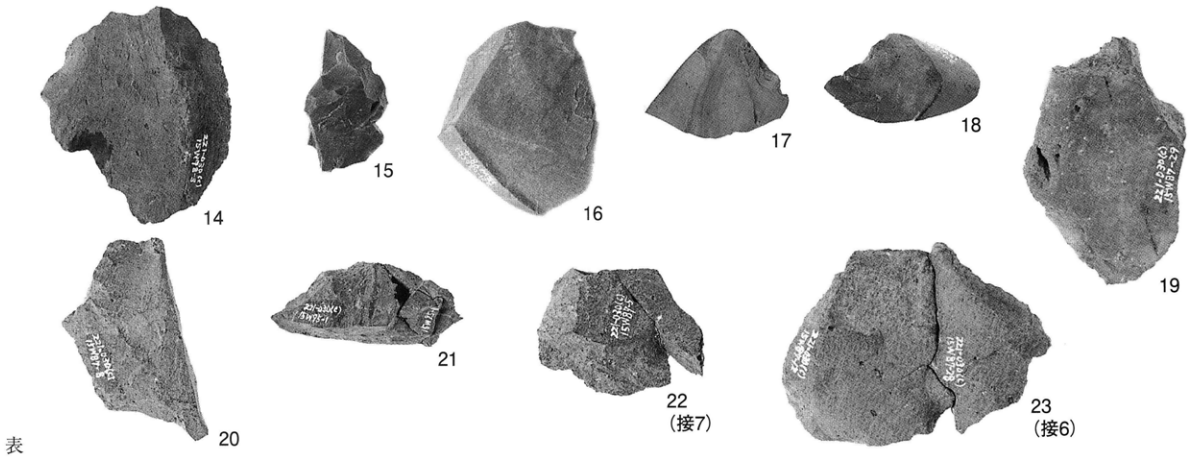


接1
(6+7+8+9+10+11+12+13)

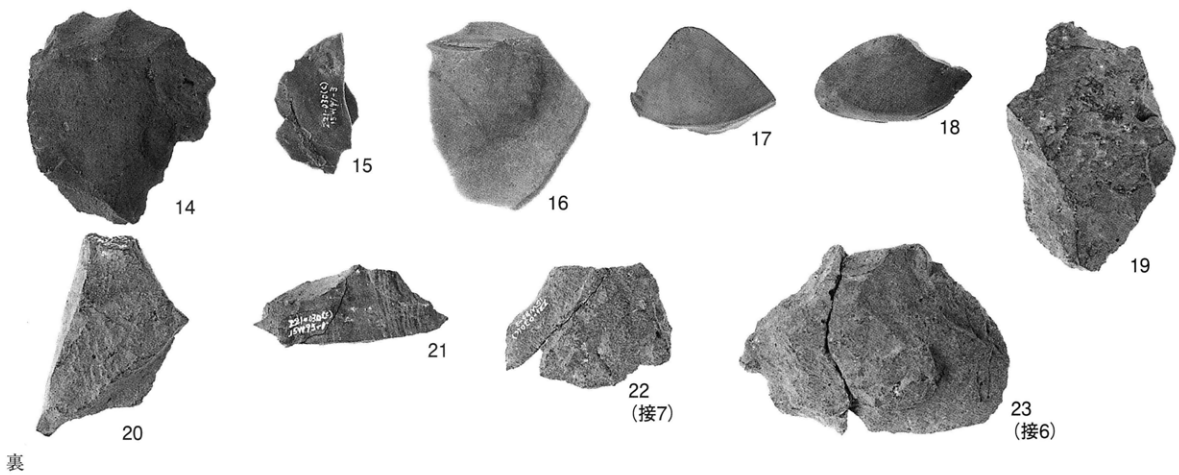




石器集中５（１）

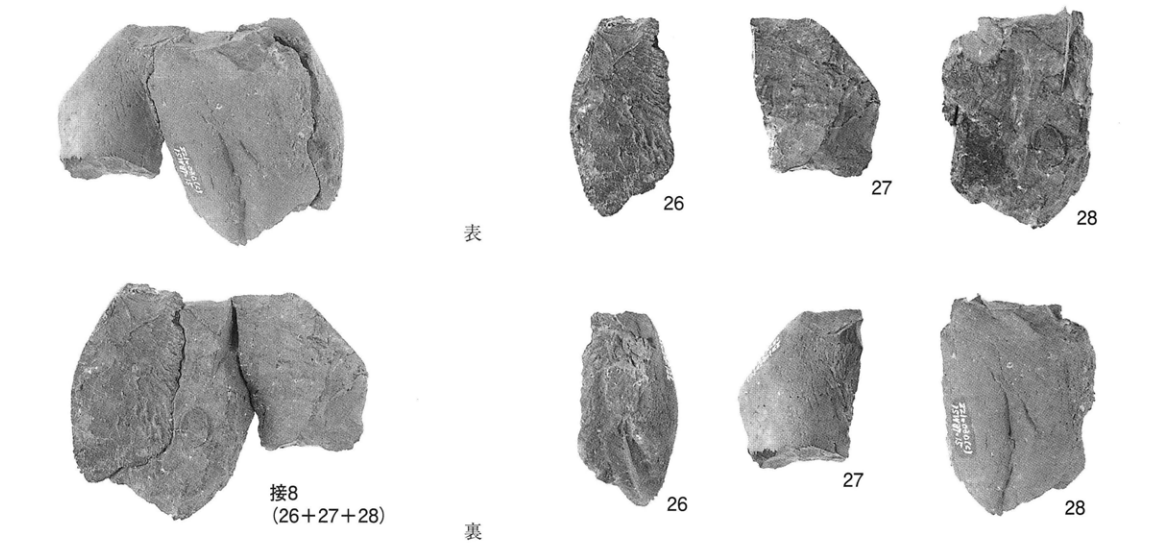

14
15
16
17
18
19
20
21
22
(接7)
23
(接6)

表


14
15
16
17
18
19
20
21
22
(接7)
23
(接6)

裏

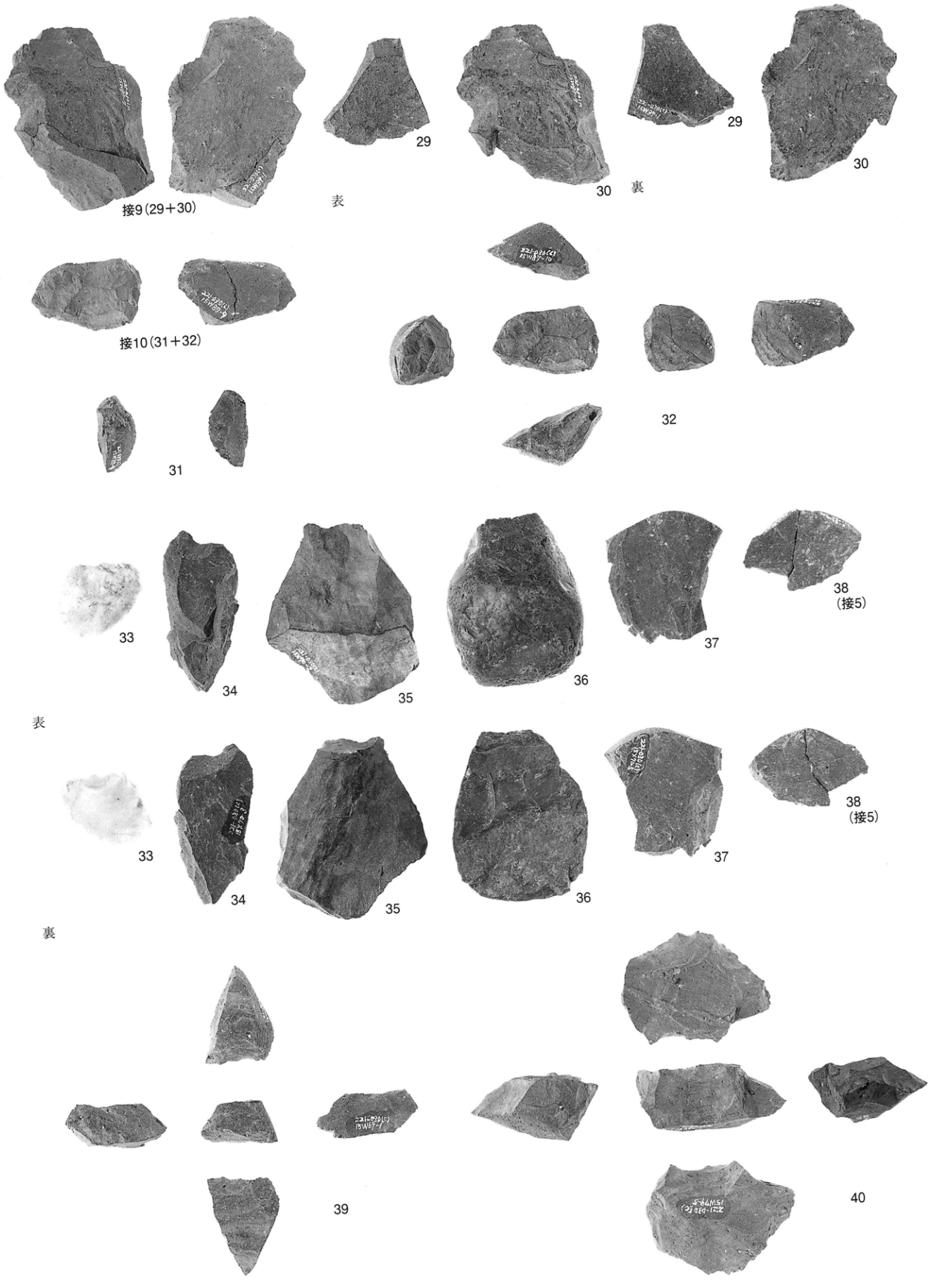
接2(24+25)
24
25


接8
(26+27+28)
26
27
28

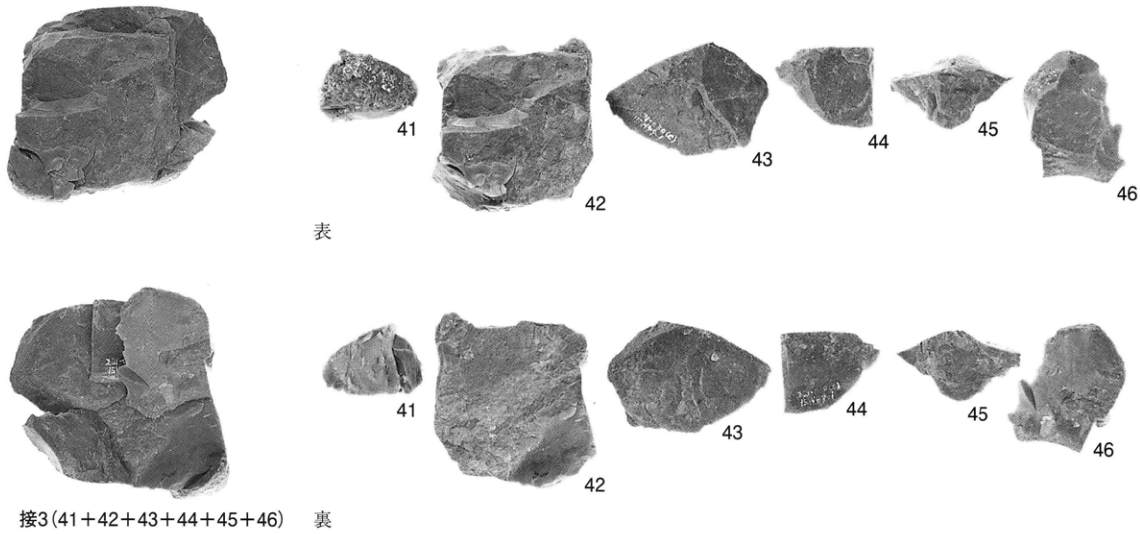
表

裏

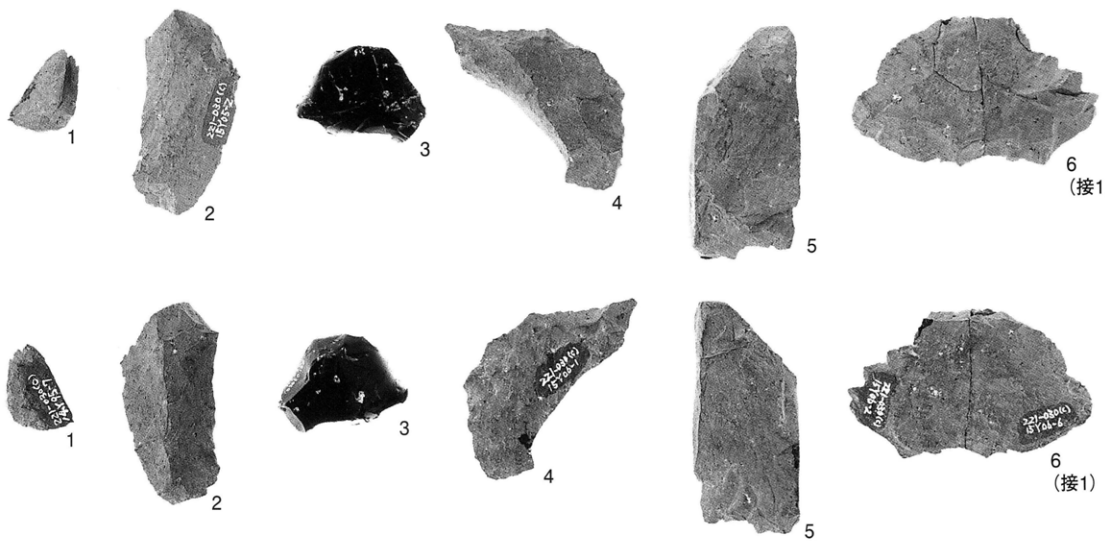
石器集中５（２）

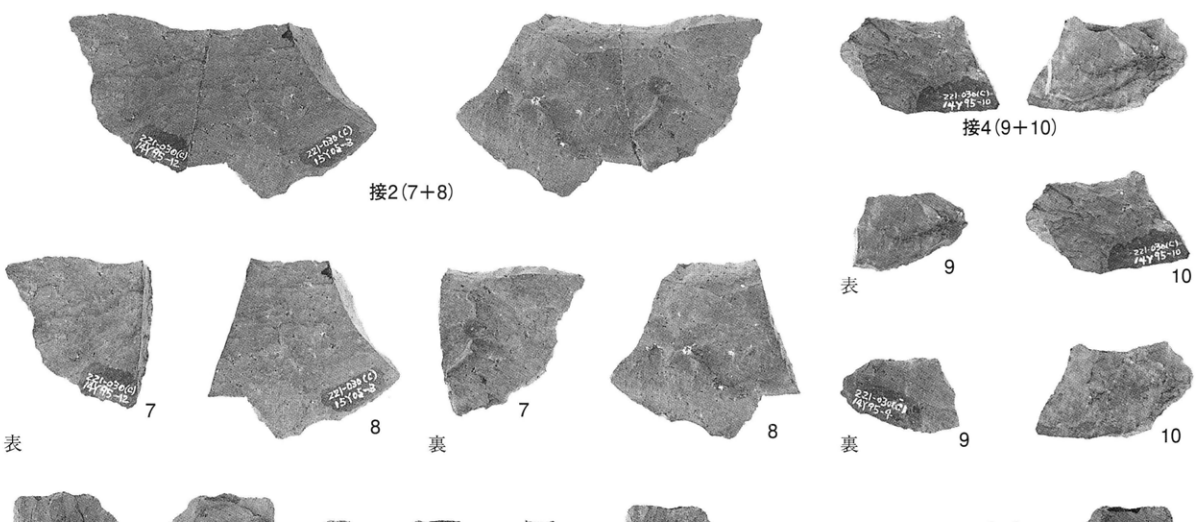

接9(29＋30)
29
表
30
裏
29
30
接10(31＋32)
31
32
33
34
35
36
37
38
(接5)
表
33
34
35
36
37
38
(接5)
裏
39
40

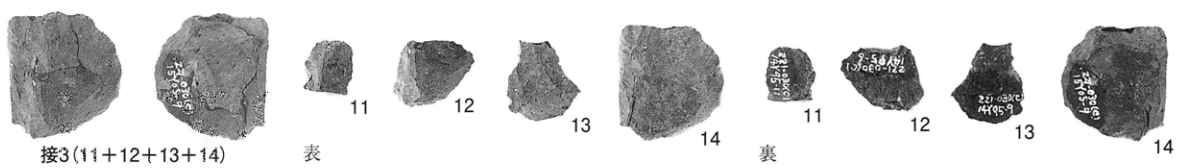
石器集中5（3）



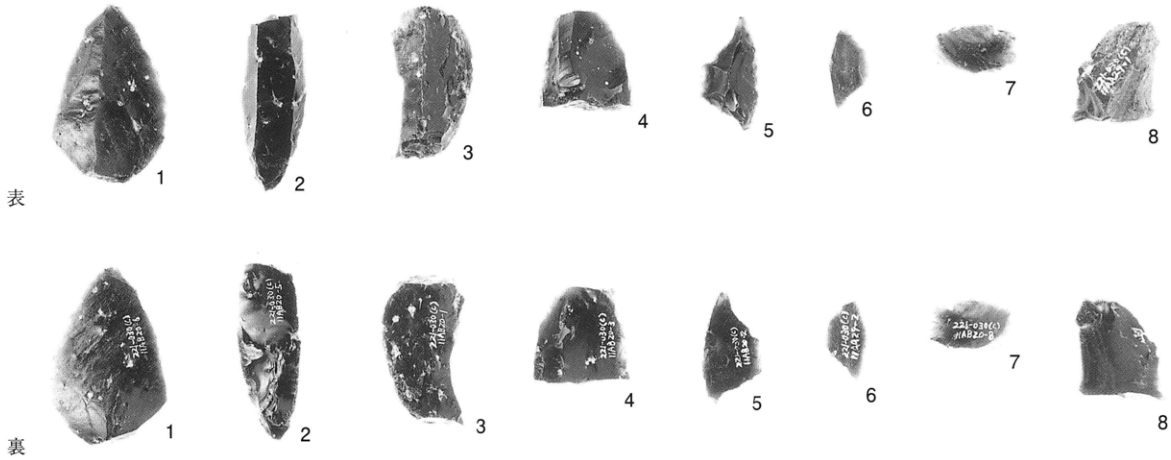
石器集中５（４）



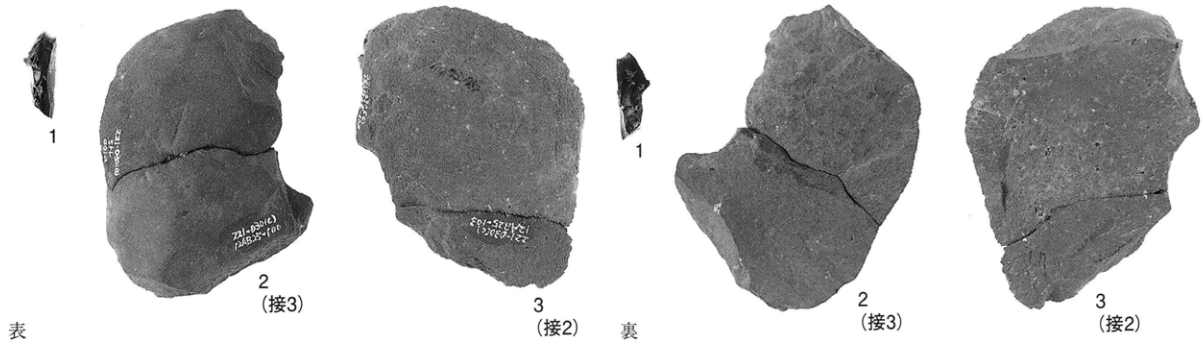


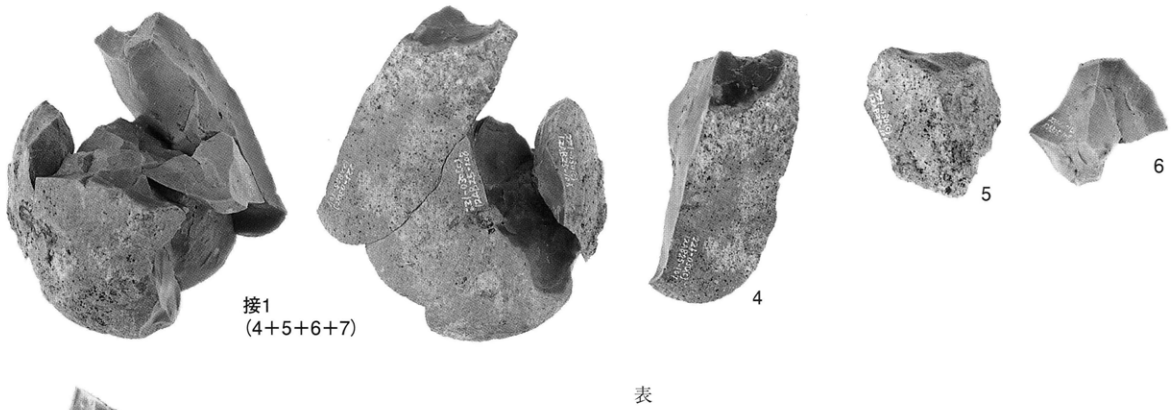


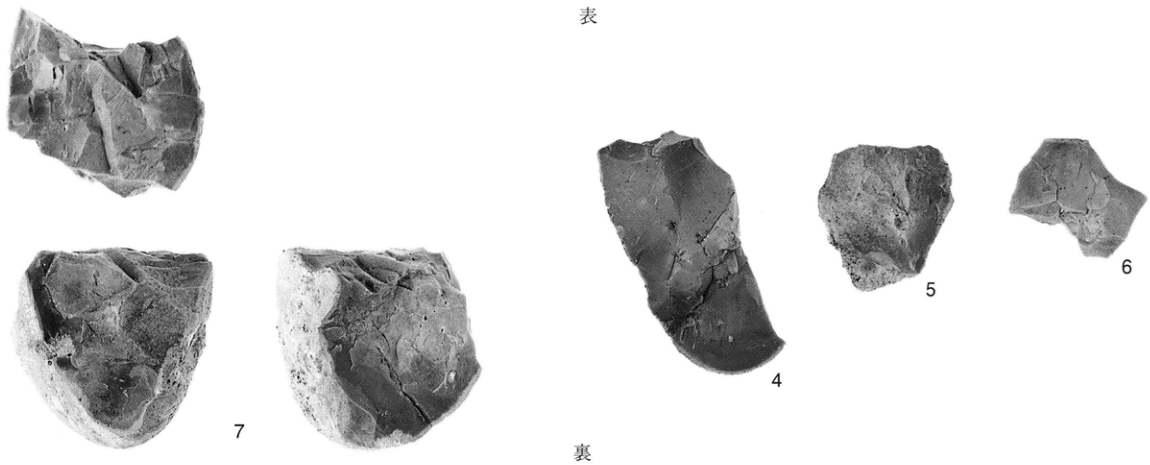
石器集中６



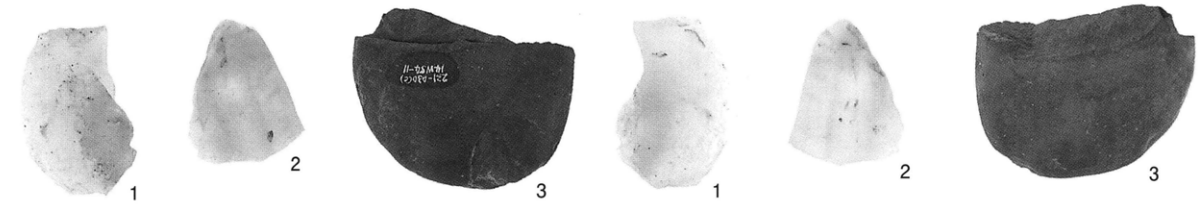
石器集中７



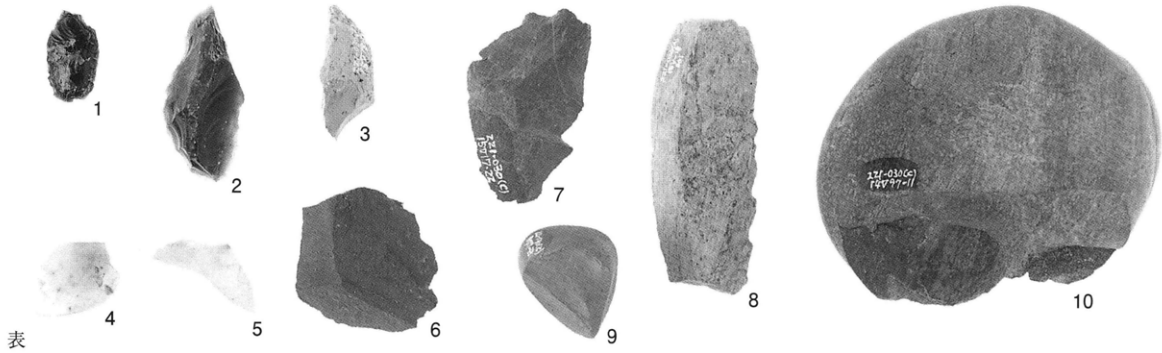


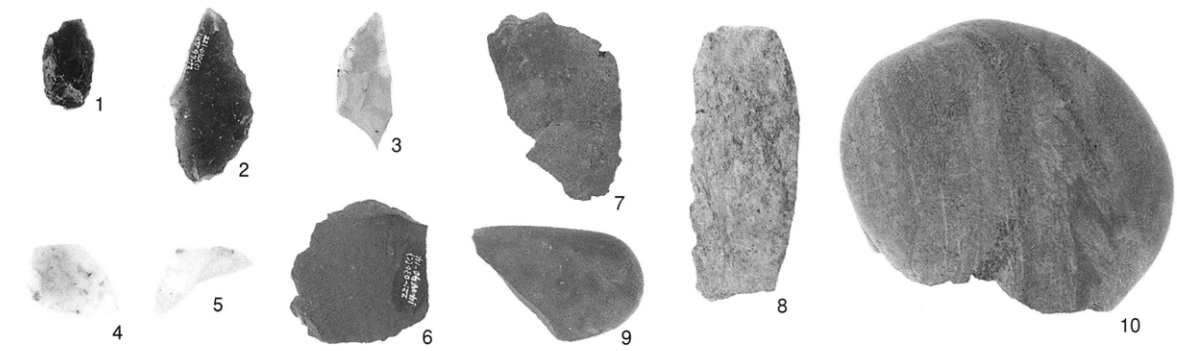


石器集中８

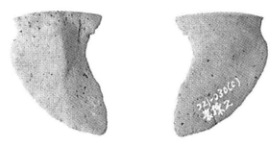


石器集中９

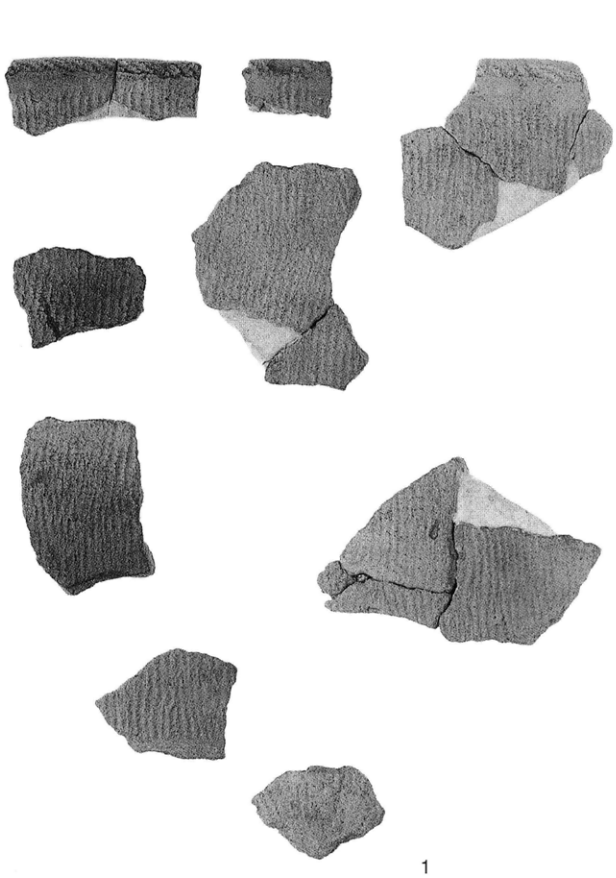




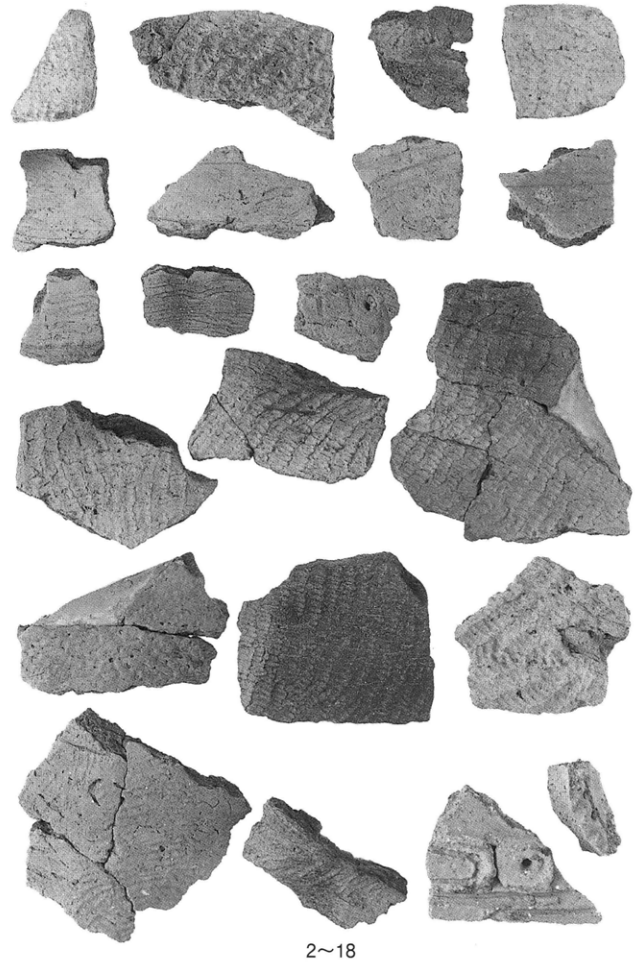
石器集中10



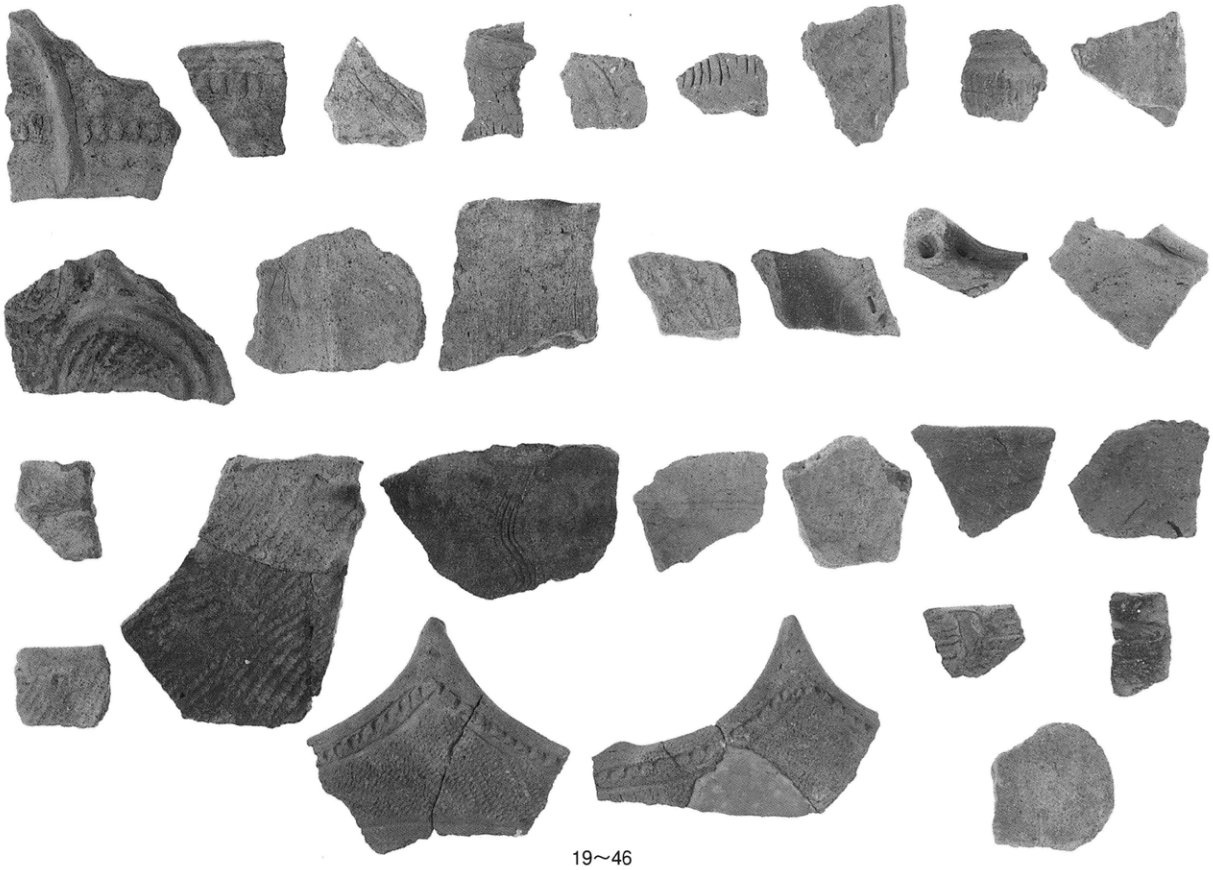
単独出土石器



1

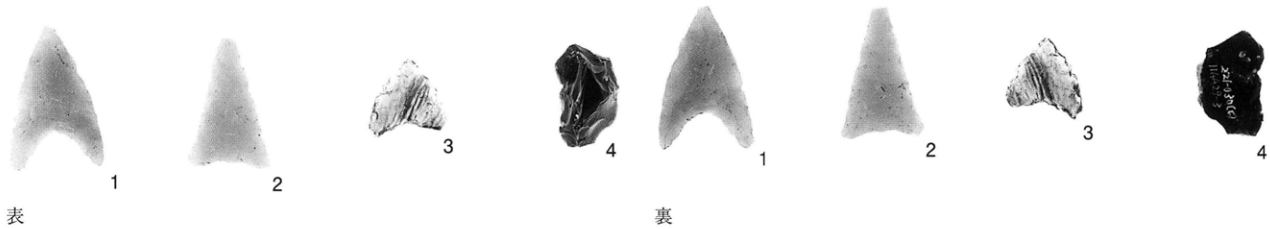


2～18

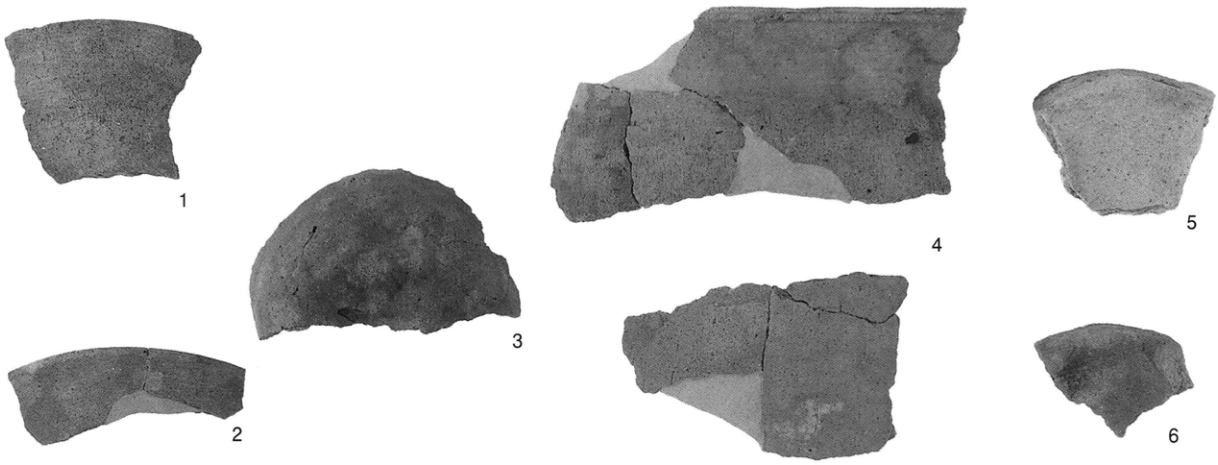


19～46

縄文土器・土製品



縄文時代石器



SI001出土土器

遺構出土土器

SI001出土石器　　銭貨

報告書抄録

ふりがな	にしやちよほくぶちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	八千代市西芝山遺跡
巻次	1
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第564集
編著者名	大内千年
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　TEL043－424－4848
発行年月日	西暦2007年３月23日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西芝山（にししばやま）	八千代市吉橋2307ほか（やちよしよしはし）	12221	030	35度44分20秒	140度4分46秒	19971201～19980226, 19981201～19981225, 20040702～20041227	24,309	西八千代北部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

日本測地系による

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西芝山	包蔵地 集落跡	旧石器時代	石器集中地点10か所	ナイフ形石器・角錐状石器・削器・掻器・石核・台石	旧石器時代は，AT下位（Ⅸ層～Ⅶ層）の石器集中地点が６か所，AT上位（Ⅵ層～Ⅲ層）の石器集中地点が４か所検出され，総数で約340点の石器が出土した。
		縄文時代	陥穴１基	縄文土器（早・前・中・後期）・石鏃	
		平安時代	住居跡１軒・土坑３基	土師器・須恵器	
		中・近世	シシ穴１基・火葬施設１基・野馬堀１条・溝状遺構５条・柵列１条	陶器	

千葉県教育振興財団調査報告第564集

西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書１

― 八千代市西芝山遺跡 ―

平成19年３月23日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　独立行政法人　都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1－3

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の２

印　　刷　　株式会社　正文社
千葉市中央区都町1－10－6